茨城県教育財団文化財調査報告　XII

# 大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書

## ―― 大 生 郷 遺 跡 ――


| (財)茨城県教育財団調査課 | |
|---|---|
| 受理年月日 | 57. 6. 1. |
| 受理番号 | 82 - 62 |
| 寄贈機関 | |



昭和 56 年 9 月

財団法人 茨 城 県 教 育 財 団

# 序

大生郷遺跡は，水海道市大生郷に造成される大生郷工業団地内に確認された埋蔵文化財の包蔵地であります。この調査に当たり，茨城県教育委員会は，日本住宅公団の委託により大生郷遺跡調査会を設立し，昭和50年度から昭和51年度にわたり発掘調査を実施しました。

昭和52年度より，茨城県教育委員会は県内各地の開発事業の進展に伴う埋蔵文化財の発掘調査の増加に鑑み，財団法人　茨城県教育財団に調査課を設置し，埋蔵文化財の発掘調査及び整理事業を実施することになりました。

本報告書は，大生郷遺跡調査会が発掘調査を実施した大生郷遺跡の調査結果を茨城県教育財団が引き継ぎ，昭和56年度に整理し，集録したものであります。

本書が，原始・古代文化解明の一環として，より多くの方々に御活用いただけるよう希望いたします。

なお，調査及び整理にあたりまして御指導・御協力をいただいた茨城県教育委員会・水海道市教育委員会はじめ各関係機関ならびに地元関係者各位に対し深く感謝の意を表します。

昭和56年９月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　竹　内　　藤　男

# 例　　言

1．本書は日本住宅公団が施行する茨城県水海道市大生郷町における大生郷工業団地造成事業区域内の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．調査は日本住宅公団の委託により，大生郷遺跡調査会が昭和50年12月から昭和52年３月までの期間実施した。

3．発掘調査は大生郷遺跡調査会調査員川俣吉之助・小室勉・桜井二郎が担当し，調査期間中，茨城県教育委員会・水海道市教育委員会・他関係機関及び地元有志ならびに多くの研究者から御協力を得た。

4．出土遺物等の整理作業は，調査期間中に上記担当調査員が当たり，それを引き継いで財団法人茨城県教育財団本部調査課調査員桜井二郎が担当し，本書の執筆をした。

5．挿図に使用した記号は下記の通りであり，遺構実測図の方位はすべて磁北である。

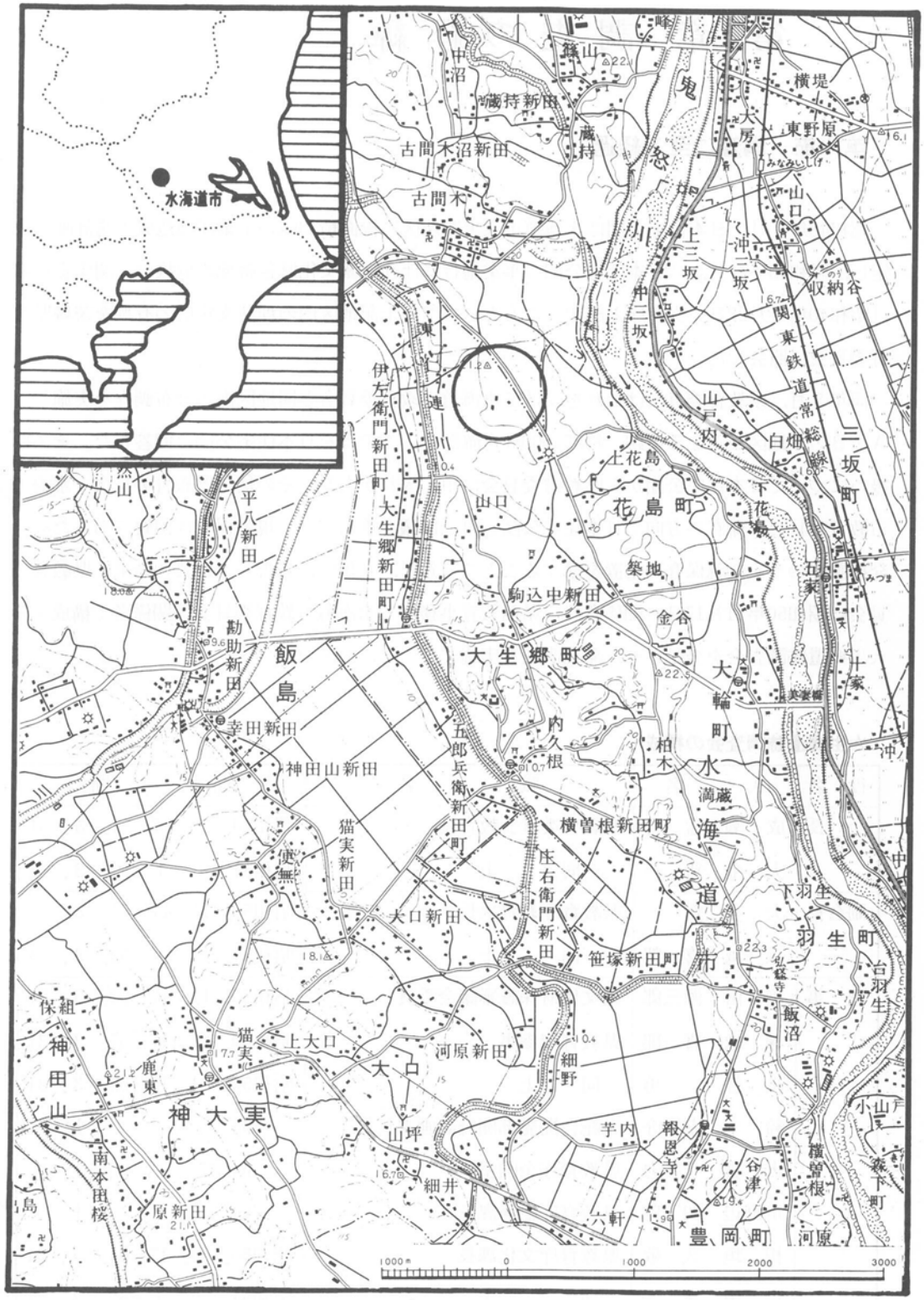
ＳＩ　住居跡　　ＳＫ　土　壙

6．調査によって確認された遺構は，中調査区を仮称番号とし，住居跡はM41－1H…，土壙はＡ２－1Pとして表示したが，その後整理の段階で時代ごとに番号をつけ直した。

# 目　　次

・序
・例　　言
・目　　次
第１章　　調査の経緯…… 1
　第１節　調査に至る経過…… 2
　第２節　調査の経過…… 3
第２章　　遺跡の立地と環境…… 10
　第１節　遺跡の位置と地形…… 10
　第２節　歴史的環境…… 10
　第３節　遺跡の地質…… 15
第３章　　遺構と遺物…… 18
　第１節　住居跡…… 19
　　１．縄文時代…… 19
　　２．古墳時代…… 72
　　３．歴史時代…… 110
　第２節　土　　壙…… 126
　　１．縄文時代…… 126
　　２．古墳時代…… 128
第４章　　ま　と　め…… 134

写真図版…… 139




第1図　大生郷遺跡位置図

# 第1章　調査の経緯

## 第1節　調査に至る経過

昭和48年3月，日本住宅公団は水海道市大生郷地区に総面積73haの工業団地造成事業計画を決定し，昭和49年3月，「日本住宅公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」（昭和40年6月22日…文化庁と調印）にもとづいて，上記地区内の埋蔵文化財の有無を茨城県教育委員会に照会した。

同年5月，県教育委員会はこれを受けて水海道市教育委員会と同地区内の分布調査を実施し，A・B・C地区からなる遺跡，約37,000㎡を確認し，この旨を日本住宅公団に回答した。その取扱いについて日本住宅公団から県教育委員会に申し入れがあり，その後，県教育委員会・水海道市教育委員会は保存の方向で日本住宅公団と再三協議を重ねたが，現状保存は困難であるため，発掘調査のうえ記録保存の措置を講ずることで合意し，文化庁に報告した。この結果，県教育委員会は昭和50年11月17日，関係各課・県西教育事務所・水海道市教育委員会等関係者で構成する大生郷遺跡調査会を発足させ，発掘調査を実施することになった。

**大生郷遺跡調査会の構成**

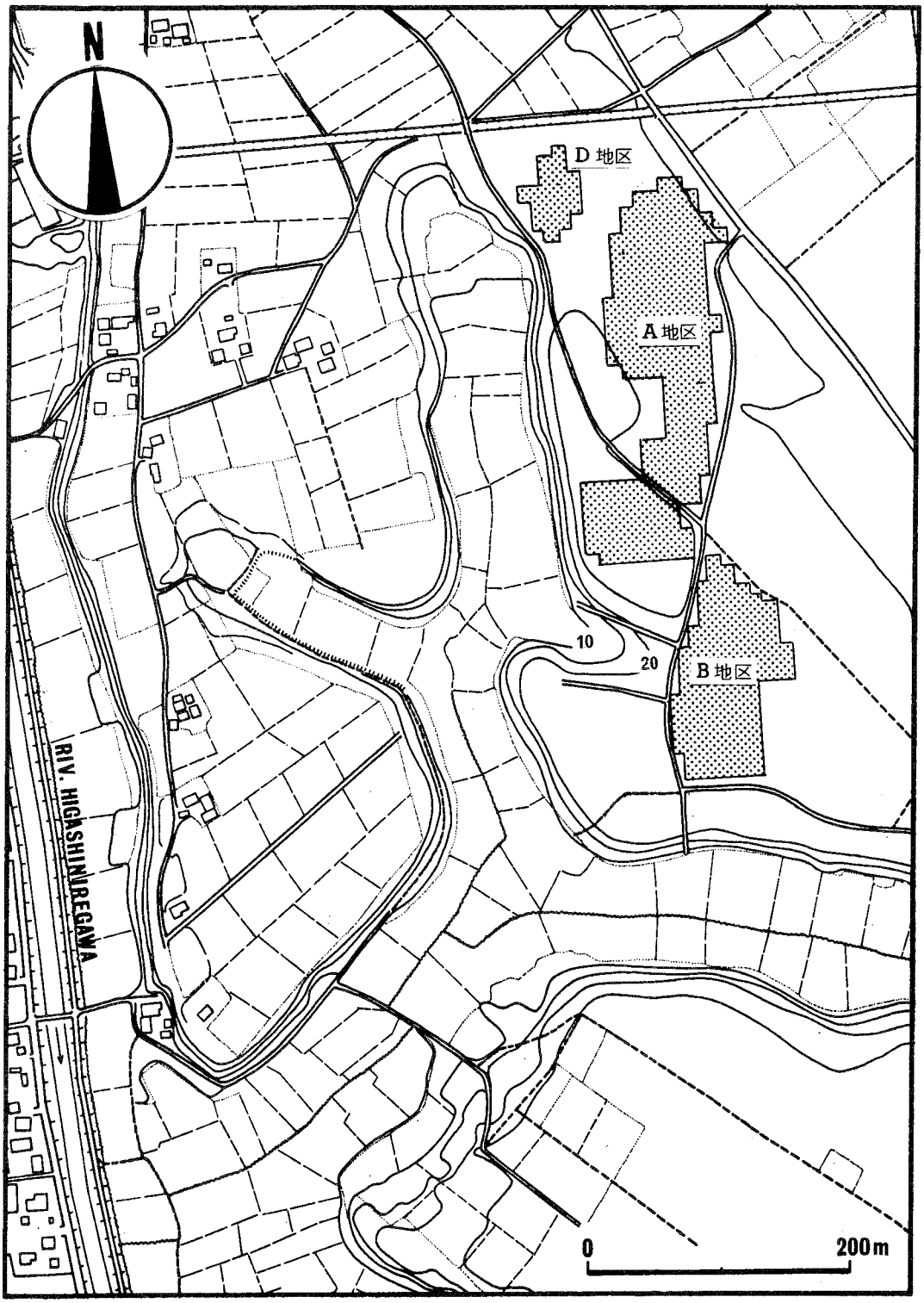
| 役　名 | 氏　　名 | 職　　名 | 期　　間 |
|---|---|---|---|
| 会　長 | 成　瀬　孟　男 | 県教育委員会教育長 | 昭和50．11．17－51．3．31 |
| | 大　金　新　一 | 同　　上 | 昭和51．4．1－52．3．31 |
| 副会長 | 大　金　新　一 | 県教育庁教育次長 | 昭和50．11．17－51．3．31 |
| | 塚　越　喜一郎 | 同　　上 | 昭和51．4．1－52．3．31 |
| 理　事 | 滝　田　源三郎 | 県文化財保護審議会委員 | 昭和50．11．17－52．3．31 |
| | 塚　越　喜一郎 | 県教育庁参事 | 昭和50．11．17－51．3．31 |
| | 張　替　　勇 | 同　　上 | 昭和50．11．17－52．3．31 |
| | 鈴　木　友之介 | 県総合開発部開発計画課長 | 同　　上 |
| | 大　貫　　力 | 県教育庁企画室長 | 同　　上 |
| | 川野辺　四　郎 | 県教育庁総務課長 | 同　　上 |
| | 板　垣　久　敬 | 県教育庁文化課長 | 昭和50．11．17－51．3．31 |
| | 島　田　孝　一 | 同　　上 | 昭和51．4．1－52．3．31 |
| | 永　塚　　進 | 県西教育事務所長 | 同　　上 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 小林　伝 | 水海道市教育委員会教育長 | 昭和51．4．1－52．3．31 |
| | 高橋杏二 | 県教育庁文化課副参事 | 同　上 |
| 監事 | 磯田　勇 | 県教育庁総務課長補佐 | 同　上 |
| | 小橋和男 | 水海道市教育委員会総務課長 | 同　上 |
| 幹事 | 高橋杏二 | 県教育庁文化課長補佐 | 昭和50．11．17－51．3．31 |
| | 大森信英 | 県教育庁文化課文化財第二係長 | 昭和50．11．17－52．3．31 |
| | 冨田　博 | 県西教育事務所社会教育課長 | 同　上 |
| | 保多正五 | 県西教育事務所社会教育主事 | 同　上 |
| | 岡　政夫 | 同　上 | 同　上 |
| | 高野　拓 | 県教育庁文化課庶務係長 | 同　上 |
| | 飯島弘道 | 県教育庁文化課主幹 | 同　上 |
| | 伊勢山司郎 | 県教育庁文化課主幹 | 昭和51．4．1－52．3．31 |
| | 須藤武男 | 水海道市教育委員会社会教育課長 | 昭和50．11．17－52．3．31 |
| | 片岡　蕃 | 水海道市教育委員会社会教育係長 | 同　上 |
| | 堀込　昇 | 水海道市教育委員会 | 同　上 |
| | 五木田大樹 | 同　上 | 同　上 |
| | 川俣吉之助 | 県教育庁文化課文化財保護主事 | 同　上 |
| | 細谷弘一 | 同　上 | 昭和50．11．17－51．3．31 |
| | 豊田雄義 | 同　上 | 昭和51．4．1－52．3．31 |
| | 大塚　博 | 同　上 | 昭和50．11．17－52．3．31 |
| | 高根信和 | 同　上 | 同　上 |
| | 山本貴之 | 県教育庁文化課主事 | 同　上 |
| 嘱託 | 小室　勉 | 大生郷遺跡調査会調査員 | 同　上 |
| | 桜井二郎 | 同　上 | 昭和51．4．1－52．3．31 |
| | 岩本みつ江 | 大生郷遺跡調査会事務員 | 同　上 |

## 第2節　調査の経過

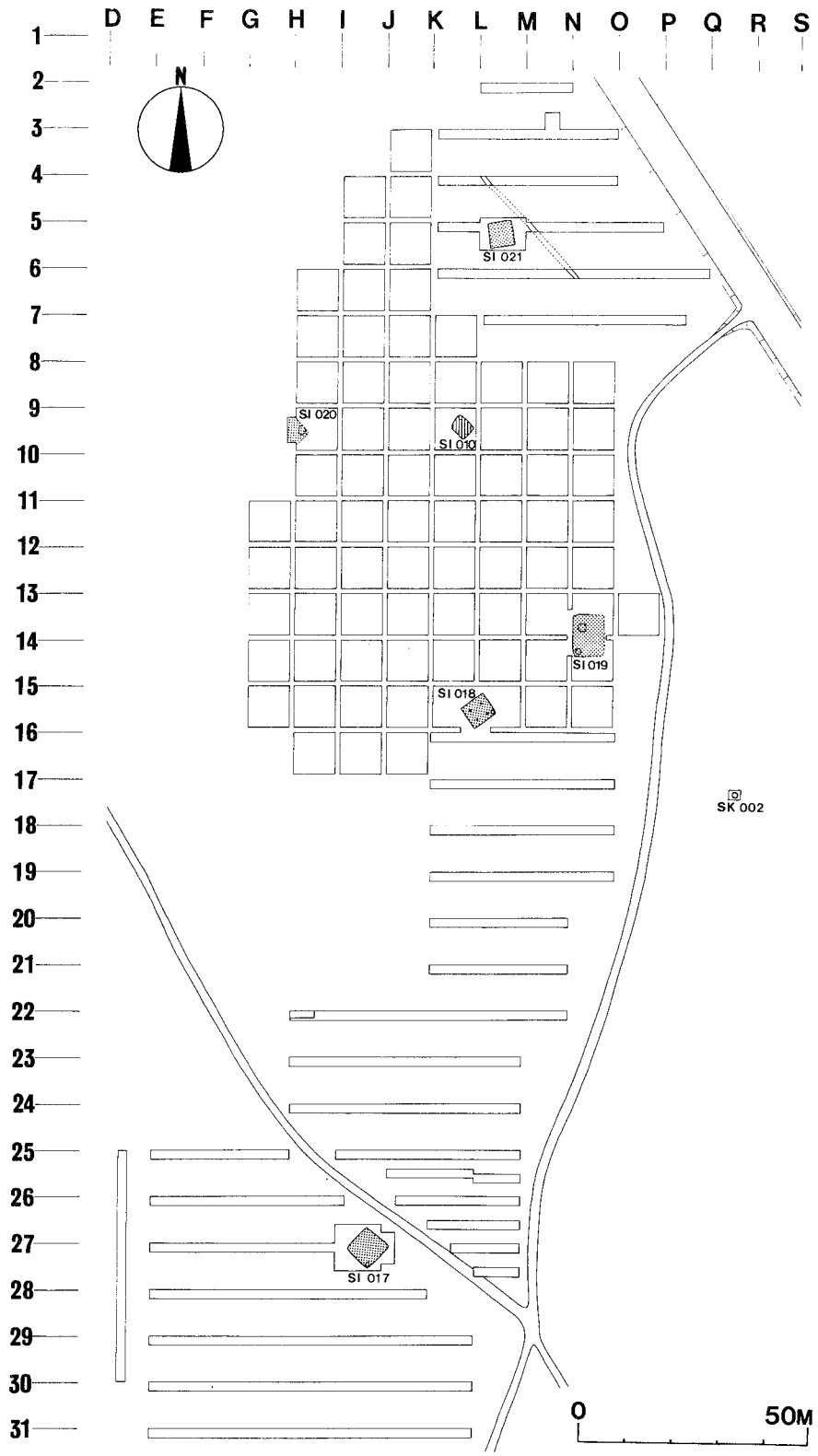
昭和50年11月17日に大生郷遺跡調査会が発足し，発掘調査に係る諸準備を行い，12月10日，水海道市大生郷町字後中丸地において，茨城県教育委員会・県西教育事務所・水海道市教育委員会等関係者の臨席を得て鍬入式を挙行した。

12月中旬より調査区域内の上物除去作業を開始する。

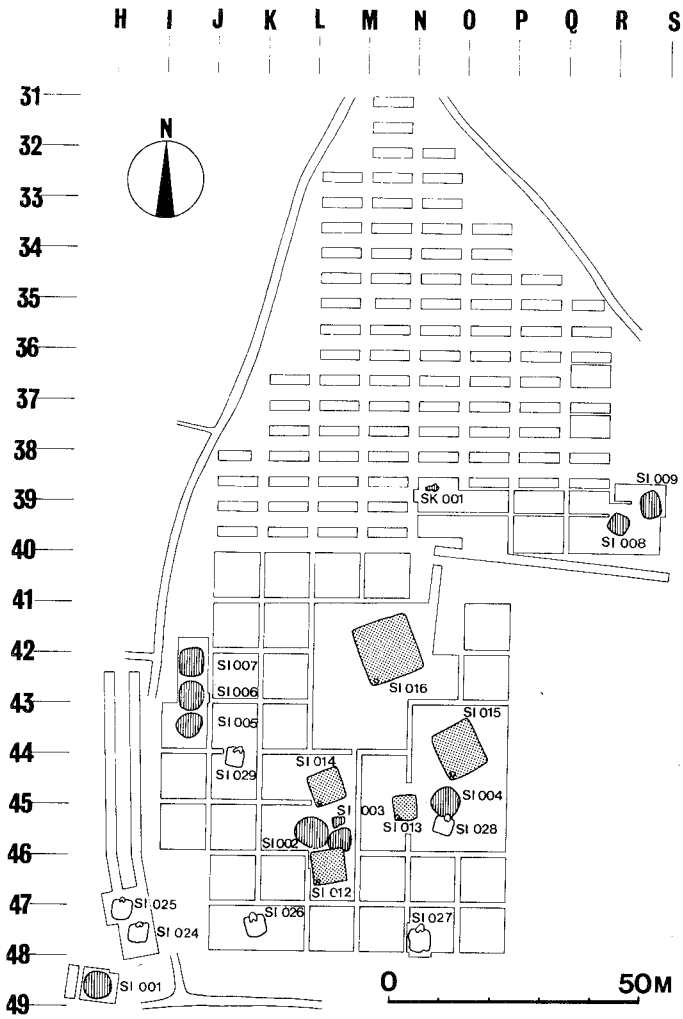



第 2 図　調査区域地形図　I

**第3図 遺 構 全 体 図**


D E F G H I J K L M N O P Q R S
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
N
SI 021
SI 020
SI 010
SI 019
SI 018
SK 002
SI 017
0
50M

第4図　A地区　全　測　図



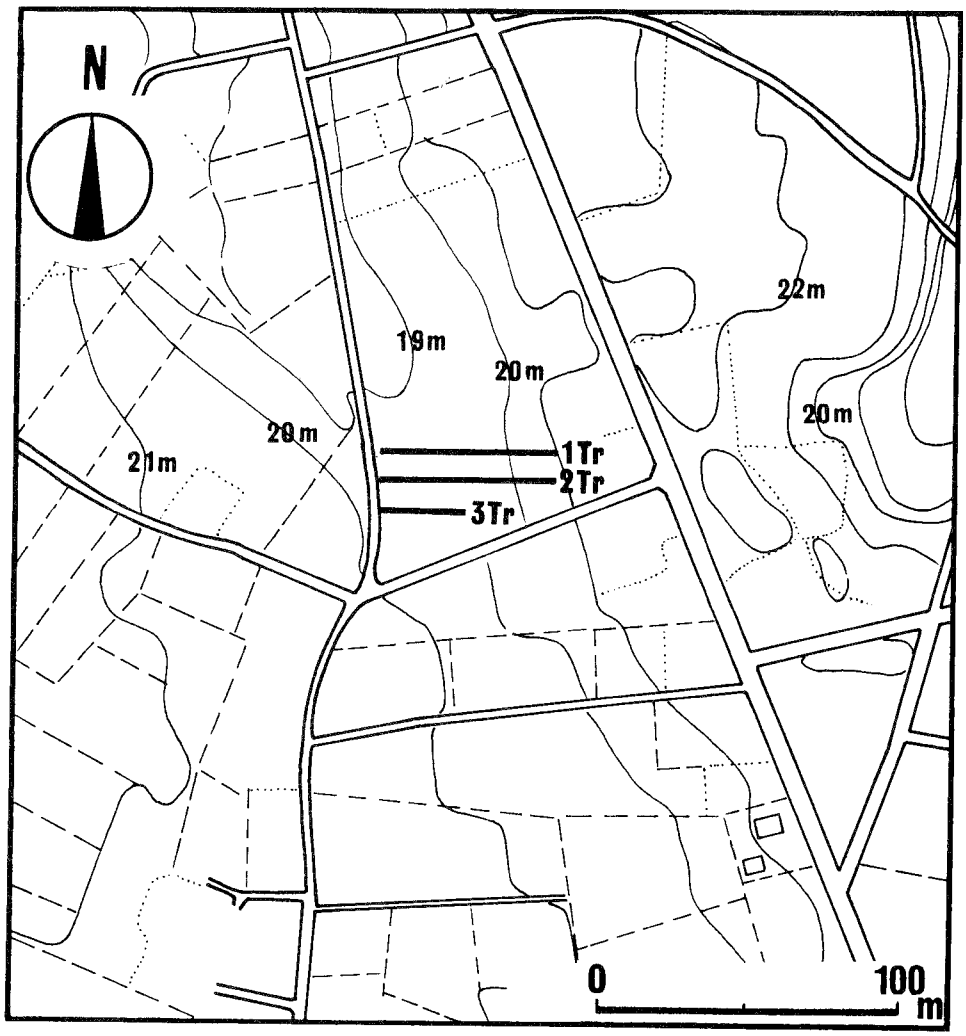

**第5図　B地区　全測図**

地区設定は，調査対象区域内の任意点（日本住宅公団による基準杭No.A17）を基準として磁北線に沿って，遺跡内を10m四方の中調査区に分割し西から東へA～R，北から南へ1～47の地区に分け北西の座標を地区名とし，昭和51年1月より調査区域内の杭打ち作業を実施する。調査はA地区とB地区の接点がほぼ中心部にあたるため，B地区の北部より南部に向かう方法を取り，終了後はA地区の南部より北上する方針で発掘調査計画をたてた。

B地区の北側は比較的遺物の散布が稀薄であったため杭打ちをした中調査区（10m×10m）内に2本のトレンチを設定して調査を進める。

3月上旬までにB地区の北側に設定したトレンチの発掘調査を完了した。検出された遺物は少量で，遺構もほとんどみられなかった。しかし，B地区のほぼ中央部N38区からは，縄文時代前期に比定される土器を伴う地点貝塚が確認され，その地区周辺の拡張作業を行い，この地区以南はグリッド（8m×8m）による発掘調査を実施した。

その結果，M41区において一辺11m程の方形プランで古墳時代に比定される大型住居跡が検出された。その後3月末日までに確認された遺構は，縄文時代前期に比定される住居跡が6軒，古墳時代中期に比定される住居跡がM41区に確認されたものを含めて3軒，歴史時代の小型方形の




**第6図　調査区域地形図　II（C地区）**

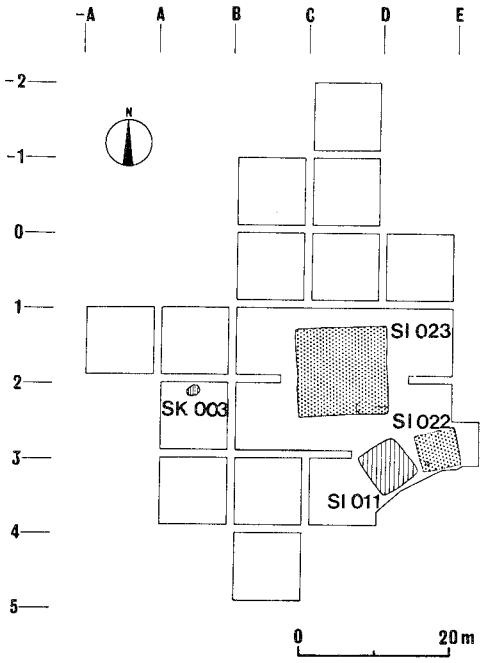
住居跡が2軒確認された。**（第5図）**

昭和51年4月，前年度に調査した遺構の継続調査と新しい遺構の検出・拡張作業を行った。

5月，B地区（10,542㎡）のグリッド発掘を完了した。

6月，B地区の遺構精査とあわせてA地区（22,298㎡）の上物除去，杭打ち作業を行い，南側はトレンチで，中央部はグリッド，さらにその北側は遺物等の分布状況からトレンチで発掘調査を実施した。

7月～8月，A地区は面積のわりに比較的遺物・遺構の分布が稀薄であり，確認できた遺構は縄文時代中期に比定される遺構が1軒，古墳時代中期に比定される住居跡が5軒ほどみられ，他に古墳時代中期に比定される土壙を1基確認した。しかし，炎天下の中での調査でなかなか進展




**第7図　D 地 区 全 測 図**

がみられなかった。**（第4図）**

9月，A地区の調査およびその周辺の分布調査により，A地区の北西約50mほどの地区をD地区（2,700m²）として追加し調査を実施することになった。

10月，D地区の調査を実施した結果，確認された遺構は縄文時代前期の住居跡1軒と土壙1基，古墳時代中期の大型住居跡など住居跡2軒を検出できたが，いずれもトレンチャー等による攪乱が激しい。**（第7図）**

A・B・D地区を調査した結果，A地区の中央部には遺構等が少なく，B地区の南部よりに多くの住居跡が位置していることが判明し，集落の分布は南部中心であり，公団と再度協議した結果，B地区の排土置場に指定していた南東部を拡張区として1,500m²ほど追加して調査をすることになる。これにより確認された遺構は縄文時代前期の住居跡が3軒，古墳時代中期の住居跡が2軒，歴史時代の住居跡が4軒確認され，それぞれ調査を実施した。

11月～12月，B地区のさらに南東約750m程の谷津を越した位置にあるC地区(4,673m²)の調査を実施したが攪乱等がひどく遺構を確認することはできなかった。C地区の調査期間の短縮により，その後A地区およびB地区の補足調査を12月下旬まで行い，予定地内の発掘調査作業を終了した。

その後3月末日まで出土遺物等の整理を行い，現場事務所を撤収し，昭和50年11月から昭和52年3月までの約17ヶ月を費した大生郷遺跡の発掘調査は終了した。

# 第２章　遺跡の立地と環境

## 第１節　遺跡の位置と地形

水海道市は県の南西部に位置し79.62㎢ほどの面積を有し，周辺の市町村とともに近郊整備地帯の指定をうけている。市域には鬼怒川をはじめとして小貝川・飯沼川などの河川が屈折して南流し，猿島台地の段丘面を複雑に開析している。猿島台地の段丘面は標高15～24mほどの低位で，水田面との比高は10m内外である。**（第１図）**

大生郷工業団地造成事業は水海道市北西部の石下町に隣接する地域に予定され，大生郷遺跡は鬼怒川と飯沼川にはさまれた水海道市大生郷町字後中丸に位置している。鬼怒川・飯沼川の両河川によって19～20mの段丘面は複雑に開析され，段丘は急崖によって谷津に面している。遺跡全体はほぼ平坦な地形を呈し，谷津の各所に湧水点を観察することができる。

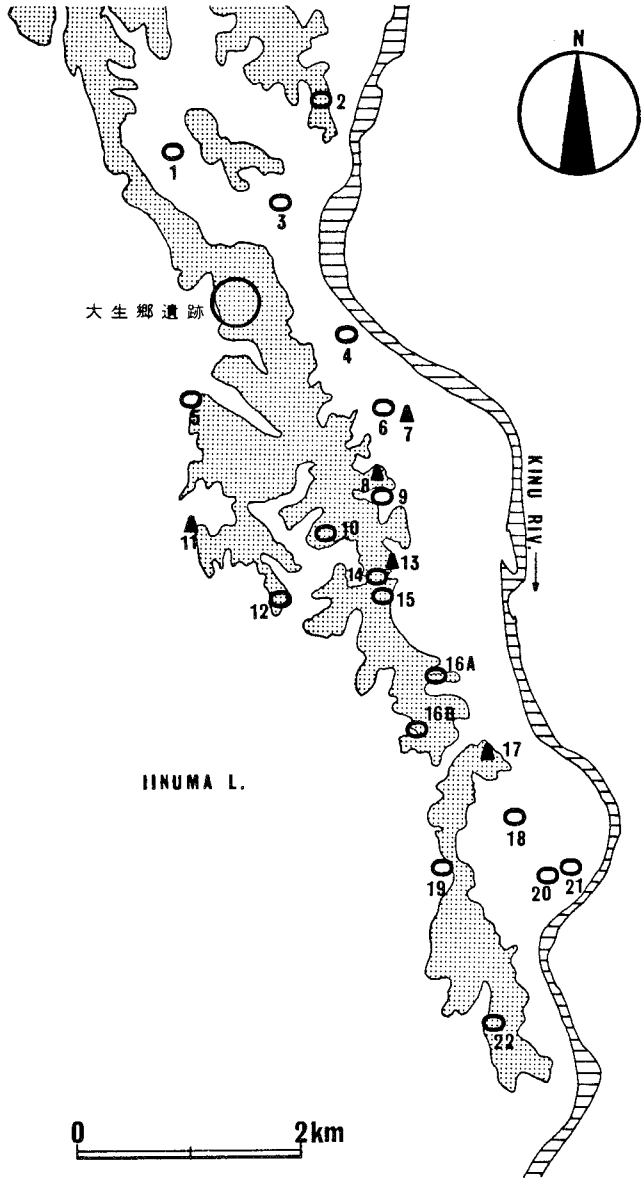
大生郷遺跡の調査対象面積は約40,000㎡ほどで，Ａ～Ｄ地区に分割して調査を進めた。調査方法等については前述したが，次に各地区についてその位置をのべる。

Ａ地区は調査対象地域の北部に位置し，飯沼水系から樹枝状に入りこんだ支谷に西面している。調査区域内はほぼ平坦で，標高は19～21mほどである。Ａ地区の南部には小支谷が東に入りこみ，谷頭部にＢ地区が設けられた。Ｂ地区も調査区域内はほぼ平坦をなし，標高はＡ地区同様に19～21mほどである。Ｃ地区は東南にのびた支谷の谷頭部に設定し，標高は21mほどである。Ｄ地区はＡ地区に隣接した北西部に設けられ，北にのびた支谷の谷頭部の東に位置している。**（第２図）**

## 第２節　歴 史 的 環 境

蛇行して南流する鬼怒川と飯沼川にはさまれた標高21mほどの低位の段丘上には，大生郷遺跡をはじめ多くの遺跡が点在している。

水海道市内には現在のところ先土器時代に編年されている遺跡・遺物は発見されていないが，縄文時代になると多くの遺跡の分布がみられる。この地域は貝塚の分布などにもとずいた海進・海退の研究にも重要な地域であり，古鬼怒川流域における汀線の変動が貝塚の形成にも密接な関係のあったことを示唆している。大生郷遺跡の南東部に位置する花島貝塚は，昭和16年に日本古代文化学会によって調査が行われ，貝殻条痕文系土器を主体とする貝塚であることが判明し，ヤマトシジミを中心としてサルボウ・マガキ・ハマグリ・オキシジミ・シオフキなどが出土している。(1)




第8図　大生郷遺跡と周辺の遺跡

## 周辺遺跡の分布

| No. | 県番号 | 遺跡名 | 時代 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 3009 | 古間木遺跡 | 縄・古 | 縄（前） | |
| 2 | 2398 | 神子埋古墳群 | 古 | 後 | 円墳66　埴輪 |
| 3 | 2404 | 宮内遺跡 | 縄・古 | 縄（前・中） | 宮内貝塚を含む |

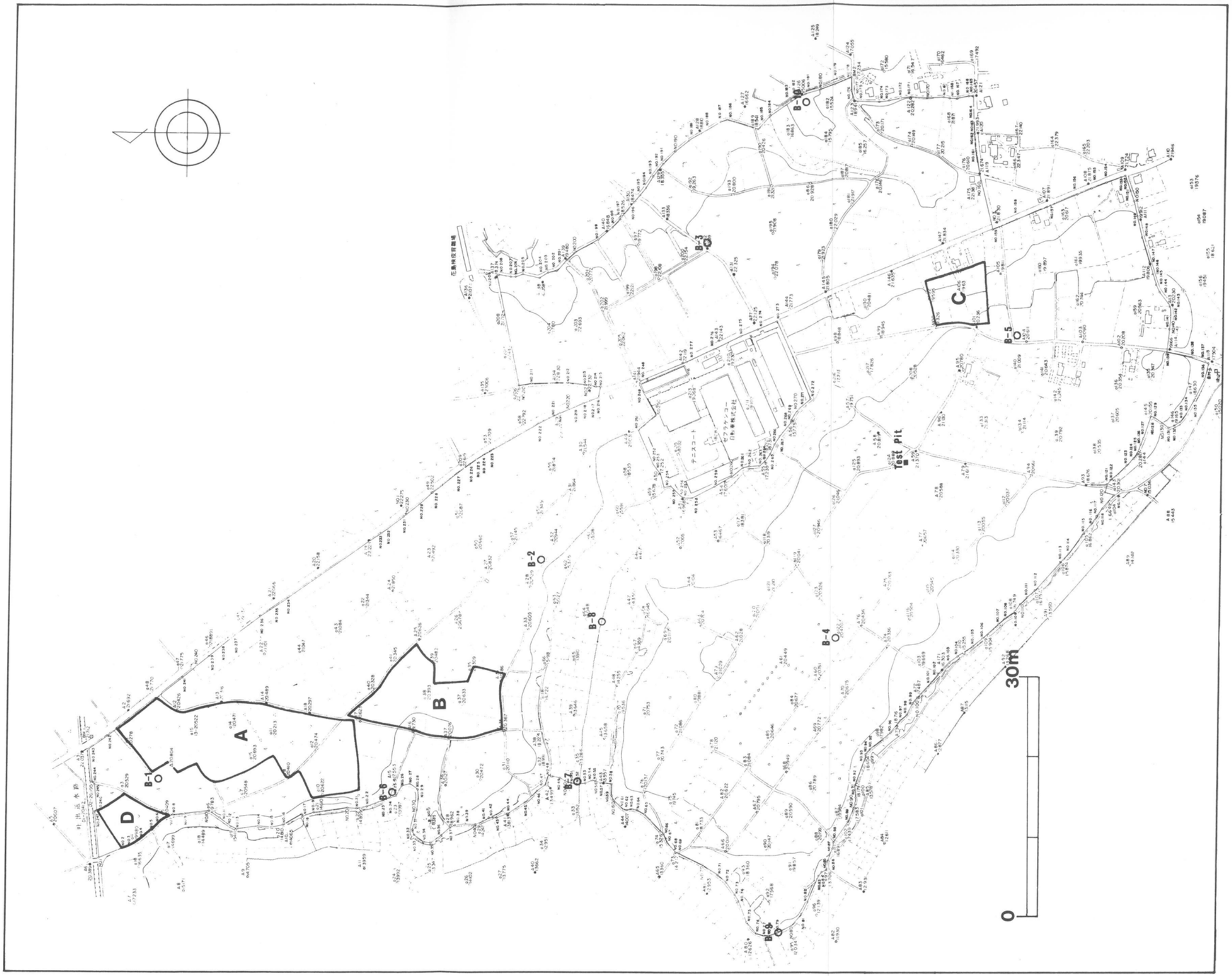
| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 3002 | 花島遺跡 | 古 | | |
| 5 | 3519 | 上新田遺跡 | 縄 | 後 | |
| 6 | 2360 | 花島古墳群 | 古 | | 円墳5 |
| 7 | 2357 | 花島貝塚 | 縄 | 早 | |
| 8 | 2363 | 築地貝塚 | 縄 | 早 | |
| 9 | 3001 | 築地遺跡 | 縄 | 後・晩 | 昭和28年　清水潤三氏発掘(貝柄山貝塚) |
| 10 | 3518 | 上口遺跡 | 縄・歴 | 縄(後)歴(須) | |
| 11 | 2354 | 大生郷貝塚 | 縄 | 後 | |
| 12 | 3520 | 内久根遺跡 | 縄 | 後 | |
| 13 | 2355 | 大日山貝塚 | 縄 | | |
| 14 | 3523 | 大塚山古墳 | | | 円　墳 |
| 15 | 3003 | 大日山遺跡 | 古 | | |
| 16A | 3521 | 満蔵A遺跡 | 縄 | 後 | |
| 16B | 3522 | 満蔵B遺跡 | 古 | | |
| 17 | 2364 | 横曽根貝塚 | 縄 | 早・前・後 | ヤマトシジミ(貝塚貝塚) |
| 18 | 3524 | 貝塚古墳 | 古 | | 埴　輪 |
| 19 | | 貝塚遺跡 | 縄 | | |
| 20 | 2358 | 七ッ塚古墳群 | 古 | | 前方後円1　円墳7<br>昭和38年　上智大学発掘 |
| 21 | 2356 | 権現塚古墳 | 古 | | 円　墳 |
| 22 | 2359 | 豊岡古墳 | 古 | | 円　墳 |

花島貝塚の南には築地貝塚・築地遺跡が位置し，築地貝塚は貝殻条痕文系土器を主体とする小貝塚が点在していたといわれている。築地遺跡は，中期から晩期に形成された遺跡であり，昭和28年に慶應義塾高等学校歴史学研究会によって発掘が実施された。(2)

大生郷遺跡の南には大生郷遺跡と同様に飯沼水系に西面して大生郷貝塚があり，昭和34年，県立水海道第二高等学校によって発掘が行われた。その結果，後期から晩期にかけて形成された貝塚であることが判明し，土器・石器のほかに多くの骨角器などが出土した。さらに，大日山貝塚・横曽根貝塚などが点在している。また，縄文時代の遺跡としては上新田遺跡・上口遺跡・内久保遺跡・満蔵A遺跡などがあげられる。

弥生時代に編年される遺跡の分布はそれほど顕著には認められず，花島遺跡・横曽根遺跡にわずかに土器片が確認されているだけである。

古墳時代から歴史時代にわたる集落の分布は，縄文時代の遺跡と複合して確認される場合が多く，花島遺跡・上口遺跡・大日山遺跡・満蔵B遺跡などが知られている。古墳の分布も多くみら




第9図　大　生　郷　遺　跡　現　況　図

れ，古墳群を形成しているものには花島古墳群・七ツ塚古墳群などがある。貝塚の発掘例と同様に古墳の発掘例も多く，上智大学による七ツ塚古墳群の調査などがあげられる。[3] 七ツ塚古墳群は前方後円墳１基と円墳６基からなる古墳群で，主体部は竪穴式石室・横穴式石室・箱式石棺・粘土槨などがあり，変化に富んだ古墳群であることが判明した。このほか，調査された古墳としては貝塚古墳・大塚戸篠山古墳群などがあげられ，多くの副葬品が発見されている。

このほか，内守谷町本郷遺跡からは土師器・須恵器とともに鉄滓・羽口・砥石などが出土し，奈良時代から平安時代頃の踏鞴跡と考えられている。

古代においては耕土面積がそれほど多くなかった当地方において，鬼怒川・飯沼川(広河の江)流域の墾田が進められ，集落の定着が多くみられるようになったのは平安時代以降と考えられる。**(第８図)**

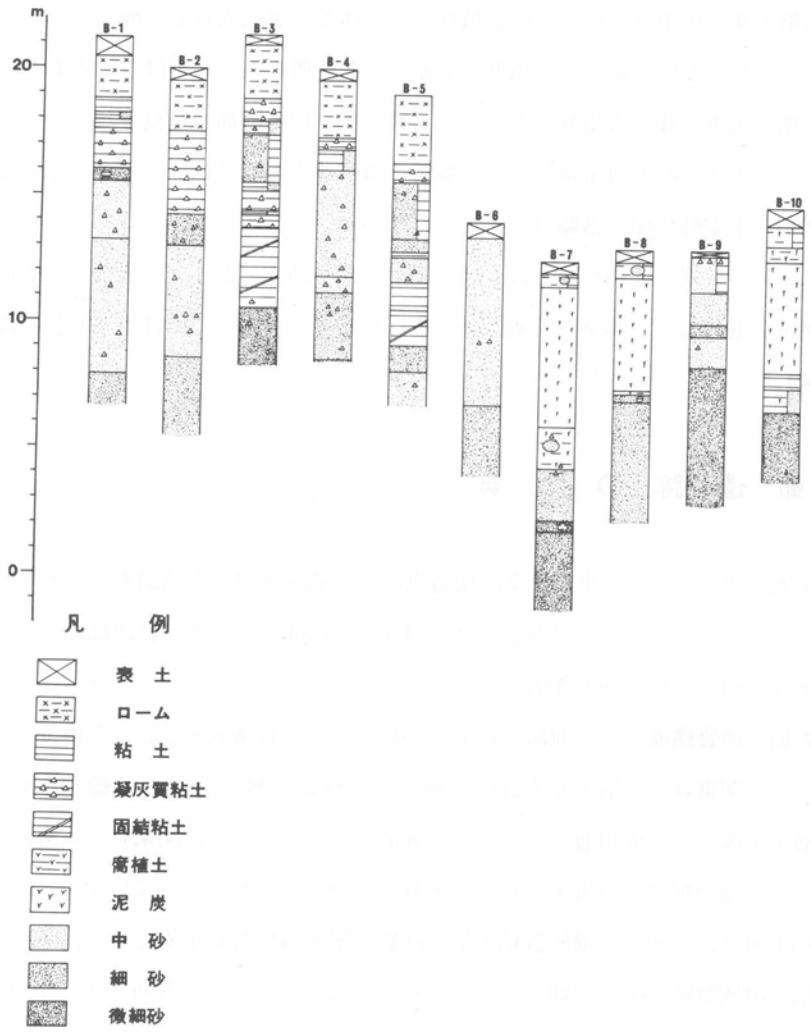
## 第３節　遺　跡　の　地　質

日本住宅公団によって大生郷工業団地造成に伴う造成地内の土質調査が行われた。調査地点は第９図に示したように10地点である。その内容は台地部に５ヶ所，谷津部に３ヶ所，台地の裾部に２ヶ所ほど選んで柱状図を作成した。

各調査地の地質構成は，台地部と谷部では異なった地質構成を示し，台地部では洪積層に限られ，上位より関東ローム層・凝灰質粘土層および砂質土層からなる常総粘土層があり，その下層に砂層を主体とした成田層がみられる。各部分についてみれば関東ローム層は台地にほぼ平坦に分布し，台地の裾部に位置するＢ－６・Ｂ－９地点では確認されていない。関東ローム層の下の常総粘土層は，上層から凝灰質粘土層・砂質土層・凝灰質粘土層となり，Ｂ－１・Ｂ－２地点では下部の凝灰質粘土層が欠如している。この層は，西から東の方向へゆるやかな傾斜を示している。さらにこの層下の成田層は，粘性土層および砂質土層からなり，西側地区においては砂層によって構成され，東側地区では粘性土層・砂層の層序がみられる。したがって，この大生郷地区の成田層は，東側にむかって粘性土層が次第に消滅していると推定される。

谷部は，泥炭層ないし腐蝕土層・粘性土層によって構成され，全般的に上流から下流に向かってゆるやかな傾斜面を形成している。**(第10図)**

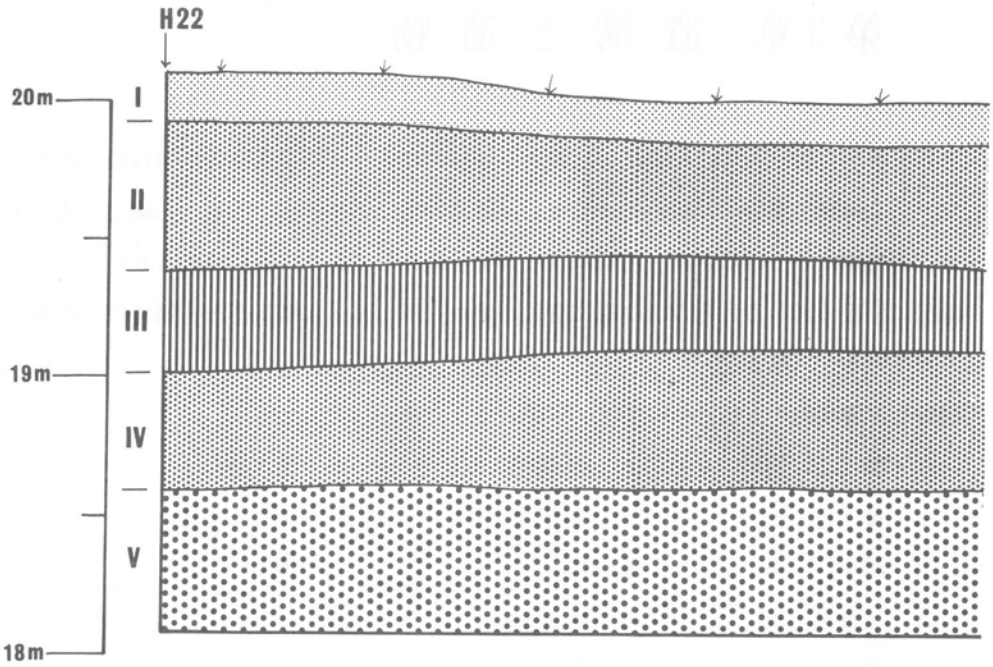
これらの地質調査によって得られた結果により，Ａ地区Ｈ22区に土層観察用のテストピットを穿ち，とくに上部ローム層の観察を行った。第１層は15～20cmほどの耕作土層で，その下部に関東ローム層が堆積している。ローム層は前述の調査例によれば２～2.1ｍほどの堆積を示している。第II～Ⅳ層は立川ローム層に比定され，第III層に有機質を含む暗褐色土層が30～40cmほど堆積し，火山活動の休止期間と推定される。さらに第Ⅴ層は武蔵野ローム層に比定されるものであ




**第10図　大生郷地区土層調査図**

ろう。**(第11図)**

大生郷遺跡において検出されている住居跡群は，第II層を掘りこんで構築されており，住居跡内の柱穴は，第III層に達しているものもみられる。




第11図　大生郷遺跡の地層

## 参考文献および引用文献

『図説水海道市史』

(1)　江坂輝弥・吉田格「貝柄山貝塚」『古代文化』13－9　昭和17年
直良信夫・江坂輝弥「貝柄山貝塚及指扇五味戸貝塚発見の貝類」『古代文化』13－9　昭和17年
江坂輝弥「貝柄山貝塚」『茨城県史料　考古資料編　先土器・縄文時代』　昭和54年

(2)　藤村東男「築地遺跡発掘報告」『Archaeology』28．29　昭和40年
星山芳樹「水海道市築地遺跡出土の注口土器について」『常総台地』7　昭和51年
清水潤三「築地遺跡」『茨城県史料　考古資料編　先土器・縄文時代』　昭和54年

(3)　吉田章一郎「茨城県水海道市羽生七塚第六号墳」『日本考古学年報』15　昭和42年

# 第3章　遺構と遺物

大生郷遺跡から検出された住居跡は，南より樹枝状に入り込む小支谷の東側台地に散在してみられ，とくに南側小支谷の谷頭の奥に集中し，総計29軒ほどである。そのうち縄文時代の住居跡は11軒で南地域に多く確認され，古墳時代は12軒で散在しており，歴史時代は６軒ですべてＢ地区の南部に位置している。そのほか縄文時代の地点貝塚１基・土壙１基・古墳時代の土壙１基が確認されている。**（第３図）**

（住居跡など遺構内の土層については，下記のように統一した。）

| | | |
|---|---|---|
| 1　表　土　層 | 6　赤褐色土 | 11　黒　色　土 |
| 2　黄　色　土 | 7　茶褐色土 | 12　地　　山 |
| 3　明褐色土 | 8　褐　色　土 | K　攪　　乱 |
| 4　淡黄褐色土 | 9　暗褐色土 | |
| 5　黄褐色土 | 10　黒褐色土 | |

大生郷遺跡から出土した遺物は土器類が主体であり，縄文土器・土師器・須恵器などがみられる。また，遺構内から出土したものがほとんどであり，各調査区内から出土したものは少ない。

遺構・遺物については各時代ごとに説明するが，縄文土器について大別すると，胎土中に繊維を含むものと含まないものに分類することができ，これらの土器の特徴によって全体的に類別し，さらに各遺構ごとに説明を加える。土師器・須恵器に関しては，表としてその特徴を記す。

**縄文土器分類**

**Ⅰ群**　胎土中に繊維を含むもの

1類　沈線文を主体とするもの

1種　コンパス文がみられるもの

2種　波状文および曲線文がみられるもの

3種　直線状文・平行沈線文がみられるもの

4種　櫛歯状文がみられるもの

5種　その他

2類　縄文を主体とするもの

1種　単節縄文がみられるもの

2種　羽状縄文がみられるもの

3種　無節および無節の羽状縄文がみられるもの

4種　その他

**Ⅱ群**　胎土中に繊維を含まないもの

## 第1節　住　　居　　跡

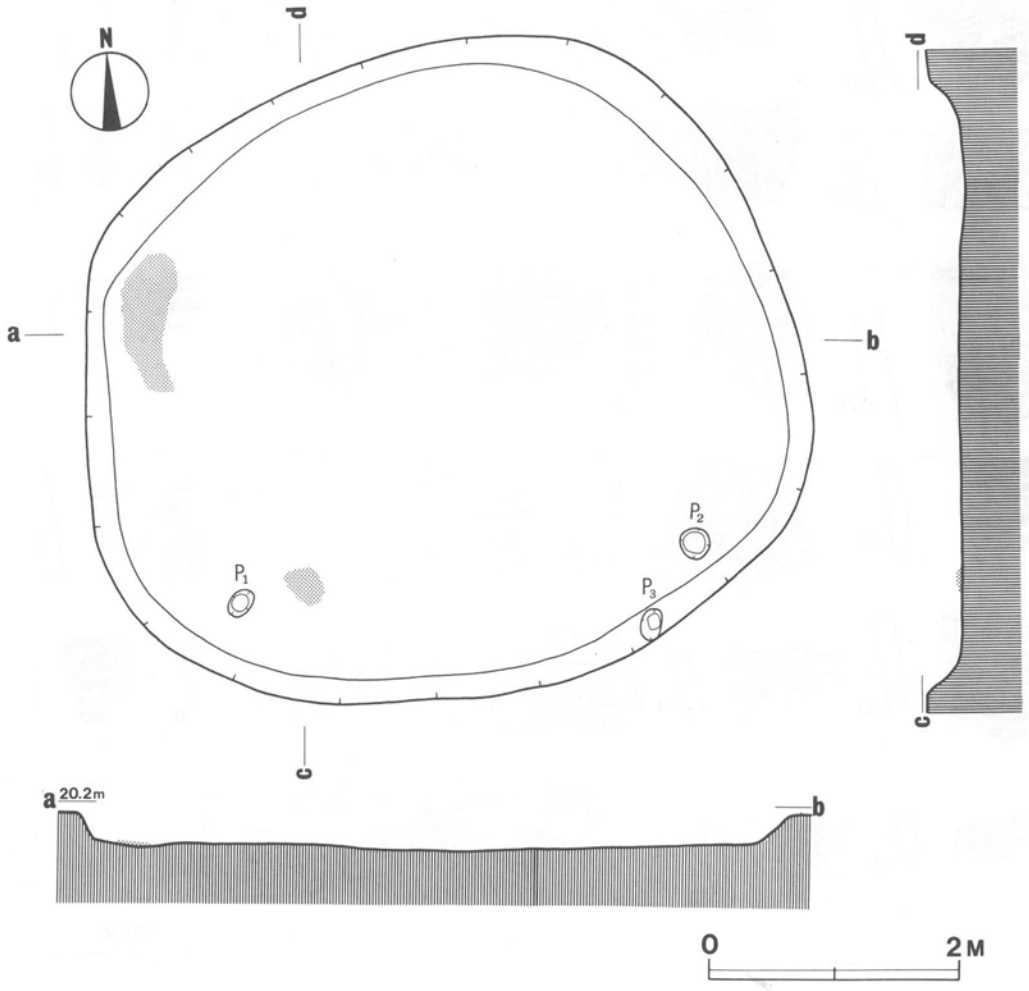
### 1．縄 文 時 代

**第1号住居跡（第12図）**

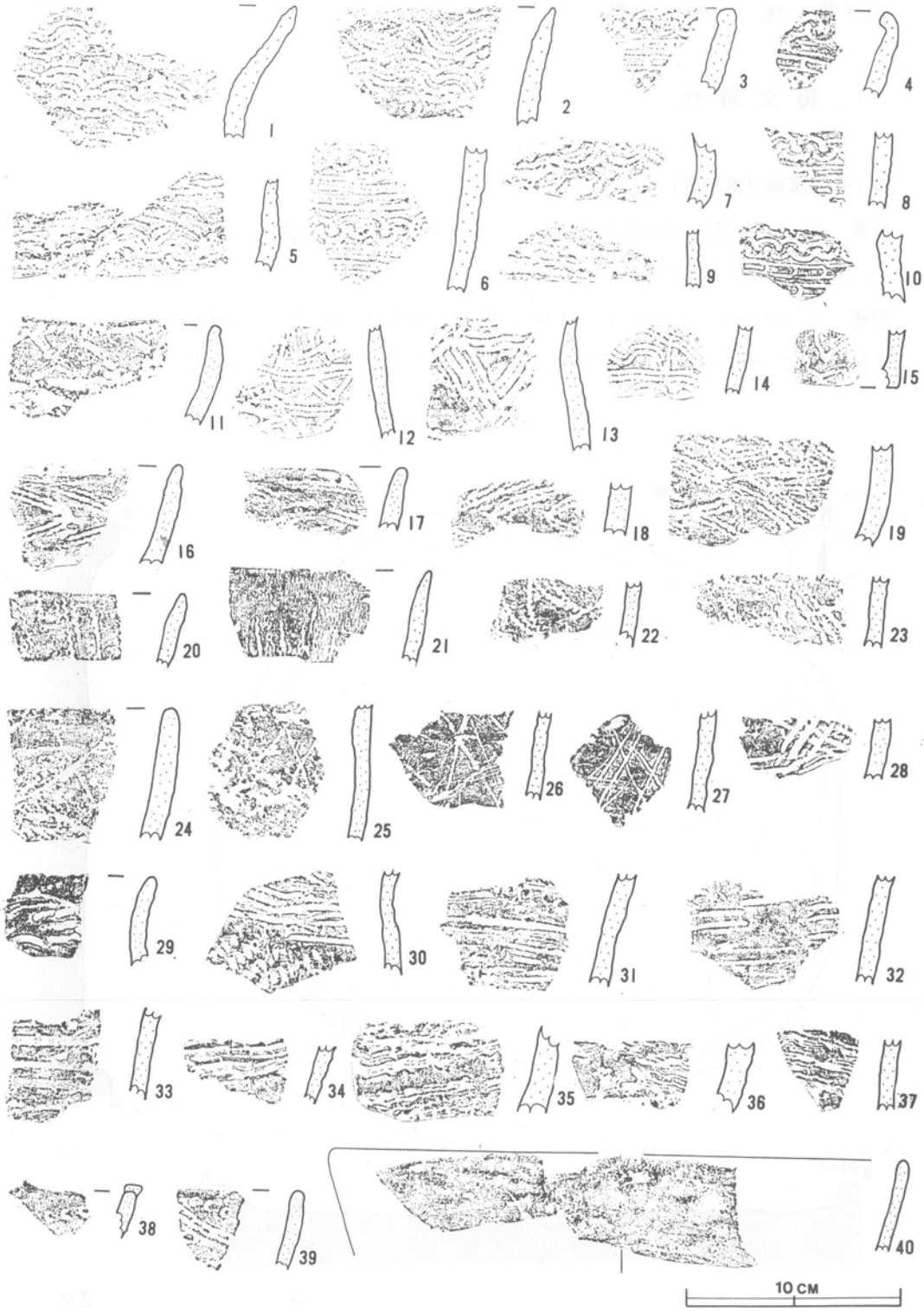
**位置**　B地区の南部（G48区）に位置し，近接する縄文時代の遺構は，北東部に第2号住居跡さらに北方には第5号住居跡がみられる。

**規模**　N－83°－E　長軸5.6m　短軸5.1m　平面形状　楕円形　　面積　19.6m²

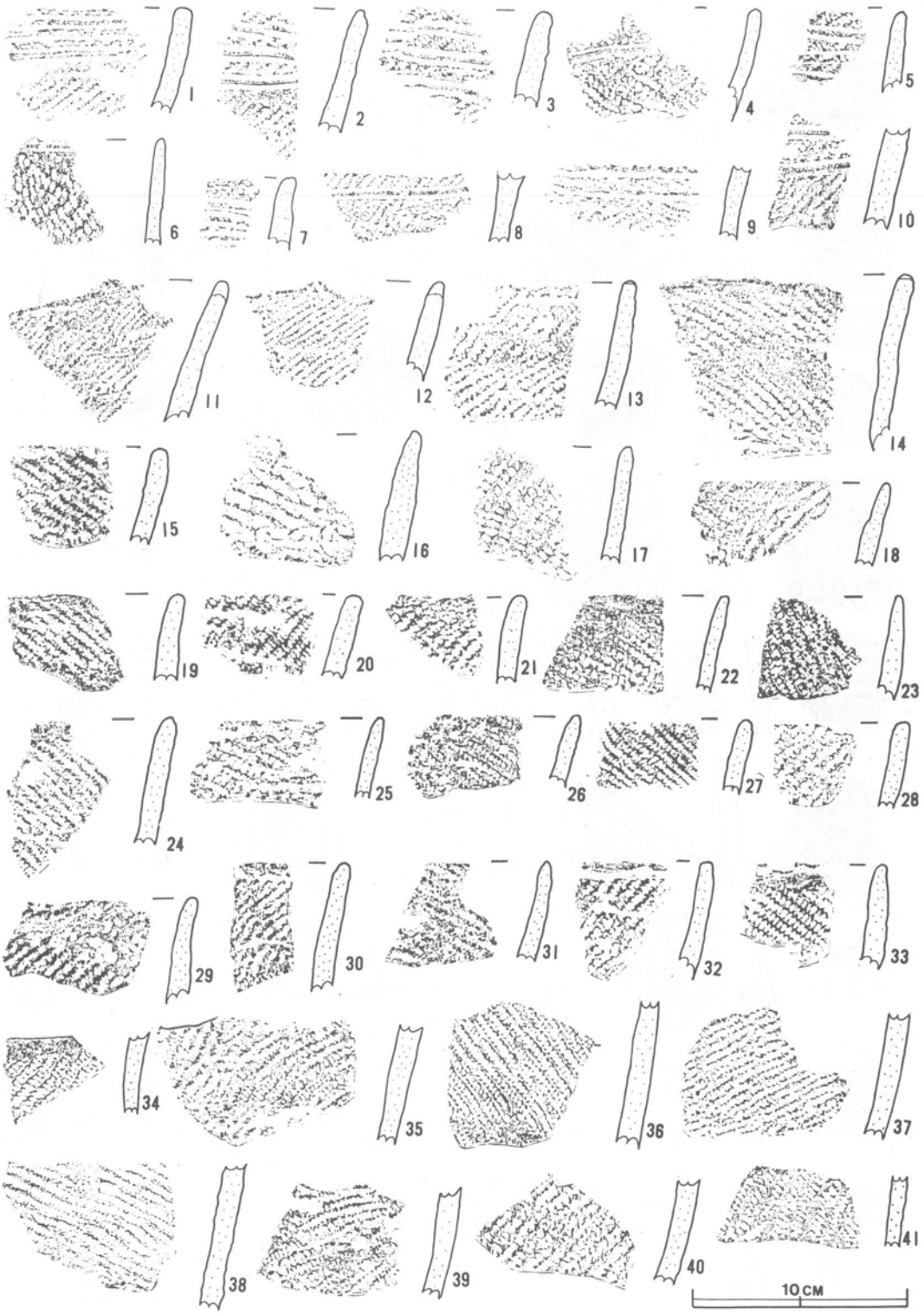
**各部の状況**　壁はいずれもゆるやかな立ちあがりを示す。壁高は24～28cmほどで，西壁部が高



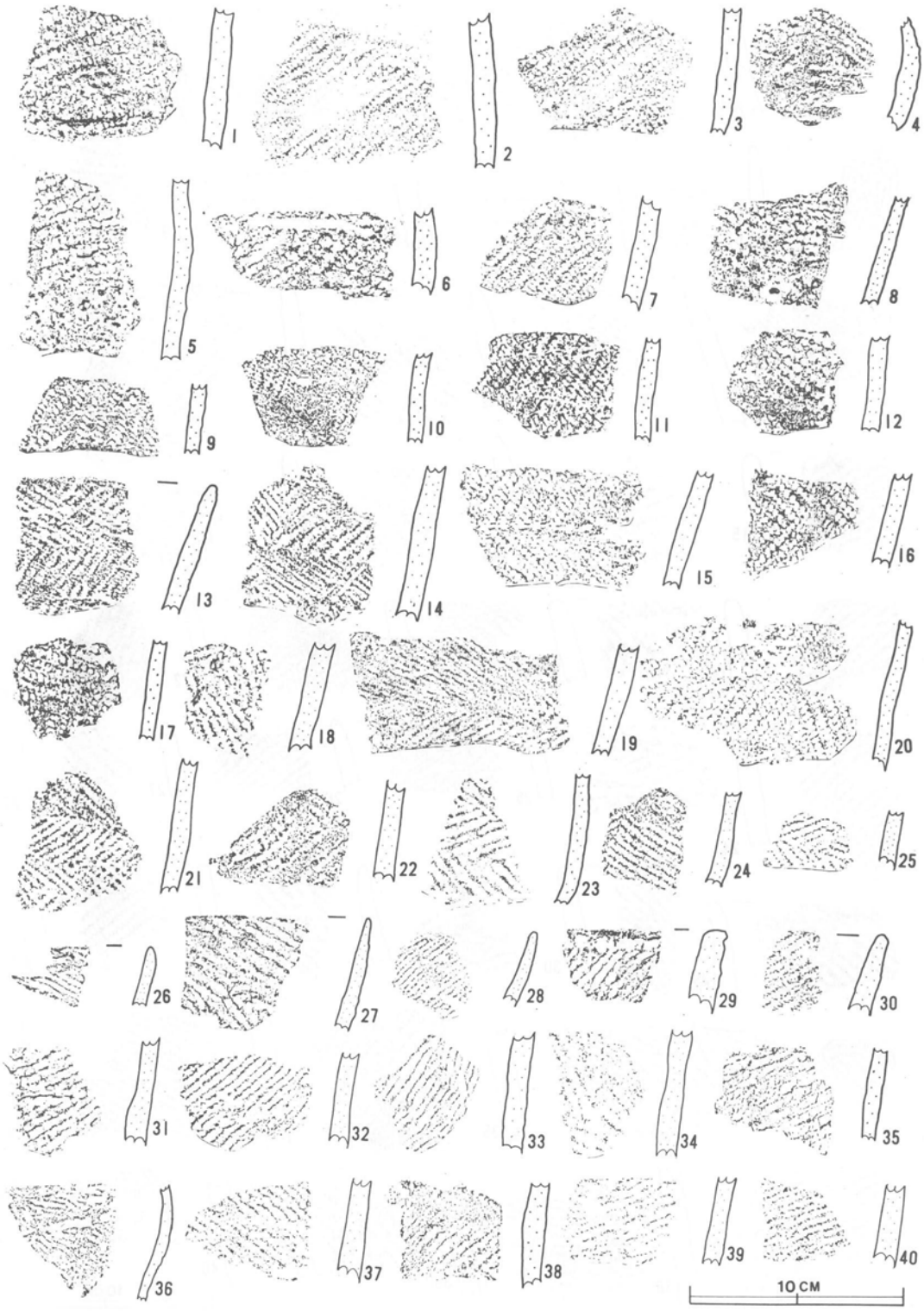

第12図　第 1 号 住 居 跡 実 測 図



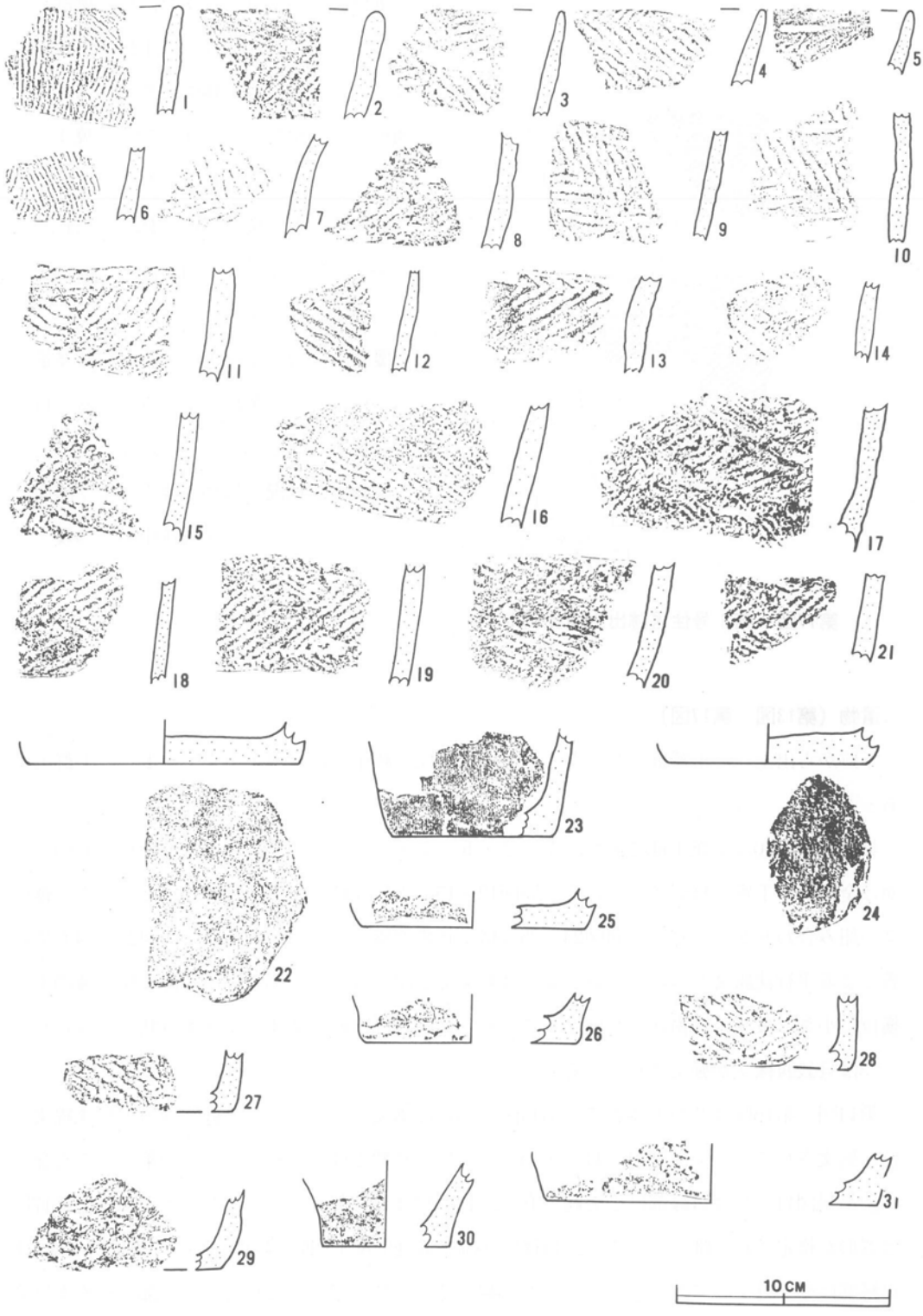

第13図　第１号住居跡出土遺物（１）




**第14図　第１号住居跡出土遺物（２）**




**第15図　第１号住居跡出土遺物（３）**



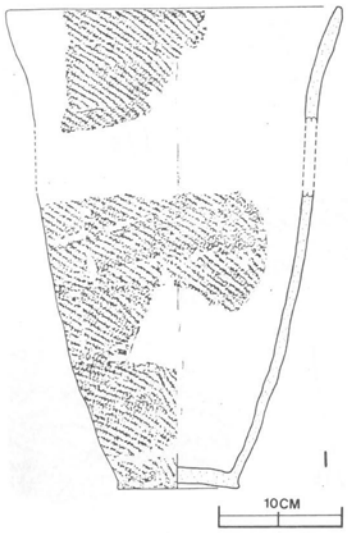

第16図　第１号住居跡出土遺物（４）

く東壁部がやや低い。また，竈南壁部が一部はりだしている。床はほぼ平坦であるが，北側が少しくぼみ，全体的にやや軟弱である。西壁および南壁よりの床に少量の焼土が確認されただけで，炉は検出されていない。

**柱穴**　南壁に接して$P_1$～$P_3$がみられ，直径は25cm内外で深さ10～34cmほどである。その他にピットは検出されていない。

**覆土**　上層は暗褐色土で，下層は多量のローム粒子を含む黄褐色土がみられる。自然流入の堆積状況を示している。

**遺物出土状況**　遺物は覆土および床面より出土し，ほとんどが住居跡中央部の覆土中から出土している。




**第17図　第１号住居跡出土遺物（５）**

**遺物（第13図～第17図）**

本跡から出土した土器群は，ほとんどが破片で住居跡中央部の覆土中より出土したⅠ群土器である。

第13図１～10は１類１種であり，１・２・５・７・９はコンパス文がややくずれたもので，器面は全体的に丁寧に整形されている。同図12～15は１類３種で，半截竹管による直線文と鋸歯状文の組み合わせがみられる。同図24～28は格子状の沈線がみられ，さらに，同図29～34も半截竹管による平行沈線文がみられ，38・39には刺突文が認められる。35～37はⅠ群１類４種の土器で横位に小さな波状の櫛歯状文が施されている。16～19は単軸絡条体による木目状文がみられ，20～23は貝殻腹縁文が施文されている。

第14図～第16図は２類土器群で，第14図１～10は縄文を地文として半截竹管の平行沈線文が横位に施文されている。同図11～41・第15図１～12は２類１種の土器で，０段多条のものも含まれる。第14図11・12は口縁部に小突起を有し，13・14は口唇部にスリットが認められる。第17図１は器形が推定される唯一のもので，口径27.0cm・底径9.8cm・推定器高38.3cmの深鉢形土器である。口縁部はやや外反してたちあがり，胴部は胴上部がくびれて底部に移行し，底部はややあげ底状を呈している。文様は$R\lessgtr\frac{L}{L}$の縄文が器面全体に施文され，焼成・胎土ともに良好である。第15図13～25は２類２種の土器群で，羽状構成は横位あるいは縦位にみられる。

第15図26～40は無節縄文の土器群であり，第15図29は口辺部に刺突文がみられる。第16図１～21は無節縄文による羽状構成を示した土器群であり，単節羽状同様横位・縦位などみられる。

第16図22～31は底部片であり，22・31など大形の底部片もみられる。

全体的に器形は深鉢形土器片であり，一般的に沈線文など有する土器群の方が焼成・整形ともに良好である。

**第２号住居跡（第18図）**

**位置**　Ｂ地区の南部（Ｌ45区）に位置し，東側に第３号住居跡が隣接している。

**規模**　Ｎ－28°－Ｗ　長軸6.46m　短軸5.65m　　平面形状　隅丸方形状　　面積　約38㎡

**各部の状況**　壁はほとんどゆるやかな傾斜を示して立ちあがっているが，北壁はほぼ垂直に立ちあがっている。壁高は23～30cmで北部が高く，南部がやや低くなり，南西壁は攪乱を受けて不明瞭である。南東壁部をのぞき，ほぼ等間隔に壁柱穴を有する。床はほぼ平坦で北側がややくぼむ。中央やや北側の床面に半円形状の焼土が検出されているが，焼土の量はそれほど多いものではなく，炉は確認されていない。

**柱穴**　壁柱穴と主柱穴がみられ，主柱穴は，対角線上に位置する$P_1$～$P_5$が考えられる。直径は，20～40cm内外で，深さ10～30cmをはかる。

**覆土**　上層はローム ブロック混りのしまりを持つ黄褐色土で，下層は多量のローム粒子を含む黄色土がみられる。自然流入の堆積を呈している。

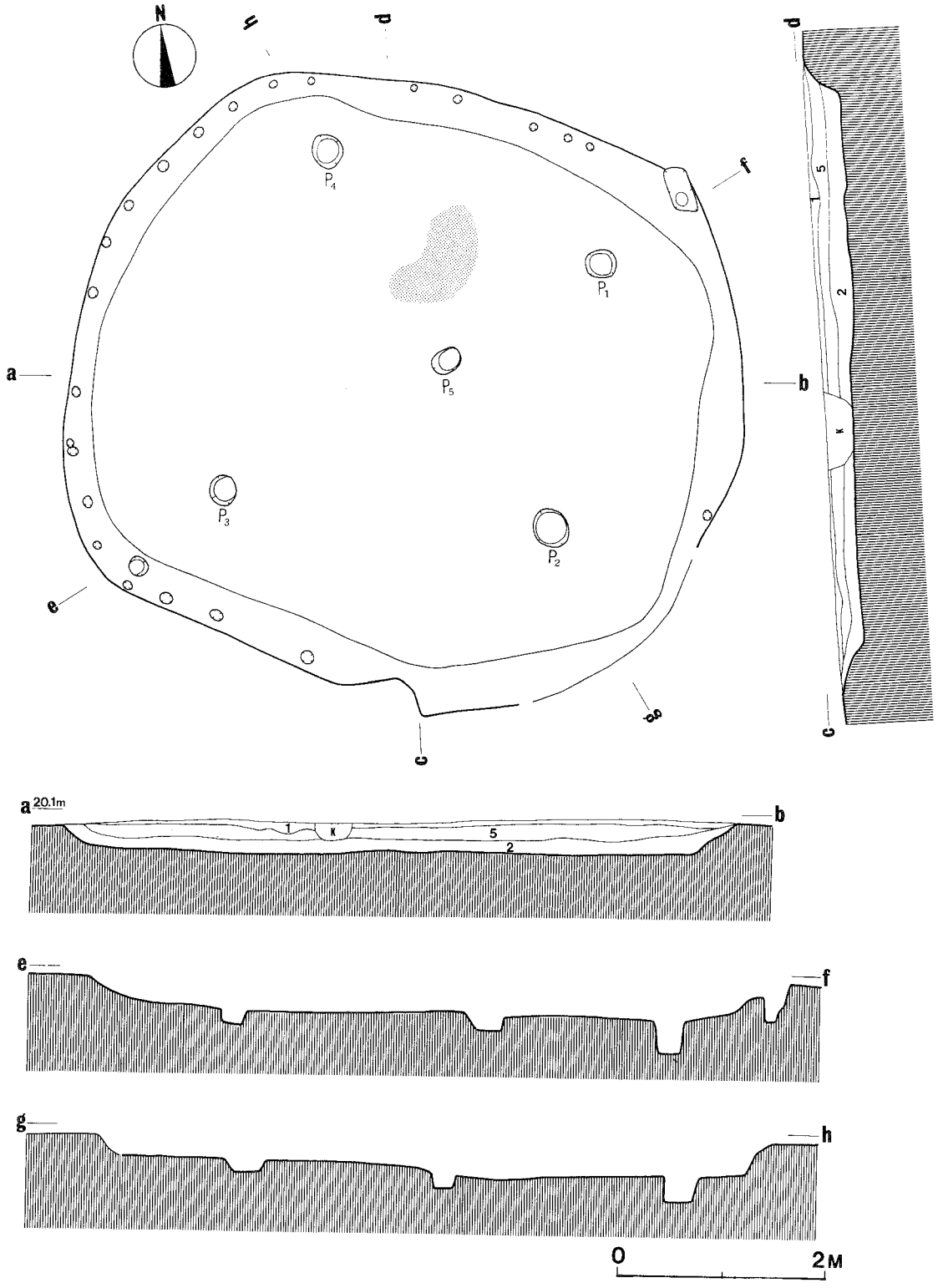
**遺物出土状況**　ほとんどが中央部付近の覆土中から出土している。

**遺物（第19図～第21図）**

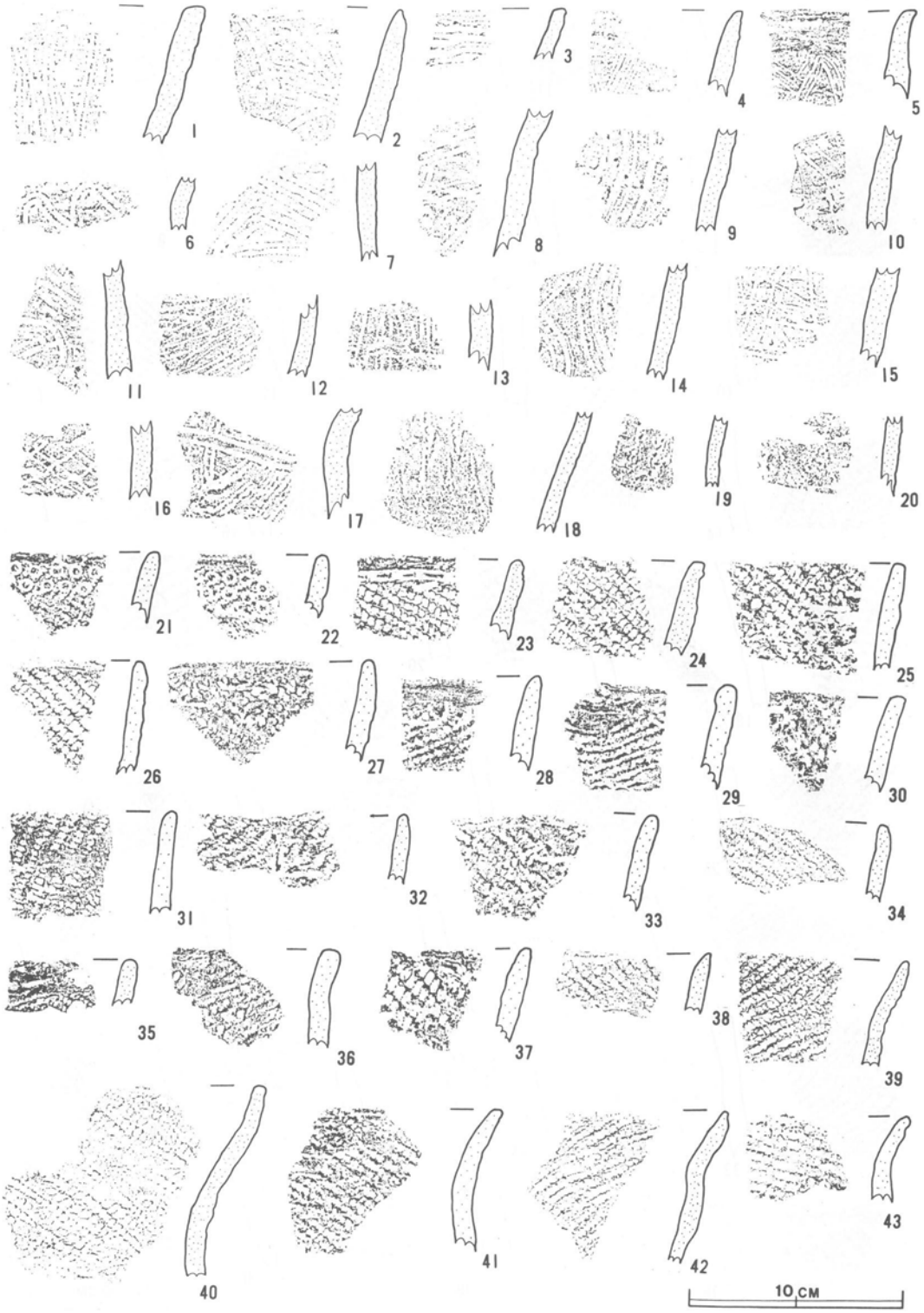
本跡から出土した土器群は，ほとんどが破片で住居跡中央部の覆土中から出土したⅠ群土器である。

第19図１～15は１類２種の土器群であり，半截竹管を使用したもの，三本同時施文したものなどがみられる。１・７・12は直線的な文様であるが，そのほかは曲線的な要素が多く，４～６はやや曲線的な鋸歯文がみられる。同図17は木目状文を地文に半截竹管による横位の沈線がみられ18～20は貝殻腹縁文がみられる。

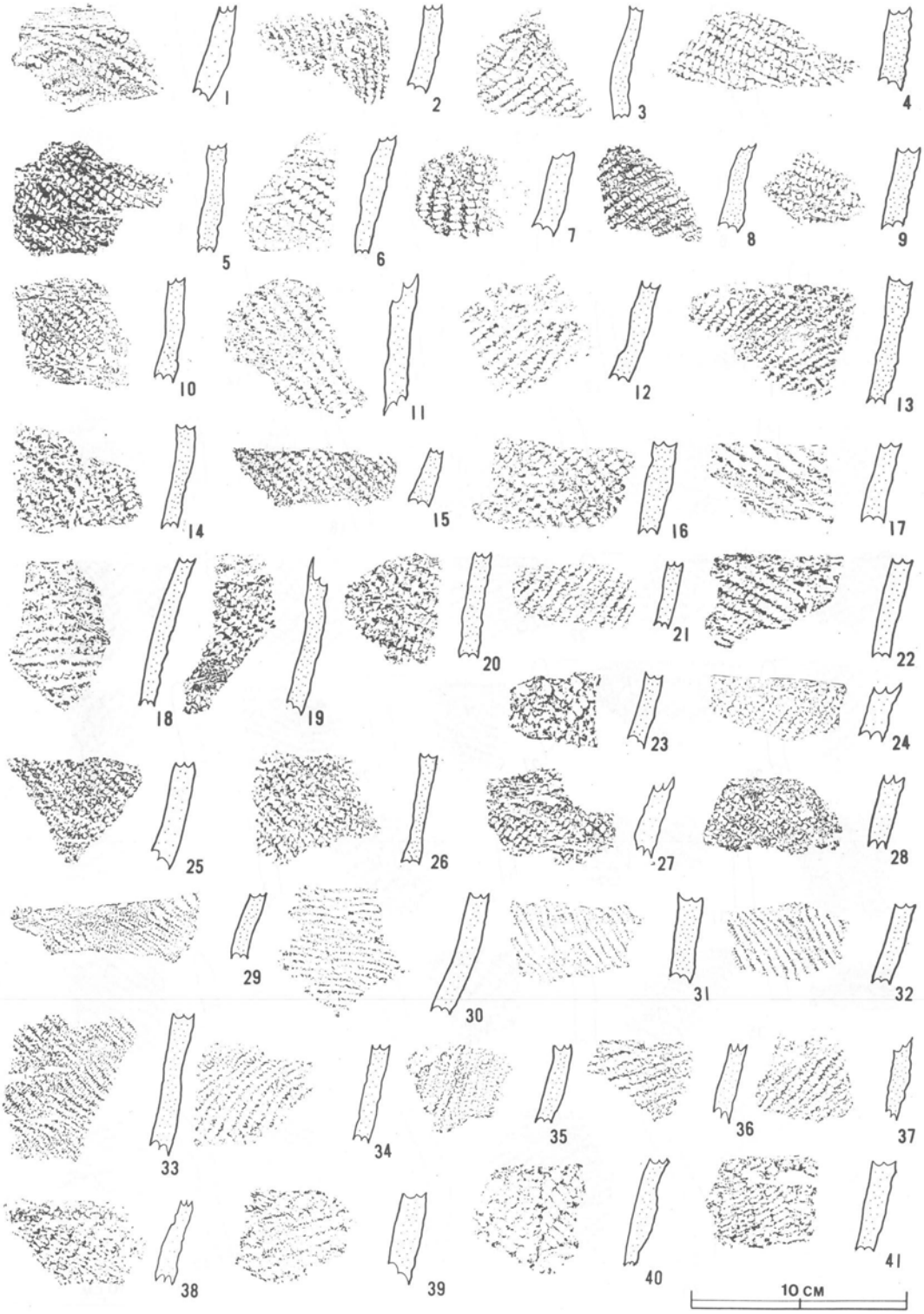
第19図21～43・第20図・第21図は２類土器で，第19図21～23は縄文を地文として口辺部に竹管刺突のみられる21・22と有節沈線がみられるものがある。同図24～43・第20図は２類１種であり０段多条のものも多く含まれる。器形は深鉢形土器であり，口縁部の形態にも種々みられる。第21図１～15は２類２種の土器群で，原体を交互に何段にも重ねて施文しているものもみられる。同図16～30は２類３種であり，16～29は無節を呈し，30は羽状構成をなしている。



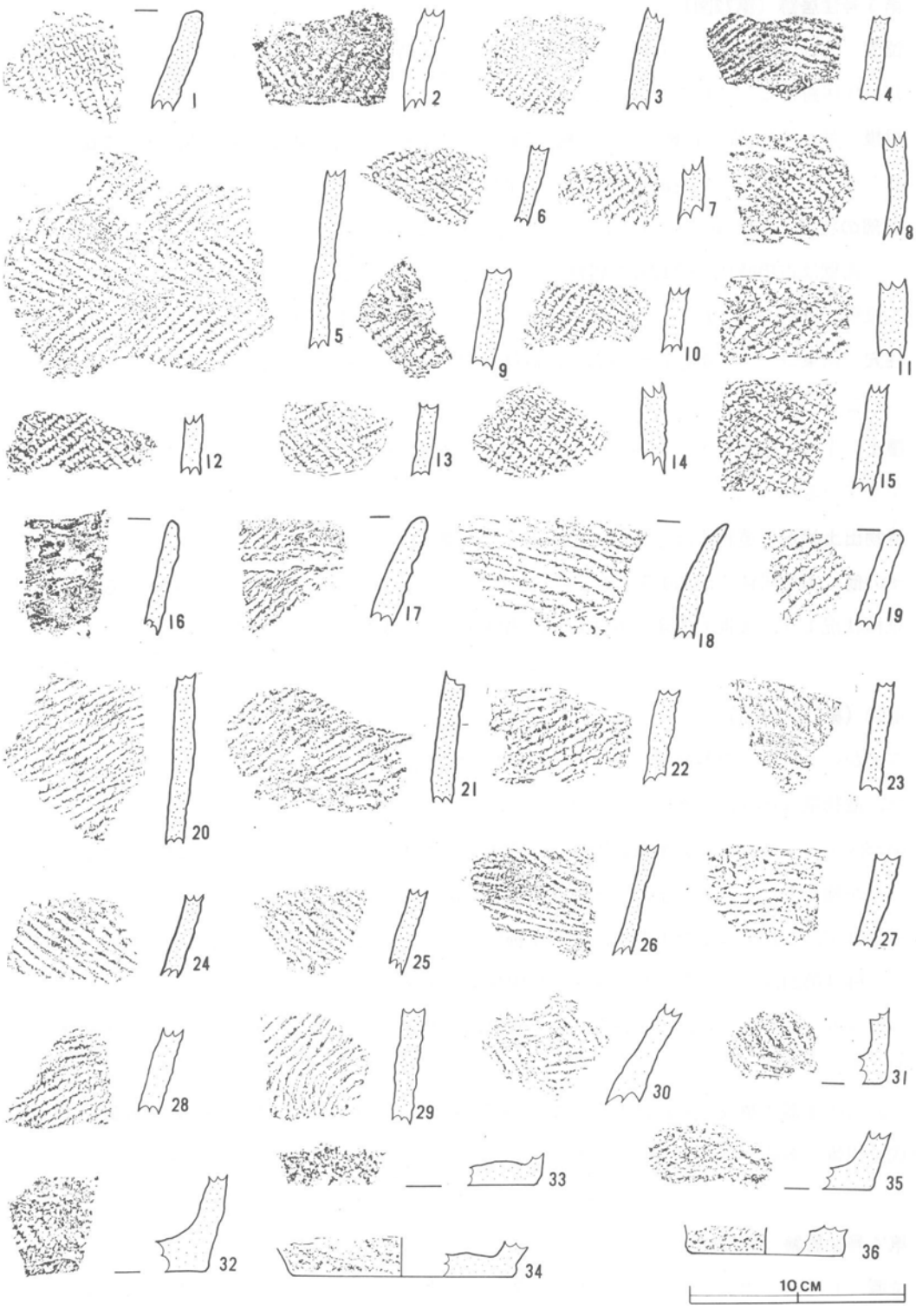

第18図　第 2 号 住 居 跡 実 測 図




第19図　第２号住居跡出土遺物（１）




**第20図　第２号住居跡出土遺物（２）**




**第21図　第２号住居跡出土遺物（３）**

**第３号住居跡（第22図）**

**位置**　Ｂ地区の南部（Ｌ45区）に位置し，西側に同時代の第２号住居跡が接し，南壁の一部は第12号住居跡によって切られている。

**規模**　Ｎ－84°－Ｗ　長軸５ｍ　短軸3.5m　　平面形状　南が第12号住居跡によって切られているため不明であるが，現況では長方形を呈していると考えられる。　面積　13.2㎡

**各部の状況**　壁はゆるやかに立ちあがり，壁高は10～24㎝内外で北壁の一部がはりだしている。南壁は古墳時代の第12号住居跡によって切られている。床はやや凹凸がみられるがほぼ平坦で東壁に攪乱がみられる。炉は検出されていないが，中央部付近に少量の焼土がみられた。

**柱穴**　南東コーナー部に$P_1$がみられ，直径は33㎝，深さ15㎝ほどで，その他にピットは検出されていない。

**覆土**　上層は暗褐色土，下層は褐色土で少量のローム粒子を含み，攪乱が入り複雑な堆積状況を呈している。

**遺物出土状況**　遺物はほとんど住居跡中央部の覆土中より出土している。

**その他**　本住居跡の北西0.5mに，不定楕円形状を呈する土壙状の攪乱壙がみられるが，覆土の堆積状況より，後世の所産と考えられ，当住居跡との関連は考えられない。

**遺物（第23・24図）**

本跡から出土した土器群は，ほとんどが破片で住居跡中央部の覆土中から出土したⅠ群土器であり，遺物量はそれほど多いものではない。

第23図１～５・９・10は半截竹管による直線文を主体としたもので，11～15は細線によって格子状文が施文されている。また，８には波状の櫛歯状文がみられる。

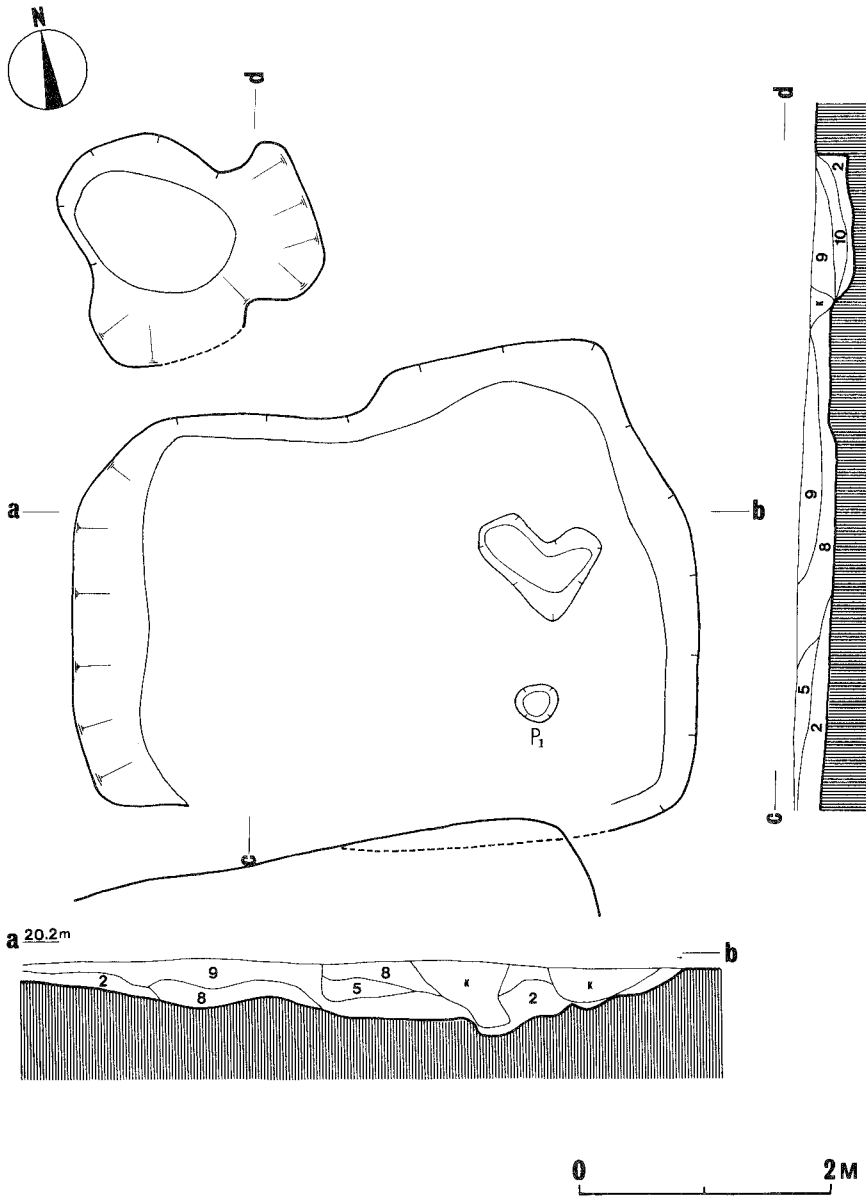
そのほかほとんどは２類土器で，２類１種は第23図19～47がみられ，０段多条のものも含まれる。２種は第24図１～５があり，４・５は附加条の原体がみられる。

３種は６～20がみられ，14・18・19が羽状構成をなす。21～28は器面の繊維痕のため文様が不鮮明である。

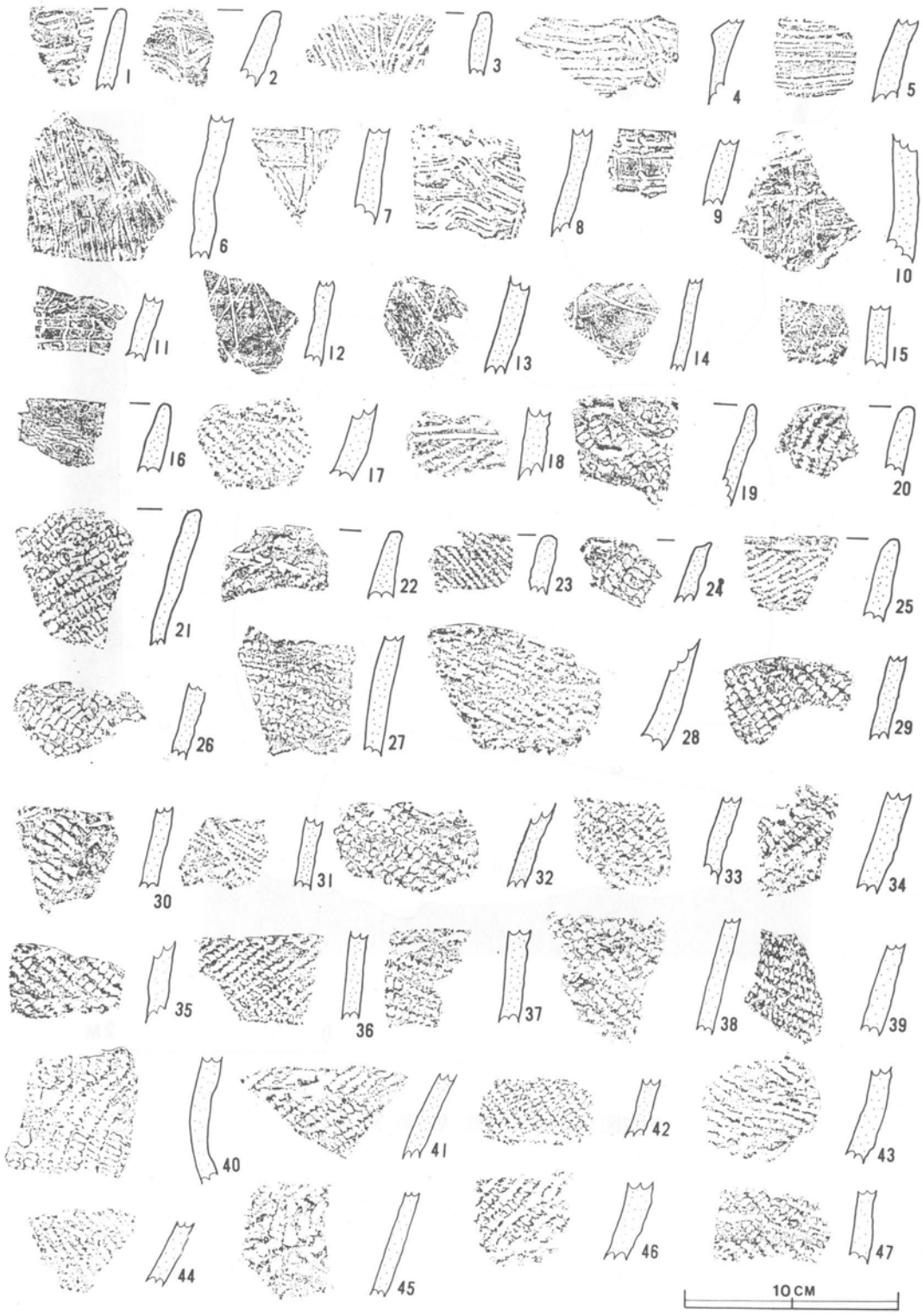
これらの土器の焼成はそれほど良好なものではないが，第24図21～28は器面に繊維痕がみられ焼成は粗雑である。

**第４号住居跡（第25図）**

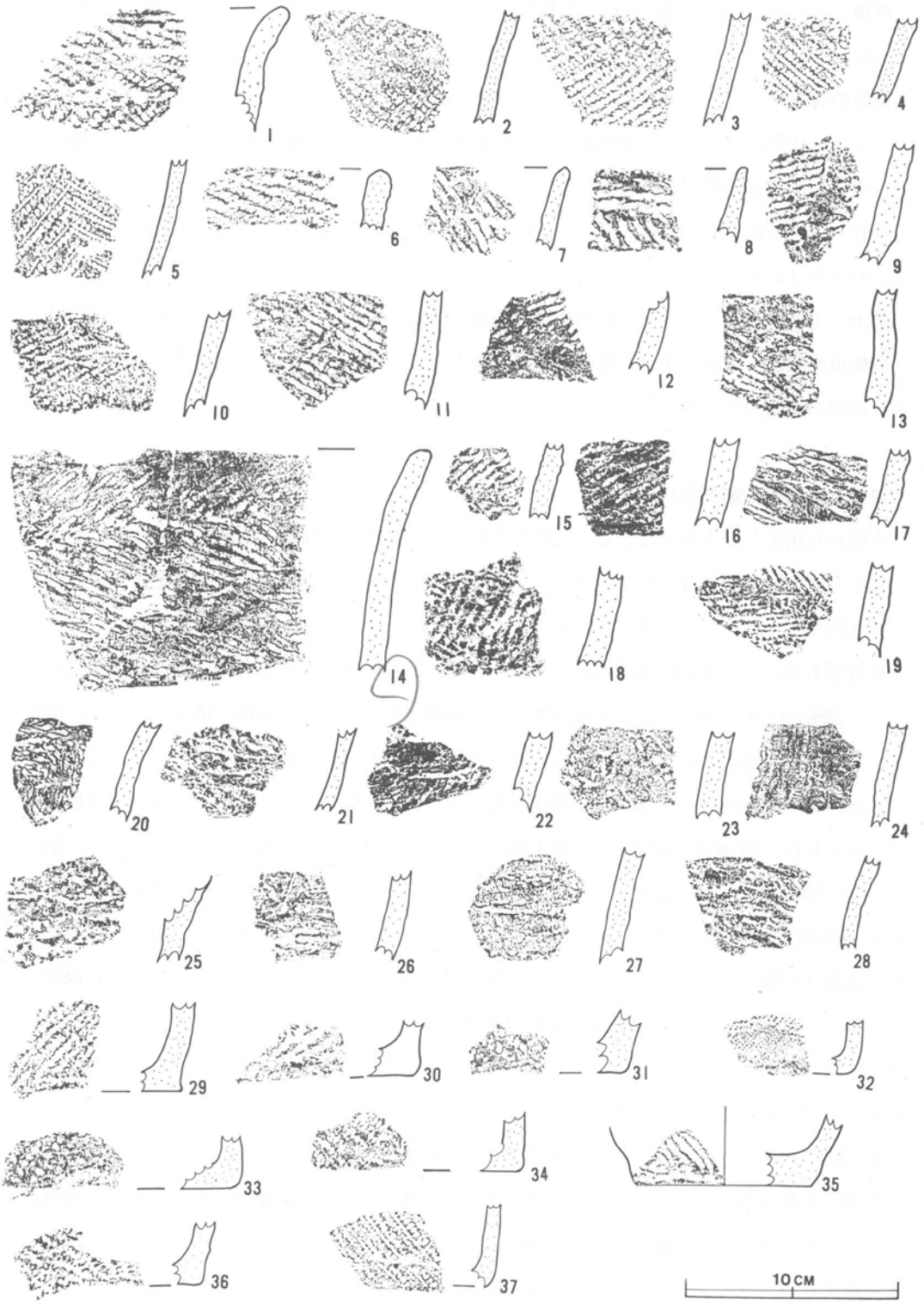
**位置**　Ｂ地区の南部（Ｎ44区）東端に位置し，南壁の一部を竈をもつ第28号住居跡によって切られている。




第22図　第 3 号 住 居 跡 実 測 図




第23図　第３号住居跡出土遺物（１）




第24図　第３号住居跡出土遺物（２）

**規模**　N－35°－W　長軸6.3m　短軸5.6m　平面形状　北東隅がやや丸まる長方形状　面積24㎡

**各部の状況**　壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがり，壁高は45～60cmで北が高く，西が低くなっている。床はほぼ平坦であるが，中央部付近が若干凸状をなす。炉は確認されていないが，西および東の壁ぎわに少量の焼土が看取される。

**柱穴**　２ヶ所確認されるのみである。$P_1$は直径34～40cm内外で深さ32cm，$P_2$は直径26cm内外で深さ45cmをはかる。

**覆土**　上層が褐色土，下層が暗褐色土で多量のローム粒を含んでいる。自然流入的な堆積である。

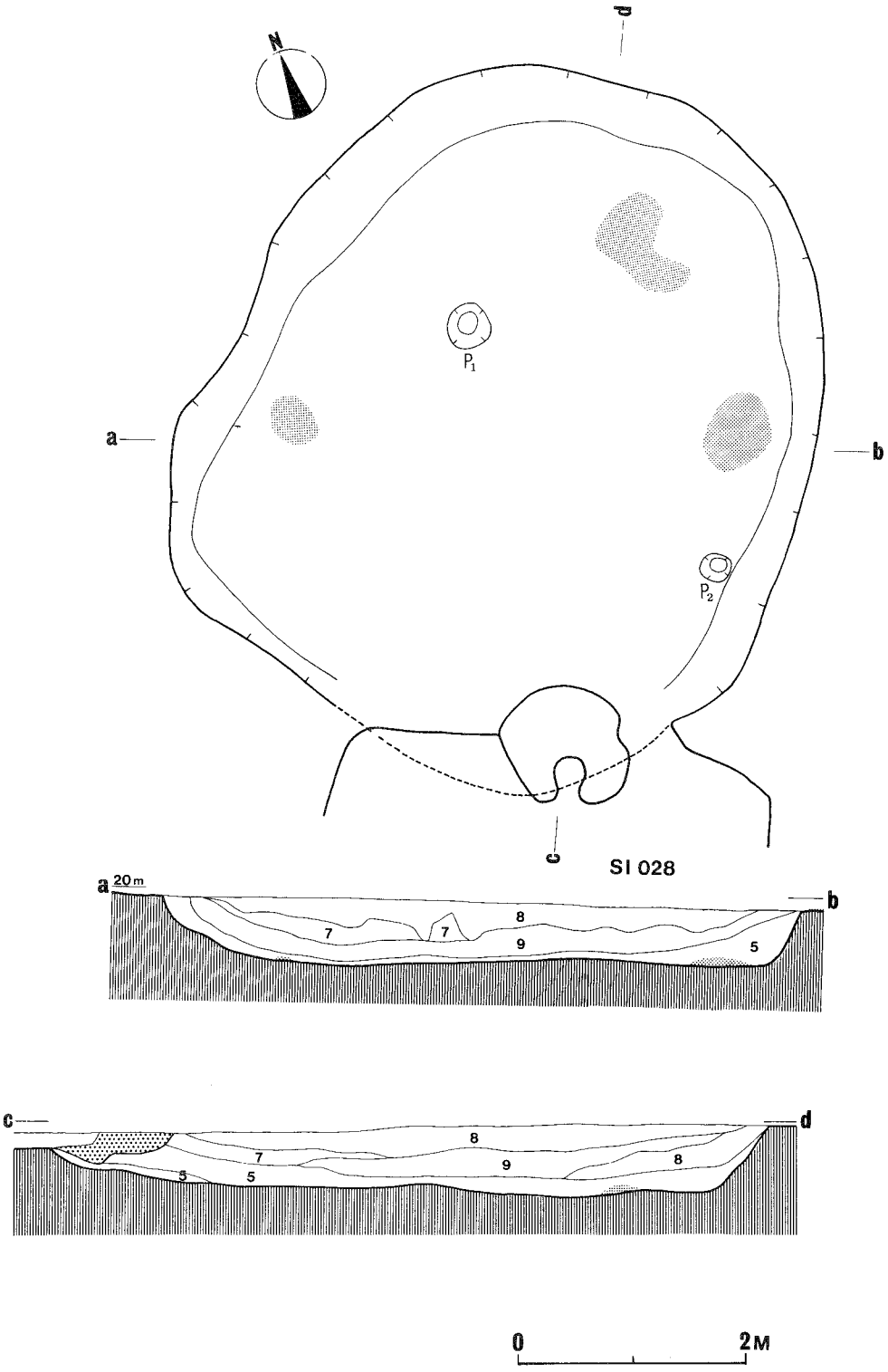
**遺物出土状況**　遺物は多量の縄文土器片で覆土および床面より出土し，ほとんどが住居跡中央より西側の覆土中から出土している。

**遺物（第26図～第35図）**

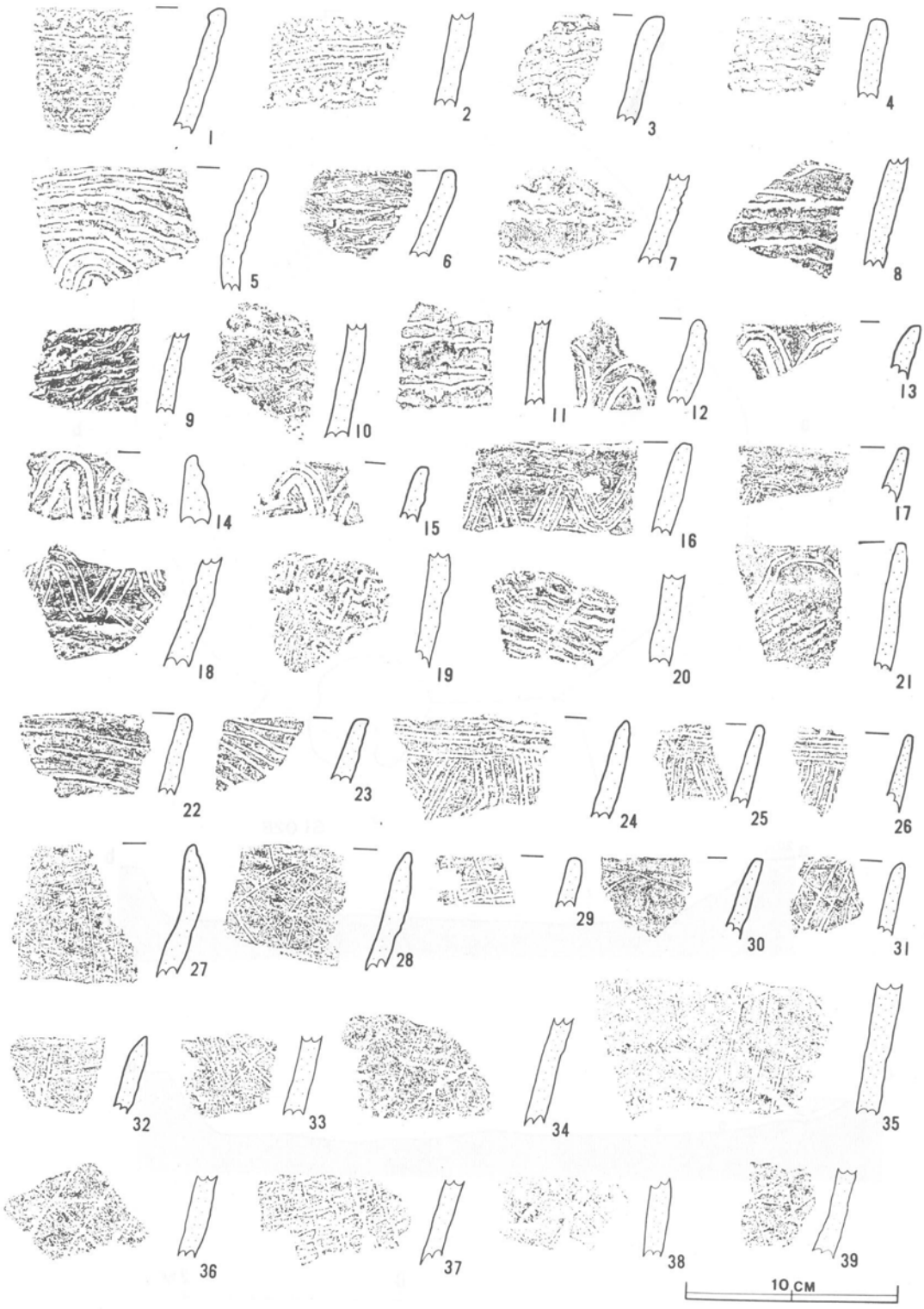
本跡から出土した土器はほとんどが破片であり，住居跡中央部から西側にかけて覆土中から多く出土している。出土量もかなり多く，すべてⅠ群土器であるが，２類土器を主体としている。

第26図１・２はコンパス文がみられ，３～11はコンパス文の退化した沈線文である。12～18は半截竹管あるいは三本同時施文の波状文がみられ，21も同種のものであり，胴部には縄文がみられる。22～26・第27図１～27は半截竹管による直線文を主体とし，文様を構成している。第26図27～39は細い沈線による格子状文がみられるもので，それらが不規則に施文されているものもみられる。第27図36～38は１類４種の櫛歯状文がみられる土器群であり，第27図28～35は貝殻腹縁文がみられる。第28図～第34図は２類土器であり，かなり大形の土器片も含まれている。第28図１～30・第29図１～36・第30図１～36・第31図１～34は１種の土器群で，０段多条のものも含まれる。第28図１は口辺部にスリットがみられ，２は０段多条のＲＬの縄文地を有し，口辺部に横位の沈線文が施文されている。また，３～５の口唇部には浅いスリットがみられる。口縁部の形状も種々で直線的に開いて立ちあがるものや口辺部で内反するものなどもあり，外反して立ちあがるものが多い。さらに，口唇部の断面形もやや尖るもの，直線的なもの，曲線的に丸みを有するものなどに分けることができる。

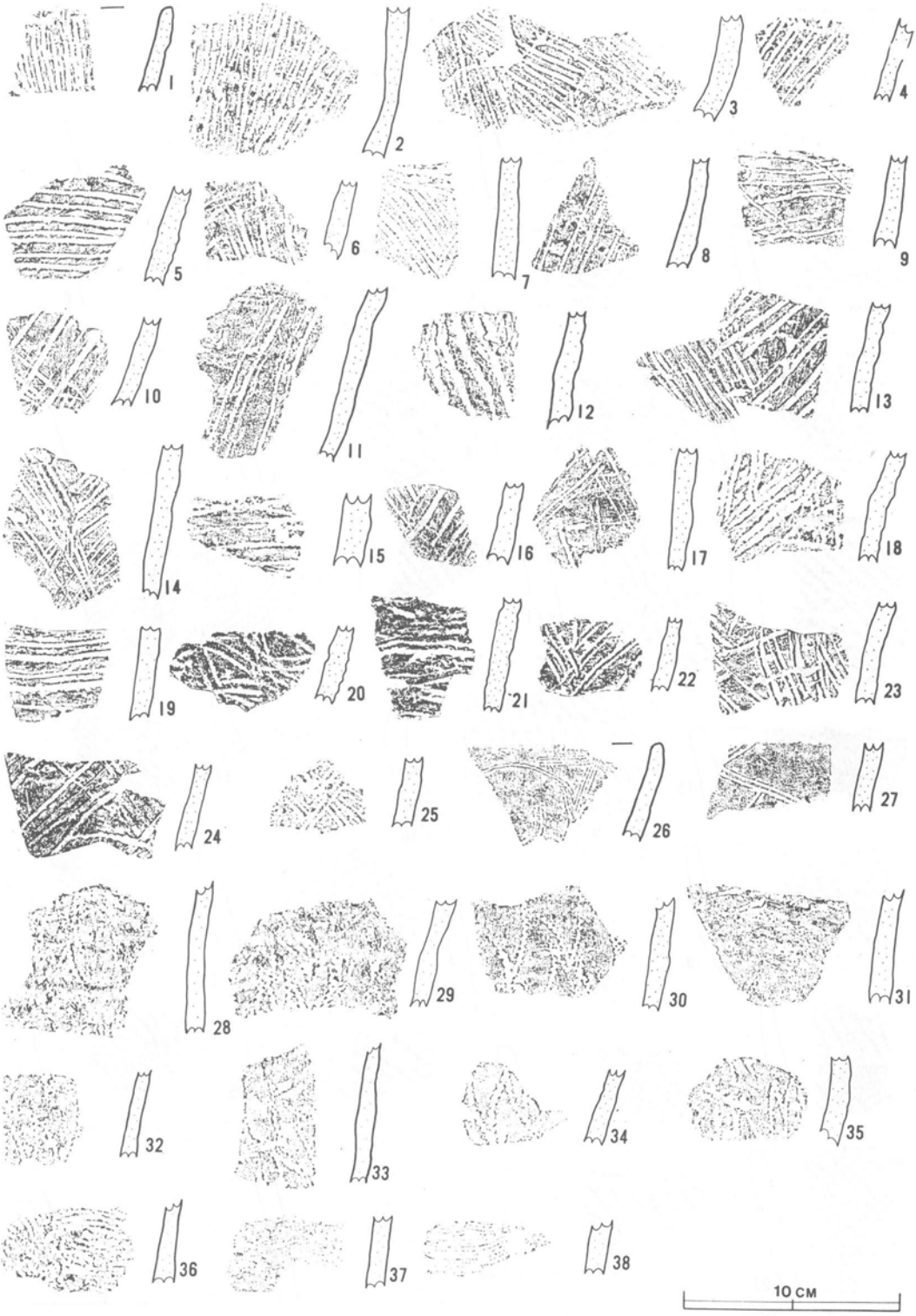
第32図１～30・第33図１～15は２種であり，羽状縄文を有する土器群である。第32図１～２は口辺部に有節沈線文を有し，同図３は沈線文が施されている。羽状構成も横位のものと縦位のものがみられ，また，羽状縄文を菱形状に施して文様的効果をあげているものもある。第32図28にはループ文がみられる。羽状縄文の中には明確に結束が判明するものと，原体の施文方向を変えて羽状構成を作出しているものとがある。また，羽状縄文が丁寧に施されているものとそうでないものがあり，全体的にみて羽状構成がやや粗雑化してきたようにみられる。



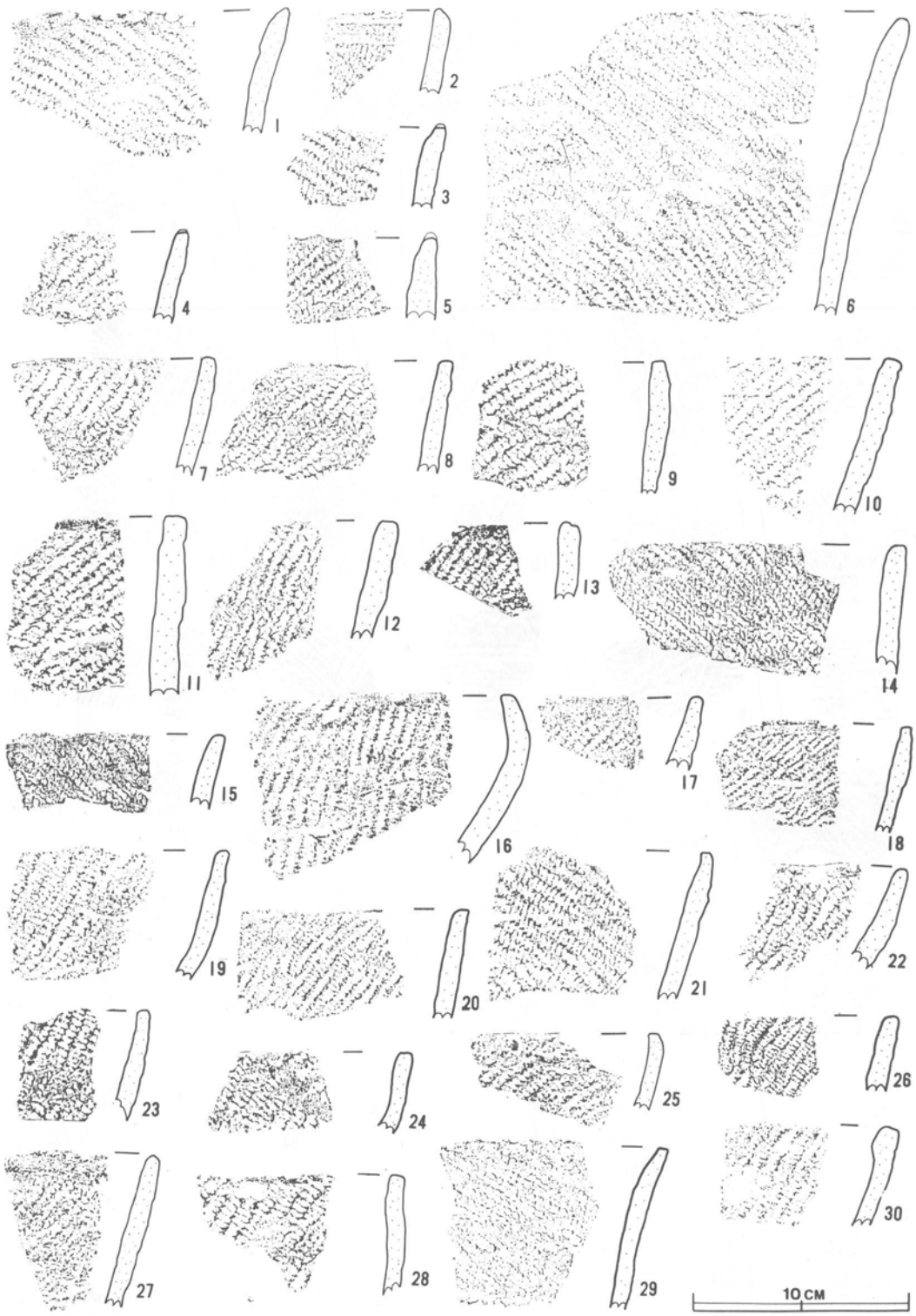

第25図　第 4 号 住 居 跡 実 測 図



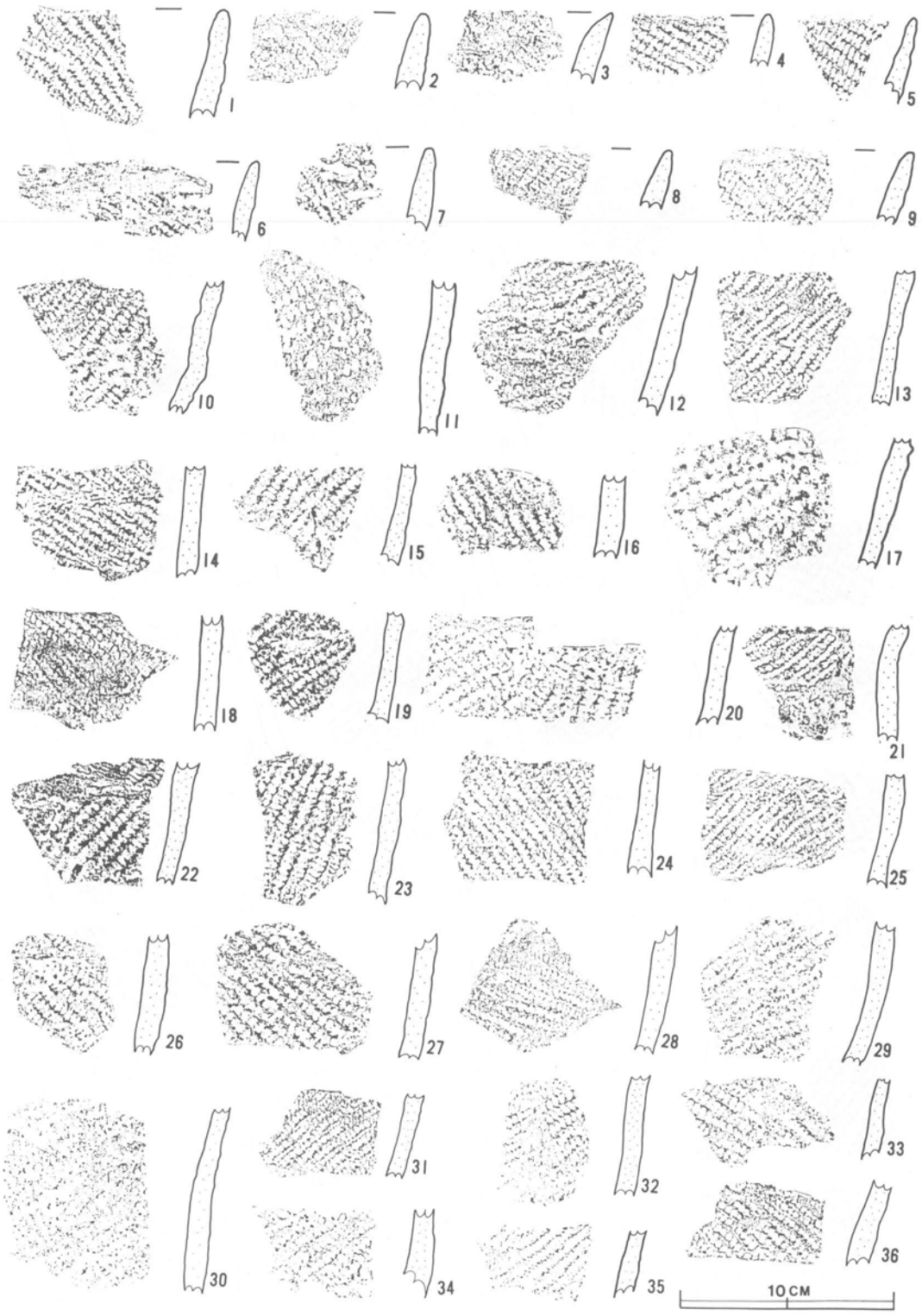

**第26図　第４号住居跡出土遺物（１）**



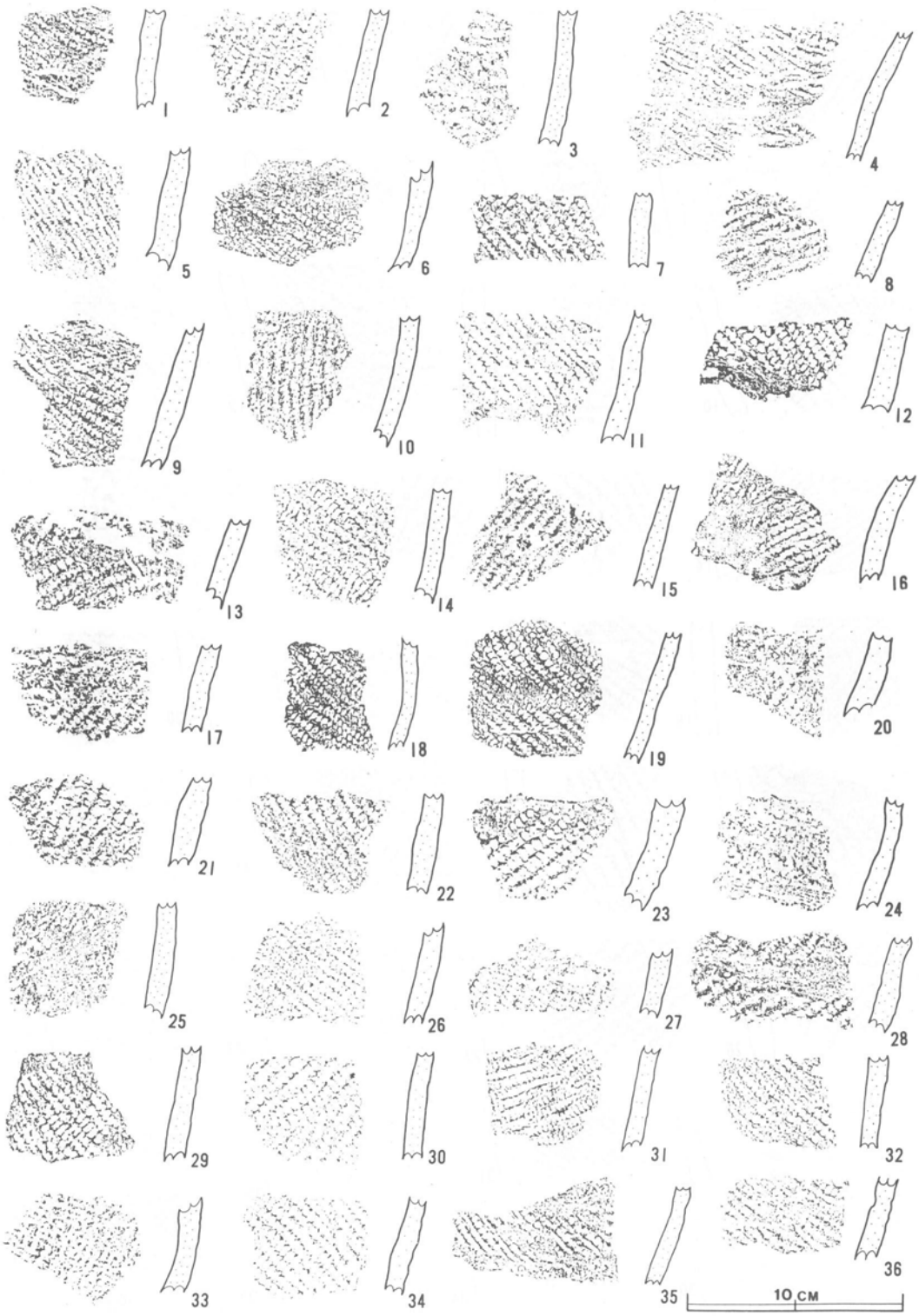

第27図　第４号住居跡出土遺物（２）



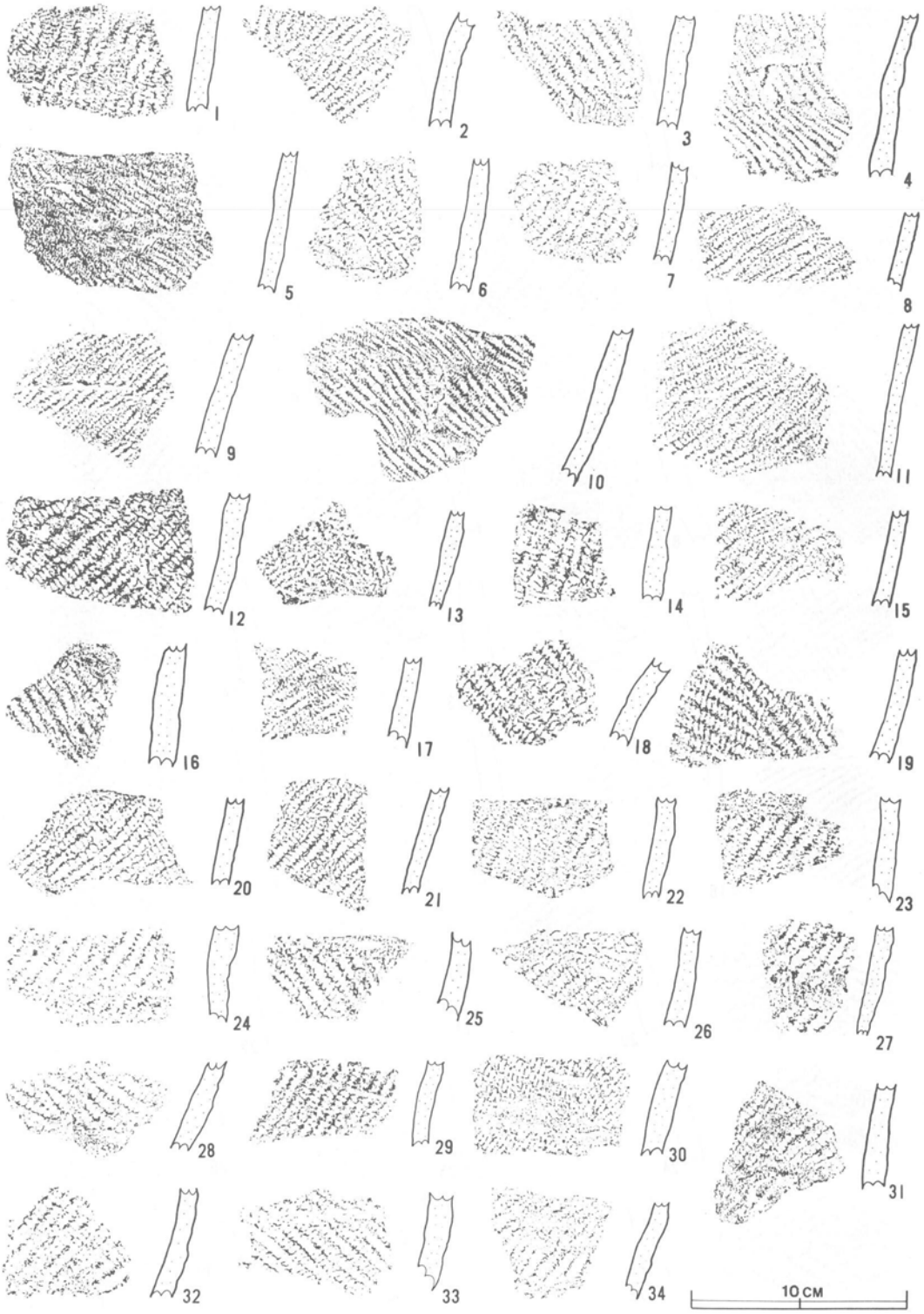

第28図　第４号住居跡出土遺物（３）



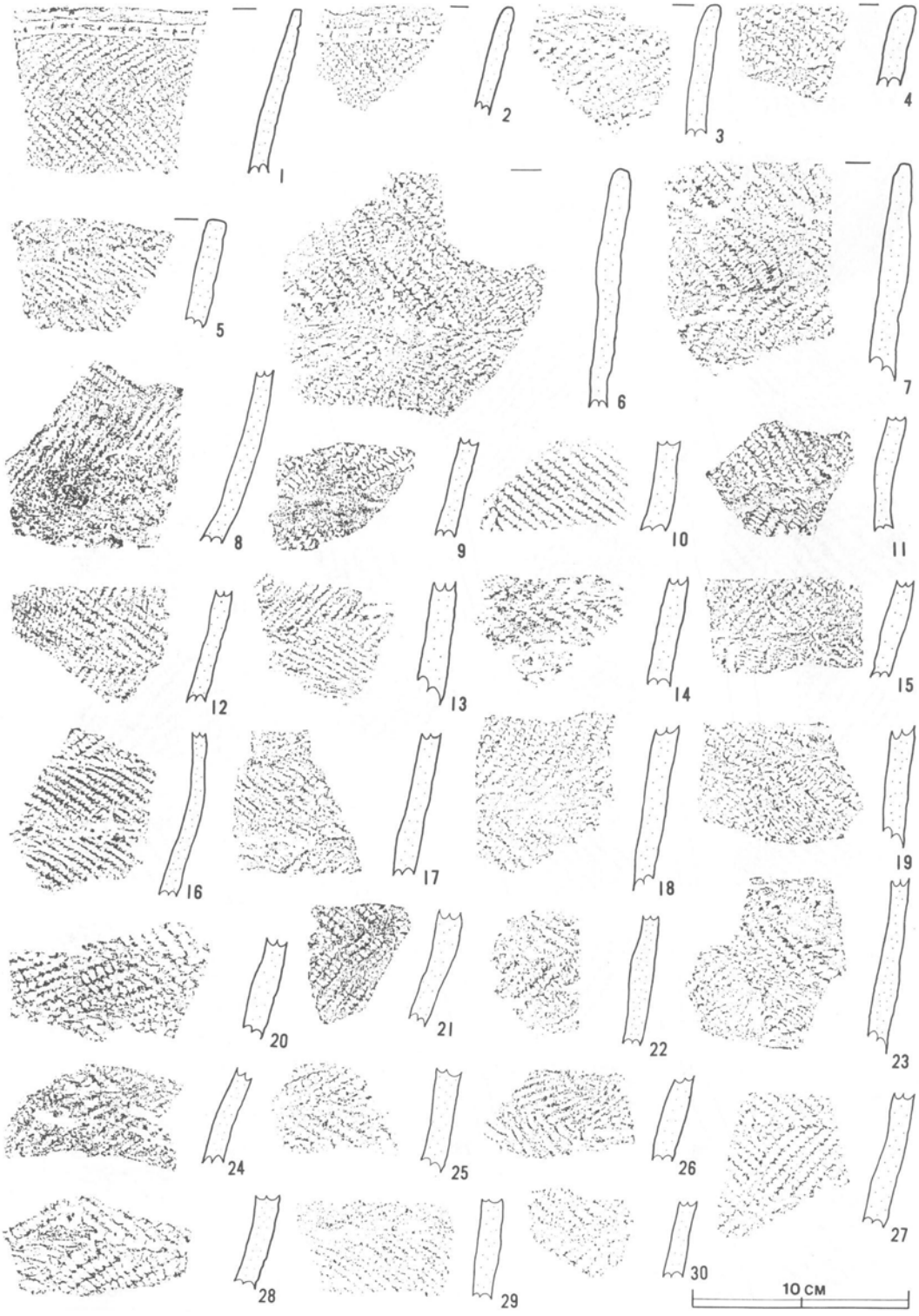

第29図　第４号住居跡出土遺物（４）



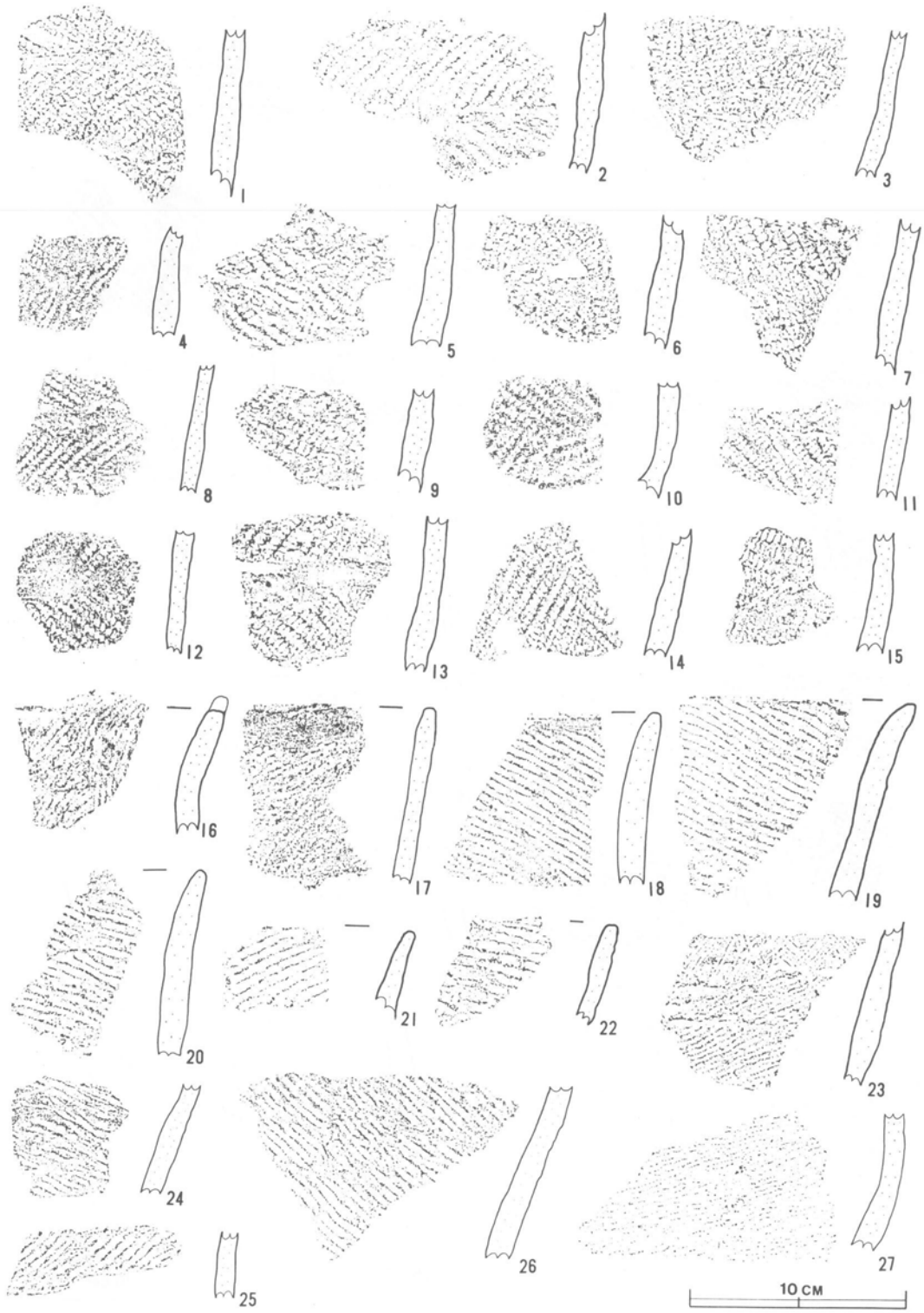

**第30図　第４号住居跡出土遺物（５）**



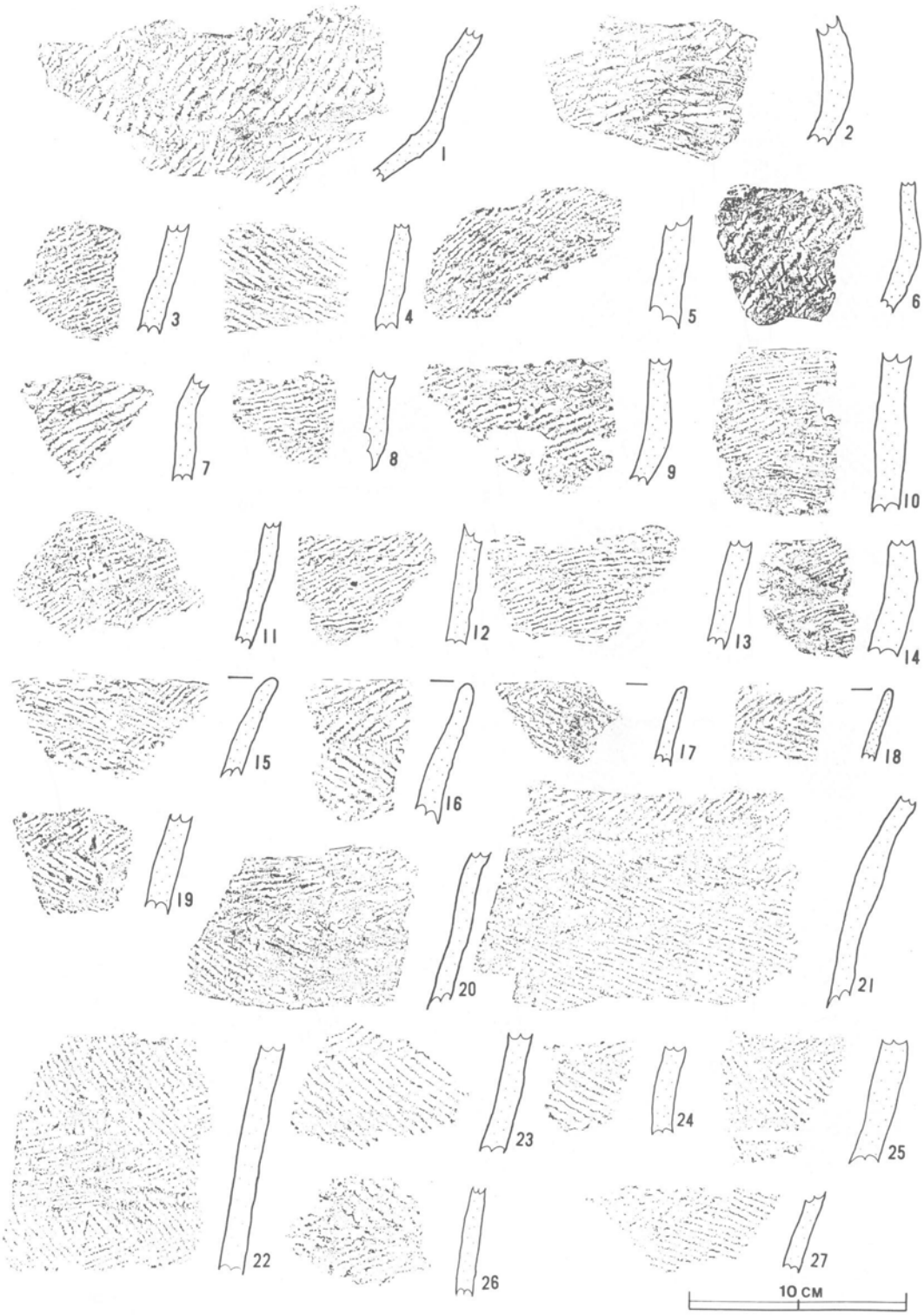

**第31図　第４号住居跡出土遺物（６）**



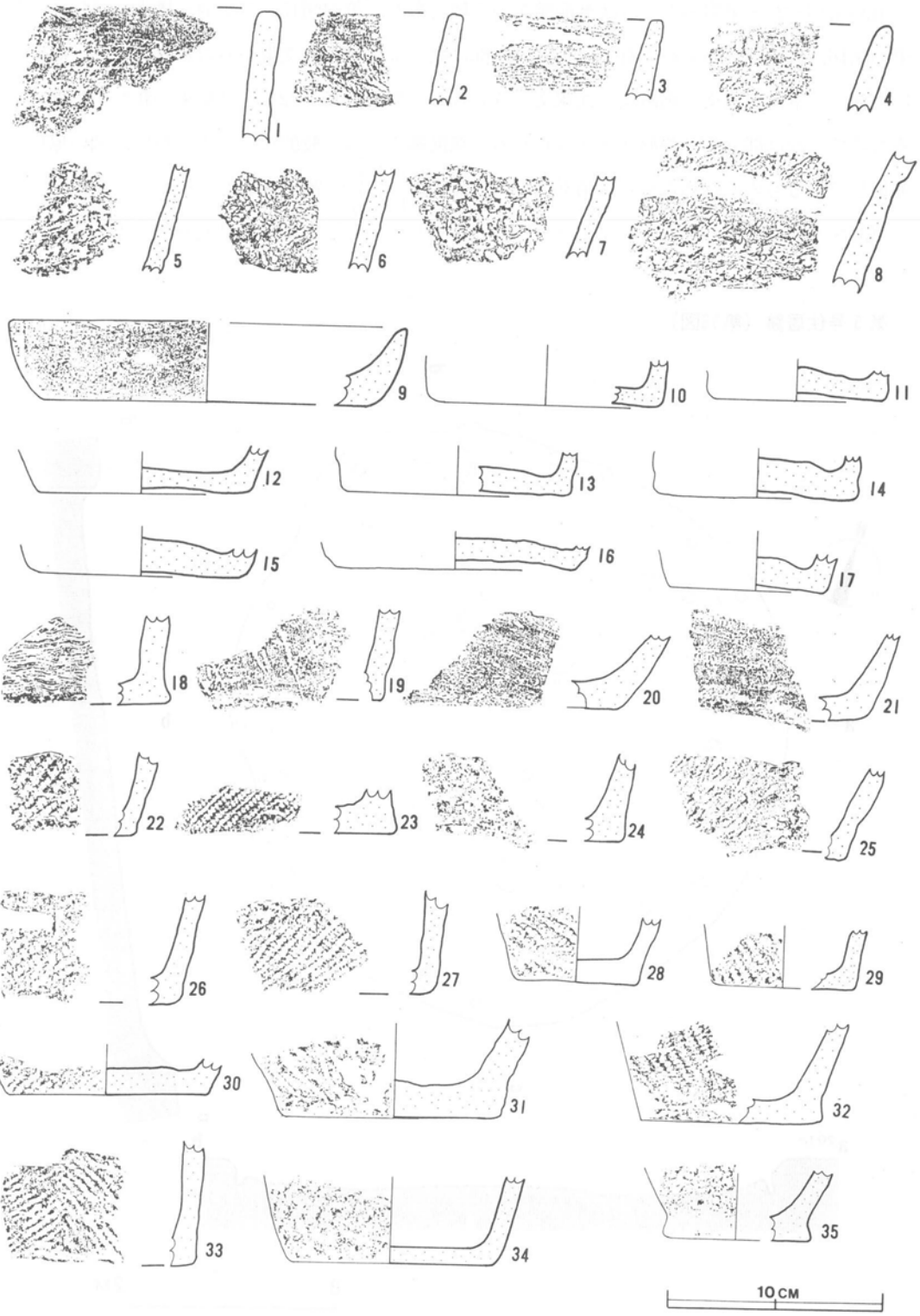

**第32図　第４号住居跡出土遺物（７）**




第33図　第４号住居跡出土遺物（８）




第34図　第４号住居跡出土遺物（９）

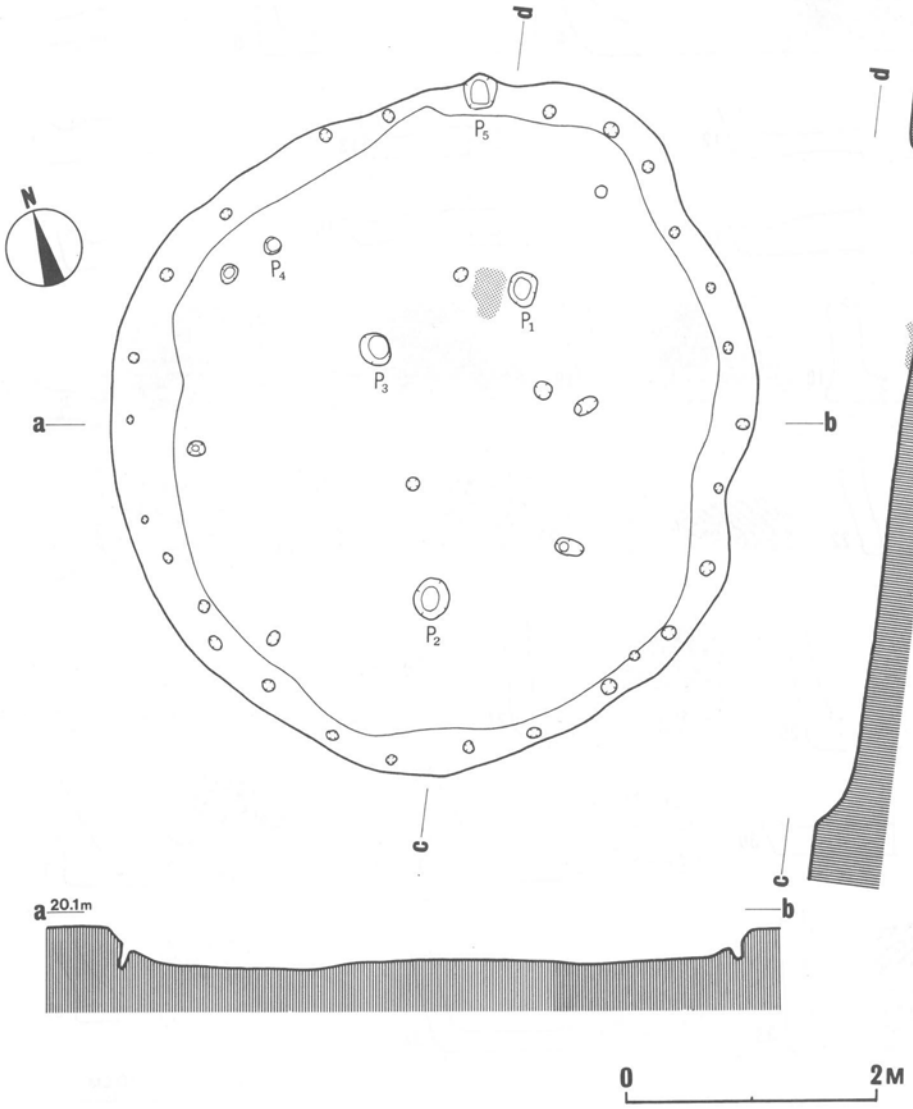



**第35図　第4号住居跡出土遺物（10）**

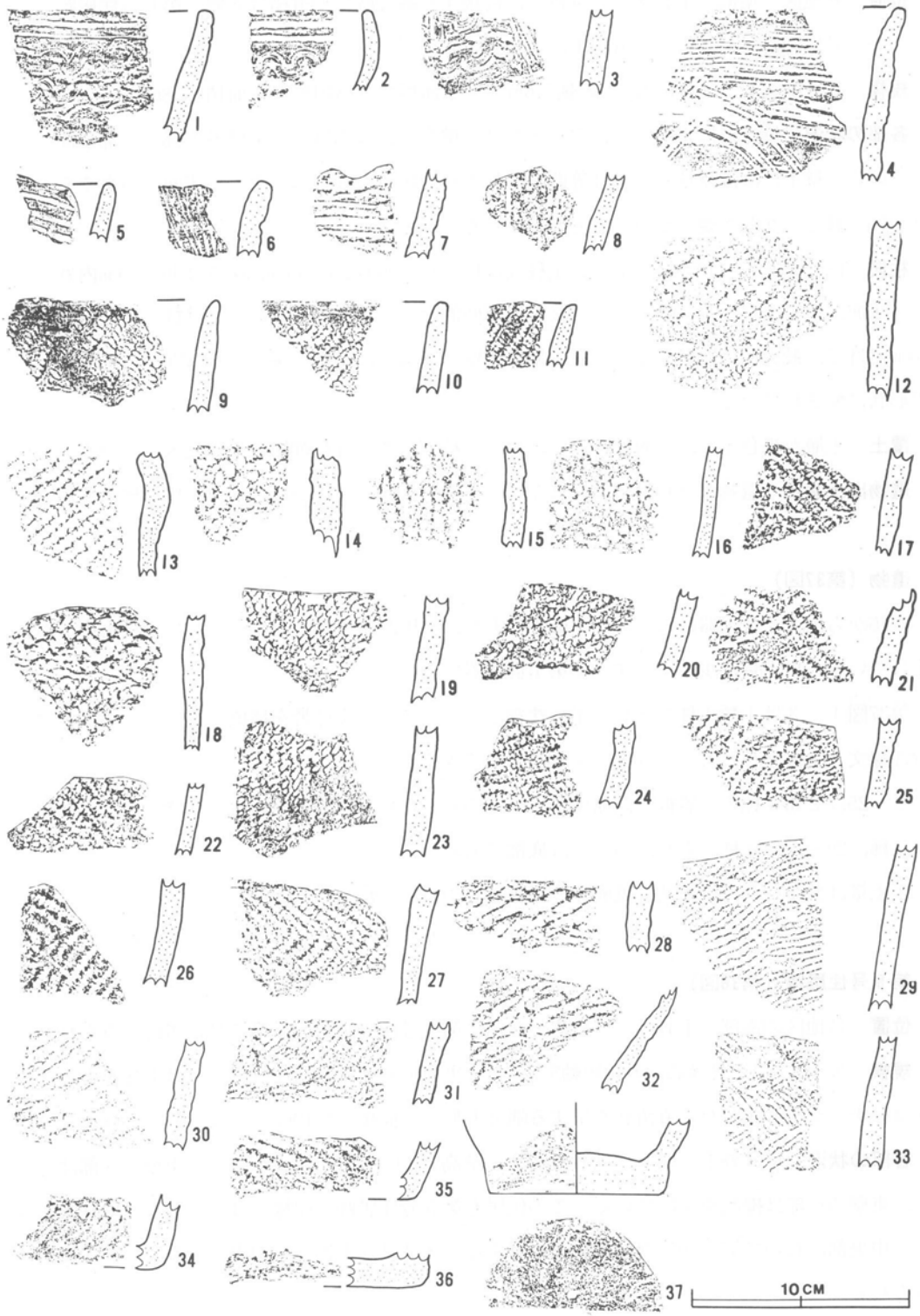
第33図16～27・第34図１～27は無節縄文の３種であり，第34図15～27が羽状構成を示している。第33図16は口縁部に小突起を有し，17は口辺部に幅２cmほどの無文帯がみられる。また，同図23は上部に三本同時施文の鋸歯状の沈線文がみられる。第34図16～22などは結束の状態が把握されるもので，22は部分的に菱形状文がみられる。無節縄文には一般的なもののほかに，細い原体を使用しているものも認められる。第35図５～８は$R\begin{cases}L\begin{cases}L\\R\end{cases}\\L\begin{cases}L\\R\end{cases}\end{cases}$の異節斜縄文である。

第35図９～35は底部片であるが，９は浅鉢状を呈している。底部中上げ底状のものもみられる。

**第５号住居跡（第36図）**




**第36図　第５号住居跡実測図**




第37図　第５号住居跡出土遺物

**位置**　B地区の南部（I 43区）に位置し，近接する縄文時代の遺構は北側に第6号住居跡，さらに第7号住居跡がありほぼ一直線上に並んでいる。

**規模**　N－8°－E　長軸6.3m　短軸5.6m　　平面形状　楕円形　　面積15.8m²

**各部の状況**　壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがり，壁高は20cm内外で，東壁外辺部の一部がはりだしている。壁下には，壁柱穴がほぼ等間隔に配され，床はほぼ平坦である。床面の中央やや北よりの$P_1$に接して少量の焼土がみられるが，炉と考えられる。

**柱穴**　$P_1$～$P_5$の5ヶ所が考えられ，主柱穴は$P_1$～$P_3$で直径25～35cm，深さは30～40cm内外である。床面に他の小穴がみられるが，これらは補助的なピットと考えられる。壁柱穴の間隔は40～70cm内外で，最大幅は北壁で1m，最少幅は西壁で35cmをはかる。深さはほぼ20cm内外で，同心円形状に配されている。

**覆土**　上層が褐色土で，下層壁ぎわにはローム粒子を多く含む黄褐色土が流入している。

**遺物出土状況**　遺物はそれほど多くはないが，中央部から南にかけての覆土中に検出された。

**遺物（第37図）**

本跡から出土した土器はほとんどが破片であり，住居跡中央部から南にかけての覆土中から出土している。出土量は少なく，すべて第I群土器である。

第37図1～3は1類1種であり，平行沈線とコンパス文が文様帯を構成している。4～8は平行沈線文を主体としたもので3種とすることができる。

9～25は2類1種の土器群で，原体が太いものもみられ，0段多条のものも含まれる。26・27は2種，29～33は3種であり，34～37は底部である。

出土量は少ないが，全体的に焼成など粗雑なものはみられない。

**第6号住居跡（第38図）**

**位置**　B地区の南部（I 42区）に位置し，南に第5号住居跡，北に第7号住居跡がみられる。

**規模**　N－1°－E　長軸5.8m　短軸5.3m　　平面形状　東側南北コーナーは丸味をもち，西南コーナーがやや張りだし直角状を呈する隅丸方形。　面積　約19m²

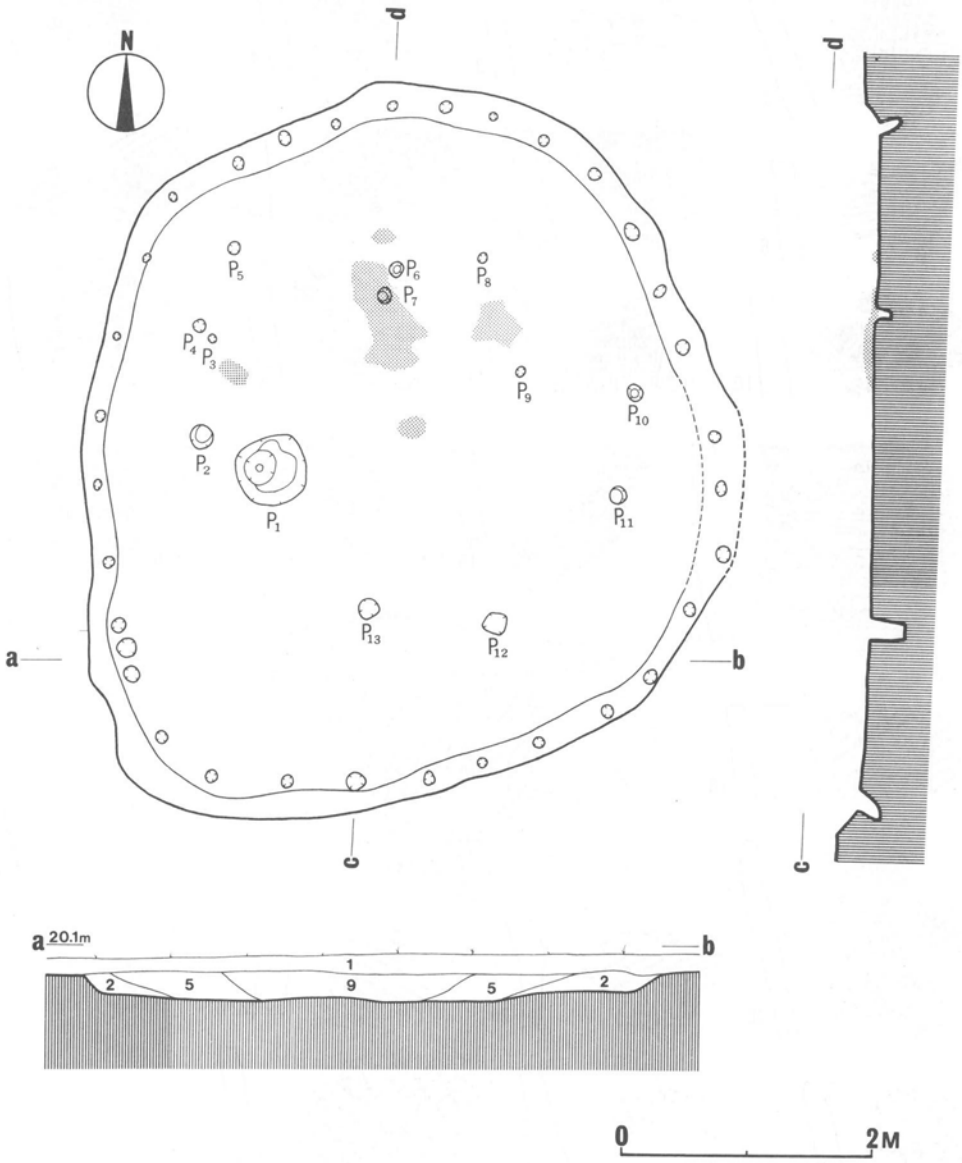
**各部の状況**　壁は外方に開いて立ちあがり，壁高は14～20cmをはかる。西南壁が一部はりだし，東壁の一部は攪乱を受けている。この住居も第5号住居跡と同様にほぼ等間隔に壁柱穴を配し，中央部にむいて55°～65°内外の角度を有する。床はほぼ平坦で，中央のやや北よりに焼土がみられる。

**柱穴**　中央やや西よりに方形状の大きめのピットがみられるが，他は小さく円形状に配されている。$P_1$は直径55cmの方形状に掘り，その西側に柱痕がみられ，深さは84cmをはかる。他のピッ

トP$_2$～P$_{13}$は，ほぼ同様なタイプで，直径20cm内外，深さ30～50cmである。

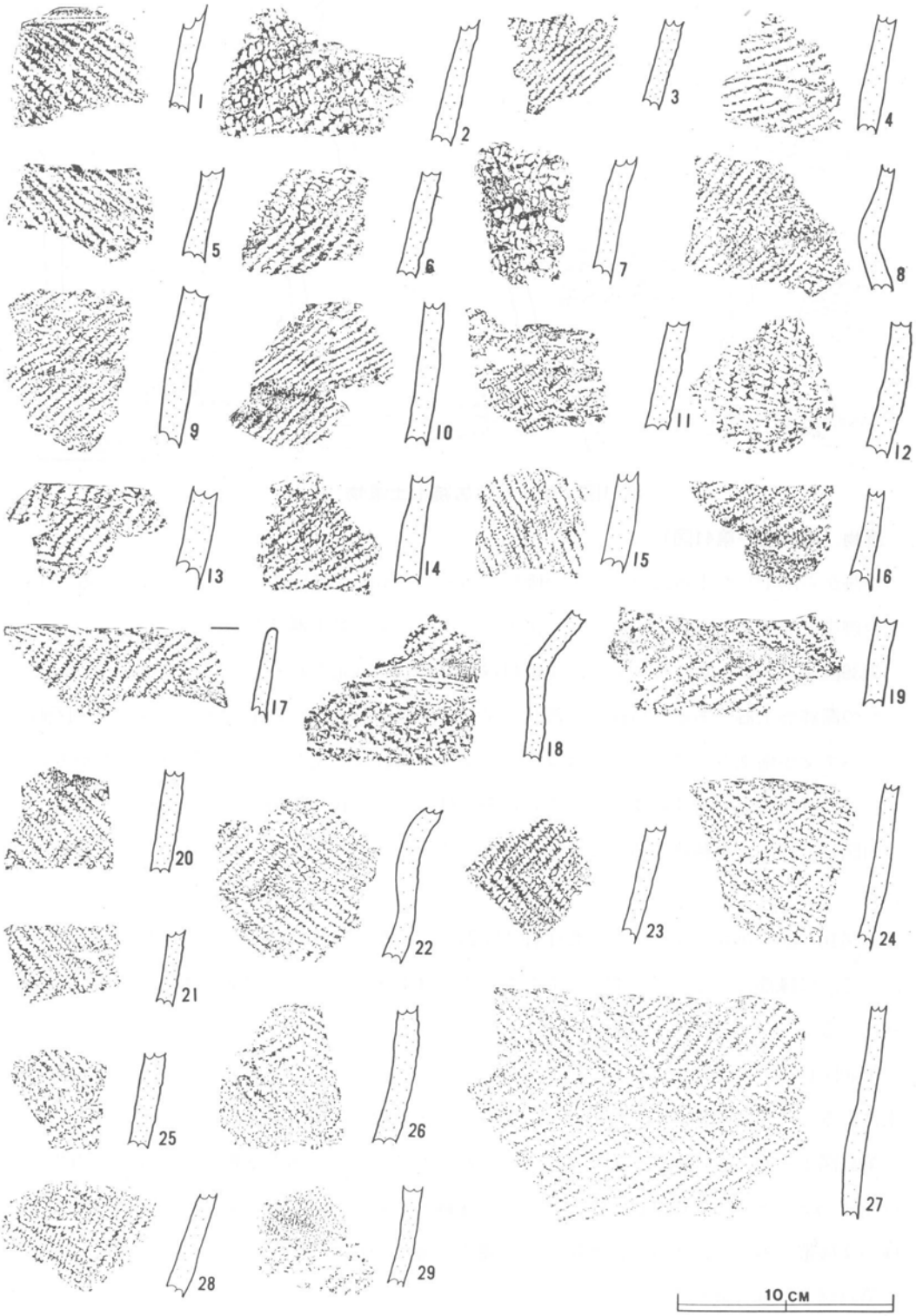
**覆土**　1は表土層で，住居中央付近の9は少量のロームブロックを含む暗褐色土で，9の両側は黄褐色土がみられる。壁ぎわの2はロームブロックを含む黄褐色土で，自然堆積の流入と考えられる。

**遺物出土状況**　中央やや西よりの覆土上層面に多くの土器片が検出されている。

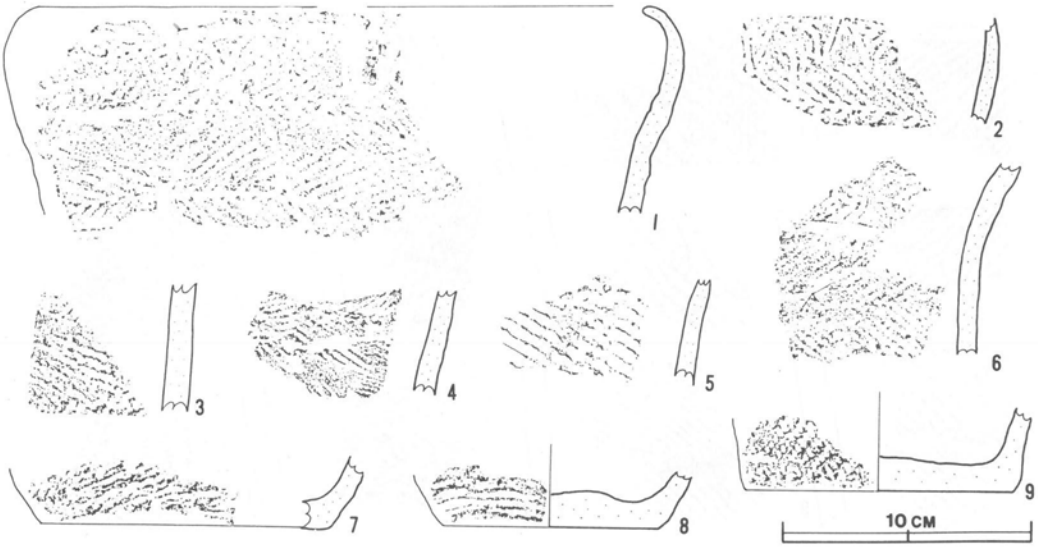



**第38図　第 6 号 住 居 跡 実 測 図**

**第39図　第６号住居跡出土遺物（１）**




第40図　第６号住居跡出土遺物（２）




**第41図　第６号住居跡出土遺物（３）**

**遺物（第39図～第41図）**

本跡から出土した土器はほとんどが破片であるが，器形が推定できるものも含まれる。土器は住居跡中央部西よりの覆土上層に多く出土し，すべて第Ⅰ群土器である。

第39図１～３は１類１種であり，１は口縁部の形状が推定されるもので，推定口径47cmほどの大形の深鉢形土器である。口縁部は波状を呈し，突起から垂下する平行沈線がみられ，区画内はコンパス文が施文されている。２はコンパス文と平行沈線を交互に施し，縦位の区画がみられる。４～11は直線的な平行沈線文などがみられる３種で，９・10は鋸歯状文が施されている。

同図12～15は，単軸絡条体による木目状文がみられ，14は上部に圧痕文らしきものが施されている。

同図16～26・第40図１～16は２類１種の土器群で，第39図19は器形が推定される。口径は28cmほどで，口縁部はゆるやかに開いて立ちあがる深鉢形土器であり，器面全体にはR$\lessgtr^{L}_{L}$が施文されている。

第40図17～29は２種の土器群であり，18は頸部が「く」の字状に屈曲している。羽状構成も結束によるものと，回転方向を変えたものもみられ，菱形を呈する部分もみられる。

第41図１～４・６は無節の羽状縄文がみられるもので，１は器形が推定できうるものである。口径は25cmほどで，口縁部は大きく内反した深鉢形土器である。口辺部には半截竹管による鋸歯様の文様帯がみられ，下部には無節の羽状縄文が施文されている。

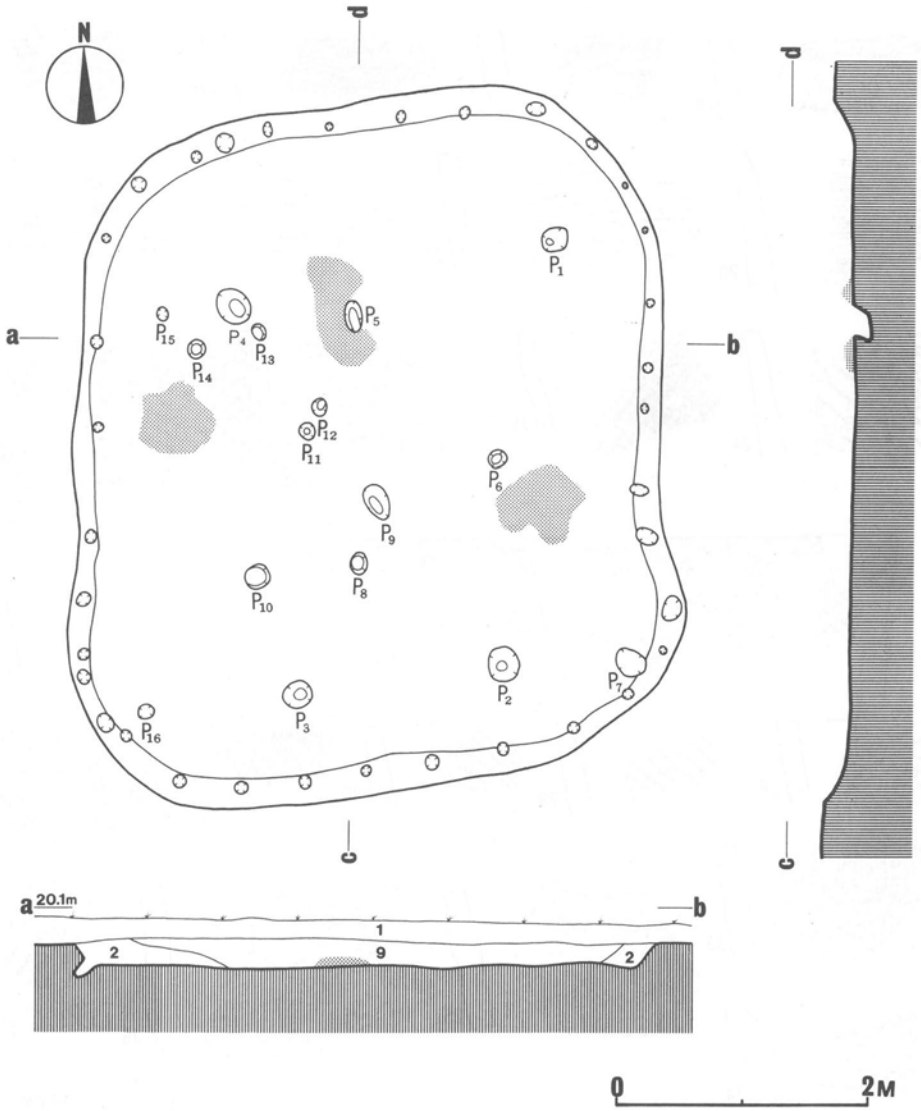
第41図７～９は底部片である。

**第７号住居跡（第42図）**

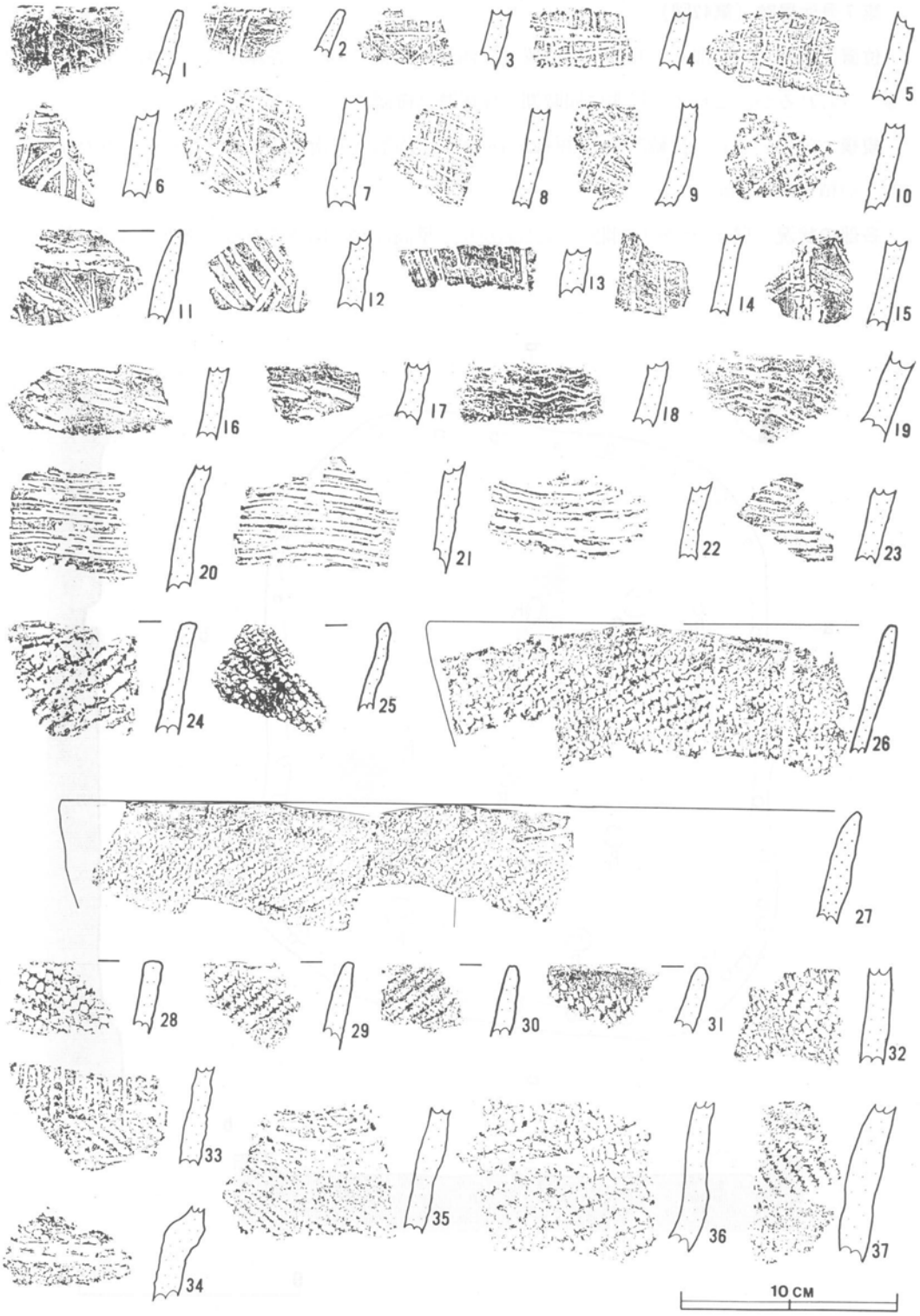
**位置**　Ｂ地区の南部（Ｉ42区）に位置し，西北に傾斜のゆるい谷津が入る。東北55ｍに地点貝塚がみられるが，これより以北に同時期の住居跡は確認されていない。

**規模**　Ｎ－4°－Ｅ　長軸5.7ｍ　短軸5.4ｍ　　平面形状　南東コーナーがやや張りだす隅丸方形　面積　約21.1㎡

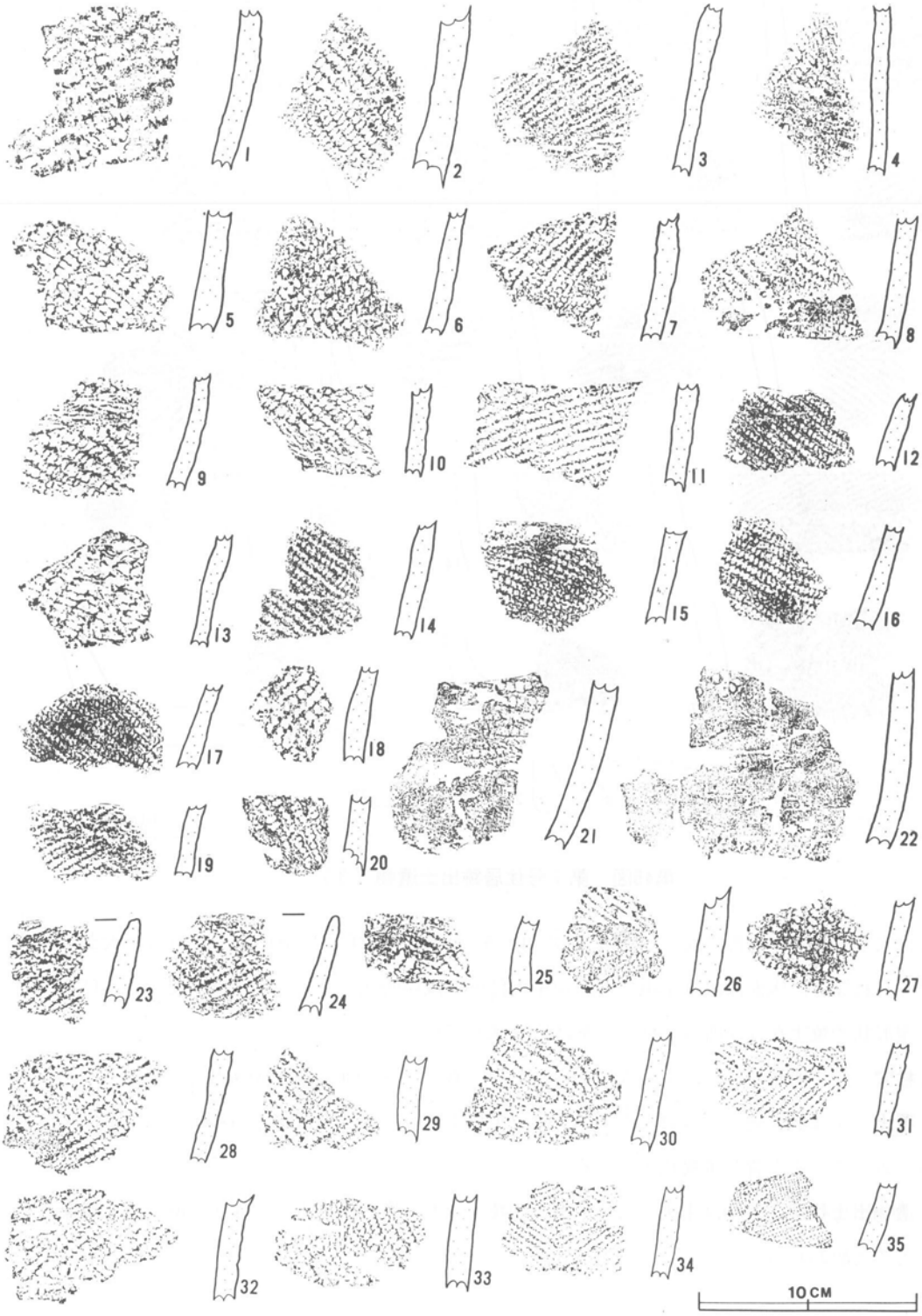
**各部の状況**　壁はやや外方に開いて立ちあがり，壁高は20㎝内外である。壁下にはほぼ等間隔に



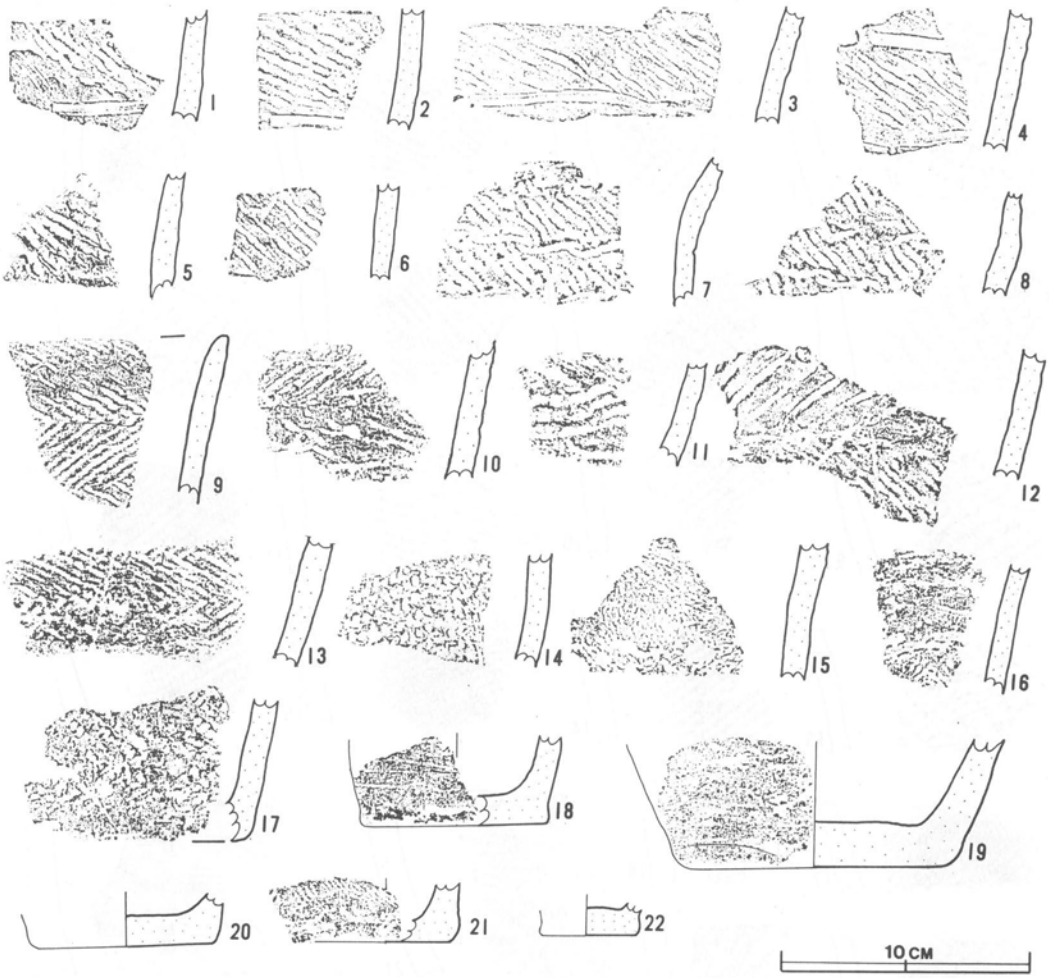

**第42図　第７号住居跡実測図**




第43図　第７号住居跡出土遺物（１）




第44図　第７号住居跡出土遺物（２）




**第45図　第７号住居跡出土遺物（３）**

壁柱穴を有し，中央部に向いて50°内外の角度をはかる。直径は10cm内外でそれほど大きいものはみられない。床面はほぼ平坦であるが中央付近が浅い凹状をなす。床中央の北西および東側に不定形状の焼土が３ヶ所みられ，一部は$P_5$と接している。

**柱穴**　16ヶ所確認され，主柱穴は $P_1$～$P_4$ で，直径20～30cm・深さ40cm内外である。

**覆土**　１は表土層，９はロームブロック，黒色土ブロックを混入する暗褐色土で，２は多量のロームブロックを含む黄褐色土である。

**遺物出土状況**　遺物は中央からやや南方の覆土上面に多く検出され，住居跡廃絶後に投棄されたものと思われる。

**遺物（第43図～第45図）**

本跡から出土した土器はほとんどが破片であり，住居跡中央部南よりの覆土上層に多く検出さ

れ，すべて第Ⅰ群土器である。

第43図１～14は直線的な沈線文が主体で，３～10は格子文がみられる。同図18～23は１類４種の櫛歯状文が施文されている。

同図24～37・第44図１～22は２類１種の土器群であり，第43図26・27は口縁部の形状が推定できうるものである。26は口径22cmほどで，直線的に開く口縁部を有した深鉢形土器である。27は口径37cmほどの大形の深鉢形土器で，口縁部は26同様直線的に開いている。33・35は上部に沈線文がみられ，34は$R<\frac{L}{L}$の縄文を地文に横位の有節沈線文が施されている。

第44図23～35は２類２種の羽状縄文を有する土器群であり，35は細い縄文が施文されている。

第45図１～13は２類３種の土器群であるが，１～４は$R<\frac{L}{L}$を地文として横位の沈線文がみられ，７・８には結束痕がみられる。

同図17～22は底部片である。

**第８号住居跡（第46図）**

**位置**　Ｂ地区の東部（Ｋ39区）に位置し，東方３ｍに第９号住居跡，西方34ｍに地点貝塚がみられる。

**規模**　Ｎ－24°－Ｅ　長軸3.8m　短軸3.5m　　平面形状　北東コーナーが丸味をもつ方形

面積　10.4㎡

**各部の状況**　壁は垂直ぎみに立ちあがり，床面から壁高は35～37cmである。床面はほぼ平坦で，中央付近に菱形状の焼土ブロックがみられる。柱穴および壁柱穴は確認されていない。

**覆土**　上層はしまりのある暗褐色土で，下層はロームブロックを含む茶褐色土がレンズ状に堆積している。

**遺物出土状況**　遺物は少量の縄文土器片で，覆土中および床面より検出されている。

**遺物（第47図）**

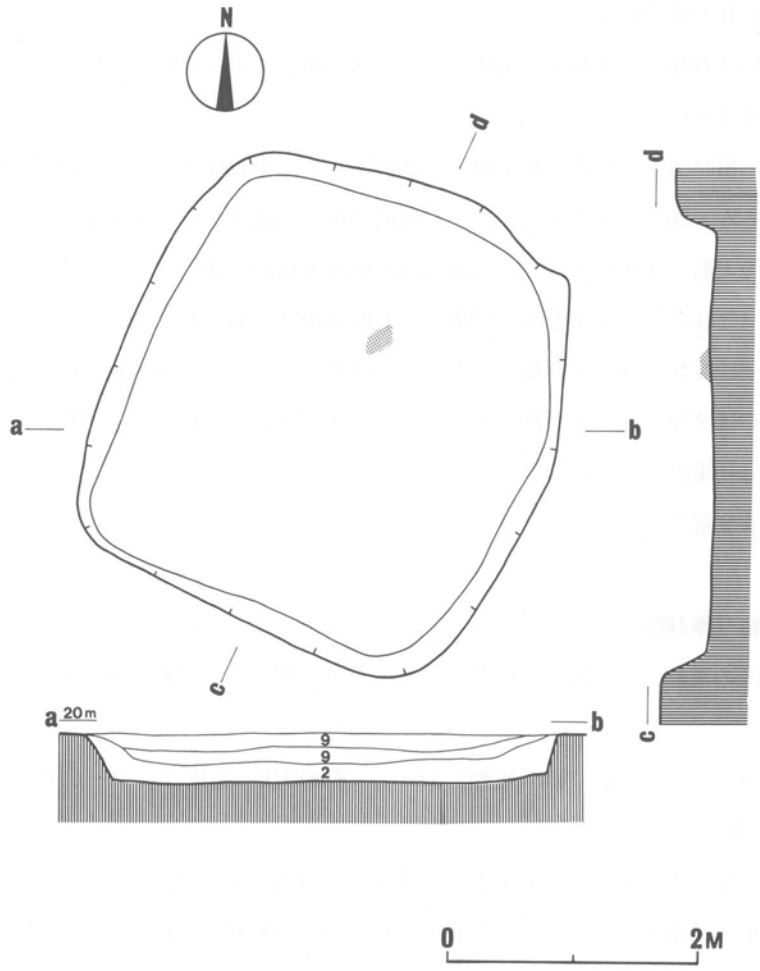
本跡から出土した土器は少量で，すべて住居跡の覆土および床面から出土した第Ⅰ群土器である。

第47図１～４は１類の土器であり，１は横位に多条の沈線が施され，２は半截竹管による文様帯がみられる。また，４は底部片である。

同図５～31は２類の土器群で９～17は１種，18～23は２種であり，縄文は粗雑なものもみられる。また，24～31は３種の土器である。

**第９号住居跡（第48図）**

**位置**　Ｂ地区の東端（Ｒ38区）に位置し，南西３ｍに第８号住居跡がみられ，東は区域外に至




**第46図　第 8 号 住 居 跡 実 測 図**

る。

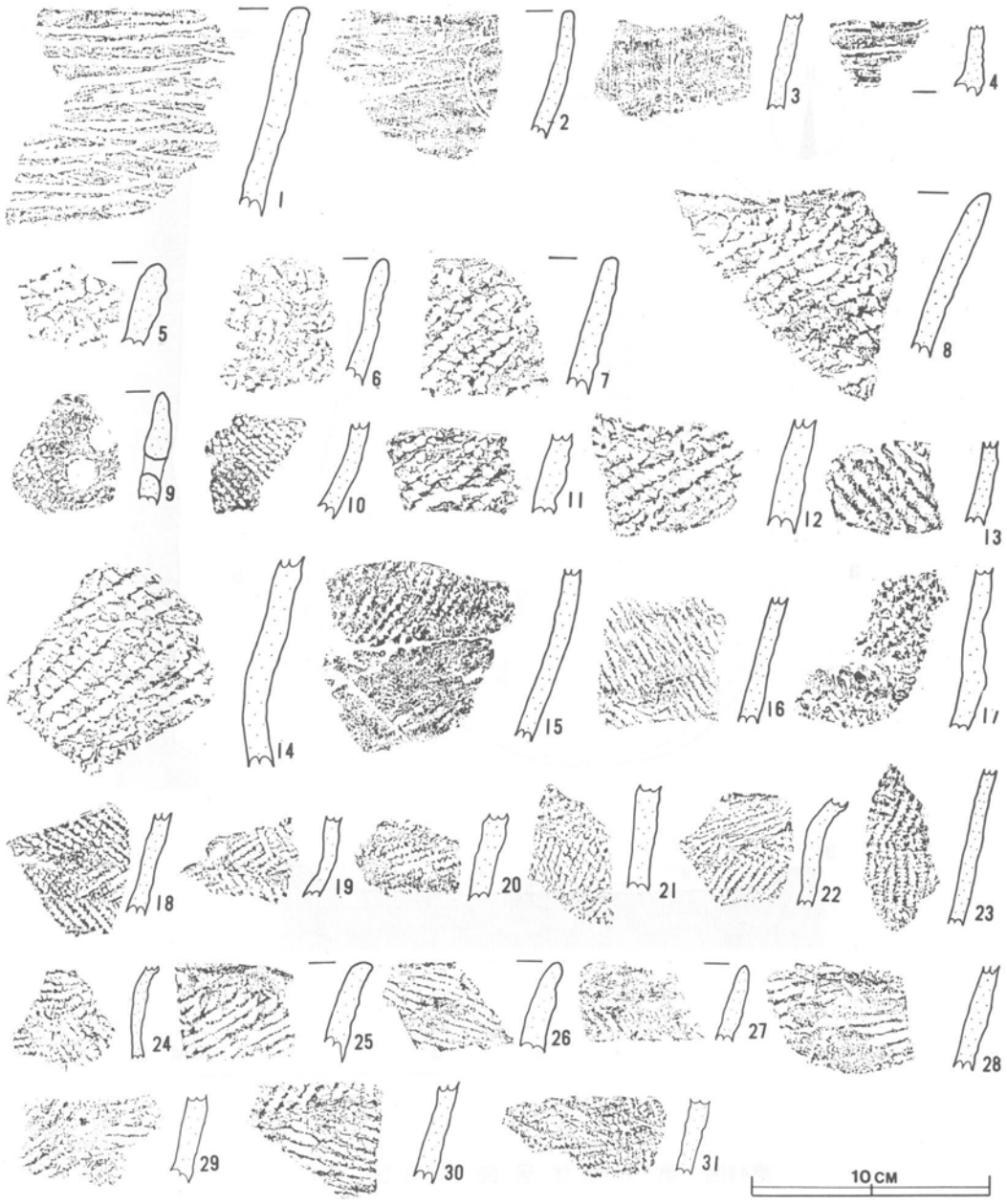
**規模**　N－4°－W　長軸5.5m　短軸４m　　平面形状　不定長方形　面積　約19m²

**各部の状況**　壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがり，壁高は16～23cmで西壁が低く，南壁はやや南に張り出し，西壁中央部分に攪乱がみられる。床面はほぼ平坦であるが，中央付近に段を有し，その北側はやや低くなる。中央に長方形状の焼土ブロックが検出され，規模は110×40cm 内外であり炉と考えられる。

**柱穴**　7ヶ所確認されているが，主柱穴は明瞭でない。南東側に$P_1$～$P_5$がみられ，$P_6$は段部分に$P_7$は北東側に位置している。直径は10cm内外で，深さ10～20cmである。

**覆土**　中央部上層の10は黒褐色土で，９はローム粒子をわずかに含む暗褐色土である。下層は多量のロームブロックを含む黄褐色土がみられ，自然堆積を示している。

**遺物出土状況**　覆土中に少量の土器片を検出したにとどまる。

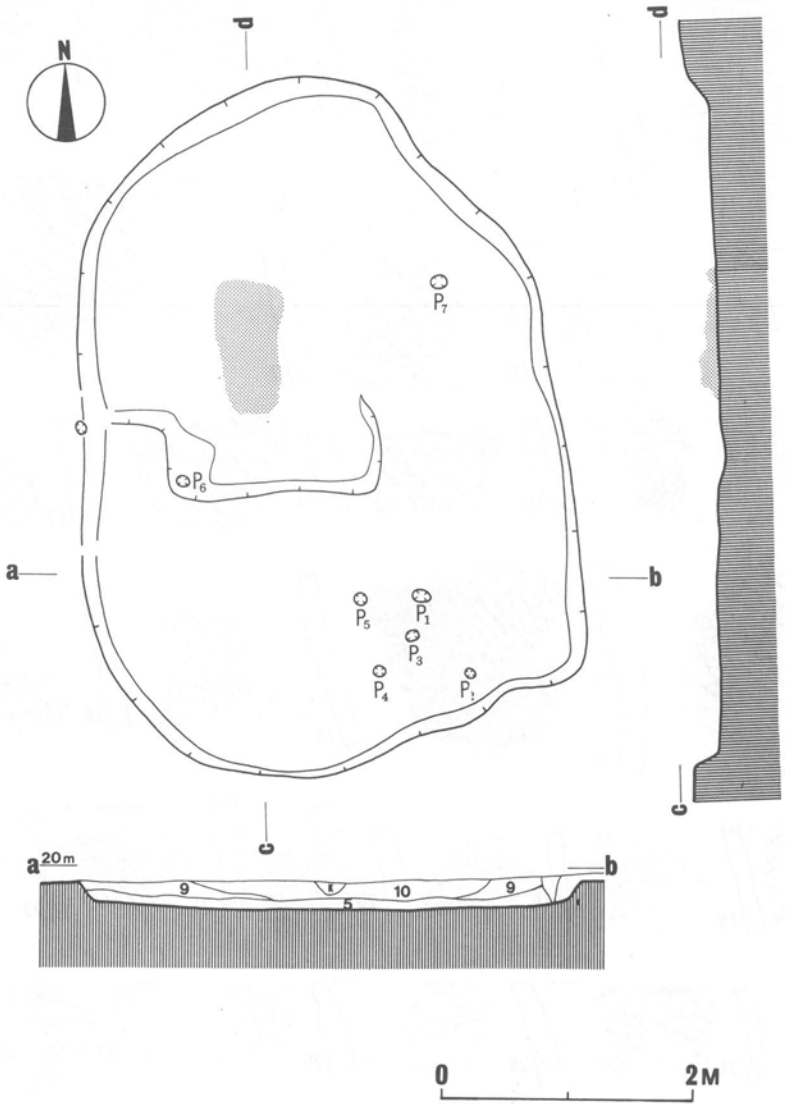



**第47図　第８号住居跡出土遺物**

**遺物（第49図）**

本跡から出土した土器は少量で，ほとんど覆土中より出土した第Ⅰ群土器である。

第49図１～13はすべて２類土器で，粗雑な整形がみられるが同一個体とも考えられる。口縁部はやや内反ぎみに開く深鉢形土器であり，地文はL$\lessdot\frac{R}{R}$の縄文をやや雑に施文し，その上に不規則な沈線文を部分的に施している。焼成はほぼ良好である。



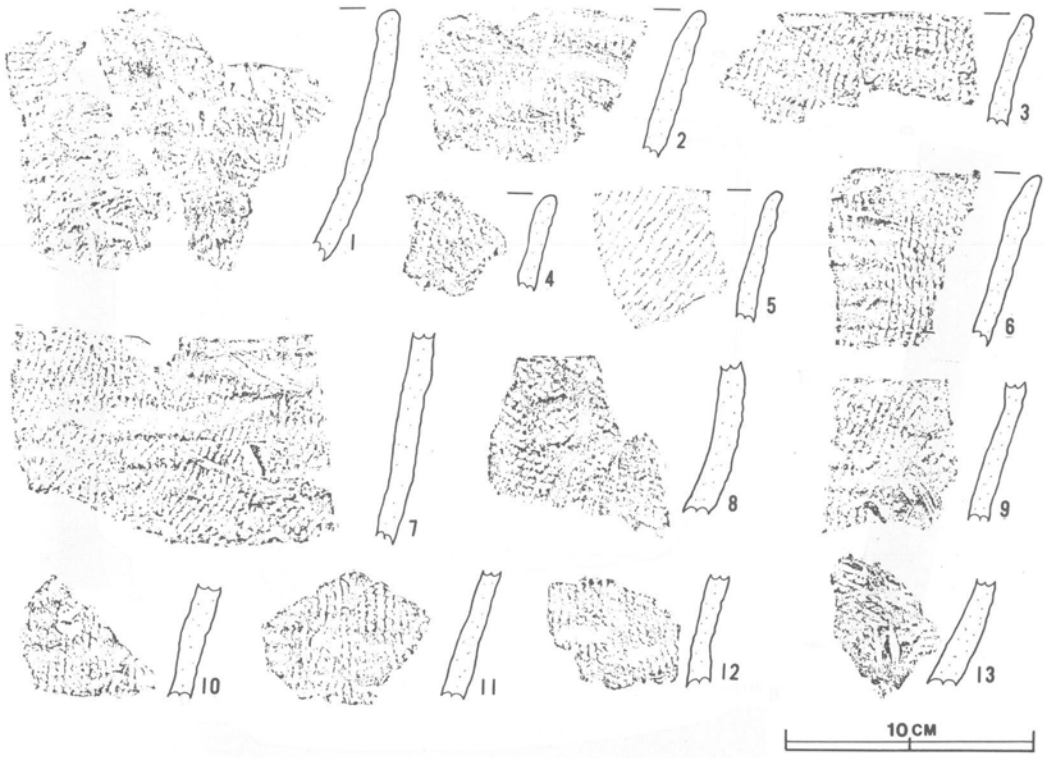

第48図　第 9 号 住 居 跡 実 測 図

**第10号住居跡（第50図）**

**位置**　A地区のほぼ中央部（K 9 区）に位置し，周辺には縄文時代の住居跡は確認されていない。

**規模**　N－33°－W　長軸4.1ｍ　短軸3.6m　　平面形状　台形状　面積　約10.7㎡

**各部の状況**　壁はややゆるやかに立ちあがり，壁高は10～30㎝で西北側は低く南側は高い。また，北・東コーナーがやや張り出している。床面はほぼ平坦であるがわずかに北より南へ傾斜を




**第49図　第９号住居跡出土遺物**

示し，床・壁とも軟弱である。

**炉**　床面中央に少量の焼土等がみられるが，床はそれほど焼化されていない。

**柱穴**　北コーナー部に，長軸65cm・短軸50cm・深さ20cmの長方形を呈するピットがみられるが柱穴は確認されていない。

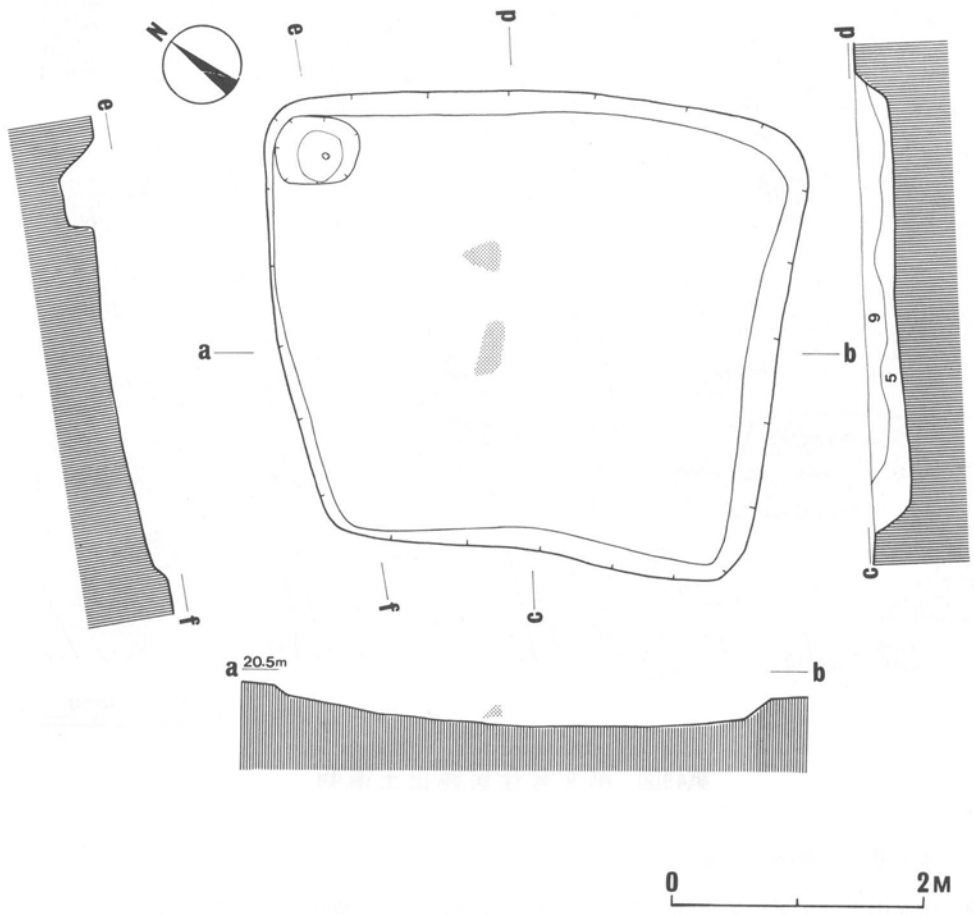
**覆土**　上層が暗褐色土で，下層はロームブロックを中量含む黄褐色土の堆積がみられる。

**遺物出土状況**　遺物の出土は少量で住居跡の中央やや東よりの覆土中より出土している。

**遺物（第51図）**

本跡から出土した土器は極少量で，住居跡中央部の東よりの覆土中より出土した第Ⅱ群土器である。

第51図１・２は同一個体片であり，口縁部は波状を呈し，胴部がくびれる深鉢形土器の破片である。波状口縁の頂部には有孔の円形および８字形の突起部がみられ，口辺部には無文帯が微隆起線によって区画されている。胴部は縄文帯と無文帯に微隆帯で区画し，縄文帯には$R<\frac{L}{L}$の縄文が施文され，無文帯部は篦による研磨がなされている。焼成は良好で，器面には部分的に煤が付着している。




第50図　第 10 号 住 居 跡 実 測 図

**第11号住居跡（第52図）**

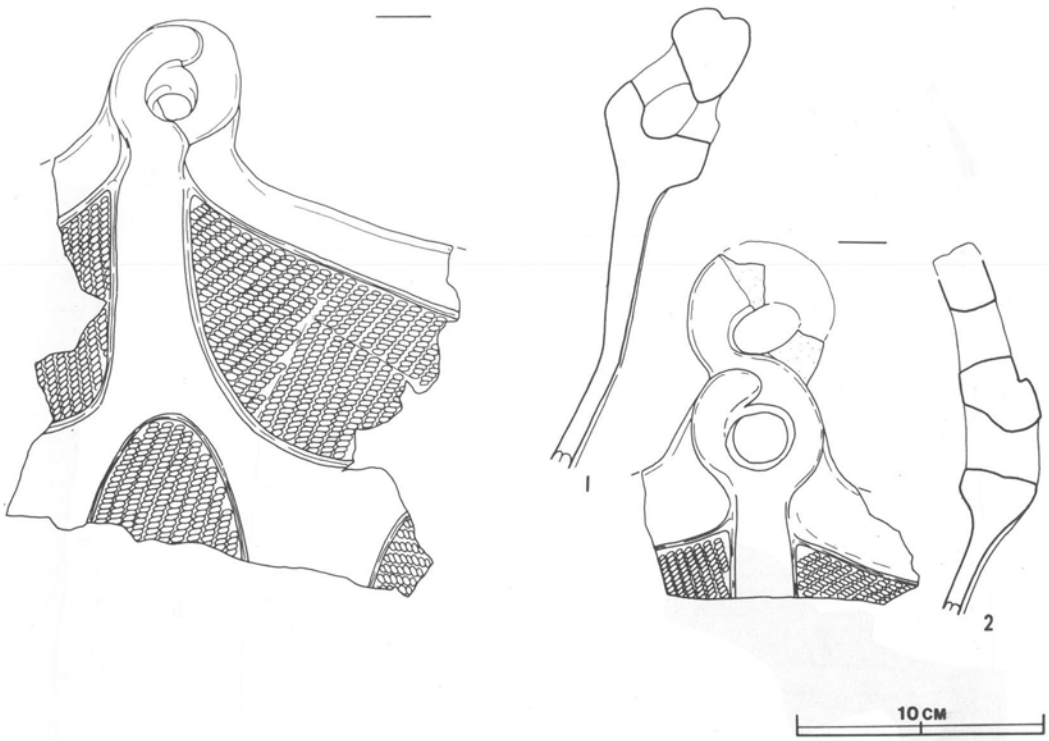
**位置**　D地区の中央やや南より（D３区）に位置し，東１ｍに古墳時代中期に比定される第22号住居跡が隣接している。

**規模**　N－25°－W　長軸6.09m　短軸5.92m　　平面形状　方形　　面積　約32.6㎡

**各部の状況**　壁は垂直ぎみに立ちあがり，壁高は26～36㎝で，南・西壁が高く，東壁はやや低くなる。床は平坦であるが，北および東壁より中央付近にかけて傾斜を示している。西壁の中央やや南よりの覆土上面より中央の床面に後世の炭焼窯跡が確認され，多量の炭化物・焼土を包含する黒色土がみられる。炉は確認されていない。

**柱穴**　６ヶ所確認されているが，床中央付近の$P_1$～$P_2$が主柱穴と考えられる。直径30～45㎝で$P_3$～$P_6$はは壁ぎわに位置し，規模はそれほど大きいものではない。

**覆土**　上層はローム粒子を含む暗褐色土であるが，部分的に褐色土・黄褐色土が混入する。下




**第51図　第10号住居跡出土遺物**

層はローム小ブロックを含む黄褐色土・暗褐色土がみられ，後世にかなり攪乱を受けている。

**遺物出土状況**　覆土上面から中層にかけて多量の土器片が検出され，土器片の接合関係からみれば，その状況はきわめて散在した分布状況を示している。住居跡の廃絶後に投棄されたと考えられる。

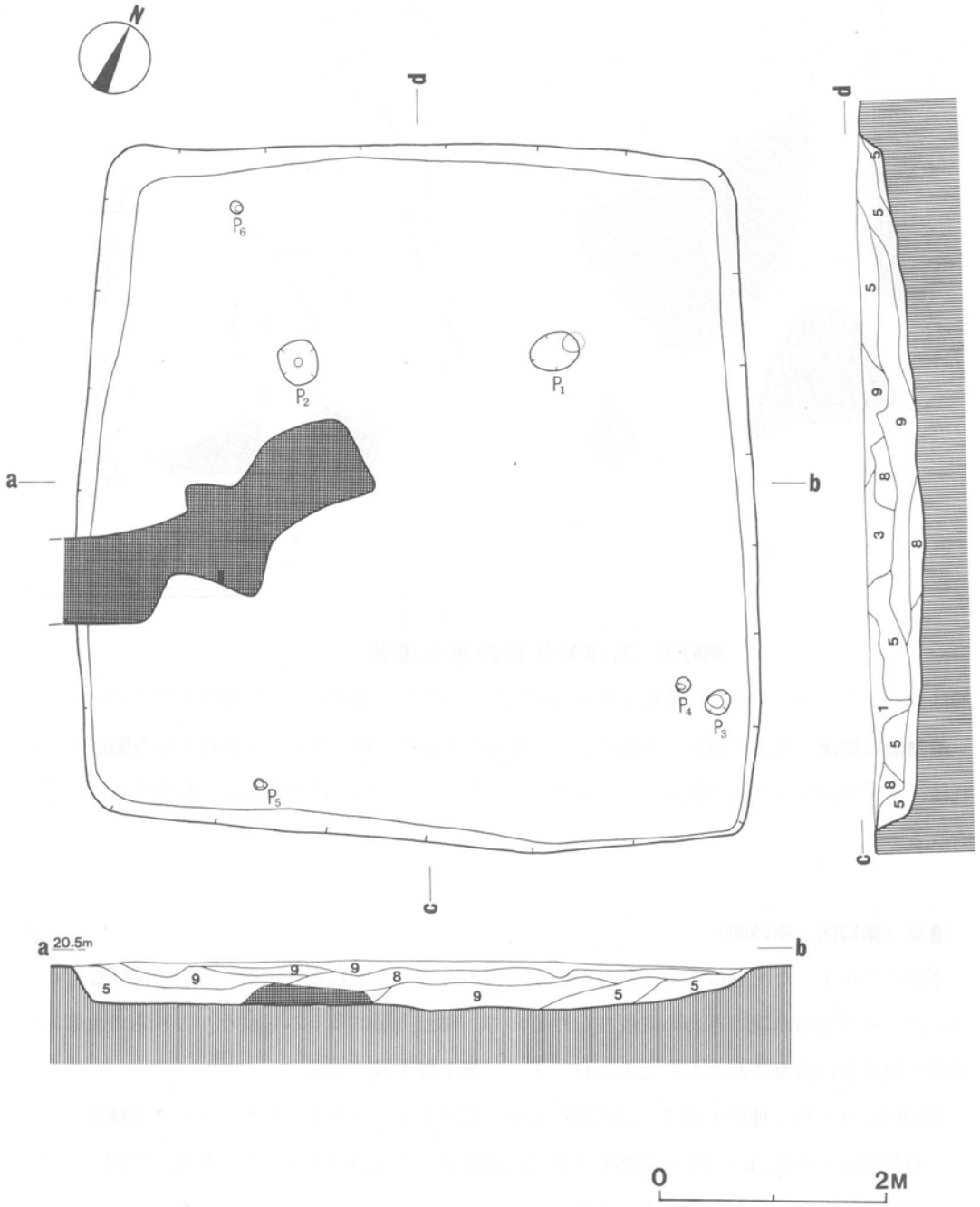
**遺物（第53図～第59図）**

本跡から出土した土器は多く，器形が推定されるものも含まれる。土器片の接合関係などからみれば，その分布状況はきわめて散在したもので，覆土上層に多くみられた。これらの土器は住居跡の廃絶後に投棄されたものとみられ，すべて第Ⅰ群土器である。

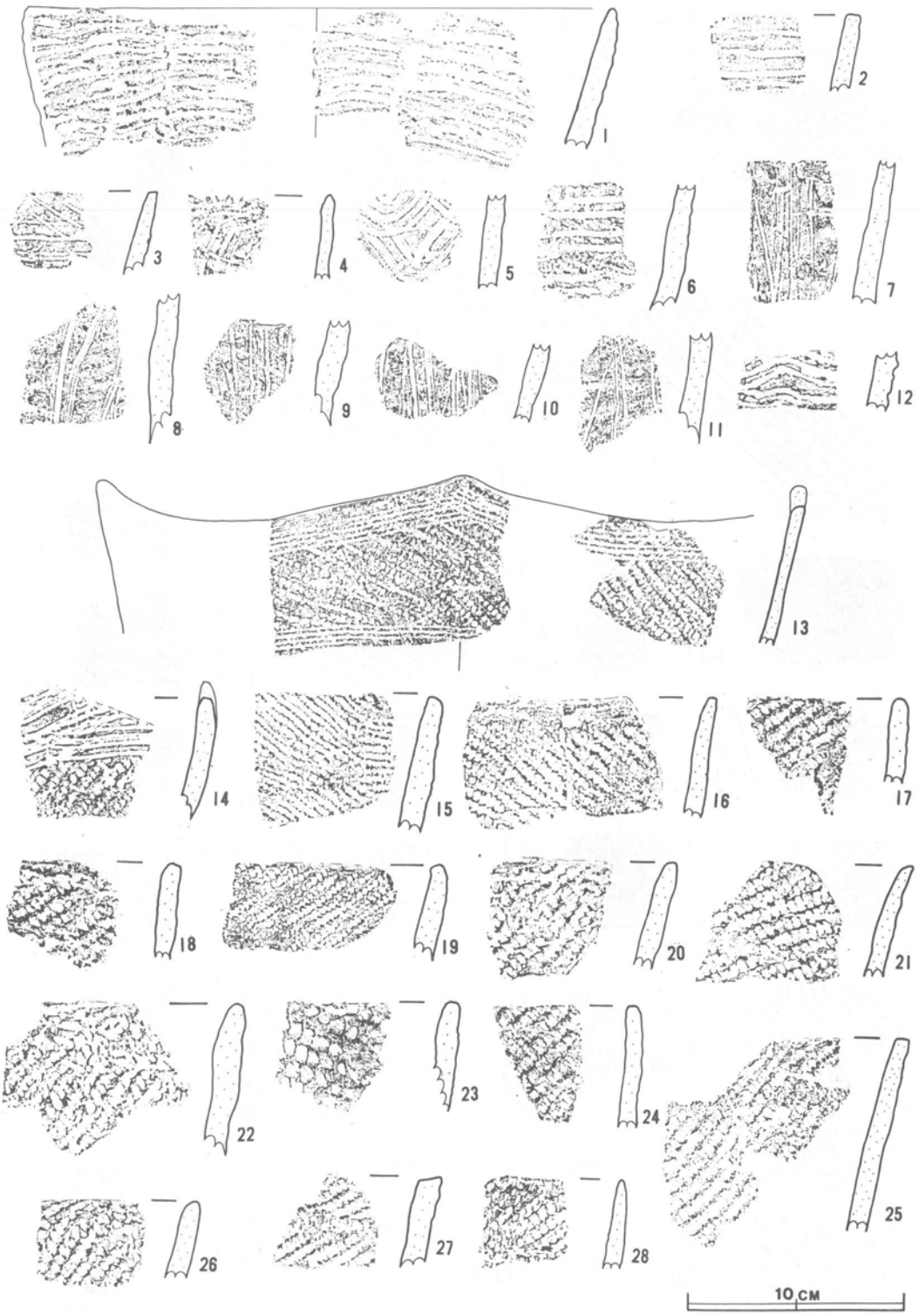
第59図２は１類１種の土器で，口辺部から胴下部までコンパス文がややくずれた文様帯を形成し，口径24cm・現高21cmほどの深鉢形土器で口縁部は小さな波状を呈しやや外反して開き，胴部でかすかにくびれ，底部へ移行する器形をしている。

第53図１～12は１類３種の土器が主体であり，１は推定口径27cmほどの口縁部が直線的に開いて立ちあがる深鉢形土器である。口辺部以下には横位の平行沈線文がみられ，焼成はほぼ良好である。

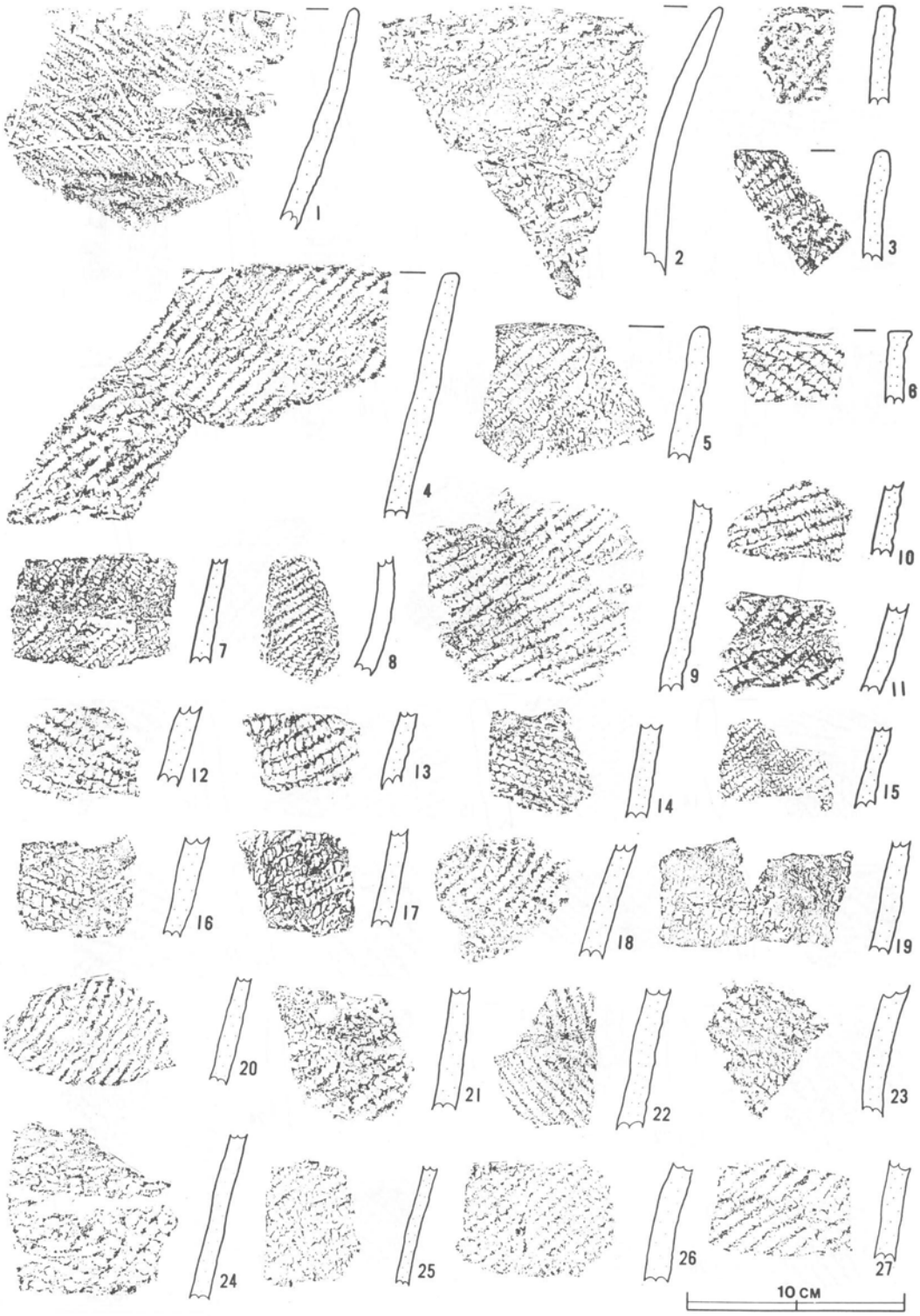
第53図13～28・第54図～第59図は２類土器で，本跡出土土器の主体となっている。第53図13～



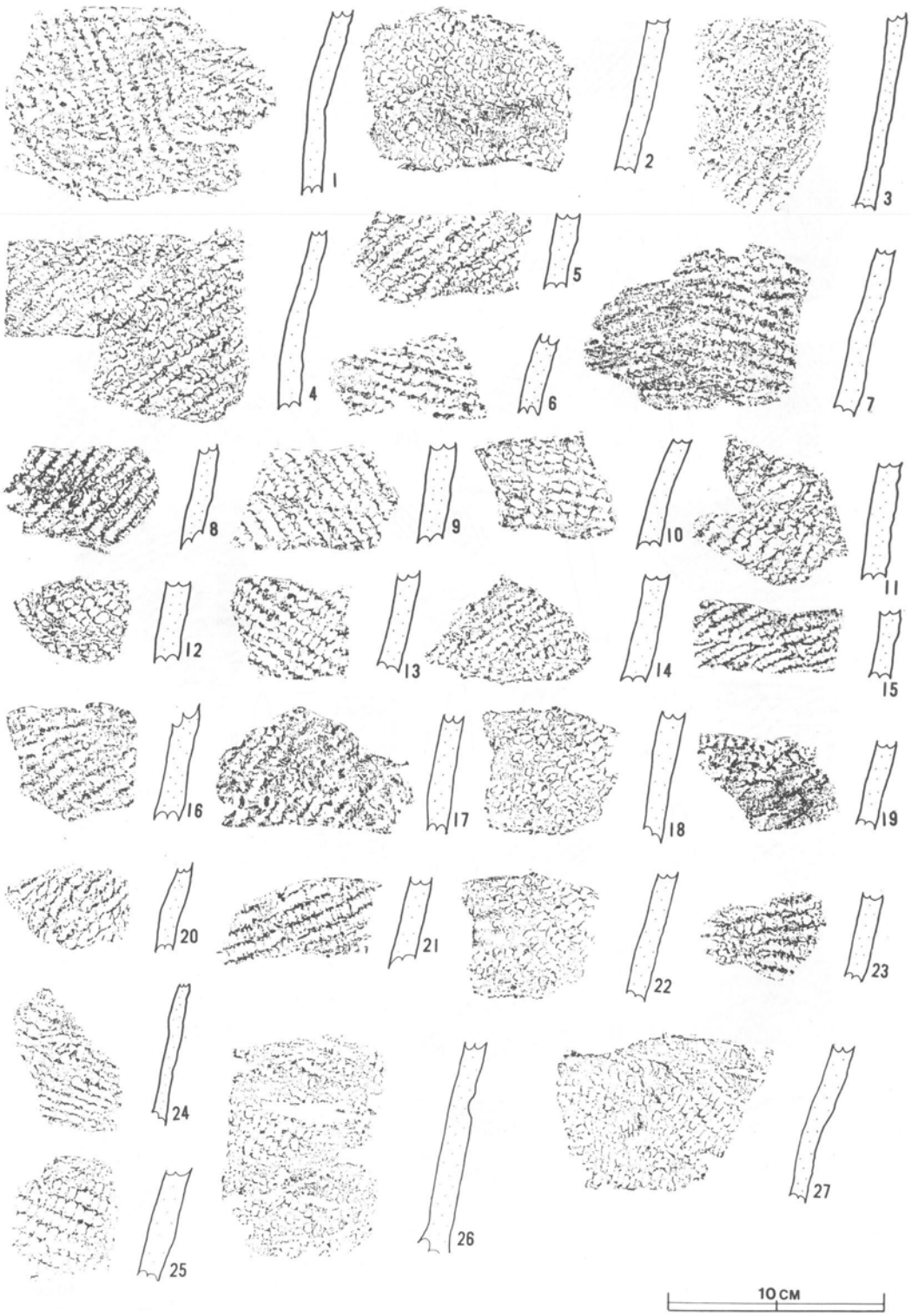

第52図　第 11 号 住 居 跡 実 測 図



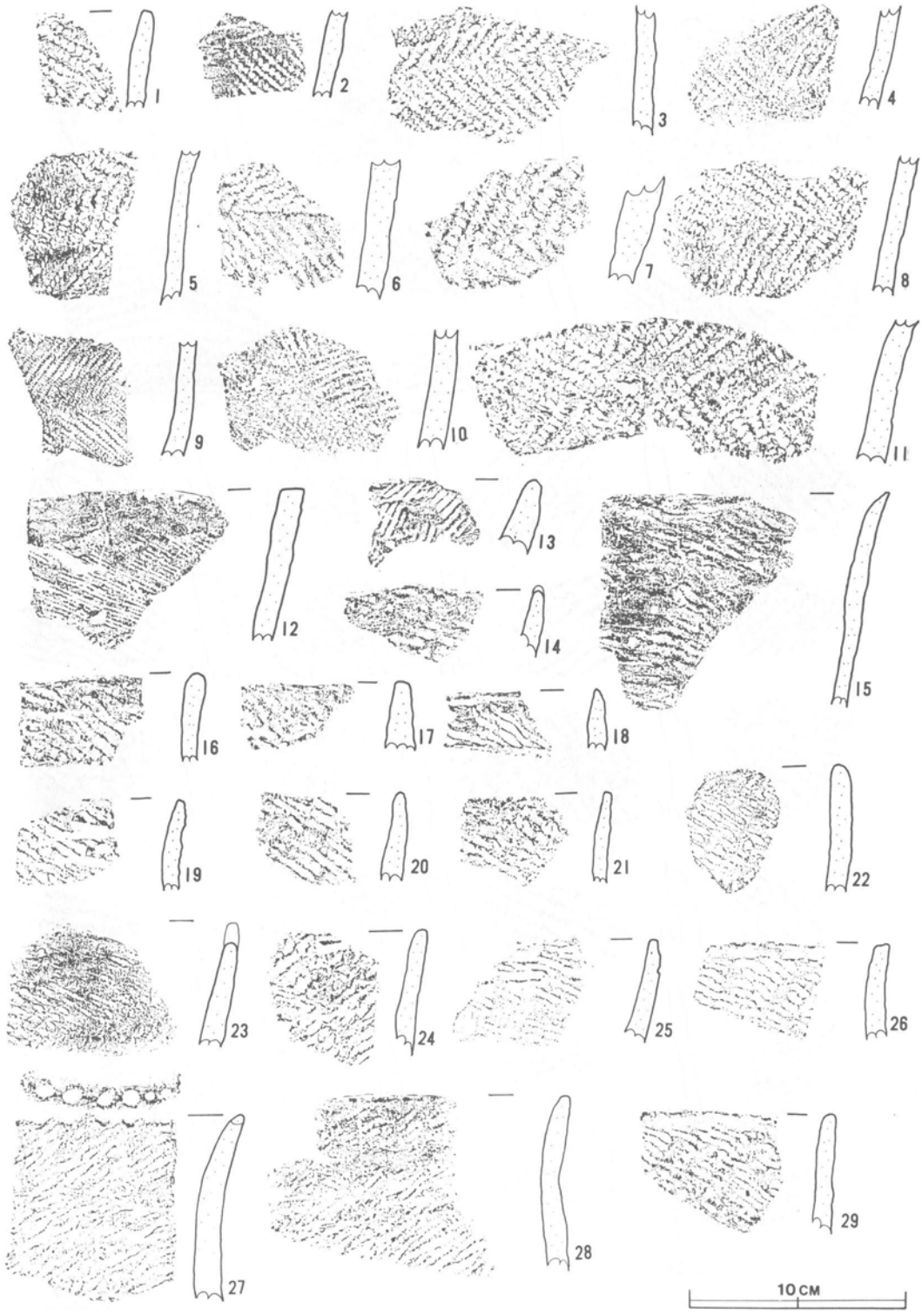

**第53図　第11号住居跡出土遺物（１）**



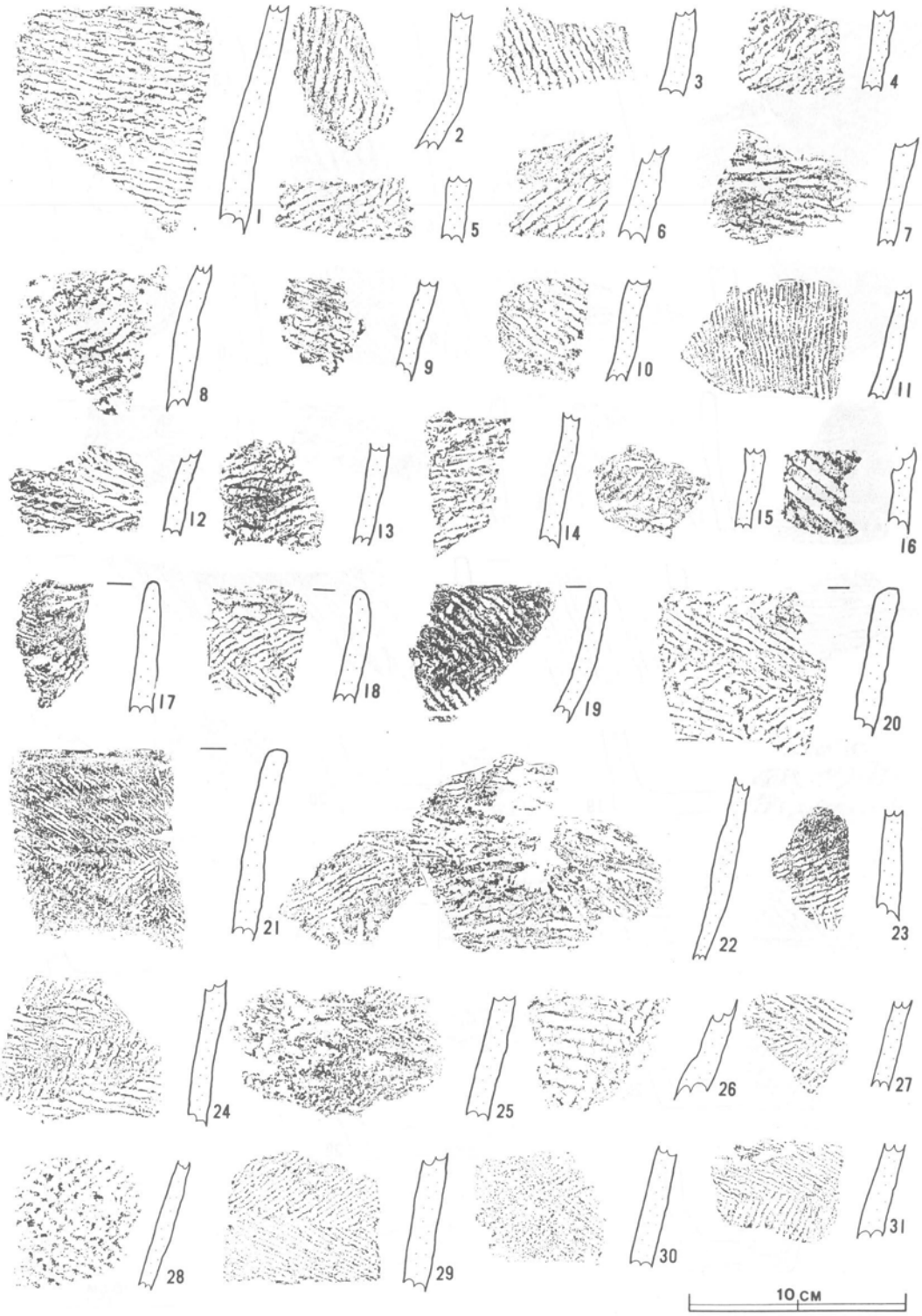

第54図　第11号住居跡出土遺物（２）



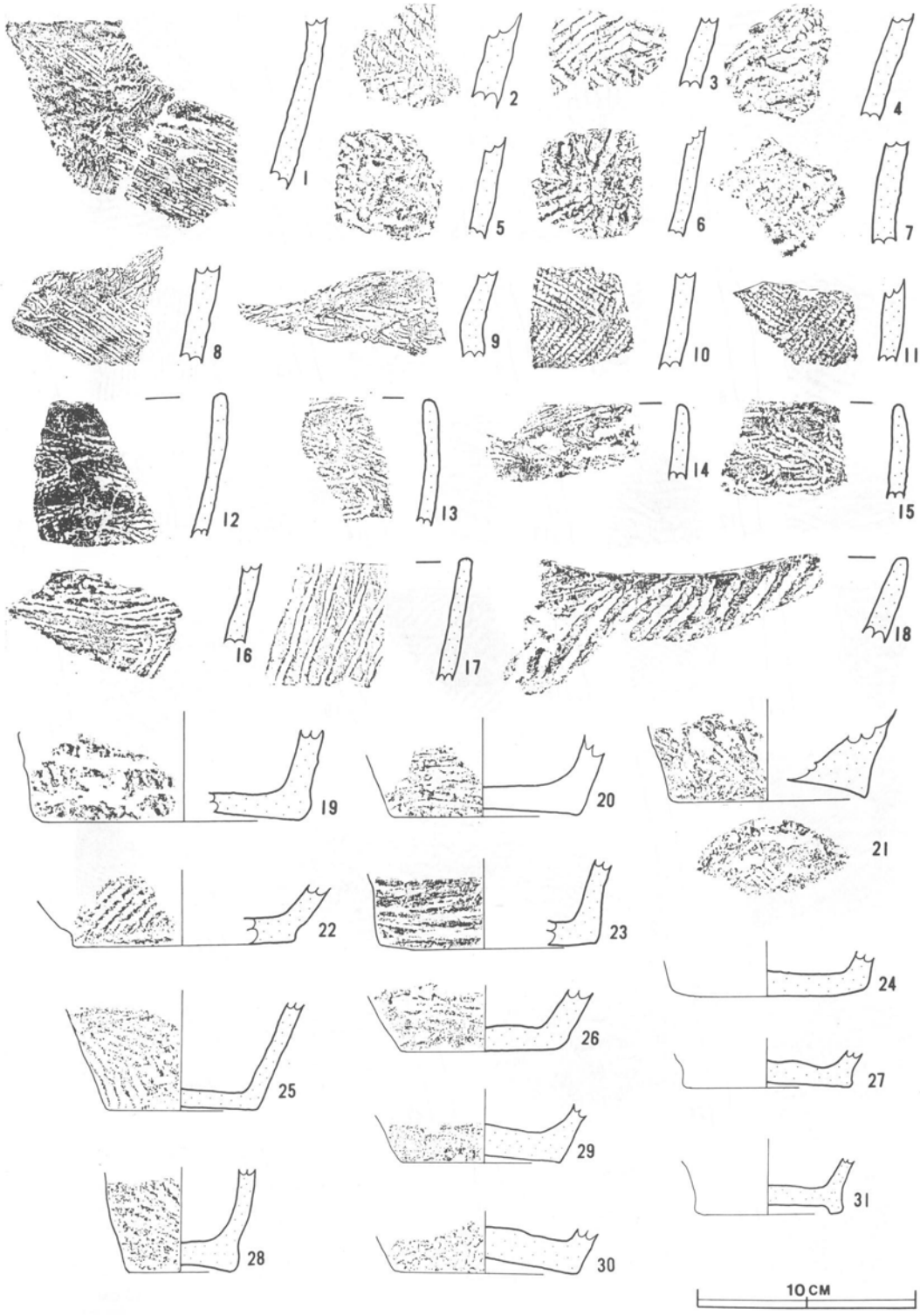

**第55図　第11号住居跡出土遺物（３）**



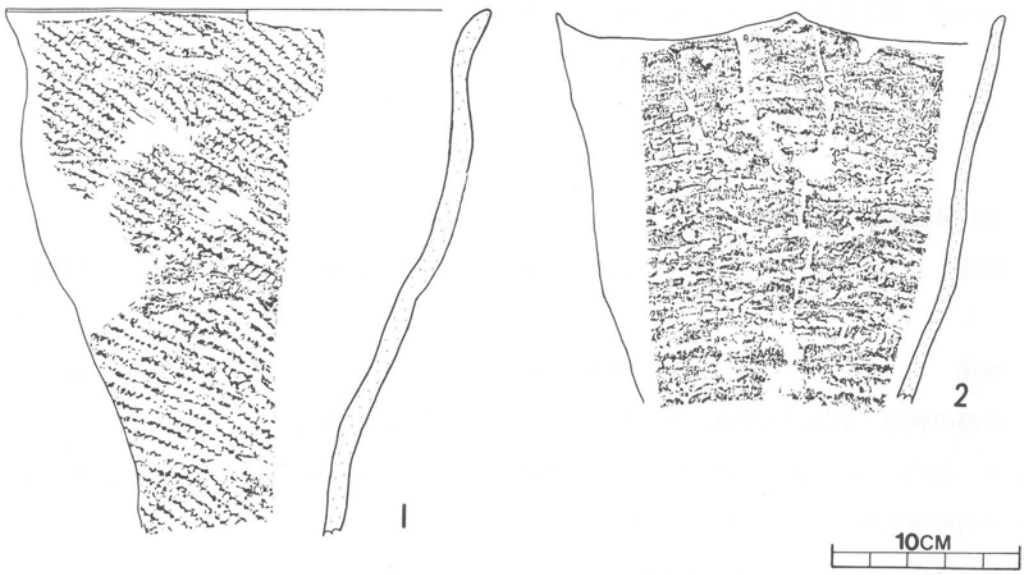

第56図　第11号住居跡出土遺物（４）




**第57図　第11号住居跡出土遺物（５）**




**第58図　第11号住居跡出土遺物（6）**




**第59図　第11号住居跡出土遺物（７）**

28・第54図１～27・第55図１～27・第59図は１種の土器群で，２類土器中で最も多い出土率を示し，第59図１はその器形が把握できる。口径26cm・現高28cmほどの深鉢形土器で，口縁部は外反し，胴上部が膨れて底部へ細く移行する。口縁部から胴下部までR$<^{L}_{L}$の縄文が施文されている。第53図13も口縁部の形状が推定されるもので，推定口径約33cmで波状口縁を呈している。地文をR$<^{L}_{L}$の縄文とし，口辺部および胴上部に６条の沈線文が横位に施文された深鉢形土器である。同図14も口辺部に平行沈線文が施されたもので，口縁部は波状を呈するものであろう。縄文原体も太いものや粗雑なものも含まれ，さらに，０段多条の原体も含まれている。

第56図１～11は２類２種の土器で，９は０段多条である。

第56図12～29・第57図１～16は２類３種のうち無節縄文で全体的に施文は粗雑である。第56図23の口縁部は波状を呈し，27は口唇部に浅いスリットがみられる。

第57図17～31・第58図１～９は３種のうち羽状を呈した土器群である。第57図22については若干検討を要する。この22の土器は第58図12～16の単軸絡条体による木目状痕を有する土器群と同

種のものとも考えられる。第58図10・11は附加条縄文を有する土器群である。また，同図17・18には撚糸文がみられる。

同図19～31は底部片であり，あげ底状を呈するものも多く含まれる。

## 2．古墳時代

### 第12号住居跡（第60図）

**位置**　B地区の南部（L46区）に位置し，第3号住居跡の北東コーナーを切り込んで構築されている。

**規模**　N－78°－E　長軸7.08m　短軸6.6m　　平面形状　方形　　面積　42.6m²

**各部の状況**　壁はほぼ垂直に立ちあがり，壁高は24～33cmで南北が高く，東西が低い。床面は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。南西コーナーに長軸70cm・短軸49cm・深さ54cmの長方形状の貯蔵穴がみられる。

**炉**　床中央およびその西北側に焼土ブロックが少量みられる。

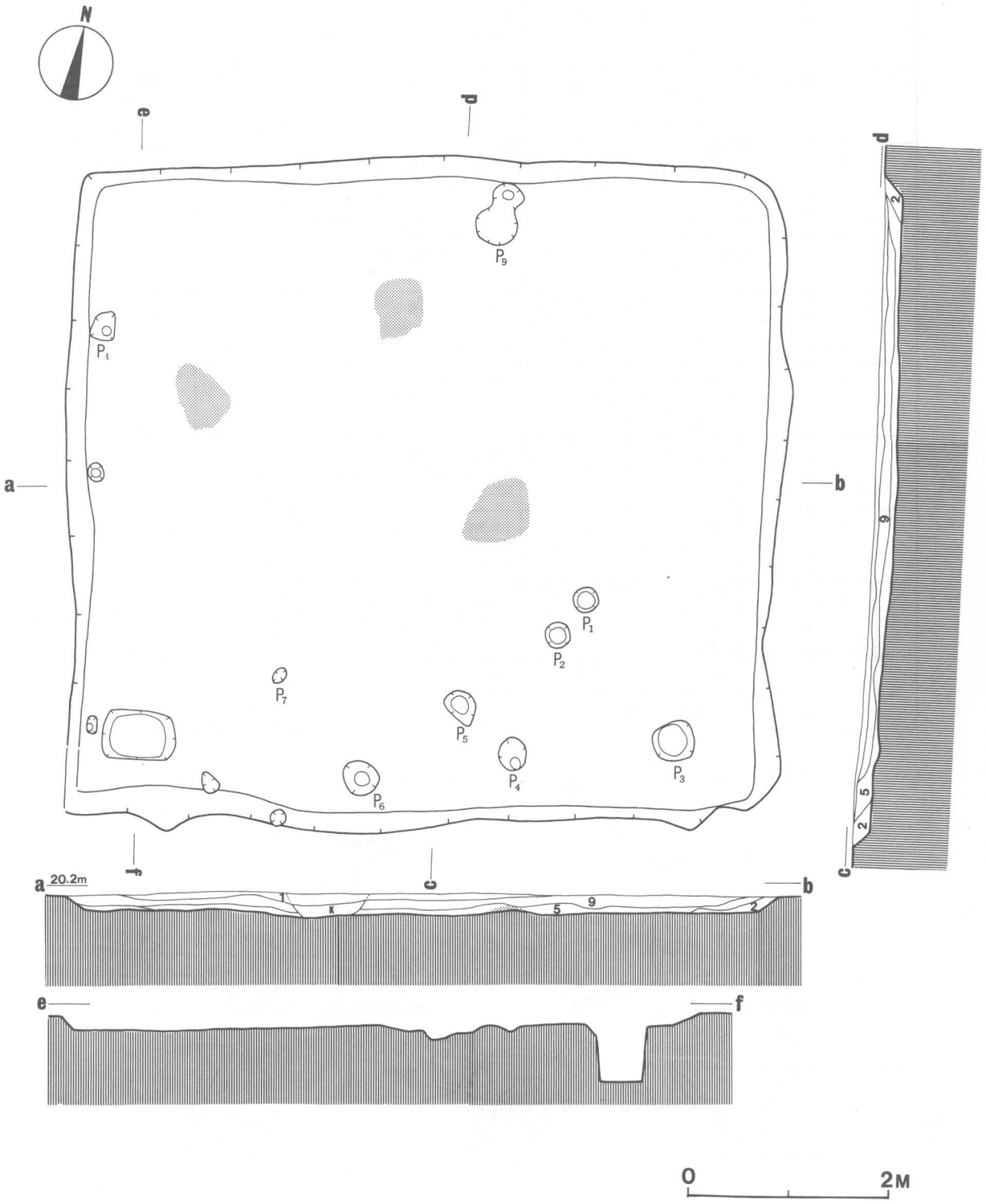
**柱穴**　9ヶ所確認され，主柱穴は明瞭ではないが，南東付近の$P_1$～$P_6$が考えられる。直径は25～45cmで，深さは12～30cmである。

**覆土**　上層は耕作土および暗褐色土で，下層はローム粒子を含む黄褐色土がみられ，部分的に攪乱が入るが自然流入の状態を示している。

**遺物出土状況**　遺物は土師器の完形品が多く，西北壁よりの床面に完形の甕（第62図1），その東側に横転して出土した高坏2点（第61図1・2），南西コーナー付近の床面に椀・坏等（第62図）が出土している。

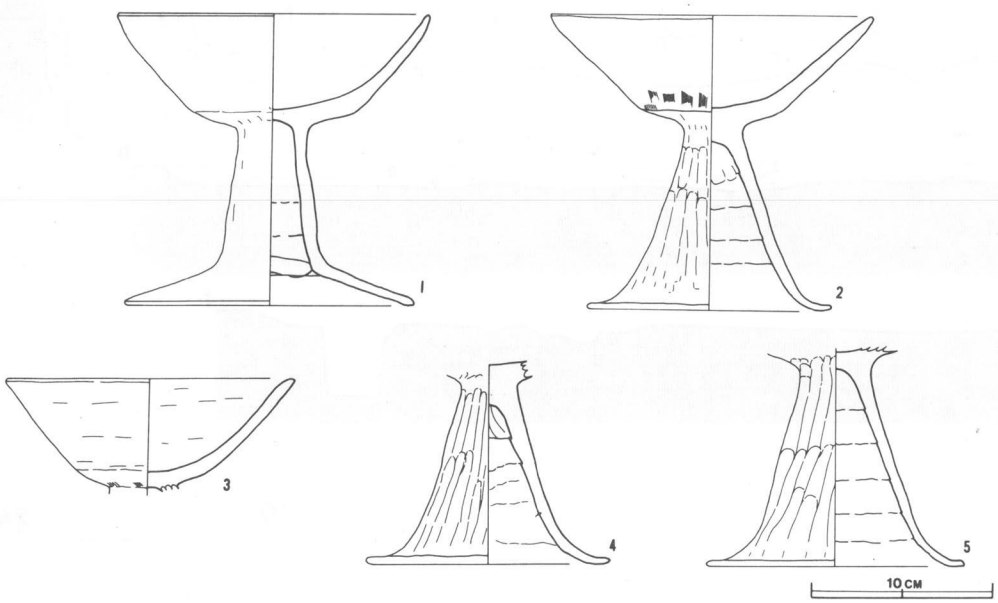
**遺　物（第61・62・98・99図）**　〔法量は上から口径・器高(現高)・底径である〕

| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器形の特徴 | 整形技法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 61図1 | 高　坏 3/3 | 17.2<br>15.9<br>16.0 | 坏部は内彎ぎみに開き，脚柱部は円筒状をなす。裾部は脚柱部下端で強く屈曲し，大きく開く。壁厚は0.5～1.0cm。 | 坏部内外とも篦みがきがみられ，脚柱部外面は縦位の篦みがき。内面には輪積痕がみられる。 | 普　通<br>砂粒・礫<br>赤褐色 | |
| 2 | 高　坏 完　形 | 17.8<br>16.1<br>13.6 | 坏部は直線的に大きく開き，脚部も直線的に開いている。壁厚は0.5～1.0cm。 | 坏部内面は横なでがみられ，外面は縦位の篦みがきのあと横なでがなされている。脚柱部から裾部にかけて縦位の篦削りがなされ，内面には輪積痕がある。 | 良　好<br>砂粒・礫<br>黄褐色 | |
| 3 | 高　坏 脚部欠 | 16.0<br><br>6.3 | 坏部は内彎ぎみに開いて立ちあがる。脚部欠損。壁厚は0.5～0.9cm。 | 坏部内外面とも横なでがみられ，内面は器壁の剝落がはげしい。 | 普　通<br>砂粒（多）<br>外面　明褐色<br>内面　褐　色 | |
| 4 | 高　坏 坏部欠 1/3 | (11.1)<br>13.4 | 坏部を欠く。脚柱部は裾部にむかって開き，裾部は大きく開いている。壁厚は0.5～1.0cm。 | 脚柱部外面は縦位の篦削りがみられ，内面には輪積痕がみられる。裾部は横なでがなされている。 | 良　好<br>砂粒・礫<br>黄褐色 | |

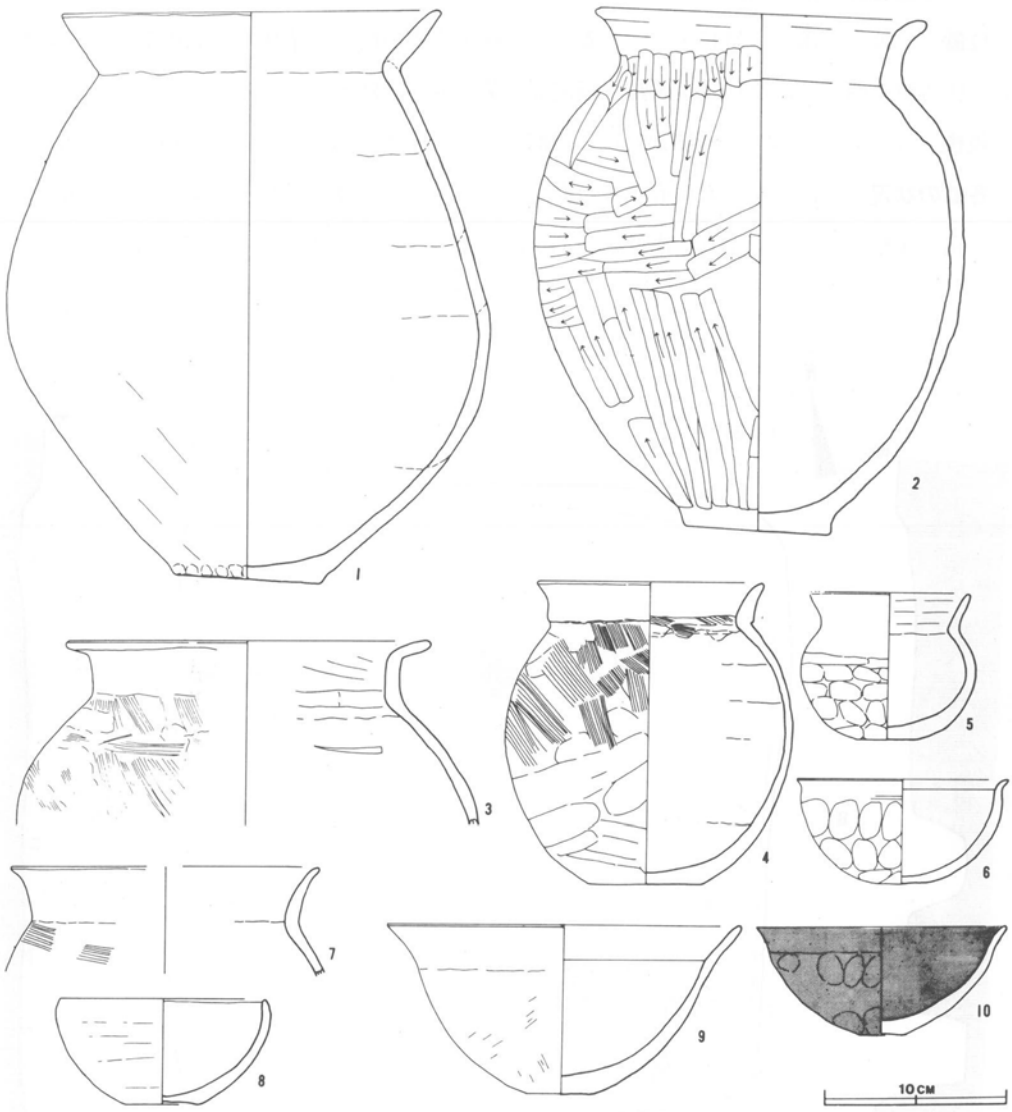



第60図　第12号住居跡実測図

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 高　坏<br>坏部欠<br>⅓ | (12.0)<br>14.4 | 坏部を欠く。脚柱部は裾部にむかって開き，裾部は大きく開いている。壁厚は0.4～1.0cm。 | 脚柱部外面は上位から3段に縦位の篦削りがみられ，内面には輪積痕が5段ほどみられる。 | 良　好<br>砂粒・石英<br>外面　黄褐色<br>内面　暗褐色 | |
| 62図<br>1 | 甕<br>½ | 21.0<br>30.8<br>8.0 | 口縁部は頸部よりやや内彎して大きく開き，胴部最大径は下位にある。壁厚は0.7cm内外。 | 口縁部内外とも横なで。胴部は斜行篦削り。 | 普　通<br>砂粒・礫<br>赤褐色 | 二次焼成をうけ焼成痕が口縁部から肩部にかけてみられる。 |
| 2 | 甕<br>完　形 | 17.4<br>28.0<br>7.9 | 口縁部は頸部から外反してたちあがり，胴部はやや長めで中段に最大径を有している。器厚は0.6cm～1.3cm。 | 口縁部内外とも横なで。頸部外面以下は篦削りがみられ，内面はなでがなされている。底面は篦削り。 | 良　好<br>砂粒（多）<br>褐　色 | |
| 3 | 甕<br>½ | 20.0<br>(10.0) | 頸部は直立ぎみに立ちあがり，口縁部は大きく外反している。胴下部欠損。壁厚は0.6～0.8cm | 口縁部内外とも横なで。胴上部は斜位あるいは横位の刷毛目痕。 | 良　好<br>砂粒・礫<br>黄褐色 | |
| 4 | 小形甕<br>⅔ | 12.6<br>16.5<br>6.3 | 口縁部は直立ぎみに立ちあがり，大きく外反している。胴部は球状をなし，やや底部は大きい。壁厚は口縁部が最大1.0cmほどで胴部は0.5～0.7cmほどである。 | 口縁部内外とも横なでがみられ，胴部上半は斜位の刷毛目痕。下部は篦削り。 | 良　好<br>砂粒・礫<br>淡茶褐色 | 二次焼成 |
| 5 | 小形壺<br>完　形 | 8.9<br>8.1<br>3.2 | 口縁部は直立ぎみに立ちあがり，やや外反し，胴部はやや扁平状をなしている。壁厚は0.6～1.0cm | 口縁部から肩部にかけて横なでがみられ，胴下部外面は篦削りがなされている。 | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 | |
| 6 | 埦<br>ほぼ完形 | 11.7<br>5.8 | 底部は丸底で，体部は底部から内彎して立ちあがり，口縁部は小さく外反している。<br>壁厚は0.4～0.6cm。 | 口縁部内外とも横なでがなされ，体部外面は篦削り，内面は横位の篦なでがみられる。 | 良　好<br>砂粒・礫<br>黄褐色 | |
| 7 | 甕<br>⅓ | 17.0<br>( 6.0) | 口縁部は頸部より外反して立ちあがり，胴部を欠く。壁厚は0.5～0.7cm。 | 口縁部内外とも横なでがみられ，肩部は斜位の刷毛目痕が部分的にみられる。 | 良　好<br>砂粒・石英<br>淡灰褐色 | |
| 8 | 埦<br>完　形 | 11.3<br>5.8<br>4.2 | 体部は底部から内彎して立ちあがり，口縁部は内傾して立ちあがっている。底部はややくぼんでいる。<br>壁厚は0.6～0.9cm。 | 口縁部内外は横なでがなされ，体部外面は横位の篦なで，内面は剝落している。底部はくぼんでいる。 | 普　通<br>砂粒・礫<br>黄褐色一部黒色 | |
| 9 | 坏<br>½ | 19.6<br>9.2<br>4.0 | 体部は底部から大きく内彎して開き，口縁部はさらに外反し，内面には稜をなす。壁厚は0.4～1.1cm | 口縁部内外とも横なでがみられる。体部は刷毛なでがみられる。 | 良　好<br>砂　粒<br>外面　黄褐色<br>内面　赤褐色 | |




**第61図　第12号住居跡出土遺物（1）**




**第62図　第12号住居跡出土遺物（２）**

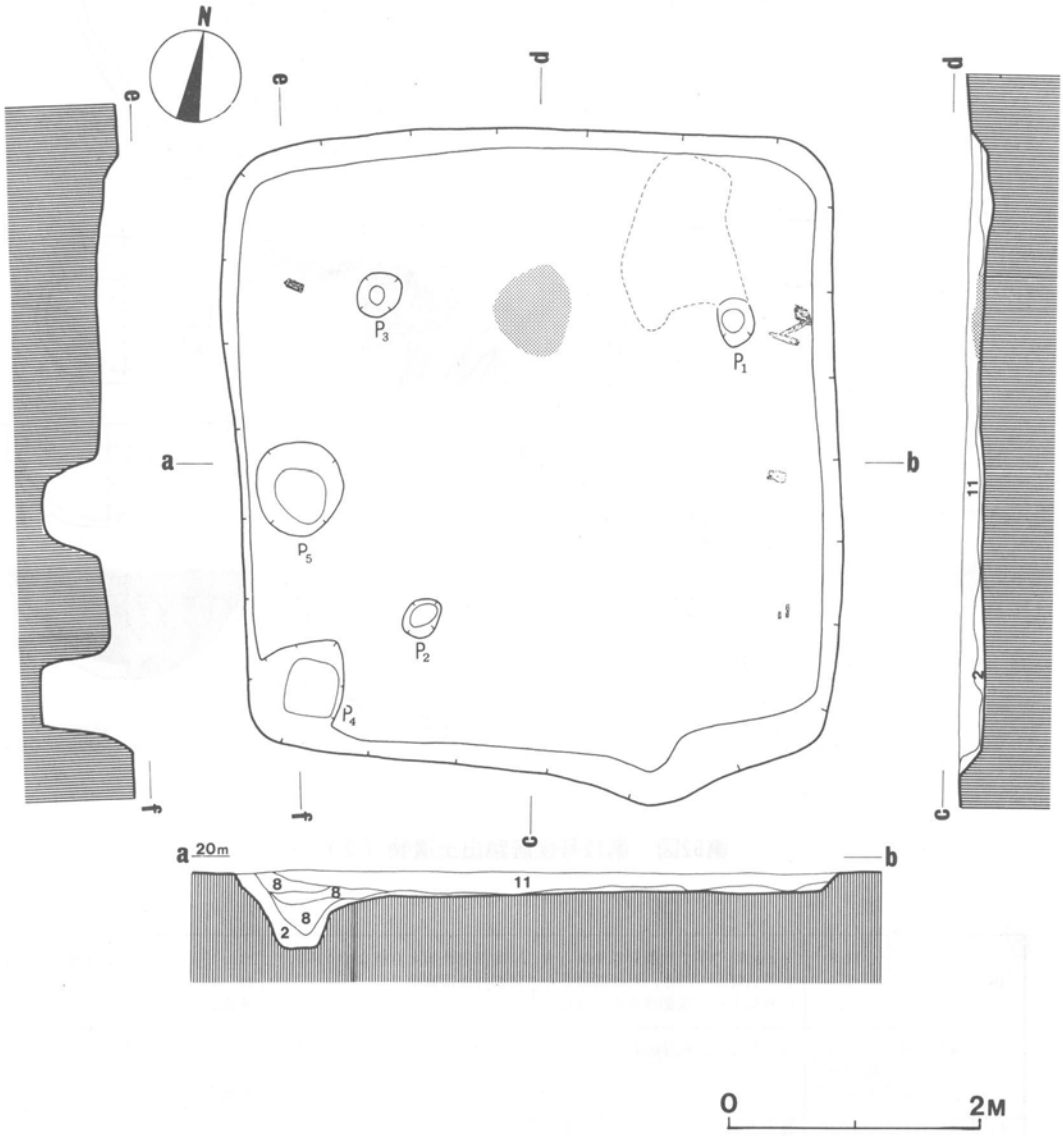
| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 | 坏<br>完　形 | 13.8<br>5.9<br>2.2 | ９と同形の坏で体部は底部から大きく内彎して開き，口縁部はさらに外反する。底部はややくぼむ。 | 口縁部内外面とも横なでがみられ，体部外面は篦削り。 | 良　好<br>砂　粒<br>赤褐色 | 内外面とも丹塗 |
| 99図<br>1 | 球状土錘<br>完　形 | 長 2.9<br>幅 2.8<br>重18.5g | 球状をなし，孔径0.4cm | | 良　好<br>砂　粒<br>黄褐色 | |
| 98図<br>7 | 石　斧 | 現長(2.1)<br>幅　2.9<br>厚　0.9<br>重　(7.5g) | 覆土中より出土したチャート製の小形磨製石斧。刃部を残し，他は欠損。刃部には縦位の擦痕が認められる。 | | | |

**第13号住居跡（第63図）**

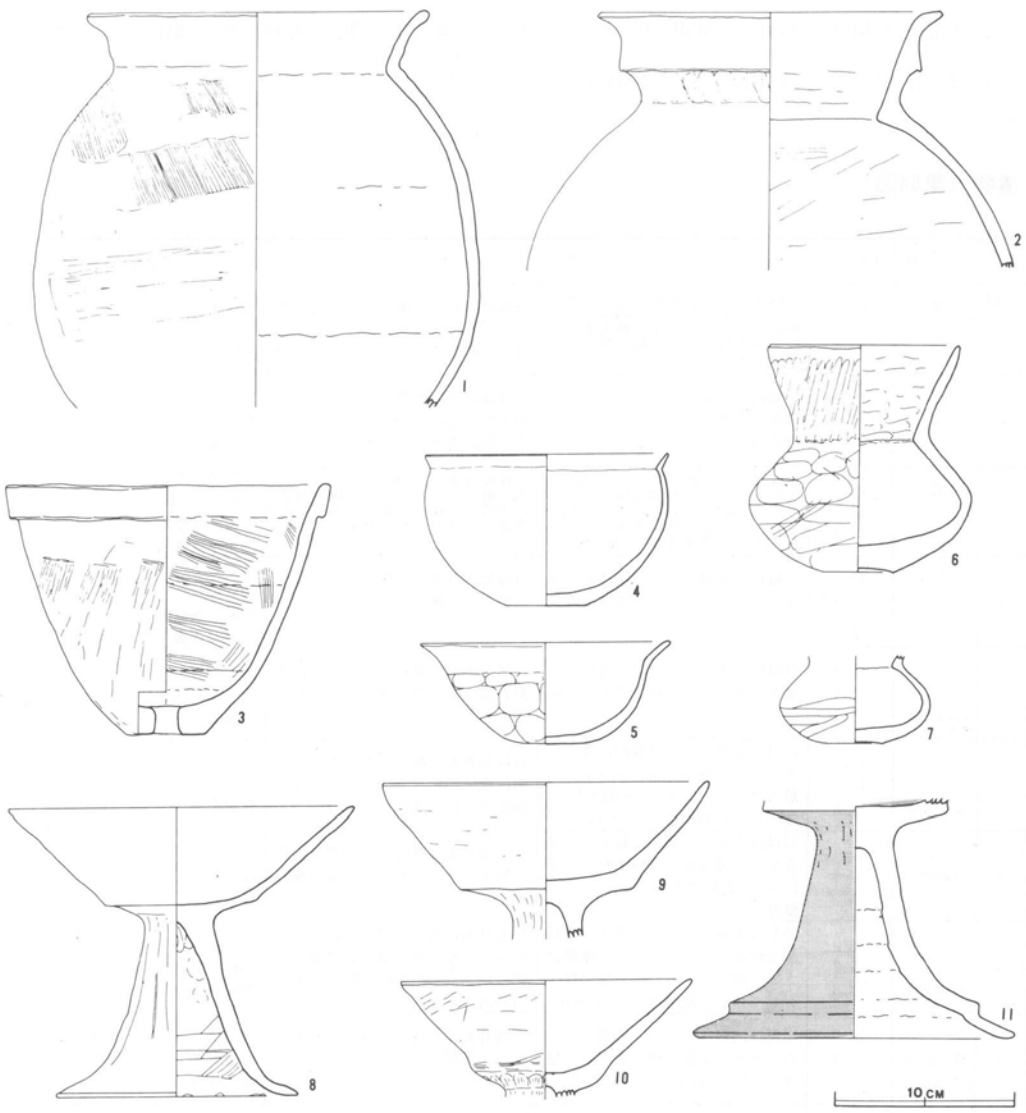
**位置**　B地区の南部（M45区）に位置し，近接する古墳時代の遺構は，北東部にやや大型の第15号住居跡，西北部に第14号住居跡，西南部に第12号住居跡がみられる。

**規模**　N－12.5°－W　長軸5.08m　短軸4.8m　　平面形状　方形　　面積　約21.6m²

**各部の状況**　壁はいずれも垂直ぎみな立ちあがりを示し，壁高は14～22cmほどで，西・北が高く，南・東部がやや低くなり，南壁の一部がはり出している。床はほぼ平坦であるが，全体的に




**第63図　第13号住居跡実測図**




**第64図　第13号住居跡出土遺物**

若干凹凸がみられ，やや軟弱である。南西コーナー部に接して貯蔵穴が位置している。

**炉**　中央やや北よりの床面に，不整形状の焼土が確認され，床はそれほど焼化されたものではない。

**柱穴**　6ヶ所確認され，$P_1$～$P_3$は主柱穴と考えられ，直径30cm内外で，深さ20～27cmほどである。$P_4$は南西コーナーに接する貯蔵穴で，長軸90cm・短軸70cm・深さは40cmをはかる。$P_5$は長径70cm内外の楕円形を呈する後世の攪乱である。

**覆土**　上層が黒色土で，下層はローム粒子を含む暗褐色土がみられ，自然流入の堆積状況を呈している。壁よりに少量の炭化材が検出され，火災に遭遇したものであろう。

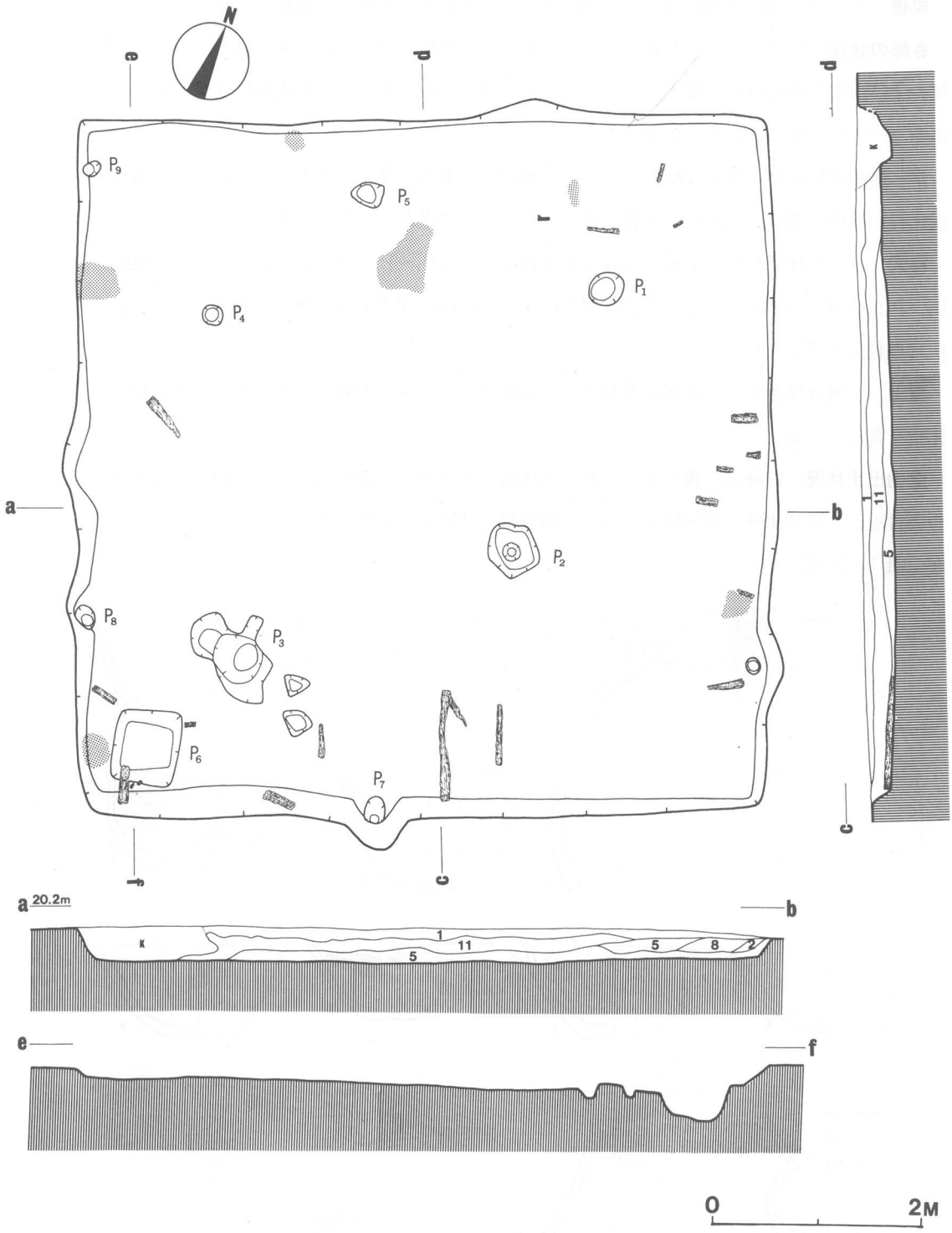
**遺物出土状況**　東南床面に倒立した複合口縁の壺（第64図２），貯蔵穴から完形の坩（第64図６）と坏部を欠損する高坏（第64図11）がみられ，貯蔵穴の北側の床面に甑（第64図３）がつぶれた状況で出土し，その西南に坏（第64図５）がみられた。

**遺物（第64図）**

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | 器形の特徴 | 整形技法 | 焼成・胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 64図 1 | 甕 2/3 | 18.8 (21.6) | 口縁部は頸部から直立ぎみに外反して立ちあがり，口脣部は丸い。胴部はやや球状をなし最大径は中段より下位にある。胴下部欠損。壁厚は0.6～0.8cm。 | 口縁部内外とも横なで。胴上部外面には斜位の刷毛目痕，下部には横位の刷毛整形がなされている。 | 普通<br>砂粒<br>赤褐色 | |
| 2 | 壺 底部欠 | 19.0 (14.0) | 口縁部は頸部から段を有して外反し胴下半部を欠損。壁厚は0.6～1.5cm。 | 口縁部内外とも横なでがみられ，頸部外面は縦位の篦削りがみられる。胴部内外とも刷毛なで。 | 良好<br>砂粒<br>淡黄褐色 | |
| 3 | 甑 完形 | 17.9<br>13.5<br>5.4 | 口縁部から底部にゆるやかにすぼまる形状を呈し，口縁部は複合をなしている。底部には径1.3cmほどの円孔がみられ，焼成前に穿孔されたものである。壁厚は0.6～1.5cm。 | 口縁部外面は指頭によるなで，内面は横なでがみられる。胴部外面の中段には縦位の篦なでがみられ，内面には横位の刷毛整形がなされている。 | 普通<br>砂粒・礫(多)<br>外面　赤褐色<br>内面　黄褐色 | 口縁部に煤付着 |
| 4 | 坏 完形 | 13.4<br>8.2<br>4.5 | 口縁部は直線的に外反し体部は半球形を呈している。底部は平底。 | 口縁部内外面とも横なでがなされ，体部内面は篦なで。 | 良好<br>砂粒<br>外面　茶褐色<br>内面　黄褐色 | |
| 5 | 坏 ほぼ完形 | 13.8<br>5.4<br>3.4 | 口縁部は体部から大きく外反して開き，体部はやや扁平である。底部は平底。 | 口縁部内外は横なでがみられ，体部外面は篦削りがみられ，内面は篦みがきがなされている。 | 良好<br>砂粒<br>赤褐色 | |
| 6 | 坩 完形 | 10.6<br>12.4<br>3.8 | 口縁部は頸部より直線的に開いて立ちあがり，胴部は扁平状を呈し，最大径は中位にある。底部はややくぼんでいる。壁厚は0.5～1.6cm。 | 口縁部外面は縦位の篦みがき，内面は横位の篦なでがなされている。胴部外面には篦削りがみられる。 | 良好<br>砂粒<br>黄褐色 | |
| 7 | 坩 口縁部欠 | 4.8<br>3.2 | 口縁部を欠き，胴部は扁平の球状を呈し，最大径は中段よりやや下にある。底部はややくぼんでいる。壁厚は0.3～0.8cm。 | 胴上部外面は横なで，下部は横位の篦削りがみられる。底部は篦整形。 | 良好<br>砂粒<br>茶褐色 | |
| 8 | 高坏 ほぼ完形 | 19.0<br>15.7<br>13.3 | 坏部は直線的に大きく開き，脚柱部も裾部にむかって開き，裾部は大きく開いている。坏下部に稜を有している。壁厚は0.4～1.3cm。 | 坏部外面は篦みがき，内面はなでがみられる。脚柱部外面は縦位の篦みがき，内面は粗い篦削り。裾部内外面ともなで。 | 普通<br>砂粒・長石<br>黄褐色 | |
| 9 | 高坏 脚部欠 1/3 | 18.0<br>8.4 | 坏部は内彎ぎみに大きく開いて立ちあがり，下部に稜を有する。壁厚は0.5～1.2cm。 | 坏部外面は横なで，脚柱部外面は縦位の篦削り。 | 普通<br>砂粒（多）<br>淡黄褐色 | 全体的に摩滅している。 |
| 10 | 高坏 脚部欠 | 16.0<br>( 6.4) | 坏部は直線的に大きく開き，坏下部に稜を有し，脚部を欠く。壁厚は0.5～1.2cm。 | 坏部内外面ともなで。稜の下部に縦位の篦削り。内面は剝落がはげしい。 | 普通<br>砂粒・礫<br>茶褐色 | |
| 11 | 高坏 坏部欠 | (13.0)<br>17.8 | 坏部のほとんどを欠いているが，下部には明瞭な稜を有している。脚柱部は裾部にむかってゆるやかに開き，裾部で段を有して大きく開いている。 | 脚柱部は縦位の篦削りがみられ，裾部はなで整形がなされている。内面には輪積痕がみられる。 | 良好<br>砂粒・雲母<br>外面　赤褐色<br>内面　黄褐色 | 坏部内外面，脚外面丹彩 |

**第14号住居跡（第65図）**

**位置**　B地区の南部（L44区）に位置し，古墳時代の住居跡は南方に同規模の第12号住居跡，北東にやや大型の第15号住居跡がみられる。




第65図　第 14 号 住 居 跡 実 測 図

**規模**　N－23°－W　長軸6.65m　短軸6.6ｍ　平面形状　方形　　面積　約41.2㎡

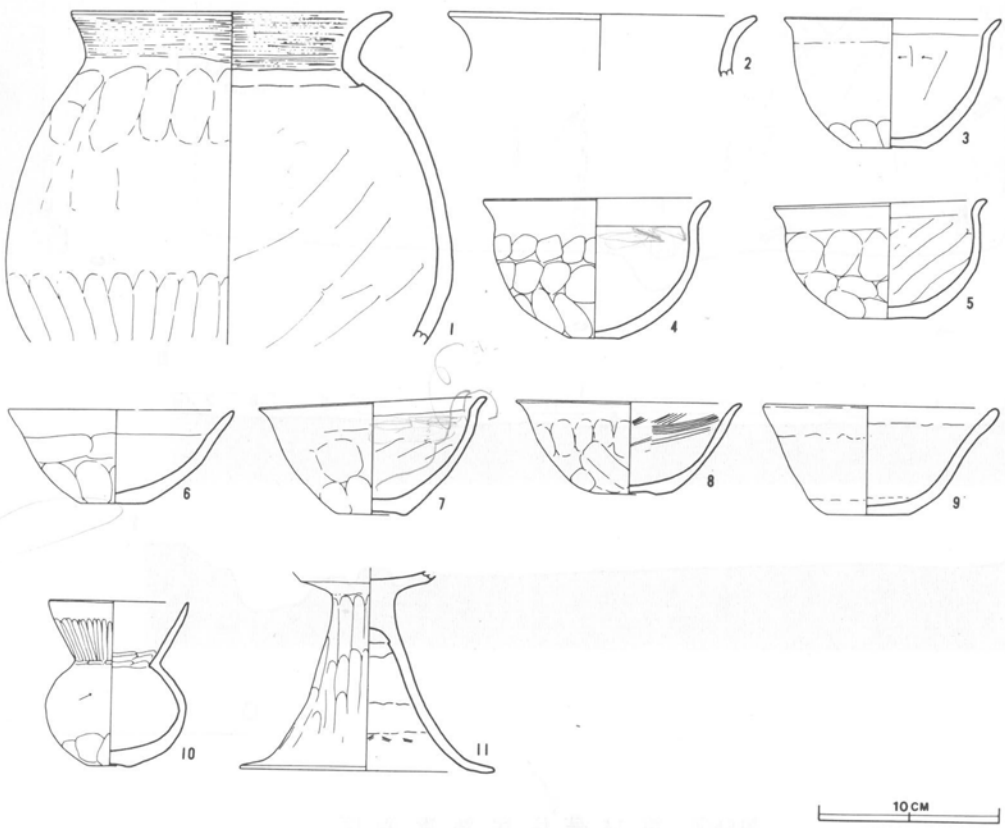
**各部の状況**　壁はいずれも垂直ぎみに立ちあがり，壁高は21～33cmで南が低く，西が高い。西壁および南壁の中央付近が張りだしている。床はほぼ平坦であるが，中央部付近がややくぼむ。南西コーナーの床には，小穴が多くみられる。

**炉**　床中央付近から焼土は検出されず，北西および南西に多くの焼土がみられ，その周辺から炭化材が床中心部向きに倒れた状態で検出され，火災に遭遇したものと考えられる。

**柱穴**　９ヶ所確認され，主柱穴はほぼ対角線上に並ぶ$P_1$～$P_4$と考えられ，$P_1$・$P_4$は小規模だが，$P_2$・$P_3$は直径１ｍ内外となる。$P_6$は長軸70cm・短軸60cm・深さ45cm内外の貯蔵穴であり，$P_7$～$P_9$は壁柱穴と考えられる。

**覆土**　上層は黒色土で，下層は多量のローム粒子を混入する黄褐色土からなり，焼土粒子・炭化物を含んでいる。

**遺物出土状況**　貯蔵穴の覆土中に完形の土師器の坏・坩等（第66図）が炭化材と共に出土し，中央付近から球状土錘（第94図２・３），南東部の床面より石製模造品の勾玉（第98図１・２）が出土している。




**第66図　第14号住居跡出土遺物**

## 遺　物（第66・98図）

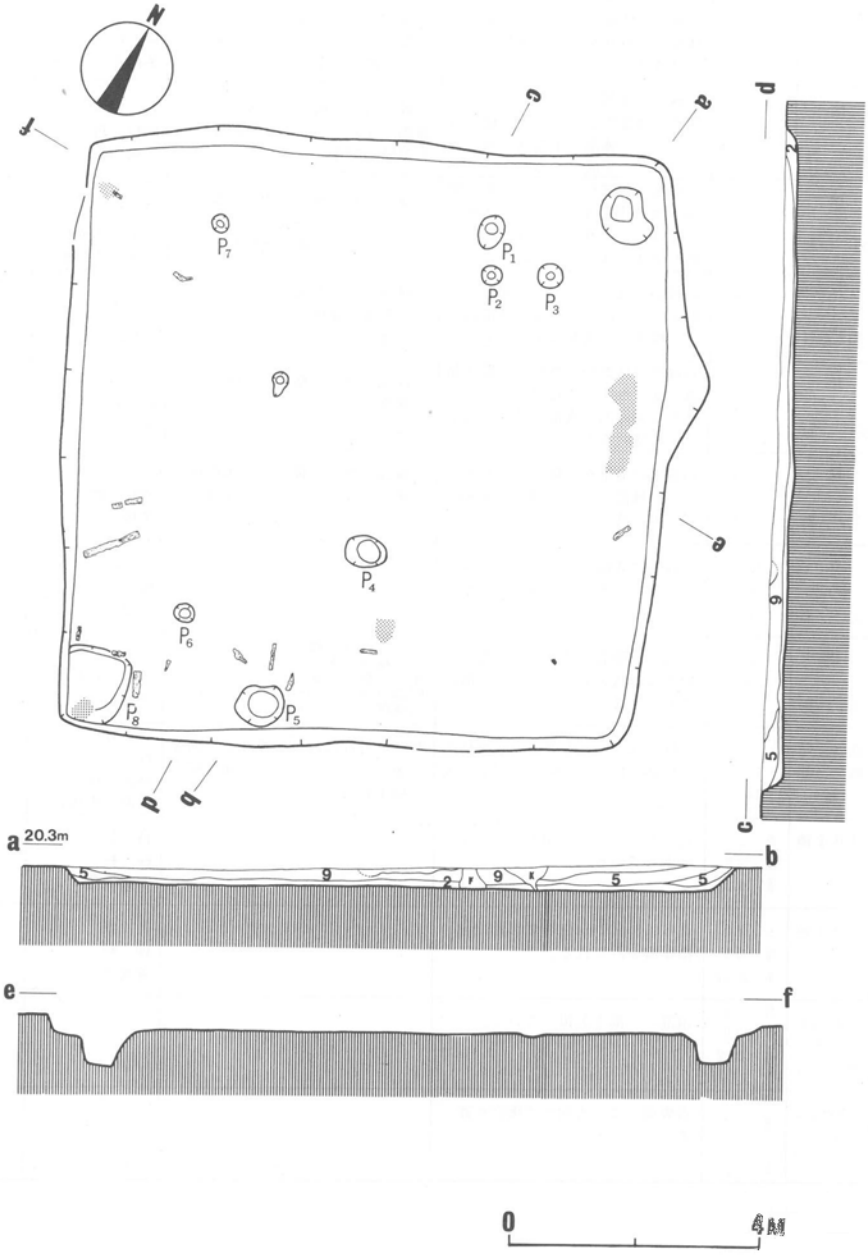
| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器　形　の　特　徴 | 整　形　技　法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 66図<br>1 | 甕<br>下部欠 | 17.7<br>(18.0) | 口縁部は頸部から大きく外反して開き，胴部はやや下ぶくれをなし，下部を欠損している。 | 口縁部内外面とも横なでで肩部および下部外面には縦位の篦削りがみられる。内面は斜位の篦なで。 | 普　通<br>砂粒・石英<br>茶褐色 | 外面の一部煤付着 |
| 2 | 甕<br>口縁部<br>1/3 | 17.0<br>( 3.4) | 口縁部片で外反して開く。 | 口縁部内外とも横なで。 | 良　好<br>砂粒・石英<br>外面　茶褐色<br>内面　黒　色 | |
| 3 | 坏<br>1/3 | 12.0<br>7.1<br>4.1 | 口縁部は体部から外反して開き，体部は半月状を呈し，底部はややあげ底状をなしている。 | 口縁部内外とも横なでがみられ，体部外面はなでで，下部は篦削り内面は篦なでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>茶褐色 | 一部に煤付着 |
| 4 | 坏<br>完　形 | 12.6<br>7.5<br>2.8 | 口縁部は体部から大きく外反して開き，頸部内面にかすかな稜を有している。体部は半月状を呈し底部は小さく平底である。 | 口縁部内外は横なで，体部外面は篦削りがみられる。体部内面はやや器壁の剥落がみられる。 | 良　好<br>砂粒・石英<br>赤褐色 | |
| 5 | 坏<br>完　形 | 11.8<br>6.6<br>4.2 | 口縁部は体部から外反して開き頸部内面に稜を有している。体部は半月状を呈し底部は平底である。器形全体にゆがみがみられる。 | 口縁部内外は横なで体部外面は篦削りがみられ，内面は篦なでがなされている。底部は篦削り。 | 良　好<br>砂　粒<br>外面　黒褐色<br>内面　赤褐色 | |
| 6 | 坏<br>ほぼ完形 | 12.4<br>5.2<br>3.5 | 口縁部は底部から大きく開き，頸部がかすかにくびれる。頸部内面には稜を有し底部は平底である。 | 口縁部内外とも横なでがなされ，体部外面は篦削りがなされ，内面は剥落がはげしい。 | 普　通<br>砂　粒<br>赤褐色 | |
| 7 | 坏<br>完　形 | 12.6<br>6.4<br>3.7 | 口縁部は体部から外反して開き頸部内面にかすかな稜を有している。体部は直線的に底部へ続く。底部はあげ底状をなす。 | 口縁部内外とも横なで，体部外面は篦削りがみられ，内面は篦なでがなされている。 | 良　好<br>砂　粒<br>赤褐色 | |
| 8 | 坏<br>完　形 | 12.4<br>5.0<br>3.1 | 口縁部は底部から開いて立ちあがり，口縁部でさらに開く。底部はややあげ底状をなす。 | 口縁部内外とも横なで。体部外面は篦削りがみられ，内面は刷毛目痕がみられる。 | 良　好<br>砂粒　礫<br>黄褐色 | |
| 9 | 坏<br>完　形 | 13.1<br>6.0<br>4.5 | 口縁部は底部からやや外反ぎみに開いてたちあがり，底部は平底である。 | 器内外面ともなで。 | 良　好<br>砂　粒<br>灰褐色 | |
| 10 | 坩<br>完　形 | 7.7<br>9.1<br>2.2 | 口縁部は頸部から直線的に開き，胴部は球状を呈している。底部はややあげ底である。 | 口辺部内外は横なで，さらに外面には縦位の篦みがきがみられ，内面には横位の篦なでがみられる。胴部外面には斜位のなで，下部には篦削りがみられる。 | 良　好<br>砂粒・石英<br>赤褐色 | |
| 11 | 高　坏<br>脚　部<br>1/3 | (10.9)<br>14.0 | 坏部のほとんどを欠損し，脚柱部は裾部にむかって開き，裾部で大きく開いている。 | 脚柱部外面は縦位の篦なでで裾部も篦なでがみられる。内面は横位の刷毛目となでがみられる。 | 良　好<br>砂　粒<br>外面　褐　色<br>内面　赤褐色 | |
| 99図<br>2 | 球状土錘 | 長　2.2<br>幅　2.4<br>重　11.0g | 孔は0.3～0.4cmで頂部はややすぼまっている。 | | 良　好<br>砂　粒<br>明黄褐色 | |
| 3 | 球状土錘 | 長　3.0<br>幅　3.0<br>重　26.0g | 孔は0.3～0.5cmほどで表面には指頭痕がみられる。 | | 良　好<br>砂　粒<br>黄褐色 | |
| 98図<br>1 | 石製模造品<br>(勾玉)<br>滑　石 | 長　2.8<br>厚　0.9<br>孔　0.22<br>重( 5.5g) | 頂部の一部を欠損している。 | | | |
| 2 | 石製模造品<br>(有孔円板)<br>滑　石 | 長　2.2<br>厚　0.4<br>孔　0.18<br>重　3 g | 表裏面には一方向への擦痕が顕著にみられる。 | | | |

**第15号住居跡（第67図）**

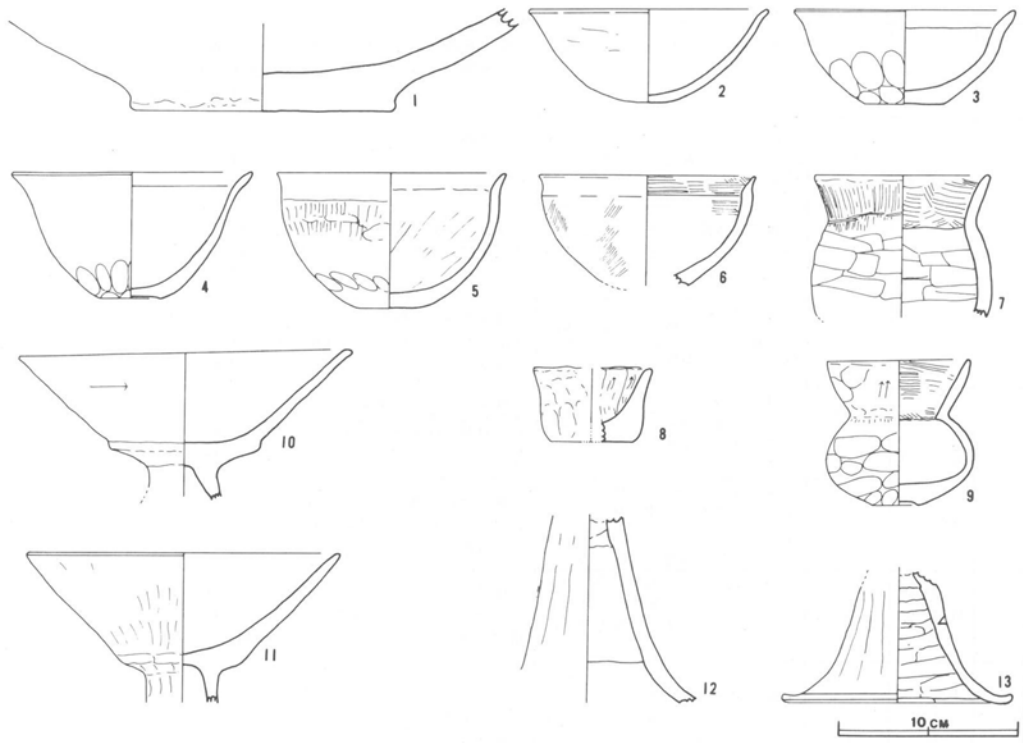
**位置**　B地区の南部（O43区）に位置し，近接する古墳時代の住居跡は南西部に第13号住居跡，北西部に大型住居の第16号住居跡がみられる。

**規模**　N－24°－W　長軸9.64m　短軸9.5m　　平面形状　方形　　面積　約82.4m²

**各部の状況**　壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがり，壁高は21～40cmで東壁が高く，西および北壁が




**第67図　第15号住居跡実測図**




**第68図　第15号住居跡出土遺物**

低い。また，北東壁が一部分張りだしている。床面はほぼ平坦であるがかなり攪乱がみられ，中央部付近が若干凹状をなす。

**炉**　北東壁ぎわに帯状の焼土が少量残存しているが，炉は検出されていない。また，炭化材が壁から中心部にかけて部分的にみられ，火災に遭遇したと考えられる。

**柱穴**　9ヶ所確認され，主柱穴は3～4個と考えられるが規格性がなく，直径20～30cmほどである。貯蔵穴は南西コーナーに接する長方形の掘り方が考えられるが，北東コーナ部にもやや小さいが同様な施設がみられる。

**覆土**　上層は少量のローム粒子・砂礫を含む暗褐色土で，下層は多量のローム粒を混入する黄色土，壁ぎわは黄褐色土のロームが流入している。

**遺物出土状況**　遺物は土師器の坏・高坏・小型壺等であり，北コーナー部付近に完形の坏（第68図2～5），手捏土器（第68図8）がみられ，東北コーナーの床面に坩（第68図9），南東壁ぎわに高坏の坏部（第68図11）が倒立した状況で出土している。床中央付近からはほとんど遺物がみられなかった。

**遺　物（第68図）**

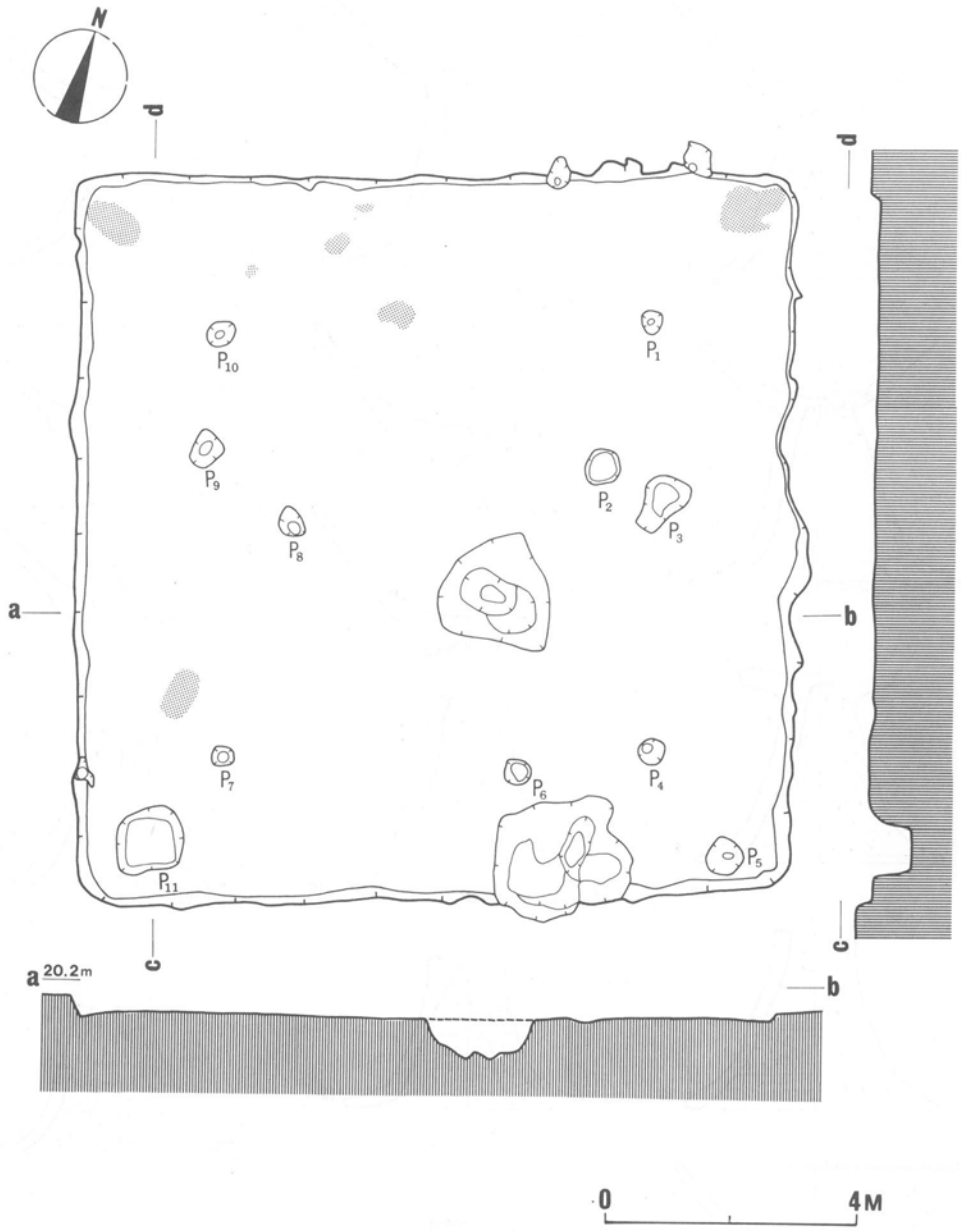
| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器　形　の　特　徴 | 整　形　技　法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 68図<br>1 | 壺<br>底部<br>2/3 | (5.5)<br>14.6 | 大形の底部で壁厚は1.3～2.0cmほどである。 | 外面は篦削りがなされ，内面も同様に篦削りがみられる。 | 粗雑<br>砂粒・礫<br>外面黒色・内面灰褐色 | |
| 2 | 坏<br>完形 | 13.3<br>5.1 | 底部は丸底で半月状に開き，口縁部はかすかに外反する。器厚は0.4～0.5cmほどである。 | 体部外面はなでがなされ，内面は剝落がはげしい。 | 良好<br>砂粒・石英<br>黄褐色 | |
| 3 | 坏<br>完形 | 12.2<br>5.2<br>4.3 | 口縁部は体部から外反して開き，内面には稜をなし底部は平底である。器厚は0.4～1.0cmほど。 | 口縁部内外面とも横なでがなされ，体部下位は篦削りがみられ，体部内面は剝落がはげしい。 | 良好<br>砂粒・石英<br>黄褐色 | |
| 4 | 坏<br>完形 | 13.3<br>6.9<br>3.3 | 口縁部は体部からやや外反し，内面にはかすかな稜がみられ，体部は内彎している。底部はややあげ底状をなし，器厚は0.3～0.7cmほどである。 | 口縁部内外とも横なでがなされ，体部もなでがみられる。底部付近は篦削りがなされている。 | 普通<br>砂粒・石英<br>明黄褐色 | |
| 5 | 坏<br>完形 | 12.6<br>7.3<br>3.2 | 口縁部は直立ぎみに外反して開き，内面には稜がみられる。体部はやや深く底部は平底である。器厚は0.4～1.0cmほどである。 | 口縁部内外面とも横なでがなされ，体部外面は篦削りの後なでがなされ，肩部には篦状具の圧痕が二段にみられる。内面は斜位の篦みがきがなされている。 | 良好<br>砂粒<br>黄褐色 | |
| 6 | 坏<br>底部欠<br>1/4 | 11.7<br>(6.0) | 口縁部は直立ぎみに外反して立ちあがり，内面には稜を有する。底部を欠いているが体部は半月状を呈している。器厚は0.3～0.9cm。 | 口縁部外面は横なで，内面は刷毛目整形がみられる。体部は斜位の刷毛目整形がみられる。 | 良好<br>砂粒<br>明褐色 | |
| 7 | 小形甕<br>底部欠<br>1/3 | 9.8<br>(7.7) | 口縁部は頸部から直立ぎみに外反して立ちあがり，胴部もあまり膨みのないものである。器厚は0.6～0.9cmほどである。 | 口縁部外面は縦位，内面には横位の刷毛目がみられ，胴部内外には横位の篦削りがみられる。 | 普通<br>砂粒<br>褐色 | |
| 8 | 手捏土器<br>(坏)<br>1/2 | 6.5<br>4.0<br>4.6 | 口縁部は底部から直立ぎみに立ちあがり，底部は平底をなす。器厚は0.6～2.0cmほどである。 | 外面には指頭痕がみられ，内面は粘土を底部からかきだすような整形痕が認められる。 | 普通<br>砂粒・礫<br>黄褐色 | |
| 9 | 坩<br>完形 | 7.9<br>7.9<br>2.5 | 口縁部は頸部から内彎して立ちあがり，胴部は球状をなす。底部はあげ底である。器厚は0.4～1.0cmほどである。 | 口縁部外面は篦削り，内面横位の刷毛目がみられる。胴部外面は篦削りがなされている。 | 良好<br>砂粒<br>暗黄褐色 | |
| 10 | 高坏<br>坏部<br>1/2 | 18.4<br>(8.0) | 坏部は直線的に開いて下部に段を有している。脚柱部の上部のみを残している。器厚は0.4～1.3cmほどである。 | 口縁部内外は横なでがなされ，下部は縦位の篦削りがみられる。段部には横位の篦削り，さらに下部は縦位の篦削りがなされている。内面はていねいなでがみられるが剝落がはげしい。器面は全体的に整形が不良である。 | 普通<br>砂粒<br>黄褐色 | |
| 11 | 高坏<br>坏部 | 17.3<br>(8.1) | 坏部は直線的に開き，脚柱部以下を欠き，脚柱部は円筒状を呈している。器厚は0.6～1.5cmほどである。 | 口縁部内外とも横なでがみられ，坏部外面は縦位の刷毛なでがなされている。脚柱部は縦位の篦削りがなされている。 | 普通<br>砂粒・礫<br>黄褐色 | |
| 12 | 高坏<br>脚柱部<br>1/2 | (10.2) | 脚柱部片で裾部にむかってゆるやかに開いている。器厚は0.8～0.9cmほどである。 | 外面は縦位の篦削りがみられ，内面にもやや粗い篦削りがみられる。裾部近くはなでがなされている。 | 普通<br>砂粒<br>赤褐色 | |
| 13 | 高坏<br>脚部<br>1/2 | (7.3)<br>12.8 | 脚柱部から裾部の破片で裾部にむかってなだらかに開がり裾部は外反して開がる。脚柱部中段に径0.4cmほどの孔がみられ，貫通していない。器厚は0.4～0.9cmほどである。 | 脚柱部外面は縦位の篦削りがみられ，内面は横位の篦削りがなされている。裾部は内外ともなで整形がなされている。 | 普通<br>砂粒<br>黄褐色 | |

**第16号住居跡（第69図）**

**位置**　B地区の南部（L41・L42・M41・M42区）に位置する大型住居跡で，近接する古墳時代の住居は南方に第12～15号住居跡がみられる。B地区ではこれ以北には古墳時代の住居は確認されていない。

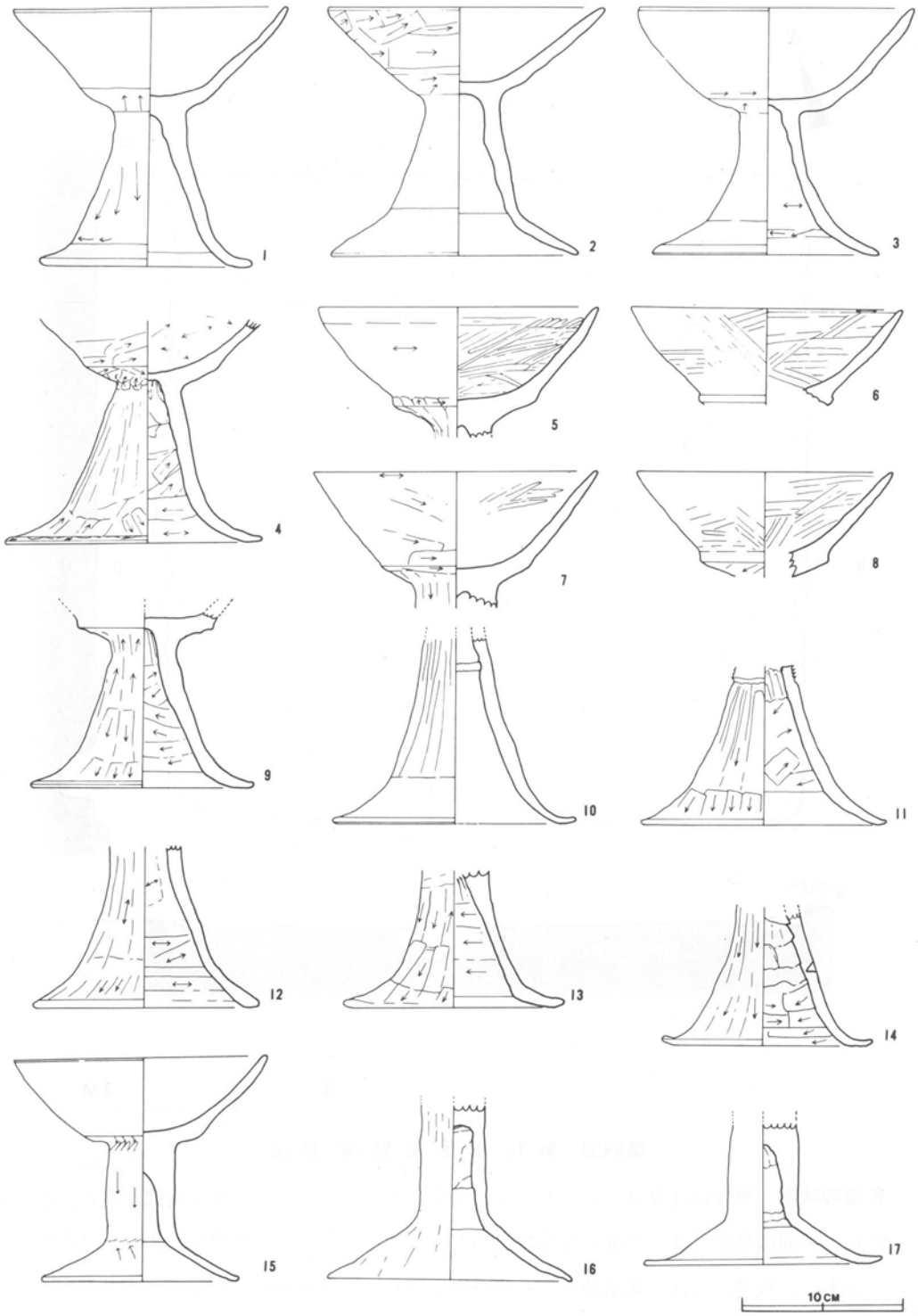
**規模**　N－18°－W　長軸11.50m　短軸11.40m　　平面形状　方形　　面積　131.1m²



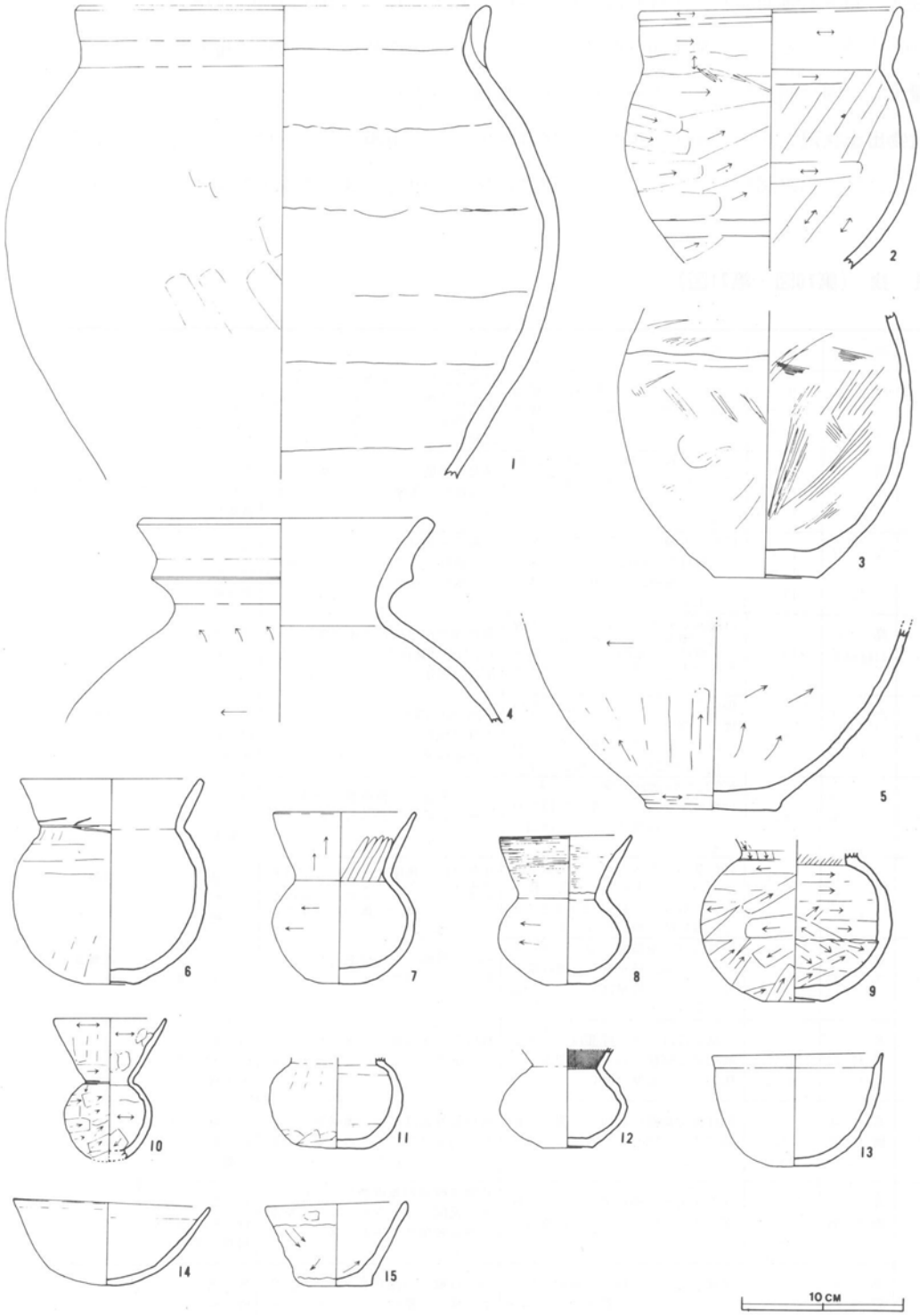

**第69図　第16号住居跡実測図**

**各部の状況**　壁はほぼ垂直に立ちあがり，壁高は15～30cmほどで，西・南部が高く，北・東部が低い。床面は軟弱で多くの攪乱を受け凹凸がみられる。中央部と南壁やや西寄りに不整形の攪乱穴があり，後者からは「寛永通宝」1枚が検出され，近世開墾時の根掘り痕であろう。南西コーナーに一辺100cm，深さ60cmの方形の貯蔵穴がみられる。

**炉**　確認されなかったが，北西コーナーと北東コーナー間に6ヶ所，焼土・炭化材が確認され火災に遭遇したものと考えられる。




**第70図　第16号住居跡出土遺物（１）**




**第71図　第16号住居跡出土遺物（２）**

**柱穴**　11ヶ所確認され，主柱穴は６～７ヶ所と考えられる。直径は40～50cm内外で，深さは20～40cm内外である。その他床面に凹凸がみられるが，耕作時による後世の攪乱であろう。

**覆土**　上層は暗褐色土で，下層は褐色土の堆積がみられる。

**遺物出土状況**　北壁に接する床面に高坏等が出土し，南西コーナー付近からも多数の高坏（第70図），坏（第71図14）等がみられ，西壁に近接して複合口縁の壺（第71図４）がみられる。

## 遺　物（第70図・第71図）

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | 器形の特徴 | 整形技法 | 焼成・胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 70図<br>1 | 高坏<br>ほぼ完形 | 16.8<br>15.8<br>12.8 | 坏部は大きく開き，脚柱部は裾部へ順々に開がり，裾部径は口縁径より小さい。全体的に器厚は厚い。 | 坏部は内外とも篦磨きがみられ，下部は篦削りがなされている。脚柱部外面は，縦位の篦削りで裾部は横位のなでがみられる。 | 普通<br>砂粒・石英<br>明赤褐色 | |
| 2 | 高坏<br>⅔ | 16.9<br>15.2<br>15.1 | 坏部は直線的に開き，脚柱部は裾部にむかってやや開き，裾部でさらに大きく開いている。器厚はやや厚い。 | 坏部は篦磨きがみられ，脚柱部外面は縦位の篦削りがみられ，内面はなでがみられる。 | 普通<br>砂粒・石英<br>黄褐色 | |
| 3 | 高坏<br>⅚ | 17.0<br>15.1<br>14.0 | 坏部は内彎ぎみに開いて立ちあがり，脚柱部は裾部にむかって開いている。器厚はやや厚い。１cm内外である。 | 坏部内外面はなでがみられ，下部には篦削りがなされている。脚柱部は縦位の篦削りがみられ，裾部はなでがみられる。 | 普通<br>砂粒<br>明黄褐色 | |
| 4 | 高坏<br>口縁部欠 | (13.7)<br>15.9 | 口縁部を欠き，坏下部はやや内彎ぎみに開き，下部に稜を有している。脚柱部は裾部へむかって開き，裾部で大きく開いている。器厚は0.6～1.2cmほどである。 | 脚柱部外面は縦位の篦研磨がみられ，内面は篦削りがなされている。裾部は篦削り及びなでがみられる。 | 普通<br>砂粒<br>褐色 | |
| 5 | 高坏<br>坏部<br>½ | 17.3<br>( 8.0) | 脚柱部以下を欠き，坏部はやや内彎して開いて立ちあがる。下部には段をなす。やや器形に歪みがみられ，器厚は0.5～1.0cmほどである。 | 坏部外面は横位のなでがみられ，下部は篦削りがなされている。内面は篦研磨がなされている。 | 良好<br>砂粒<br>明褐色 | 二次焼成 |
| 6 | 高坏<br>坏部 | 16.6<br>( 6.0) | 坏部はやや内彎して開いて立ちあがり，底部以下を欠き，下部には段を有している。器厚は0.5～0.7cmほどある。 | 坏部内外面とも篦研磨がなされ，段部には篦なでがみられる。 | 良好<br>砂粒（多）<br>赤褐色 | |
| 7 | 高坏<br>坏部<br>⅓ | 17.4<br>8.4 | 脚柱部以下を欠き，坏部は直線的に開いて立ちあがり，下部に稜を有す。器高は0.4～1.2cmほどである。器形的にやや歪みがある。 | 坏部外面は篦削りがみられ，内面は篦なでみがきがなされている。剝落がはげしい。下部から脚柱部にかけては縦位の篦削りがなされている。 | 普通<br>砂粒<br>明赤褐色 | 二次焼成 |
| 8 | 高坏<br>坏部 | 15.9<br>( 6.7) | 坏部はほぼ直線的に開いて立ちあがり，下部に段を有し，脚柱部を欠いている。器厚は0.5～1.0cmほどである。 | 坏部内外面とも篦研磨がなされ，段部には，篦削りがみられる。 | 普通<br>砂粒（多）<br>褐色 | 二次焼成 |
| 9 | 高坏<br>脚柱部<br>⅓ | (10.8)<br>13.2 | 坏部をほぼ欠き，稜部以下である。脚柱部は裾部にむかって開き，全体的にやや器厚は厚い。 | 脚柱部外面は縦位の篦削りがみられ，裾部にはなでがなされている。 | 普通<br>砂粒（多）<br>明赤褐色 | |
| 10 | 高坏<br>脚柱部 | (11.2)<br>15.0 | 脚柱部で裾部にむかって開き，裾部でさらに開がる。器厚は0.4～1.2cmほどである。 | 脚柱部外面は縦位の篦研磨がみられ，内面はなでがみられる。裾部はなでがみられる。 | 良好<br>砂粒<br>明褐色 | |
| 11 | 高坏<br>脚柱部<br>½ | ( 9.7)<br>15.1 | 坏部を欠き，脚柱部は中段より裾部へ大きく開いている。器厚は0.7cm内外である。 | 外面は縦位の篦研磨がみられ，内面は篦削りがなされている。裾部は外面篦削り，内面は横なでがみられる。 | 良好<br>砂粒（多）<br>褐色・黒斑あり | |
| 12 | 高坏<br>脚柱部<br>½ | ( 9.9)<br>13.3 | 坏部を欠き，脚柱部は裾部にむかって開いている。器厚は0.6～0.8cm。 | 外面は縦位の篦研磨がみられ，内面は横位の篦削りがなされている。 | 普通<br>砂粒<br>褐色 | |
| 13 | 高坏<br>脚柱部<br>½ | ( 8.3)<br>12.4 | 坏部を欠き，脚柱部は裾部にむかって開き，裾部でさらに大きく開いている。器厚は0.7～1.2cm。 | 外面は縦位の篦削り，内面横位の篦削りがみられる。裾部は横なでがなされている。 | 普通<br>砂粒（多）<br>褐色 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 14 | 高　坏<br>脚柱部<br>½ | ( 8.7)<br>12.0 | 坏部を欠き，脚柱部は裾部にむかって開き，裾部は大きく外反する。器厚は0.4～0.9cmほどで，脚柱部中央の1ヶ所に孔が穿たれ，内面は輪積痕が顕著である。 | 外面は縦位の篦削り，内面は横位の篦削りがみられる。裾部は横なでがなされている。 | 良　好<br>砂　粒<br>明黄褐色 | |
| 15 | 高　坏<br>ほぼ完形 | 15.5<br>13.6<br>12.2 | 坏部はわずかに内彎しながら開いて立ちあがり，下部は段をなし，脚柱部は円筒状をなし，裾部は大きく開いている。器厚は0.6～1.2cmほどである。 | 坏部内外面ともなでがみられ，脚柱部は縦位の篦研磨がなされ，裾部内外面はなでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>明黄褐色 | |
| 16 | 高　坏<br>脚柱部<br>½ | (11.8)<br>15.0 | 坏部を欠き，脚柱部は円筒状を呈し，裾部で大きく開く。器厚は0.5～0.8cm。 | 脚柱部外面は縦位の篦なで，内面は裾部との境に稜をなし，篦削りがみられる。裾部は内外とも篦なでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 17 | 高　坏<br>脚柱部<br>½ | ( 8.5)<br>14.7 | 坏部を欠き，脚柱部は円筒状をなし，裾部は大きく開いている。脚柱部はやや器厚が厚く，内面には輪積痕がみられる。 | 脚柱部は縦位の篦なでがみられ，裾部にも篦なでがなされている。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 71図<br>1 | 甕<br>底部欠<br>⅔ | 25.6<br>(29.0) | 口縁部は頸部から直立ぎみに立ちあがり，胴部最大径は中位にあり，底部は欠いている。器厚は0.7～1.0cmほどでやや厚い。内面には輪積痕が顕著である。 | 口縁部は内外とも横なでがみられ，胴部外面は篦削り後，研磨されたとみられる。 | 良　好<br>砂　粒<br>明黄褐色 | 内面に多量の煤付着 |
| 2 | 甕<br>底部欠 | 16.0<br>(16.0) | 口縁部は頸部から直立ぎみに立ちあがり，胴部はそれほど張り出したものではない。器厚は0.8～1.0cmほどである。 | 口縁部内外面は横位のなでがみられ，胴部外面は横方向の篦削りがみられ，内面には斜位の篦削りがみられる。 | 普　通<br>砂　粒（多）<br>褐　色 | |
| 3 | 甕<br>口縁部欠<br>½ | (15.2)<br>6.3 | 肩部以上を欠き，胴部はそれほど張出したものではない。底部は平底で篦削りがなされている。器厚は0.5～1.2cmほどで底部は厚い。 | 胴部外面は斜位の篦削りがみられ，下部はなでがなされている。内面も，外面と同様な整形痕がみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 4 | 壺<br>胴以下欠 | 17.5<br>(12.5) | 口縁部は頸部から大きく外反し，一段を有している。胴部は中位以下を欠き，球状をなすものであろう。器厚は口縁部が1.0cm内外と厚く，胴部は0.8cmほどである。 | 口縁部から頸部外面は横位のなでがみられ，内面は同様のなでがみられる。胴部外面は篦みがきがみられる。 | 普　通<br>砂粒・石英・長石<br>赤　色 | |
| 5 | 甕<br>底　部<br>⅓ | (11.3)<br>7.8 | 胴部中位以上を欠き，やや球状を呈したものであり，底部は平底である。器厚は0.6～1.0cmほどである。 | 胴部外面は下部に篦削りがみられ，その上部には，横位のなでがみられる。内面は斜位の篦削りがみられる。底部は篦削りがなされていない。 | 普　通<br>砂　粒・石　英<br>明黄褐色 | |
| 6 | 小形甕<br>完　形 | 11.0<br>12.5<br>3.2 | 口縁部は頸部から直線的に開いて立ちあがっている。胴部は球状をなし，底部はややあげ底で小さい。器厚は0.6～1.0cmほどである。 | 口縁部内外とも横位のなでがみられ，胴部外面の上部は篦削り，下部は篦削り後になでがみられ，内面は篦削り，なでがみられ，底部は篦削りがみられる。 | 良　好<br>砂　粒<br>暗褐色 | |
| 7 | 坩<br>ほぼ完形 | 8.5<br>11.5<br>2.4 | 口縁部は，頸部から直線的に開いて立ちあがり，胴部は球状をなしている。底部は平底である。器厚は0.4～0.7cm。 | 口縁部内外は縦位の篦なで，胴部外面は横位の篦なでがみられ，内面は篦削りがなされている。 | 普　通<br>砂　粒・雲　母<br>褐　色 | 二次焼成 |
| 8 | 坩<br>ほぼ完形 | 7.9<br>9.1<br>2.9 | 口縁部は頸部からやや外反して立ちあがり，胴部は扁平な球状を呈し，底部はやや平坦をなす。器厚は0.4～0.6cmほどである。 | 口縁部内外とも横位のなでがみられ，胴部は篦削りとなでが内外ともみられる。 | 普　通<br>砂粒・石英・長石<br>暗黄褐色 | |
| 9 | 小形甕<br>口縁部欠<br>⅔ | ( 9.8)<br>3.7 | 口縁部を欠き，胴部は球状を呈し，内面中位に輪積痕がみられる。底部はあげ底状をなし，小さい。器厚は0.5～0.8cmほどである。 | 頸部内外は斜位の篦研磨がみられ，胴部外面は斜位の篦削り，内面も同様に篦削り，なでがみられる。底部は篦削りがみられる。 | 良　好<br>砂　粒（多）<br>褐　色 | |
| 10 | 坩<br>底部欠<br>½ | 6.8<br>( 8.6) | 口縁部は頸部から直線的に開いて立ちあがり，胴部は小さく底部を欠いている。口縁部は歪曲し著しく楕円形で器厚は薄い。 | 口縁部内外とも篦削り，なでがみられ，胴部外面は斜位の篦削りがみられる。 | 良　好<br>砂　粒<br>褐　色 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 11 | 坩<br>口縁部欠 | ( 5.7)<br>4.8 | 口縁部を欠き，胴部は扁平な球状を呈し，平底をなしている。全体的にやや凹凸がみられ，整形は不良。器厚は0.4～0.6cm。 | 外面は篦削り，篦なでがみられ，底部は篦なでがなされている。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | 胴部煤付着 |
| 12 | 坩<br>口縁部欠 | ( 6.1)<br>3.15 | 胴部は扁平な球状をなし，底部はややあげ底を呈し，器厚は0.3～0.5cmである。 | 外面は篦削りと篦なでがみられ，外面及び口縁内面とも丹彩されている。 | 良　好<br>砂　粒<br>暗赤褐色 | 丹彩（外面） |
| 13 | 坏<br>⅔ | 10.6<br>6.85<br>3.2 | 口縁部は底部から内彎して立ちあがり，小さく外反している。内面には稜をなし，底部は小さい。器厚は0.2～0.6cm。 | 口縁部内外は，横なでがみられ，体部外面は篦削り，内面はなでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>明褐色 | |
| 14 | 坏<br>完　形<br>丸　底 | 12.1<br>5.1 | 口縁部は丸底部から大きく開いて立ちあがり，器厚は0.4cm内外である。 | 口縁部内外は，横なでがみられ，体部外面は篦なでがみられ，内面はなでがなされている。 | 普　通<br>砂　粒<br>明赤褐色 | |
| 15 | 坏<br>⅔ | 8.6<br>5.0<br>4.4 | 口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり，器厚は0.5cm内外である。 | 口縁部内外面は，横なでがみられ，体部内外面は，篦削りがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |

**第17号住居跡（第72図）**

**位置**　A地区の南部（I 27区）に独立して位置し，古墳時代の住居跡は北方22mに第18号住居跡がみられる。

**規模**　N－44.5°－W　長軸6.7m　短軸6.4m　　平面形状　方形　　面積　約41.4m²

**各部の状況**　壁は垂直ぎみに立ちあがり，壁高は15～17cmをはかり南壁がやや高くなる。床はほぼ平坦であるが若干北方向に傾斜を示している。中央から西よりに多く炭化材が検出されている。南西コーナー部に接して，深さ45cmの貯蔵穴がみられるが一部攪乱を受けている。

**炉**　確認されなかったが，北壁および東・南壁に焼土が検出されており，火災に遭遇したものと考えられる。

**柱穴**　4ヶ所確認されているが，直径は20～35cm内外で$P_1$・$P_2$は小さく，$P_3$は長方形であり，$P_4$以外はあまりしっかりしたものではない。

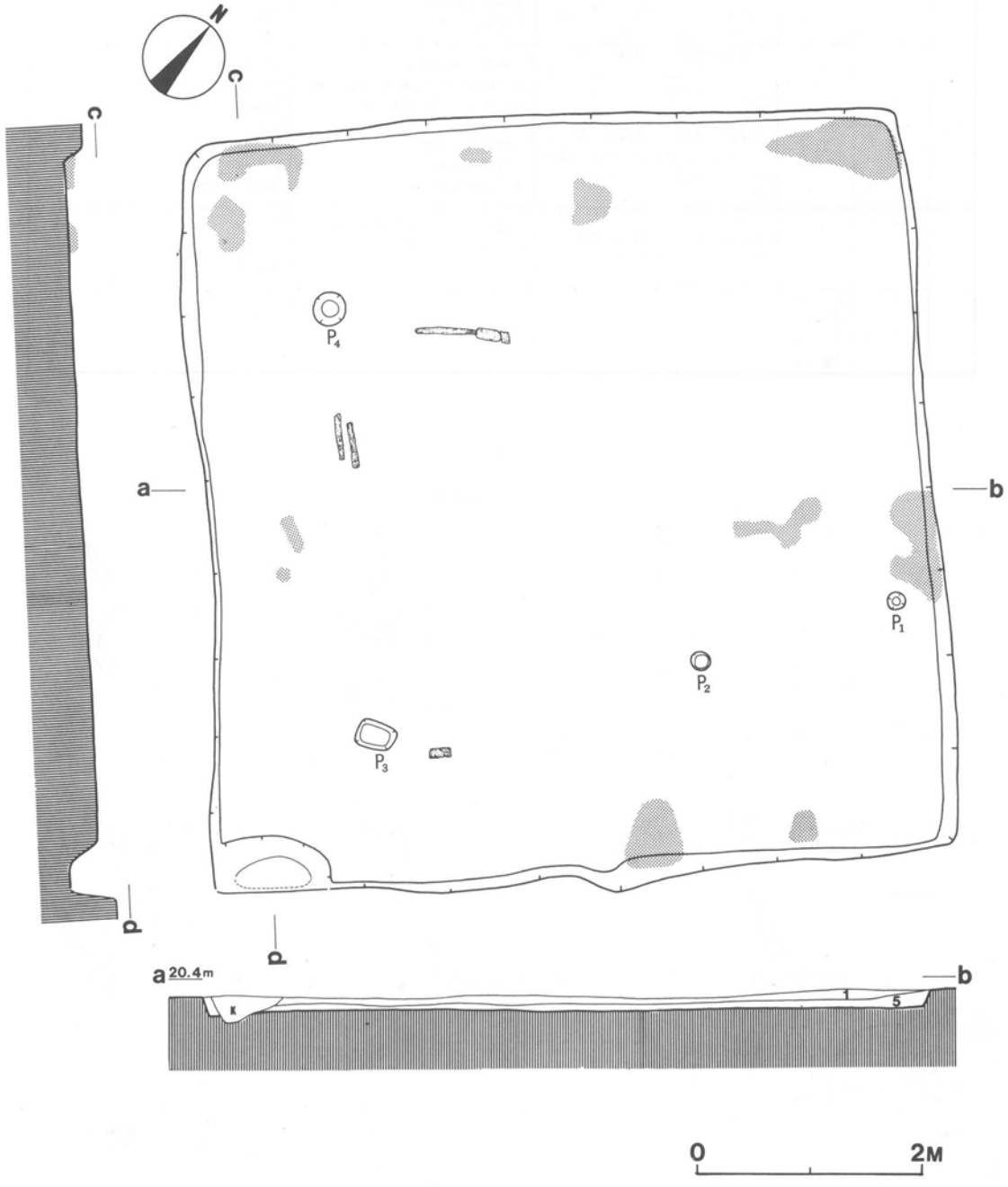
**覆土**　上層は少量のロームブロックを含む褐色土で，下層は多量のローム粒を含む黄褐色土が堆積し，自然流入の状態を示している。

**遺物出土状況**　南西コーナー付近から多数の球状土錘が床面よりやや浮いた状態で一括して出土し，さらに，北壁および東壁付近からも数点出土している（第74図）。また，中央やや南西よりの床面に剣形石製模造品が1点（第98図3），北東壁ぎわの床面からも双孔円板が1点（第98図4）出土している。

**遺　物（第73図）**

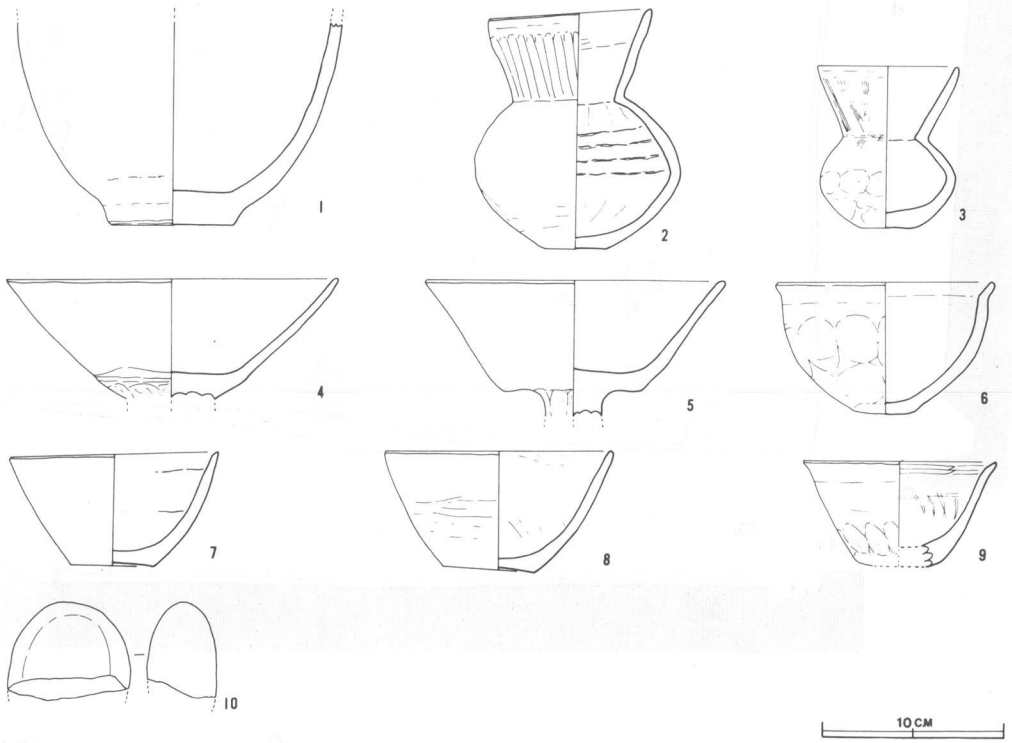
| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器　形　の　特　徴 | 整　形　技　法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 73図<br>1 | 甕<br>胴下部<br>⅓ | (11.1)<br>6.7 | 胴部上半以上欠き，胴部はやや円筒状で底部へとゆるやかにすぼまる。器厚は0.7～1.9cmほどである。 | 胴部は，なでがみられ内面は剝落がはげしい。 | 良　好<br>砂　粒，礫<br>灰褐色 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 坩<br><br>ほぼ完形 | 8.9<br>13.1<br>3.6 | 口縁部は頸部から直線的に開いて立ちあがり，胴部はほぼ球状を呈し平底をなす。器厚は0.5～0.8cmほどである。 | 口辺部内外は横なでがなされ，外面は頸部まで縦位の篦みがきがなされている。胴部外面も不鮮明ながらなでがみられ，内面には輪積痕が4段ほど認められる。 | 良　好<br>砂　粒<br>外面　淡黄褐色<br>内面　黒　色 | |
| 3 | 坩<br><br>完　形 | 7.8<br>8.9<br>2.8 | 口縁部は頸部から直線的に開き，頸部は「く」の字状にくびれている。胴部は球状をなし，底部はややあげ底状を呈している。器厚は0.5～1.0cmほどである。 | 口辺部内外は横なでが見られ，外面には頸部まで縦位の刷毛目痕がみられ，胴上部にもかすかに認められる。胴下部は篦削りが認められる。 | 良　好<br>砂　粒<br>黄褐色 | |

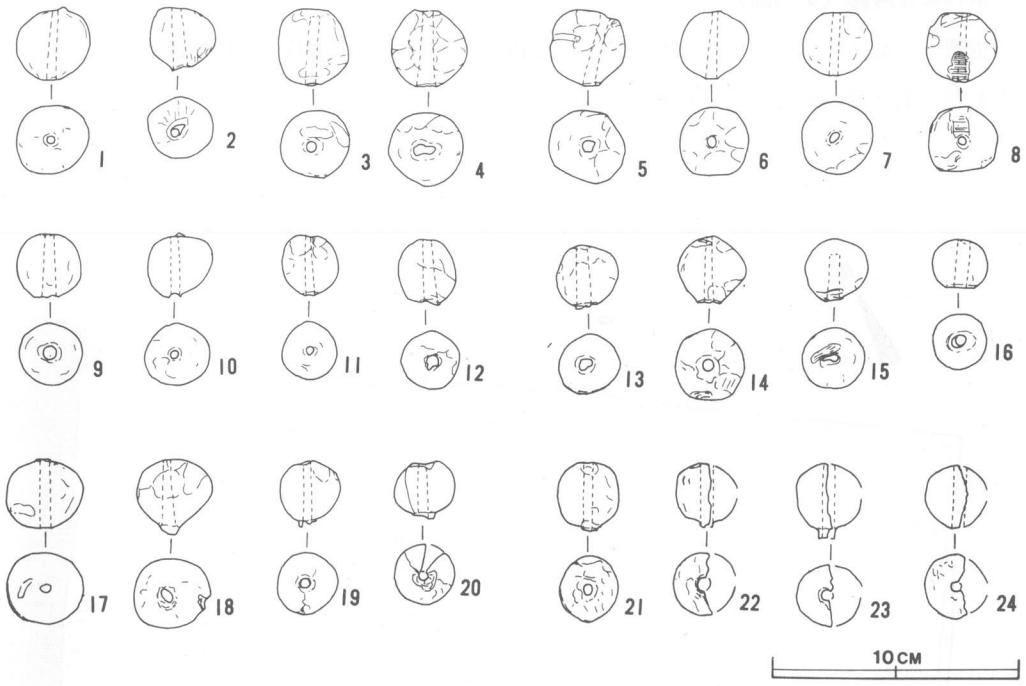



第72図　第17号住居跡実測図

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 高　坏<br>脚部欠 | 18.2<br>( 6.6) | 坏部は直線的に大きく開き，下位に稜をなし，脚柱部以下を欠いている。 | 坏部外面は横なでがみられ，内面は篦なでがなされている。 | 良　好<br>砂　粒<br>赤黄褐色 | 煤　付　着 |
| 5 | 高　坏<br>脚部欠 | 16.6<br>( 7.6) | 坏部は直線的に大きく開いて立ちあがるが角ばった感じである。脚柱部以下を欠き，器厚は0.5～1.0cmほどである。 | 坏部内外面ともなで整形がなされ脚柱部上半には篦削りが認められる。 | 普　通<br>砂　粒・礫<br>淡黄褐色 | 煤　付　着 |
| 6 | 坏<br>完　形 | 12.0<br>7.2<br>3.4 | 口縁部は体部から外反して開き，体部は底部へすぼまる。底部はやや丸味をおびた平底である。器厚は0.4～0.7cmほどである。 | 口縁部内外は横なでがみられ，体部外面は篦削りがみられ，内部にも篦なでがみられる。 | 良　好<br>砂　粒・礫<br>外面　茶褐色<br>内面　赤褐色 | |
| 7 | 坏<br>⅔ | 11.5<br>6.3<br>4.7 | 口縁部は底部より直線的に開いて立ちあがる。底部はややあげ底状を呈し，器厚は0.3～0.9cmほどである。 | 口縁部内外は横なでがなされている。体部内外は不鮮明であるが篦なでが見られ，内面調整は密である。 | 良　好<br>砂　粒<br>明茶褐色 | |
| 8 | 坏<br>完　形 | 12.6<br>6.9<br>5.0 | 口縁部は底部より直線的に開いて立ちあがり，底部はややあげ底状を呈し，器厚は0.4～0.8cmほどである。 | 口縁部内外は横なでがなされ，体部内外とも篦なでがみられる。内面の調整は密である。 | 良　好<br>砂　粒<br>茶褐色一部黒斑あり | |
| 9 | 坏<br>½ | 10.7<br>5.7<br>3.4 | 口縁部はやや小さく外反して開く。体部は底部から直線的に開き底部を欠いている。器厚は0.3～1.1cmほどである。 | 口縁部内外は横位の篦なでがみられ，体部外面は篦削りがなされている。 | 良　好<br>砂　粒<br>黄褐色 | |
| 10 | 磨　石<br>安山岩 | 長 ( 5.2)<br>幅　6.7<br>厚　3.8<br>重量(158g) | | | | |




**第73図　第17号住居跡出土遺物**



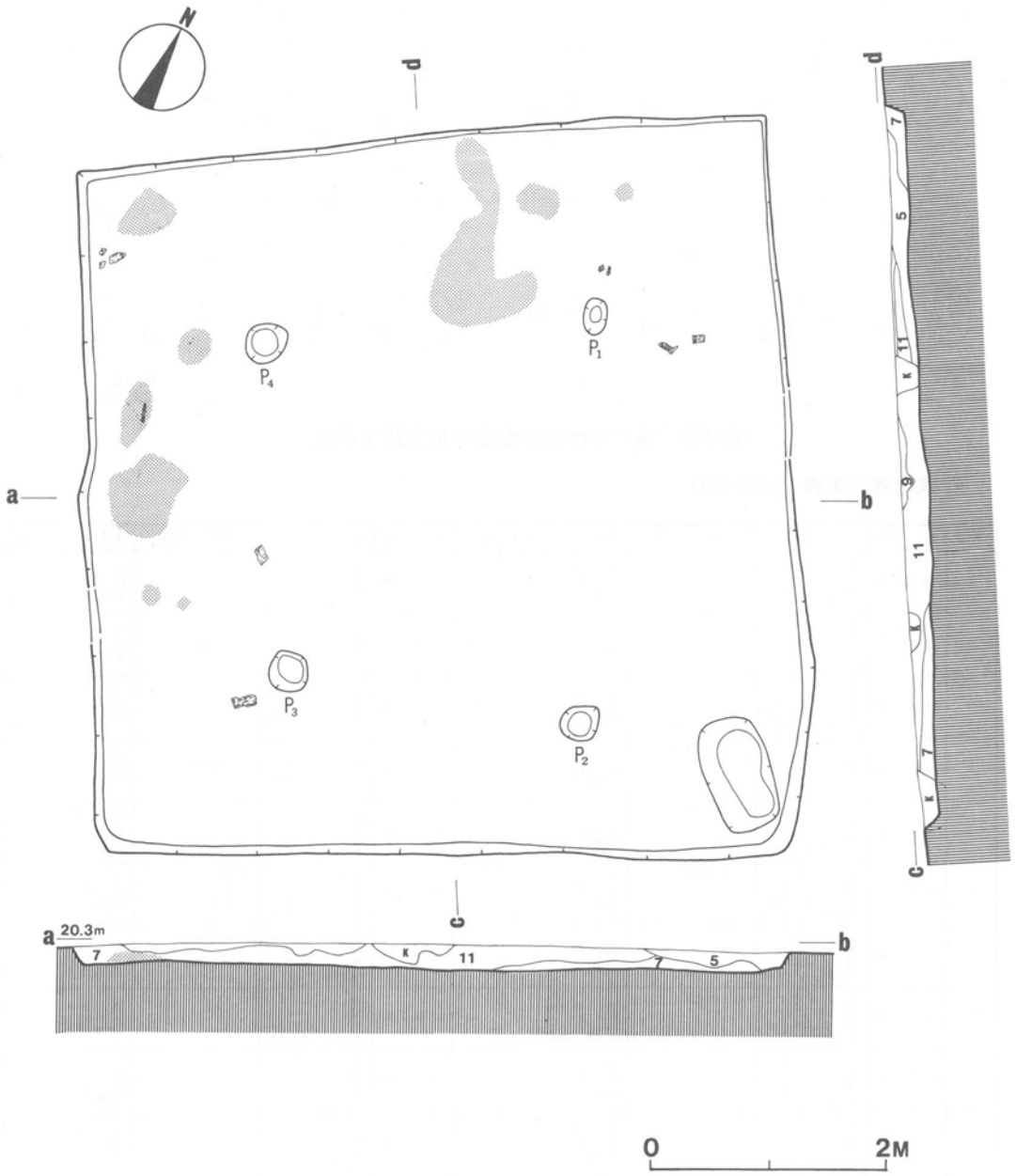

第74図　第17号住居跡出土球状土錘実測図

## 球状土錘計測表　(第74図)

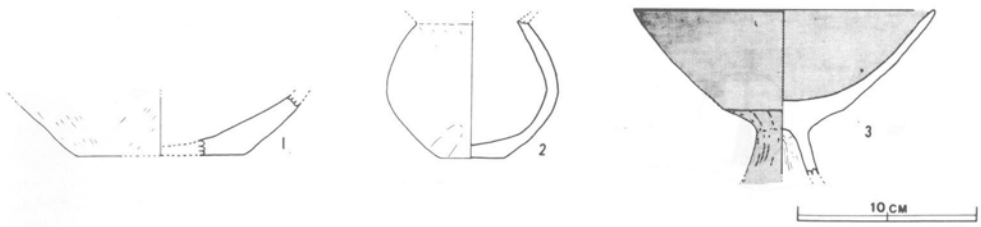
| 番号 | 器　種 | 法　量(cm) | 器形の特徴 | 焼成・胎土・色調 | 番号 | 器　種 | 法　量(cm) | 器形の特徴 | 焼成・胎土・色調 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 球状土錘 | 長　2.9<br>幅　3.0<br>重　21g<br>孔径　0.4 | | 普　通<br>砂　粒<br>灰褐色 | 13 | 球状土錘 | 長　2.6<br>幅　2.5<br>重　12g<br>孔径0.4～0.6 | | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 |
| 2 | 球状土錘 | 長　2.5<br>幅　2.6<br>重　14.5g<br>孔　0.4～0.6 | | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 | 14 | 球状土錘 | 長　2.7<br>幅　2.7<br>重　17.5g<br>孔径0.2～0.4 | | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 |
| 3 | 球状土錘 | 長　3.1<br>幅　3.0<br>重　19.5g<br>孔径　0.4 | | 普　通<br>砂　粒<br>灰褐色 | 15 | 球状土錘 | 長　2.6<br>幅　2.5<br>重　13.5g<br>孔径0.4～0.5 | | 普　通<br>砂　粒<br>黒　色 |
| 4 | 球状土錘 | 長　3.0<br>幅　3.0<br>重　22g<br>孔径0.4～0.8 | 頂部孔は双円状 | 普　通<br>砂　粒<br>灰褐色 | 16 | 球状土錘 | 長　2.0<br>幅　2.2<br>重　8.5g<br>孔径　0.5 | 頂部磨滅 | 普　通<br>砂　粒<br>明黄褐色 |
| 5 | 球状土錘 | 長　3.0<br>幅　3.0<br>重　23.5g<br>孔径0.4～0.5 | 孔は一方によっている。 | 黒褐色<br>黄褐色 | 17 | 球状土錘 | 長　2.8<br>幅　3.1<br>重　22g<br>孔径0.4～0.5 | | 普　通<br>砂　粒<br>灰褐色 |
| 6 | 球状土錘 | 長　2.6<br>幅　2.8<br>重　18.5g<br>孔径0.2～0.4 | やや磨滅している。 | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 | 18 | 球状土錘 | 長　3.1<br>幅　3.0<br>重　21g<br>孔径0.3～0.5 | 頂部にもりあがりあり。<br>指頭痕 | 普　通<br>砂　粒<br>灰褐色 |
| 7 | 球状土錘 | 長　2.5<br>幅　2.8<br>重　18.5g<br>孔径0.3～0.4 | | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 | 19 | 球状土錘 | 長　2.7<br>幅　2.5<br>重　10.5g<br>孔径0.3～0.4 | | 普　通<br>砂　粒<br>暗褐色 |
| 8 | 球状土錘 | 長　2.7<br>幅　2.8<br>重　18.5g<br>孔径0.2～0.3 | やや磨滅している。 | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 | 20 | 球状土錘 | 長　2.3<br>幅　2.4<br>重　10.5g<br>孔径0.3～0.4 | | 普　通<br>砂　粒<br>明黄褐色 |
| 9 | 球状土錘 | 長　2.6<br>幅　2.6<br>重　13g<br>孔径0.3～0.5 | | 普　通<br>砂　粒<br>暗褐色 | 21 | 球状土錘 | 長　2.7<br>幅　2.5<br>重　12.5g<br>孔径　0.3 | | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 |
| 10 | 球状土錘 | 長　2.5<br>幅　2.6<br>重　12.5g<br>孔径0.3～0.4 | | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 | 22 | 球状土錘<br>½ | 長　2.6<br>幅　2.5<br>重　(6.5g)<br>孔径　0.5 | | 普　通<br>砂　粒<br>黒褐色 |
| 11 | 球状土錘 | 長　2.4<br>幅　2.3<br>重　11.5g<br>孔径0.2～0.4 | | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 | 23 | 球状土錘<br>½ | 長　3.0<br>幅　2.5<br>重　(5.8g)<br>孔径　0.4 | | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 |
| 12 | 球状土錘 | 長　2.7<br>幅　2.3<br>重　12.5g<br>孔径0.3～0.6 | | 普　通<br>砂　粒<br>茶褐色 | 24 | 球状土錘<br>½ | 長　2.5<br>幅　2.5<br>重　(5.7g)<br>孔径　0.4 | | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 |

**第18号住居跡（第75図）**

**位置**　A地区のほぼ中央部（K15区）に位置し，近接する古墳時代の住居跡は北東約８ｍに長方形状の第19号住居跡がみられる。




**第75図　第18号住居跡実測図**




**第76図　第18号住居跡出土遺物**

**規模**　N－31°－W　長軸6.10m　短軸6.0m　　平面形状　方形　　面積　約34.8m²

**各部の状況**　壁は垂直ぎみに立ちあがり，壁高は11～16cmで西壁が他に比して低くなり，北東コーナー部が張りだしている。床面は軟弱で凹凸が多くみられ，北東壁の中央部と南西壁の一部が攪乱を受けている。南東コーナーに96×56cm，深さ45cm内外の長方形状の貯蔵穴がみられる。

**炉**　確認されていないが，北西コーナー付近に多量の焼土および炭化材が検出され，火災に遭遇したものと考えられる。

**柱穴**　主柱穴はほぼ対角線上に４ヶ所確認され，直径は30cm内外の楕内形で，深さは28～34cmほどである。

**覆土**　上層は砂粒を含む黒色土であるが，部分的に攪乱がみられる。下層は黄褐色土でロームブロック・焼土を含んでいる。

**遺物出土状況**　覆土中から土師器の小片がわずかに出土している。（第76図）

**遺　物（第76図）**

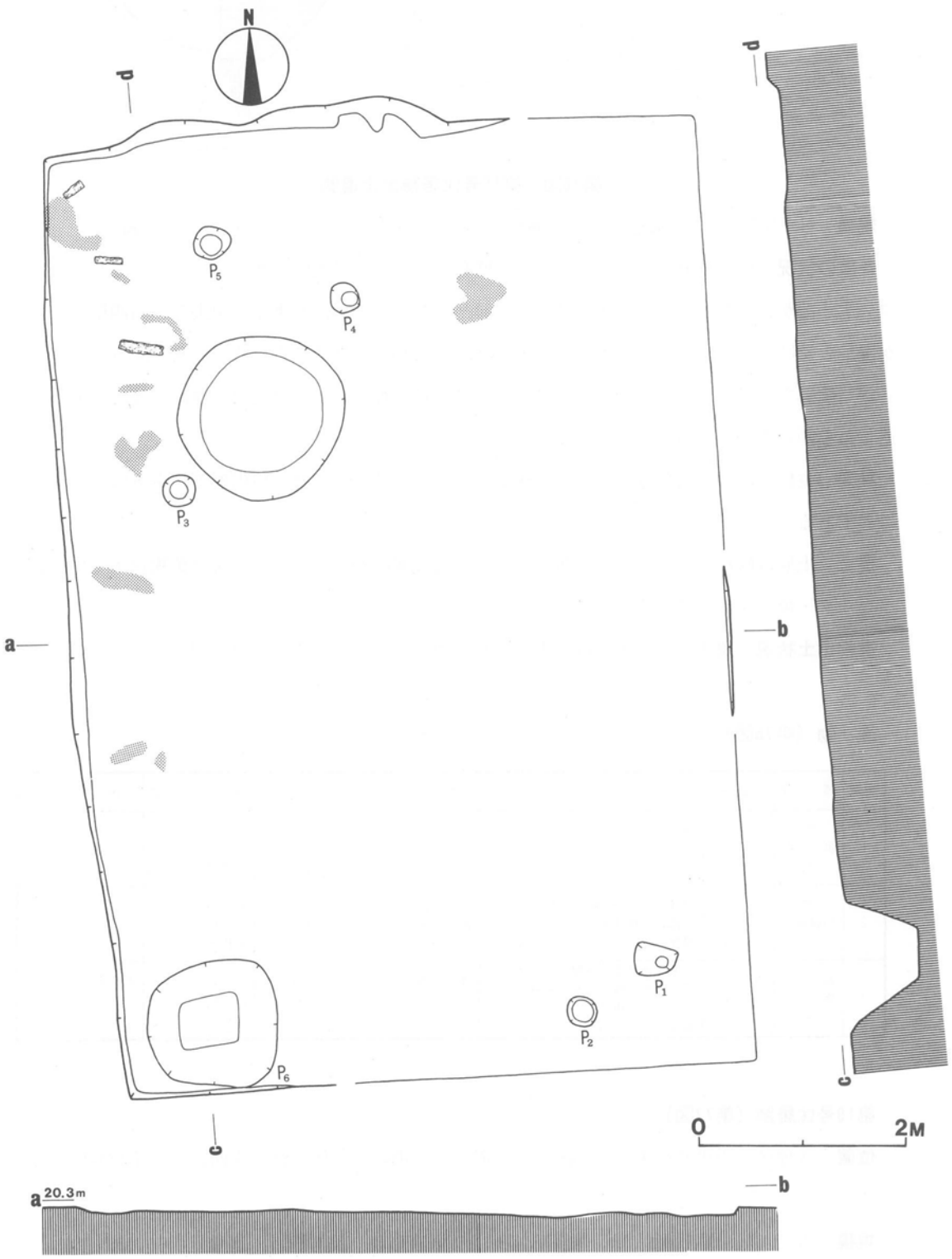
| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器　形　の　特　徴 | 整　形　技　法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 76図<br>1 | 甕<br>底　部<br>½ | (3.3)<br>9.0 | 底部片であり大きく開いている。 | 外面はなでがみられる。 | 粗　雑<br>砂　粒<br>暗茶褐色 | |
| 2 | 坩<br>口縁部欠<br>½ | (7.6)<br>3.4 | 口縁部を欠き，胴部は球状をなし，胴部最大径は中位にある。平底で器厚は0.5～1.0cmほどである。 | 胴部外面はなでがみられ，下部は篦削がなされ，内面は剝落がはげしい。 | 普　通<br>砂　粒<br>明褐色 | |
| 3 | 高　坏<br>脚部欠<br>½ | 16.6<br>(9.1) | 坏部は底部より内彎ぎみに大きく開き下部に稜をなす。脚柱部はほとんどが欠損している。<br>器厚は0.4～1.1cm。 | 体部は篦なでが内外にみられ，稜以下は縦削りの篦削りがみられる。 | 良　好<br>砂　粒<br>赤褐色 | 丹　彩 |

**第19号住居跡（第77図）**

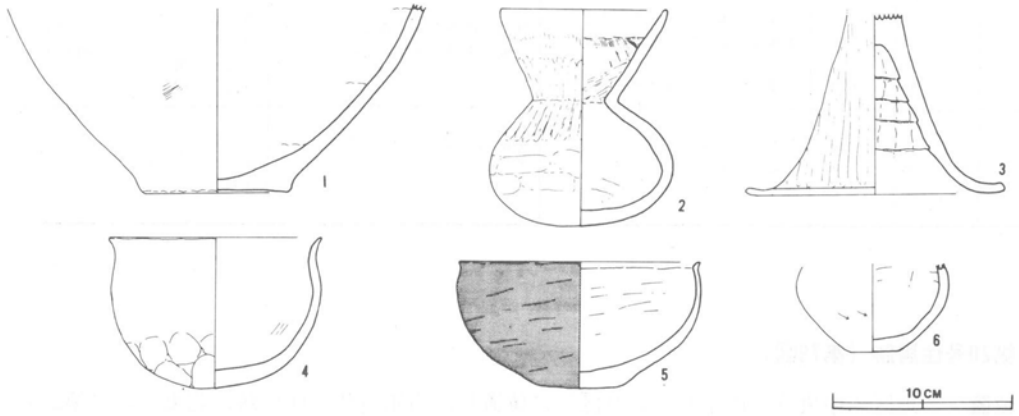
**位置**　A地区の中央やや東（N13区）に位置し，古墳時代の住居跡は南西21mに第18号住居跡がみられる。

**規模**　N－　°－W 長軸9.3m　短軸6.4m　　平面形状　長方形　　面積　約56.8m²

**各部の状況**　壁高は６～10cm内外と浅く，東方に向かうにしたがいほとんど確認できなくなる。




第77図　第19号住居跡実測図




**第78図　第19号住居跡出土遺物**

床面は凹凸が多くみられ，西壁中央付近がややくぼみ，全体的にかなり攪乱を受けている。南西コーナー部に長径117cm・短径75cmほどの方形状の貯蔵穴がみられ，その覆土上面に多量の焼土，炭化材が検出されている。また，同穴の南壁外辺部から灰色粘土ブロックが確認されている。床の北西付近に位置する直径160cm内外の円形の土壙は覆土からみて後世の所産と考えられる。

**炉**　確認されないが，北西コーナー付近から南にかけて，多量の焼土および炭化材が検出され火災に遭遇したものと考えられる。

**柱穴**　南側に２ヶ所，北西コーナーに３ヶ所みられるが主柱穴は不明である。直径は30cm内外で深さは11～22cmほどである。南西コーナー付近は攪乱により不明である。

**覆土**　５～10cmほどの暗褐色土がわずかに残存する。

**遺物出土状況**　遺物は少量の土師器片で，貯蔵穴から坩（第78図２）・埦（第78図４・５）が出土している。

**遺　物（第78図）**

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | 器形の特徴 | 整形技法 | 焼成・胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕<br>底部<br>1/3 | (10.0)<br>8.0 | 胴部以下の破片で底部はややあげ底状をなし胴部はやや内彎して立ちあがる。<br>器厚は0.5～0.7cmほどである。 | 胴部外面には部分的に刷毛目痕がみとめられ，内面はなで整形がなされている。 | 良　好<br>砂　粒<br>黄褐色 | 内面一部煤付着 |
| 2 | 坩<br>3/3 | 9.1<br>11.8 | 口縁部は頸部から直線状に開いて立ちあがり，胴部はやや扁平な球状を呈し丸底を呈している。<br>器厚は0.4～0.8cmほどである。 | 口縁部には横なでがみられ，下部外面には縦位の篦削り，内面には刷毛目痕がみられる。第Ⅰ整形として刷毛なでがなされ，第Ⅱに口縁部の横なでがなされたものである。胴部上面には縦位の篦削り，下部は横位の篦削りがみられる。 | 良　好<br>砂　粒<br>赤褐色・一部黒斑あり。 | |
| 3 | 高坏<br>脚部 | (9.8)<br>14.4 | 脚柱部以下で裾部へ開がり，裾部はさらに大きく開いている。脚柱部内面には４段の輪積痕が認められ，器厚は0.4～1.1cmほどである。 | 脚柱部外面は縦位の篦みがきがなされ，裾部は内外面ともなでがみられる。 | 良　好<br>砂　粒<br>外面　赤褐色<br>内面　黄褐色 | |
| 4 | 埦<br>1/2 | 11.8<br>8.2 | 口縁部は体部が外反して開き，体部は丸底から内彎して立ちあがっている。器厚は0.3～1.0cmほどである。 | 口縁部および体部上面は横なでがみられ，下部は篦削りがなされている。 | 良　好<br>砂　粒<br>淡黄褐色 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 坏<br>(塊)<br>完　形 | 13.3<br>6.9<br>4.7 | 口縁部は体部から小さく外反し，体部は不安定な底部から内彎して立ちあがっている。<br>器厚は0.2～1.0cmほどである。 | 体部は内外面とも横なでがみられ，内面は剝落がすすんでいる。 | 普　通<br>砂　粒<br>外面　赤褐色<br>内面　茶褐色 | 外面　丹彩<br>一部煤付着 |
| 6 | 坩<br>胴　部<br>1/3 | (4.7)<br>2.6 | 胴下部片で扁平の球状を呈し，平底をなす。<br>器厚は0.4～0.5cmほどである。 | 胴部内外面とも斜位のなでがみられる。 | 良　好<br>砂　粒・石　英<br>赤褐色 | |

**第20号住居跡（第79図）**

**位置**　A地区の中央やや西より（H９区）に位置し，古墳時代の住居跡は北東56mに第21号住居跡がみられる。

**規模**　長軸(5.7)m　短軸(5.1)m　平面形状　方形(？)　　面積　推定29m²

**各部の状況**　かなり攪乱を受けていることと，西側はエリア外となり未調査のためプランを明確にすることができず，壁の追求も困難であった。床はほぼ平坦であるが軟弱である。北東コーナーに不定形状の掘り込みがみられ，規模は1.5×2.1m，深さは20～30cm内外で，東壁よりに多量の焼土が検出され，焼土下には灰色粘土が部分的に確認される。竈の機能を有している可能性がみられる。柱穴および壁溝は確認されていない。

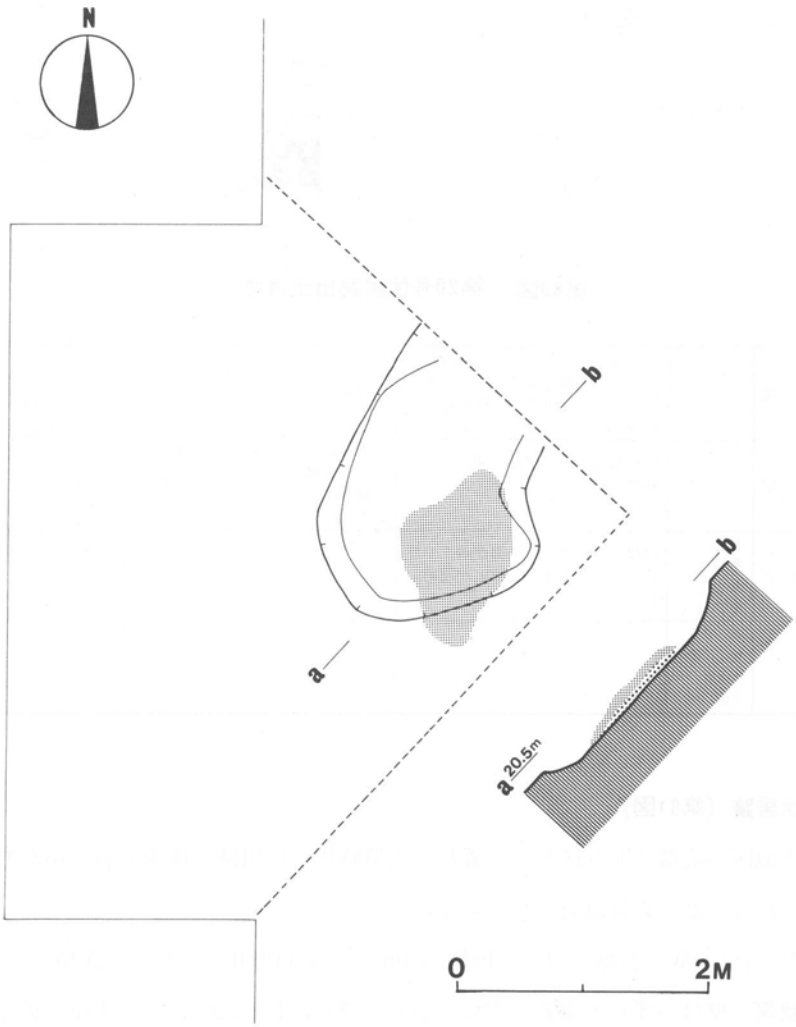
**覆土**　暗褐色土が浅く堆積しているが，ほとんど攪乱を受けている。

**遺物出土状況**　遺物は少量の土師器片と砥石（第80図12）がみられる。

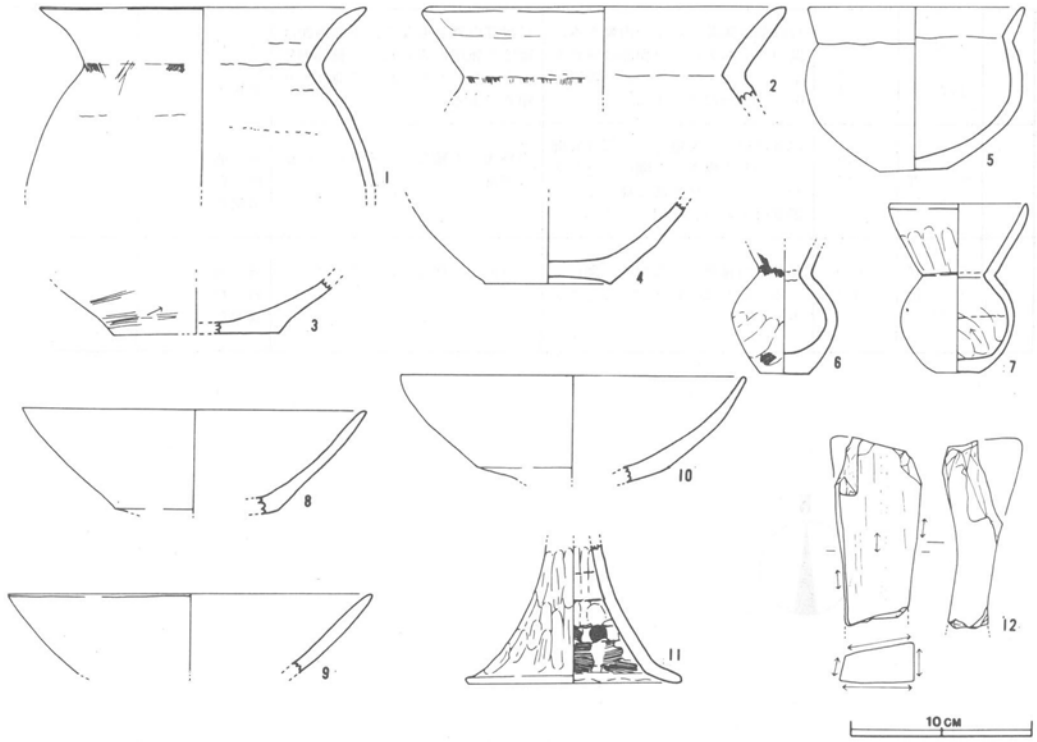
**遺　物（第80・99図）**

| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器　形　の　特　徴 | 整　形　技　法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 80図<br>1 | 甕<br>1/2 | 18.1<br>(9.8) | 口縁部は頸部から「く」の字状に外反して開き，胴部下半を欠いている。器厚は0.5～0.7cmほどである。 | 口縁部内外は横なでがなされ，頸部外面には刷毛目痕がみとめられる。胴部外面はなで，内面は剝落が進んでいる。 | 普　通<br>砂　粒<br>外面　黄褐色<br>内面　茶褐色 | 口縁部煤付着 |
| 2 | 甕<br>口縁部欠<br>1/3 | 20.1<br>(5.3) | 口縁部は頸部から「く」の字状に開き，頸部以下を欠いている。器厚は0.7～1.1cmほどである。 | 口縁部内外面とも横なでがなされ頸部外面には刷毛目痕が認められる。 | 良　好<br>砂　粒<br>外面　黄褐色<br>内面　黒　色 | 内面煤付着 |
| 3 | 甕<br>底　部<br>1/2 | (2.9)<br>9.0 | 底部片で，器厚は0.6cm内外である。 | 胴下部外面は横位のなでがみられ内面には煤が付着している。 | 普　通<br>砂　粒<br>外面　黄褐色<br>内面　黒　色 | 内面煤付着 |
| 4 | 甕<br>底　部 | (4.2)<br>7.0 | 底部片で，あげ底状を呈し，器厚は0.6～0.8cmほどである。 | 胴部内外面とも横なでがなされている。 | 普　通<br>砂　粒<br>灰褐色 | |
| 5 | 塊<br>2/3 | 12.0<br>9.0<br>3.6 | 口縁部は頸部から直線的に開いて立ちあがり，胴部はやや上位に最大径を有している。平底をなし，器厚は0.5～0.8cm。 | 口縁部内外は横なで，胴部下半は篦なでがみられ，内部は剝落がはげしい。 | 良　好<br>砂　粒・石　英<br>黄褐色 | 口縁部ややゆがみあり。 |
| 6 | 坩<br>口縁部欠 | (6.8)<br>2.8 | 口縁部は欠いているが，頸部から直線的にひらいて立ちあがるものであろう。胴部はやや直線的に胴部中段でひろがり，底部は平底をなす。器厚は0.6～1.1cmである。 | 口縁部から頸部には縦位の刷毛目がみられ，内面は横なでがなされている。胴下部には篦削りがなされている。 | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 7 | 坩<br><br>ほぼ完形 | 7.5<br>9.2<br>2.4 | 口縁部は頸部からやや内彎ぎみに開いて立ちあがり，胴部は球状を呈し，平底をなしている。器厚は0.3～0.6cmほどである。 | 口縁部内外ともなで，下部外面は縦位の篦削がみられる。胴部内外面ともなでがみられ，内面はより顕著である。 | 良　好<br>砂　粒<br>黄褐色 | |
| 8 | 高　坏<br>坏　部<br>1/3 | 19.0<br>( 5.7) | 坏底部以下を欠損し，坏部は底部からやや内彎ぎみに開いて立ちあがっている。坏下部は稜をなし，器厚は0.4～1.0cmほどである。 | 内外面とも横なでがみられ，内面は剝落がすすんでいる。 | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 | |
| 9 | 高　坏<br>坏　部<br>1/3 | 20.0<br>( 4.3) | 坏部の口縁部片で直線的に開いている。器厚は0.4～0.7cmほどである。 | 内外面とも横なでがなされている。 | 普　通<br>砂　粒<br>黄褐色 | |




第79図　第 20 号 住 居 跡 実 測 図




**第80図　第20号住居跡出土遺物**

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 | 高　坏<br>坏　部<br>¼ | 19.0<br>( 5.8) | 坏底部以下を欠損し，坏部は底部からやや内彎して開いて立ちあがっている。坏下部には稜をなし，器厚は0.3～1.0cmほどである。 | 内外面とも横なでがみられ，内面は剝落している。 | 普　通<br>砂　粒・石　英<br>外面　赤褐色<br>内面　黄褐色 | 外面煤付着 |
| 11 | 高　坏<br>脚　部 | ( 7.5)<br>11.9 | 脚柱部以下で，裾部へ開いている。器厚は0.5～0.7cmほどである。 | 外面は縦位の篦削りがみられ，内面には輪積痕がみられる。裾部には横なで，内面には刷毛目痕が認められる。 | 良　好<br>砂　粒<br>黄褐色 | |
| 12 | 砥　石<br>凝灰岩 | 長(10.2)<br>幅( 4.8)<br>厚( 2.7)<br>重(177.5)g | 破損品であり，中央部が細くくびれている。各面には擦痕が認められる。 | | | |
| 99図<br>4 | 球状土錘 | 長　2.4<br>幅　2.6<br>重　14g<br>孔径0.3~0.4 | | | | |

**第21号住居跡（第81図）**

**位置**　A地区の北端（L５区）に位置し，古墳時代の住居跡は南西56mに第20号住居跡がみられるが，これより北からは確認されていない。

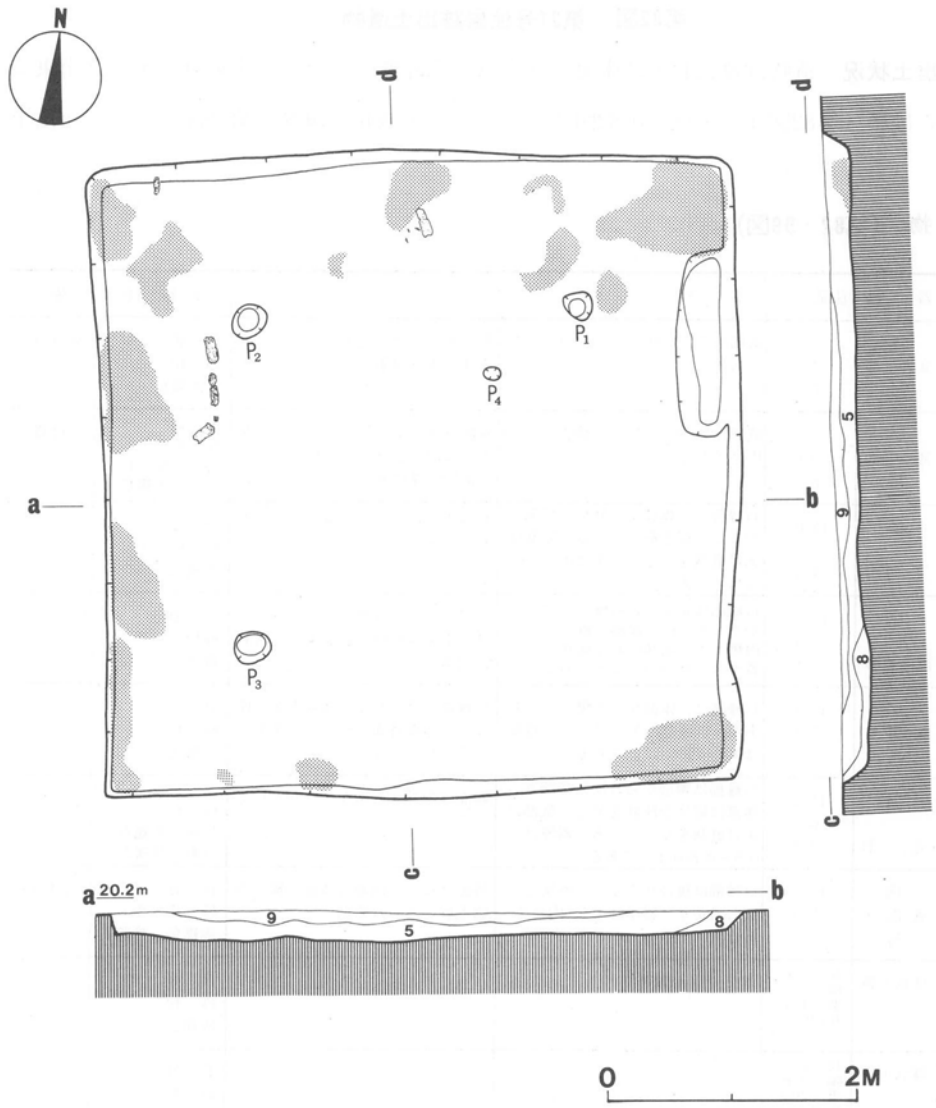
**規模**　N－75°－W　長軸 5.1m　短軸 5.0m　　平面形状　方形　　面積　約24m²

**各部の状況**　壁はいずれも垂直に立ちあがり，壁高は15～22cmほどで東壁が低く，南・北がやや高くなる。床は若干凹凸がみられるがほぼ平坦で，南東コーナー部分が一部攪乱を受けている。また，北東コーナーの東壁に接して溝が帯状に140cmほど南北に走るが性格は不明である。

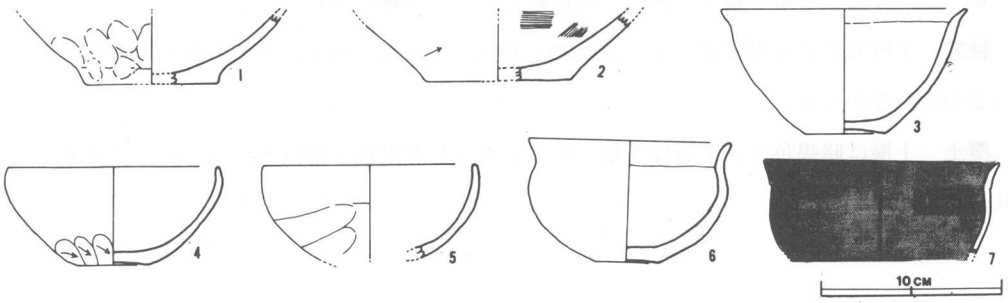
**炉**　壁にそって多量の焼土が検出されているが，炉は確認されていない。

**柱穴**　主柱穴は３ヶ所確認され，直径20～30cm，深さ10～28cmほどであるが南東コーナー部には認められなかった。

**覆土**　上層は暗褐色で，下層は多量のロームを含む黄褐色・褐色土がみられ，自然流入の堆積状況を示している。




**第81図　第21号住居跡実測図**




**第82図　第21号住居跡出土遺物**

**遺物出土状況**　遺物は覆土および床面より少量の土師器が出土し、北東コーナーと南東コーナー部からは坏（第82図４）・埦（第82図３・５～７）・球状土錘等（第99図５～８）が出土している。

**遺　物　(第82・99図)**

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | 器形の特徴 | 整形技法 | 焼成・胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 82図<br>1 | 甕<br>底部<br>½ | (3.7)<br>7.2 | 底部片で、器厚は0.4～0.9cmほどである。 | 胴下部外面は、篦削りがなされ、内面に煤が付着している。 | 普通<br>砂粒<br>淡黄褐色 | 煤付着 |
| 2 | 甕<br>底部<br>½ | (3.6)<br>8.0 | 底部片で平底をなし、器厚は0.8cm内外である。 | 胴部外面には、斜位の篦なで、内面には刷毛目痕がみられる。また、内面には煤付着。 | 普通<br>砂粒<br>外面　褐色<br>内面　黒褐色 | 煤付着 |
| 3 | 坏<br>完形 | 13.6<br>6.8<br>4.2 | 口縁部は、体部から外反して開き、かすかに稜を有している。底部はあげ底状をなし、器厚は0.3～0.6cmほどである。 | 口縁部、内外面とも横なでがなされている。 | 良好<br>砂粒（少）<br>茶褐色 | |
| 4 | 坏<br>ほぼ完形 | 11.8<br>5.4<br>3.8 | 口縁部は底部から内彎して立ちあがり、さらに口縁部で直立ぎみに内彎する。底部はあげ底状をなし、器厚は0.4～0.6cmほどである。 | 口縁部内外面は横なでがなされ、体部下端は篦削りがなされ、内面は剝落している。 | 普通<br>砂粒・石英<br>黄褐色 | |
| 5 | 坏<br>底部欠<br>⅓ | 11.8<br>(5.1) | 口縁部は、体部から内彎して立ちあがり、底部を欠いている。器厚は0.4～0.6cmほどである。 | 口縁部内外面および体部内面は横なで、体部外面下部には、篦削りがなされている。 | 良好<br>砂粒<br>赤褐色 | |
| 6 | 埦<br>完形 | 11.2<br>6.7<br>3.4 | 口縁部は頸部から外反して開き、体部は扁平な球状を呈し、底部はあげ底状をなしている。器厚は0.5～0.8cmほどである。 | 器面は内外とも横なでがなされている。 | 良好<br>砂粒<br>外面　黄褐色<br>内面　暗褐色 | |
| 7 | 埦<br>底部欠<br>¼ | 13.0<br>(5.0) | 口縁部は複合状をなして外反して立ちあがり、器厚は0.4cm内外である。 | 外面はなで、内面は体部に横位の刷毛痕がみられる。 | 良好<br>砂粒（少）<br>赤褐色（丹彩） | 内外丹彩 |
| 99図<br>5 | 球状土錘 | 長　2.6<br>幅　2.5<br>重　17g<br>孔径0.4<br>～0.5 | 指なで痕が顕著 | | 良好<br>砂粒<br>灰褐色 | |
| 6 | 球状土錘 | 長　2.8<br>幅　2.8<br>重　20g<br>孔径0.4<br>～0.5 | | | 良好<br>砂粒<br>灰褐色 | |
| 7 | 球状土錘 | 長　2.4<br>幅　2.5<br>重　13.5g<br>孔径0.6<br>～0.8 | 指なで痕が顕著。 | | 良好<br>砂粒<br>灰褐色 | |

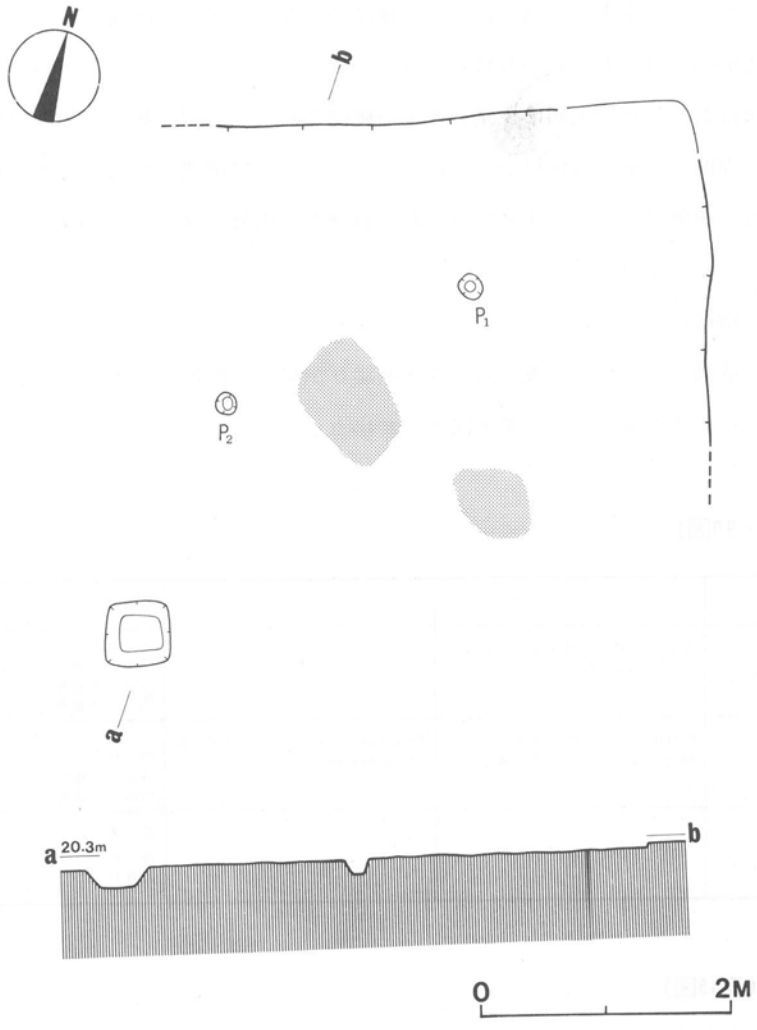
| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 8 | 球状土錘 | 長 2.6<br>幅 2.7<br>重 16g<br>孔径0.5<br>～0.6 | 篦痕あり | | 良 好<br>砂 粒<br>灰褐色 | |

**第22号住居跡（第83図）**

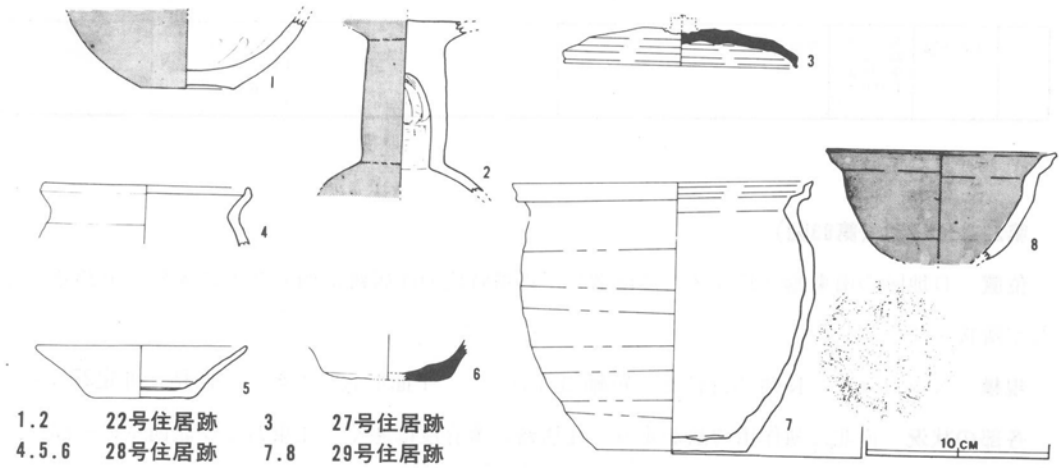
**位置**　D地区の南東端（E３区）に位置し、古墳時代の住居跡は西北２ｍに大型の第23号住居跡が隣接している。

**規模**　N－21°－W　長軸(5.14)ｍ　短軸(5.13)ｍ　　平面形状　方形　　面積　推定25.2㎡

**各部の状況**　南北に耕作用の畝が走り、住居跡の遺存度は悪く、北東および北西壁の一部がわ




**第83図　第 22 号 住 居 跡 実 測 図**




1.2　22号住居跡　3　27号住居跡
4.5.6　28号住居跡　7.8　29号住居跡

**第84図　第22・27・28・29号住居跡出土遺物**

ずかに確認できるのみで、南東・南西はほとんど確認できない。床面の状況も悪く、わずかに南西コーナーに一辺50cm内外の方形状の貯蔵穴がみられる。

**炉**　床面の中央部およびその東側に少量の焼土が確認されているが、炉として使用されていたとは考えられず、周囲に少量の炭化材がみられたことから火災に遭遇したものと考えられる。

**柱穴**　中央付近の西側に２ヶ所の小穴がみられ、直径20cm内外で深さ13～35cmを測る。その他にピットは検出されていない。

**覆土**　わずかに暗褐色土がみられる。

**遺物出土状況**　遺物はわずかで、覆土および床面より少量の土師器が出土し、貯蔵穴付近より高坏（第84図２）と球状土錘の小片（第99図９）が出土した。

**遺　物（第84・99図）**

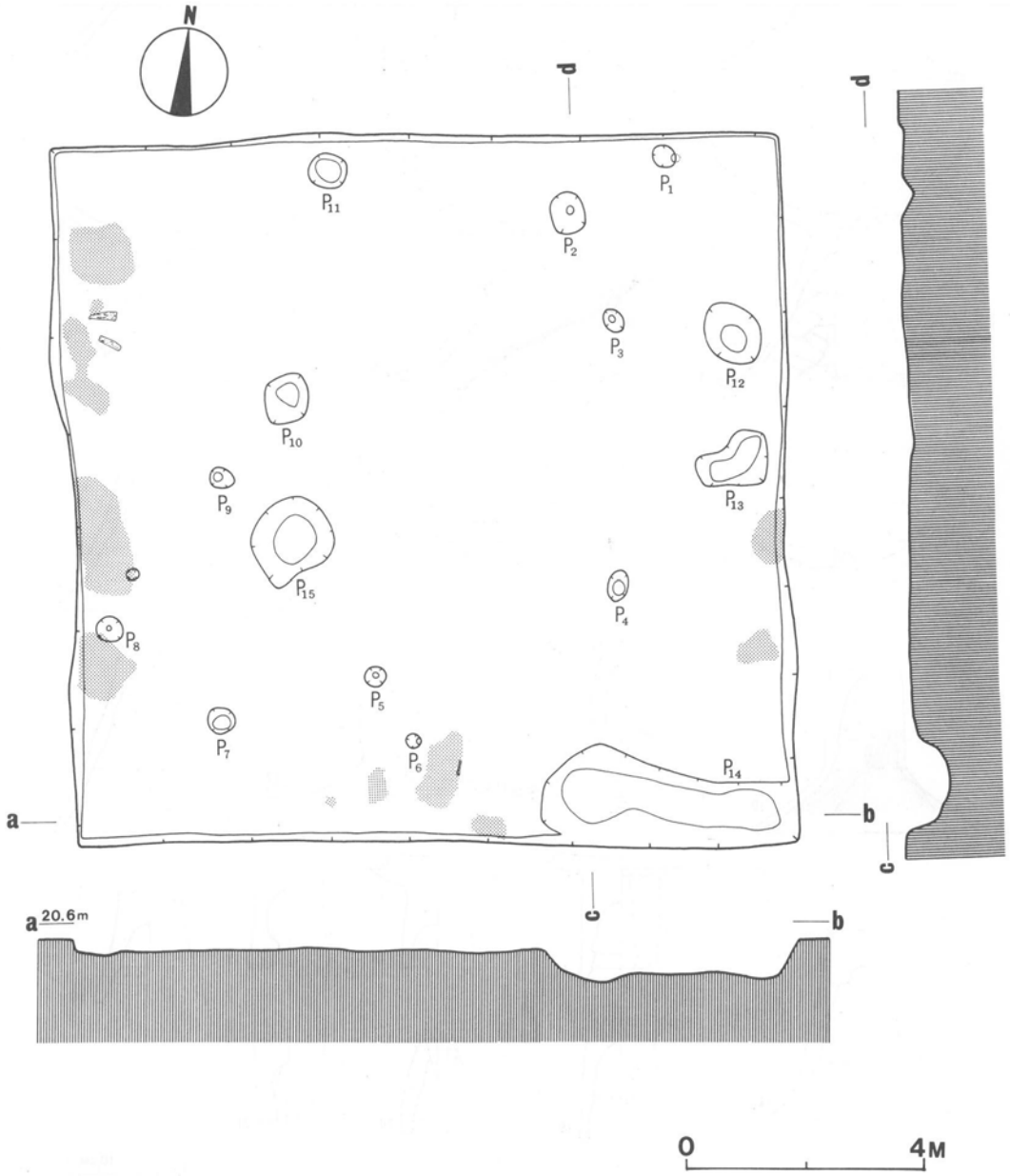
| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器形の特徴 | 整形技法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 84図<br>1 | 壺<br>底　部 | (4.0)<br>5.2 | 底部片であげ底状をなし、器厚は0.7～1.0cmほどである。 | | 普　通<br>砂粒・石英<br>外面　赤黄褐色<br>内面　赤褐色 | 丹　彩 |
| 2 | 高　坏<br>脚柱部 | (9.3) | 脚柱部のみでやや円筒状を呈し、裾部で大きく開くものと考えられる。 | 外面は縦位の箆なでで、内面は箆による整形痕が認められる。 | 普　通<br>砂　粒<br>外面　赤褐色<br>内面　淡黄褐色 | 丹　彩 |
| 99図<br>9 | 球状土錘 | 長　2.2<br>幅　2.2<br>重　10.5g<br>孔径0.3<br>～0.4 | | | 粗　雑<br>砂　粒<br>茶褐色 | |

**第23号住居跡（第85図）**

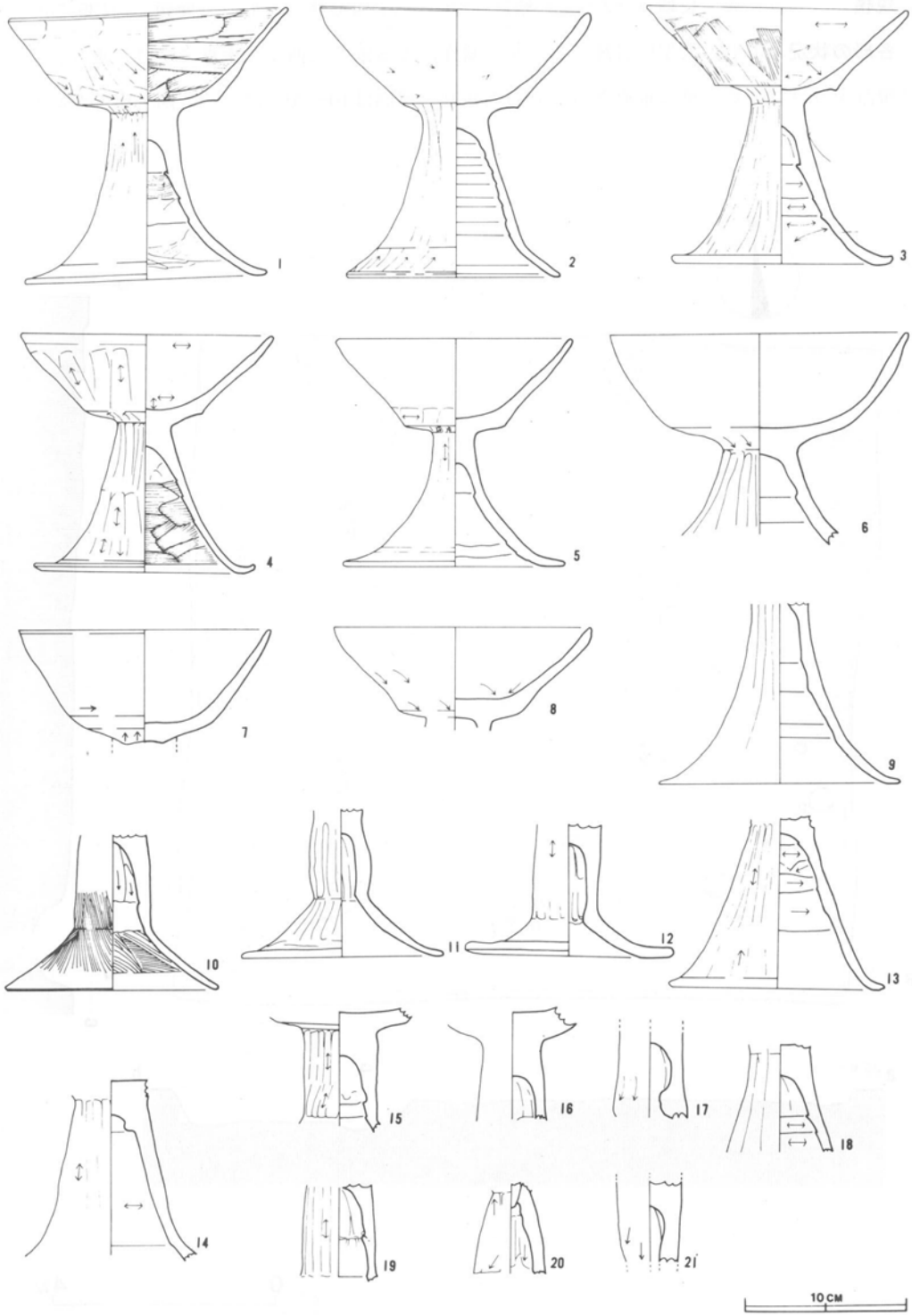
**位置**　Ｄ地区の中央部（Ｃ１区）に位置し、近接する古墳時代の住居は南東２ｍに第22号住居跡がみられる。

**規模**　N－9°－W　長軸11.82m　短軸11.48m　　平面形状　方形　　面積　約135.2m²

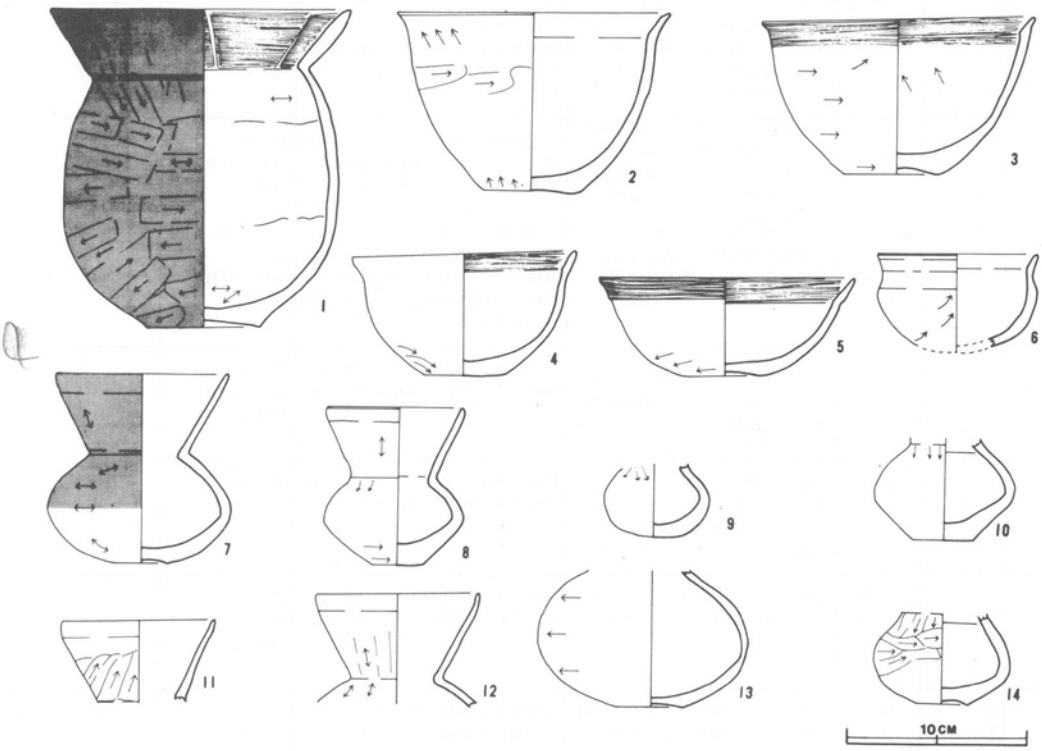
**各部の状況**　方形の大型住居跡であるが、耕作による畝が北西より南東にかけて走り、全体的に攪乱をうけている。壁は垂直ぎみに立ちあがり、壁高は10～20cmほどで、西・南部が高く北部




**第85図　第23号住居跡実測図**




**第86図　第23号住居跡出土遺物（1）**




**第87図　第23号住居跡出土遺物（２）**

が低い。床面はかなり攪乱されているが、南東コーナー部に２ヶ所の貯蔵穴が接してみられ、多数の高坏・坩・坏・壺等が出土している。また、南壁部には長径4.3m、短径1.2m、深さ0.6～0.7mほどの不定形状の土壙が複合している。

**炉**　西壁および南東部に焼土が検出されているが炉は確認されていない。

**柱穴**　大小あわせて15ヶ所確認され、柱穴は$P_2$～$P_{10}$と考えられる。いずれも直径は20～50cm内外で深さも30～60cmほどである。$P_{12}$・$P_{13}$・$P_{15}$はその規模も大きく、土層その他から後世の所産と考えられる。

**覆土**　暗褐色・黒色土がみられるがかなり耕作による攪乱を受けている。

**遺物出土状況**　床面より出土した遺物は少量で、北壁よりの$P_{11}$付近に、完形の甕（第87図１）・鉢等（第87図２・３）が３点出土し、南東コーナーの貯蔵穴から多くの高坏（第86図）が出土している。

## 遺　物（第86・87・98・99図）

| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器　形　の　特　徴 | 整　形　技　法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 86図<br>1 | 高　坏<br><br>完　形 | 18.9<br>16.2<br>14.9 | 坏部は直線的に開き、下部に稜を有し、脚柱部から裾部に大きく開いている。内面には輪積痕がみられ、器厚は0.5～1.0cmほどである。 | 坏部外面は口縁部横なでで、下部に篦削りがみられ、内面には刷毛目痕がみられる。脚柱部外面は縦位の篦削りがみられ裾部付近はその後篦なでがみられる。内面は刷毛目痕篦なでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |

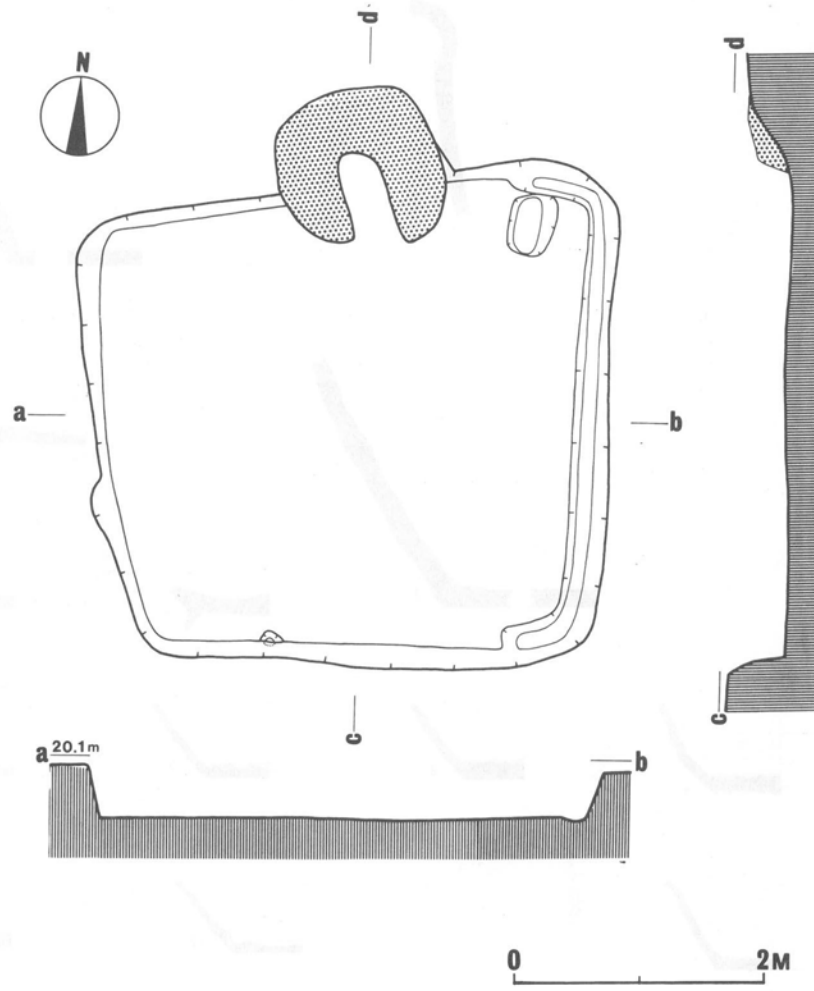
| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 高　坏<br>完　形 | 16.5<br>16.3<br>13 | 坏部はやや内彎して開き、下部に稜をなす。脚柱部は裾部へ開がり内面には輪積痕がみられ、器厚は0.5～0.8cmほどである。 | 坏部内外面とも、篦削りがみられ、脚柱部外面は、縦位の篦削り、裾部は横なで、内面にはなでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 3 | 高　坏<br>完　形 | 16.2<br>15.6<br>12.8 | 坏部は直線的に開き、下部に稜をなし、脚柱部は裾部へ開がり、さらに大きく外反する。脚柱部内面には、輪積痕がみられ、器厚は、0.5～0.9cmほどである。 | 坏部外面は縦位の刷毛目、内面横なでがみられ、脚柱部外面には縦位の篦削りがみられ、内面は刷毛目がみられる。 | 良　好<br>砂粒・石英<br>黄褐色 | |
| 4 | 高　坏<br>完　形 | 13.3<br>14.45<br>13.5 | 坏部はやや内彎的に大きく開き、下部は稜を有し、脚柱部は裾部で大きく外反している。器厚は0.3～0.9cm。 | 坏部外面は縦位の刷毛目、内面は横なで。脚柱部外面は縦位の篦削り、裾部は刷毛目、内面は横位の刷毛目がみられる。 | 良　好<br>砂粒（良好）<br>褐　色 | |
| 5 | 高　坏<br>½ | 14.2<br>13.9<br>13.65 | 坏部は直線的に開いて立ちあがり、下部に稜を有し、脚柱部から裾部に大きく開いている。脚柱部は内面には、輪積痕がみられる。器厚は0.5～0.9cmほどである。 | 坏部内外ともなでがみられ、稜部は篦削りがなされ、脚柱部外面は縦位の篦なでがなされている。 | 普　通<br>砂粒（良好）<br>黒褐色 | |
| 6 | 高　坏<br>裾部欠 | 18.4<br>(12.8) | 坏部は内彎して椀状に立ちあがり、脚柱部は裾部にむかって大きく開いている。内面には輪積痕がみられ器厚は、0.6～0.9cmほどである。 | 坏部内外面ともなでがみられ、脚柱部外面は縦位の篦削りがみられ内面はなでがなされている。 | 普　通<br>砂　粒<br>暗黄褐色 | |
| 7 | 高　坏<br>坏　部 | 15.5<br>(7.1) | 脚柱部を欠き、坏部はやや内彎ぎみに開き、器厚は0.5～0.8cmほどである。 | 口縁部外面は横なで、下は篦削りがみられ、内面はなでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>浅黄褐色 | |
| 8 | 高　坏<br>脚柱部欠 | 15.9<br>(6.2) | 坏部はやや内彎ぎみに開き、下部に稜を有し、脚柱部以下を欠いている。器厚は0.6～1.1cmほどである。 | 坏部外面口縁部は横なでがみられ、下は縦位の篦削りがなされている。内面は篦みがきがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 9 | 高　坏<br>脚柱部 | (11.0)<br>15 | 坏部を欠き、裾部にむかって大きく開き、内面には輪積痕がみられる。 | 脚柱部外面は縦位の篦みがきがなされ、内面はなでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 10 | 高　坏<br>脚柱部<br>½ | (9.5)<br>13 | 脚柱部は筒状をなし、裾部は直線的に大きく開いている。器厚は0.3～1.0cmである。 | 脚柱部及び裾部には刷毛目がみられ、下端は横なで、裾部内面にも刷毛目がみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 11 | 高　坏<br>脚柱部<br>½ | (8.8)<br>12.3 | 脚柱部は中央部で太くなり、裾部は外反して大きく開き、器厚は0.3～0.8cmである。 | 外面は縦位の篦なで、内面はなでがなされている。 | 普　通<br>細砂粒<br>浅黄褐色 | |
| 12 | 高　坏<br>脚柱部 | (8.0)<br>12.9 | 脚柱部は、筒状て裾部が大きく外反している。器厚は0.5～0.8cmである。 | 外面縦位の篦なでで内面は指なで裾部は横なでがなされている。 | 良　好<br>砂　粒（多）<br>褐　色 | |
| 13 | 高　坏<br>脚柱部<br>¼ | (10.5)<br>13.4 | 坏部を欠き、脚柱部から裾部へやや外反して開いている。内面には輪積痕がみられ、器厚は0.4～0.7cmほどである。 | 外面は縦位の篦研磨がなされ、内面はなでがなされている。 | 普　通<br>細砂粒<br>黄褐色 | |
| 14 | 高　坏<br>脚柱部 | (11.0) | 坏部及び裾部を欠き、脚柱部は裾部にむかって開き、器厚は0.5～0.9cmほどである。 | 外面は縦位の篦削りがみられ、内面はなでがなされている。 | 普　通<br>砂　粒（多）<br>褐　色 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 15 | 高　坏<br>脚柱部 | (7.7) | 坏部から脚柱部は筒状にのび、裾部を欠いている。内面には輪積痕がみられ、器厚は0.5～1.0cmほどである。 | 外面は縦位の篦削り。 | 普　通<br>砂　粒（多）<br>褐　色 | |
| 16 | 高　坏<br>脚柱部 | (7.0) | 坏部及び裾部を欠き、脚柱部は円筒状を呈している。坏部の器厚はやや厚く、脚柱部はそれほどでない。 | 内外面にもなでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒（多）<br>明褐色 | |
| 17 | 高　坏<br>脚柱部 | (5.2) | 脚柱部片で円筒状をなし、器厚はやや厚い。 | 外面は縦位の篦削りがみられ、内面は指調整がみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>明黄褐色 | |
| 18 | 高　坏<br>脚柱部 | (6.5) | 坏部及び裾部を欠き、内面に輪積痕を有し、器厚は0.5～0.8cmほどである。 | 外面は縦位の篦削り、内面なでがみられる。 | 良　好<br>細砂粒（多）<br>褐　色 | |
| 19 | 高　坏<br>脚柱部 | (6.0) | 脚柱部片で円筒状をなし、内面に輪積痕がみられる。 | 外面は縦位の篦削りがみられ、内面は指なでがみられる。 | 良　好<br>砂　粒<br>黄褐色 | |
| 20 | 高　坏<br>脚柱部 | (6.8) | 脚部片で裾部にむかってやや開がる。坏部は脚柱部へはめこんでつくられている。器厚は0.8cm内外。 | 外面は縦位の篦なでがみられ、内面は指なでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>明黄褐色 | |
| 21 | 高　坏<br>脚柱部 | (5.3) | 脚柱部片で円筒状をなし、器厚はやや厚い。 | 外面は縦位篦削りがみられ、内面はしぼり痕がみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 87図<br>1 | 甕<br>完　形 | 16.3<br>17.3<br>6.2 | 口縁部は頸部から大きく開き、胴部はやや筒状をなしている。底部はあげ底。器厚は0.6～0.8cm。 | 口縁部外横なで、胴部外面は篦削り、内面はなでがみられる。 | 良　好<br>砂粒・石英<br>赤褐色 | 外丹彩<br>二次焼成 |
| 2 | 埦<br>ほぼ完形 | 14.8<br>9.7<br>5.4 | 底部からやや開きぎみに体部へ立ちあがり、頸部でややくびれて口縁部は外反する。器厚は0.5～0.8cm。 | 口縁部内外とも横なで、体部外面は篦削り。 | 普　通<br>砂粒・石英・長石<br>暗黄褐色 | |
| 3 | 埦<br>完　形 | 15<br>8.4<br>4.7 | あげ底の底部から口縁部へやや内彎して立ちあがり、口縁部やや外反する。器厚0.4～0.8cm。 | 口縁部内外とも横なで、体部は内外とも篦削りがみられる。 | 普　通<br>砂粒・石英・雲母<br>赤褐色 | |
| 4 | 坏<br>完　形 | 12.2<br>6.6<br>4.2 | 底部から開いて立ちあがり、口縁部は外反している。器厚は0.4～0.6cmほどである。 | 口縁部内外とも横なで、体部は篦削りがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>暗黄褐色 | |
| 5 | 坏<br>ほぼ完形 | 14<br>5.3<br>3.9 | あげ底の底部から開いて口縁部に立ちあがる。口辺部にはかすかな段を有し、器厚は0.5cm内外である。 | 口縁部内外とも、横なでがみられ、体部外面は篦削り、内面は篦みがきがなされている。 | 普　通<br>砂粒・長石<br>褐　色 | |
| 6 | 埦<br>底部欠<br>⅓ | 8.9<br>(5.0) | 口縁部は頸部から外反して開き、内面に稜を有する。底部は丸底状をなすものであろう。器厚は0.3～0.6cm | 口縁部内外とも横なでがみられ、体部外面には篦削りがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 7 | 坩<br>ほぼ完形<br>⅔ | 9.3<br>10.25<br>2.9 | 口縁部は頸部から直線的に開いて立ちあがり、胴部はやや扁平な球状をなしている。底部はあげ底で器厚は0.3～0.8cmほどである。 | 口縁部は横なでがみられ、下部は縦位の篦削りがみられる。胴部は横・斜位のなでがみられ、底部は篦削りがみられる。肩部には丹塗かれている。 | 良　好<br>砂粒（細砂）<br>赤褐色 | 丹　彩 |
| 8 | 坩<br>完　形<br>⅔ | 7.4<br>8.6<br>2.8 | 口縁部は頸部から直線的に立ちあがり、胴部は扁平な球状をなしている。 | 口縁部横なで、下部は縦位の篦削りがなされ、胴部は篦削りがなされている。 | 普　通<br>細砂粒<br>褐　色 | |
| 9 | 坩<br>口縁部欠 | (3.9)<br>2.9 | 胴部は球状をなし、底部はやや丸底状を呈し、器厚は0.4～0.7cm。 | 胴部外面は篦削りがみられ、内面はなでがみられる。 | 普　通<br>砂粒・長石<br>褐　色 | |
| 10 | 坩<br>口縁部欠 | (5.5)<br>3.3 | 胴部は扁平な球状をなし、底部は平底である。器厚は0.4～0.9cmほどである。 | 胴部外面は篦削りがみられ、内面はなでがみられる。 | 普　通<br>砂粒・長石・雲母<br>暗黄褐色 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 11 | 坩<br>口縁部 | 8.2<br>(4.4) | 口縁部のみで頸部から直線的に開いて立ちあがり、器厚は0.3～0.5cm。 | 口縁部内外とも横なで、外部下部は下から上への篦削り。 | 良　好<br>砂　粒(多)<br>褐　色 | |
| 12 | 坩<br>口縁部 | 8.8<br>(6.0) | 口縁部は、頸部から開いて立ちあがり、胴部はやや扁平な球状をなしている。底部はあげ底で、器厚は0.3～0.8cmほどである。 | 口縁部内外とも横なで、下部外面は縦位の篦なで、内面は丁寧ななで。 | 良　好<br>砂　粒(多)<br>明赤褐色 | |
| 13 | 坩<br>口縁部欠 | (7.5)<br>3.7 | 胴部はやや扁平な球状をなし、底部はあげ底を呈し、器厚は0.3～0.5cmである。 | 胴部外面は篦削りがみられる。 | 普　通<br>砂粒・石英・雲母<br>褐　色 | |
| 14 | 坩<br>口縁部欠 | (5.0)<br>2.8 | 胴部は扁平な球状をなし、底部はあげ底である。器厚は0.4～0.8cmである。 | 胴部外面は篦削りがみられ、内面はなでがなされている。 | 普　通<br>砂粒・石英・雲母<br>褐　色 | |
| 99図<br>10 | 球状土錘 | 長　2.7<br>幅　2.5<br>重 12.5g<br>孔　0.3 | | 整形は不良であり、棒状の押圧痕がみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>明赤褐色 | |
| 11 | 球状土錘 | 長　1.9<br>幅　2.45<br>重 10.5g<br>孔　0.5 | | 全体的に指なでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>赤褐色 | |
| 12 | 球状土錘 | 長　2.1<br>幅　2.9<br>重 10.4g<br>孔　0.6 | | 全体的に指なでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 13 | 球状土錘 | 長　2.5<br>幅　2.5<br>重 13.5g<br>孔　0.6 | | 全体的に指なでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 14 | 球状土錘 | 長　3.3<br>幅　3.1<br>重 28g<br>孔　0.5 | | 全体的に指なでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 15 | 球状土錘 | 長　2.9<br>幅　3.15<br>重 22.5g<br>孔　0.5 | | 全体的に指なでがみられる。 | 普　通<br>砂　通<br>褐　色 | |
| 16 | 球状土錘 | 長　2.7<br>幅　3.2<br>重 22g<br>孔　0.6 | | 全体的に指なでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 17 | 球状土錘 | 長　3.15<br>幅　3.5<br>重(21.2)g<br>孔　0.4 | | 全体的に指なでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 18 | 球状土錘 | 長　3.1<br>幅　3.1<br>重(13.4)g<br>孔　1.0 | | 全体的に指なでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 19 | 球状土錘 | 長　3.1<br>幅　3.2<br>重 26g<br>孔　0.6 | | 全体的に指なでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>明黄褐色 | |
| 98図<br>⑥ | 鉄　鏃 | 現長3.5<br>幅　2.1 | 完形品ではないが、3本以上が重なって錆びた状態を示し、茎部を有するものと、三角鏃がみられる。錆はそれほど進んだものではない。 | | | |
| 8 | 石製模造品 | 長　3.6<br>幅　1.5<br>厚　0.6<br>重　4g | 剣形のもので頂部の一部を欠き、3㎜ほどの孔を有している。全体的に擦痕が顕著である。 | | 滑石製 | |

## 3．歴史時代

### 第24号住居跡（第88図）




**第88図　第24号住居跡実測図**

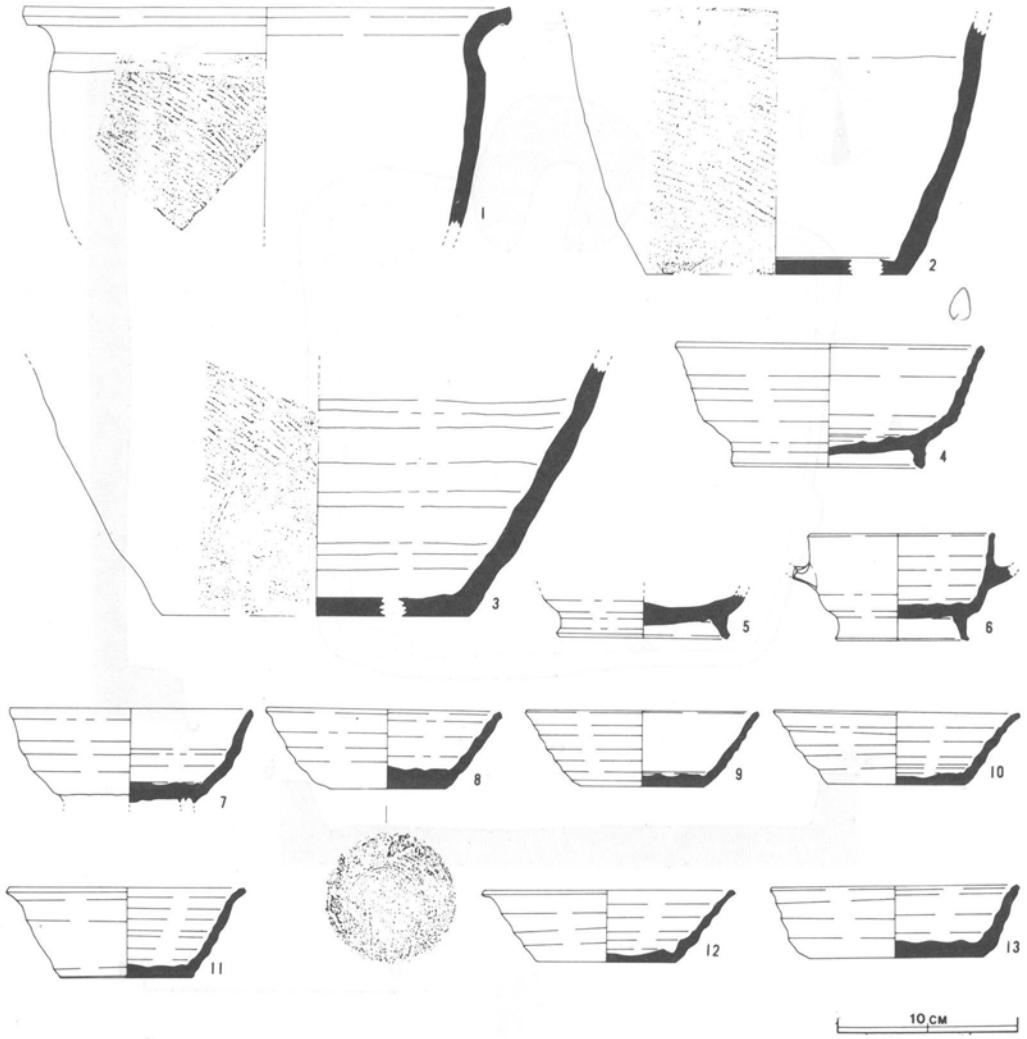
**位置**　B地区の南端（H46区）に位置し、歴史時代の住居跡は南方2mに第25号住居跡が隣接し、東方23mに第26号住居跡、北東33mに第29号住居跡がみられる。

**規模**　N－7°－W　長軸4.3m　短軸4.0m　　平面形状　方形　　面積　約15.5m²

**各部の状況**　壁は垂直に立ちあがり、壁高は40～45cm内外で東側の南東コーナー部が外側に張り出し、方形というよりはやや台形状を呈している。床面はほぼ平坦でよく踏み固められている。北東コーナーに50×35cmほどの長方形状の掘り込みがみられる。

**竈**　北壁のほぼ中央部に位置し、軸線はN－25°－Wを向き、住居に対しかなり斜めに設置されている。煙道部および燃焼部は、北壁を130cmの幅で80cm程掘り込んで構築され、砂・粘土によって袖部をつくりだすが遺存度は悪い。

**柱穴**　床面では確認されていない。




**第89図　第24号住居跡出土遺物（1）**

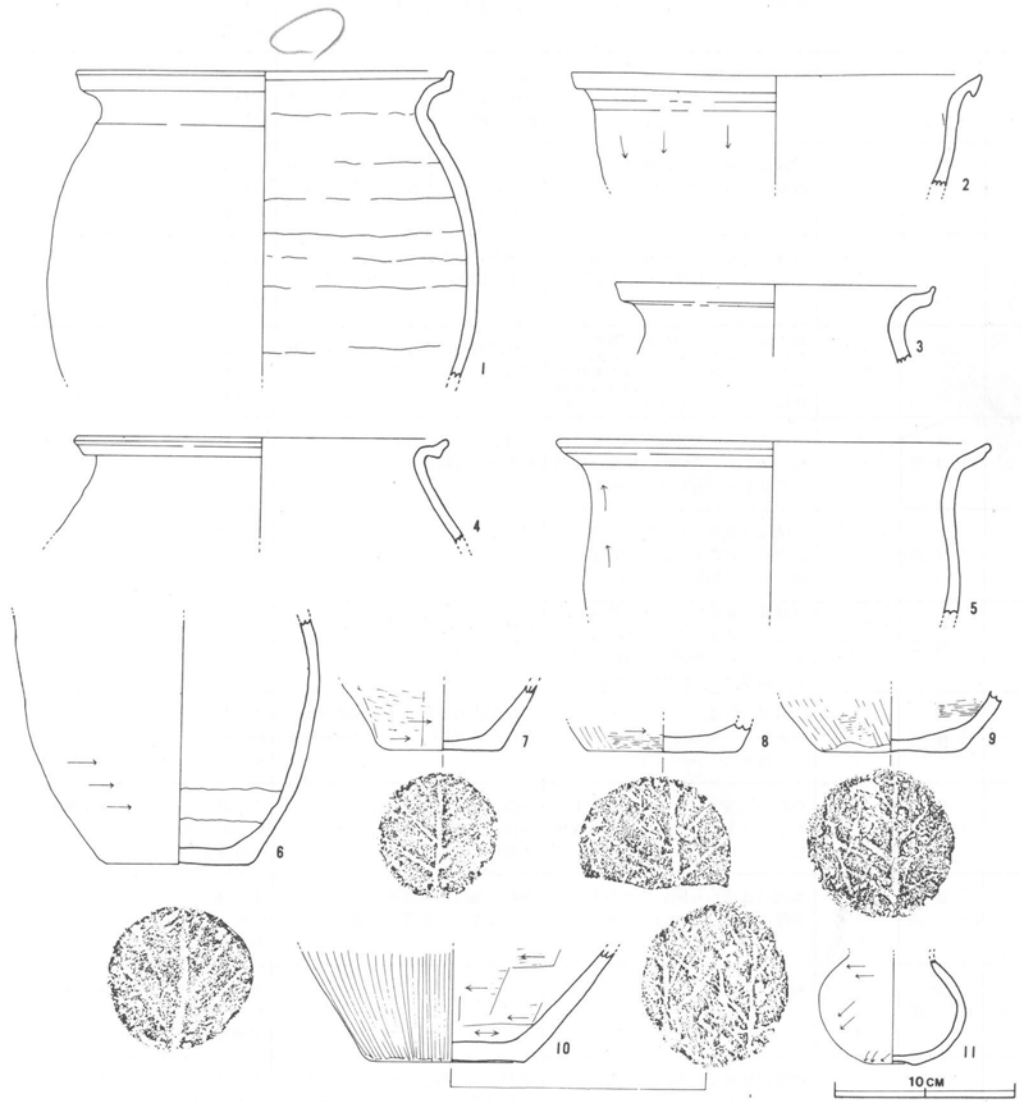
**覆土**　上層は黒褐色で、下層はロームブロックを含む暗褐色土の堆積がみられる。

**遺物出土状況**　遺物は住居跡中央付近から竈にかけて覆土中からの出土が多い。竈周辺から多数の管状土錘（第100図1～17）の出土がみられ、また、須恵器の坏（第89図）が比較的多い。他に竈付近より鉄製品（第98図５）が出土している。

**遺　物（第89・90・100図）**

| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器形の特徴 | 整形技法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 89図<br>1 | 甕<br>底部欠 | 26.8<br>(12.0) | 口縁部は頸部から外反し、口辺部は稜を有している。胴部はそれほどふくらまずに底部へ移る。器厚は1.0cm内外である。 | 口縁部内外は横なでがみられ、胴部外面には叩目がみられる。 | 普　通<br>砂粒・雲母<br>灰白色 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 甕（甑）<br>胴上部欠 | (13.0)<br>14.3 | 底部からやや内彎して立ちあがる胴部を有し、上部以上は欠いている。器厚は1.0～1.3cmほどである。 | 胴部外面には叩目がみられ、底部近くには、斜位の篦削りがみられる。内面は篦と指頭による整形痕がみられる。 | 普　通<br>砂粒・長石<br>灰白色 | |
| 3 | 甕<br>底　部 | (13.8)<br>16.8 | 大形の土器で、胴部以下の破片。底面の一部を欠いている。器厚1.0～1.2cmほどである。 | 胴部外面には叩目がみられ、下端は斜位の篦削りがなされ、内面にはロクロ回転に沿った指頭による整形痕がみとめられる。 | 普　通<br>砂粒・長石<br>灰白色 | |
| 4 | 台付坏<br>½ | 15.8<br>6.8<br>10.6 | 口縁部は直線的に開いてたちあがり、底部には貼付高台がつけられ、器厚は0.4～0.6cmほどである。 | 内外面とも水引き痕が認められる。 | 普　通<br>砂　粒<br>明灰色 | |
| 5 | 台付坏<br>高台部 | (2.5)<br>9.4 | 高台部片で貼付高台である。器厚は0.6cm内外である。 | 内外面に水引き痕が認められる。 | 良　好<br>砂粒・長石<br>灰　色 | |




**第90図　第24号住居跡出土遺物（２）**

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 台付坏<br>(把手付)<br>½ | 10.1<br>5.8<br>7.6 | 口縁部は底部から直立ぎみに立ちあがり、底部には高台を貼付けている。又、体部中段には、把手を貼付し、本来は一対である。器厚はやや薄い。 | 体部外面は水引きがていねいになされている。 | 普　通<br>砂　粒<br>暗灰色 | |
| 7 | 台付坏<br>台部欠 | 13.4<br>(5.2) | 高台部を欠き、口縁部は底部からやや内彎して立ちあがり、器厚は0.4～0.6cmほどである。 | 内外面とも水引き痕が顕著である。 | 普　通<br>砂　粒<br>灰褐色 | |
| 8 | 坏<br>⅔ | 12.9<br>4.3<br>6.3 | 口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり、器厚は0.4cm内外で底部が厚い。 | 内外面とも水引き痕がみられ、外面下端部は篦削りがなされている。底部は糸切痕がみられる。 | 普　通<br>砂粒・長石・石英<br>明灰色 | |
| 9 | 坏<br>⅔ | 12.8<br>4.1<br>7.0 | 口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり、器厚は0.4～0.6cmほどである。 | 内外面とも水引き痕がみられ、外面下端に篦なで痕が認められる。 | 普　通<br>砂　粒<br>黄灰色 | |
| 10 | 坏<br>⅔ | 13.5<br>4.0<br>7.6 | 口縁部は底部から外反ぎみに開き、器厚は0.3～0.6cmほどである。 | 内外面とも水引き痕が顕著で、底面は篦整形がなされている。 | 普　通<br>砂粒・長石<br>黄灰色 | |
| 11 | 坏<br>⅔ | 12.9<br>4.3<br>6.3 | 口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり、器厚は0.4cm。 | 内外面とも水引き痕が認められ、外面下端部は篦削りがなされ、底部も篦削りがなされている。 | 普　通<br>砂粒・長石<br>明灰色 | |
| 12 | 坏<br>完　形 | 14.2<br>4.1<br>7.4 | 口縁部は底部から直線的に開き、器厚は0.4cm内外である。 | 内外面にはロクロによる水引き痕が認められ、下端には篦なで痕が認められる。 | 普　通<br>砂粒・雲母<br>黄灰色 | |
| 13 | 坏<br>⅔ | 13.4<br>3.9<br>9.0 | 口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり、器厚はやや厚めである。 | 内外面とも水引き痕が認められ、外面下端部には篦削りがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>黄灰色 | |
| 90図<br>1 | 甕<br>⅓ | 20.3<br>(16.8) | 胴下部を欠き、口縁部は頸部から外反して開き、さらに直立的に立ちあがる。胴部はそれほど丸味を有したものではない。内面には輪積痕がみられ、器厚は0.6cm内外。 | 口縁部内外は横なでがみられ、胴部内外にはなでがなされている。 | 良　好<br>砂　粒（多）<br>明黄褐色 | |
| 2 | 甕<br>口縁部<br>⅙ | 22.4<br>(6.2) | 口縁部は外反して立ちあがり、折返し状を呈している。胴部は底部へすぼまる。器厚は0.6cm内外。 | 口縁部内外とも横なでがみられ、胴部外面は縦位の篦削りがなされている。 | 良　好<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 3 | 甕<br>口縁部<br>⅙ | 17.5<br>(4.1) | 口縁部は頸部から外反し、さらに直立的に立ちあがる。内外ともに稜を有し、器厚は0.7～0.9cm。 | 内外面とも横なで。 | 普　通<br>砂　粒（多）<br>褐　色 | |
| 4 | 甕<br>口縁部 | 20.2<br>(5.7) | 口縁部は頸部から大きく外反し稜をなし、内面にもゆるやかな稜を有している。胴部は直線的に開がる。器厚は0.5cm内外である。 | 口縁部内外は横なでがなされ、胴部内外はなでがみられる。 | 良　好<br>砂　粒（多）<br>褐　色 | |
| 5 | 甕<br>口縁部<br>⅓ | 23.6<br>(9.3) | 口縁部は頸部から大きく開いて立ちあがり、胴部はやや胴状を呈する。器厚は0.5～0.7cm。 | 口縁部内外は横なで、胴部外面は篦削り、内面にはなでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 6 | 甕<br>口縁部欠<br>½ | 8.0 | 胴部以下でそれほど丸味を有するものではなく、内面下部には輪積痕がみられる。 | 外面はなでおよび篦削りがみられ、内面にもなでがなされ、底部には木葉痕がみられる。 | 不　良<br>砂　粒（多）<br>明赤褐色 | 底部木葉痕 |
| 7 | 甕<br>底　部 | (3.7)<br>6.2 | 胴部は底部から開いて立ちあがり、器厚は0.5～0.8cmほどである。 | 胴部下端は横位篦削りがみられ、内部はなで、底部に木葉痕がみられる。 | 普　通<br>砂粒・石英(多)<br>褐　色 | |
| 8 | 甕<br>底　部 | (1.5)<br>8.5 | 底部片で底部に木葉痕がみられる。 | | 普　通<br>砂粒・石英(多)<br>暗褐色 | 底部木葉痕 |
| 9 | 甕<br>底　部 | (3.4)<br>7.6 | 胴部は底部から開いてたちあがり、器厚は0.6～0.9cmほどである。 | 胴部下端は縦位篦削りがみられ、内部は篦なでがなされ、底部には木葉痕がみられる。 | 普　通<br>砂粒・石英・雲母<br>褐　色 | 底部木葉痕 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 | 甕<br>底　部 | (6.2)<br>8.5 | 底部片で胴部へやや開いて立ちあがり、器厚は0.6～1.0cmほどである。 | 外面は縦位の箆削り、内面は横位の箆なでがなされ、底部には木葉痕がみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | 底部木葉痕 |
| 11 | 坩<br>口縁部欠<br>½ | (6.0)<br>2.1 | 口縁部を欠き、胴部は球状を呈し、底部は箆削りがみられ、あげ底である。器厚は0.5cm内外。 | 胴部外面は横位あるいは斜位の箆削り、内面はなでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 100図<br>1 | 管状土錘 | 長　7.2<br>幅　3.1<br>重 55.5g<br>孔径 1.1<br>～0.6 | 孔はややつぶれている。 | 箆なでがみられ、横にころがして整形。 | 良　好<br>砂　粒<br>淡黄褐色 | |
| 2 | 〃 | 長　6.9<br>幅　2.9<br>重45.5g<br>孔径 1.0 | 孔はややつぶれている。 | なでがみられ、横にころがして整形。 | 普　通<br>砂　粒<br>淡黄褐色 | |
| 3 | 〃 | 長　9.2<br>幅　3.0<br>重　68g<br>孔径 1.0 | | 横にころがして指でなで整形。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 4 | 〃 | 長　2.0<br>幅　3.3<br>重57.5g<br>孔径 0.9 | | 横にころがして整形。 | 良　好<br>砂　粒<br>淡黄褐色 | |
| 5 | 〃 | 長　8.0<br>幅　3.0<br>重58.0g<br>孔径 0.9 | | 横にころがして整形。指頭痕あり。 | 良　好<br>砂　粒<br>淡黄褐色 | |
| 6 | 〃 | 長　8.9<br>幅　2.9<br>重48.0g<br>孔径 1.1<br>～1.3 | | 横にころがして箆なで。 | 普　通<br>砂　粒<br>暗褐色 | |
| 7 | 〃<br>½ | 長　7.4<br>幅　2.7<br>重27.5g<br>孔径 1.0 | | 横にころがして整形。指頭痕あり。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 8 | 〃 | 長　7.3<br>幅　2.4<br>重33.5g<br>孔径 1.0 | | 横にころがして整形。指頭痕あり。 | 普　通<br>砂　粒<br>淡黄褐色 | |
| 9 | 〃 | 長　7.4<br>幅　2.6<br>孔　0.9<br>重20.0g | | 横にころがして整形。指頭痕あり。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 10 | 〃 | 長　6.6<br>幅　3.4<br>孔　1.3<br>重49.5g | | 横にころがして整形。指頭痕あり。 | 普　通<br>砂　粒<br>淡黄色 | |
| 11 | 〃 | 長　7.1<br>幅　3.0<br>孔　0.9<br>重47.5g | | 横にころがして整形。指頭痕あり。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |
| 12 | 〃 | 長　5.1<br>幅　3.0<br>孔　1.1<br>重47.4g | | 横にころがして箆で整形。 | 良　好<br>砂　粒<br>淡黄褐色 | |
| 13 | 〃<br>½ | 長　6.2<br>幅　2.55<br>孔　0.7<br>重21.6g | | 横にころがして整形。箆なでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>灰白色 | |
| 14 | 〃 | 長（5.3）<br>幅　2.5<br>孔　0.9<br>重24.4g | | 横にころがして整形。指頭痕あり。 | 普　通<br>砂　粒<br>明黄褐色 | |
| 15 | 〃 | 長　5.2<br>幅　2.2<br>孔　1.0<br>重20.5g | | 横にころがして整形。指頭痕あり。 | 普　通<br>砂　粒<br>暗褐色 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 16 | 管状土錘<br>½ | 長 4.7<br>幅 0.2<br>孔 0.9<br>重14.0g | | 横にころがして整形。指頭痕あり。 | 普 通<br>砂 粒<br>暗褐色 | 二次焼成痕あり。 |
| 17 | 管状土錘<br>½ | 長 4.3<br>幅 2.35<br>孔 0.8<br>重13.4g | | 横にころがして整形。指頭痕あり。 | | |
| 98図<br>5 | 鉄 製 品 | 長(8.0)<br>幅 2.3<br>厚 0.4 | 鉄鏃とも考えられる。<br>先部7.6cm、茎部は一部破損。錆は進んでいる。 | | | |

**第25号住居跡（第91図）**

**位置**　B地区の南方（H47区）に位置し、近接する歴史時代の住居跡は北方２ｍに第24号住居跡がみられる。

**規模**　N－22.5°－W　長軸4.3ｍ　短軸4.1ｍ　　平面形状　方形　　面積　約15.5㎡

**各部の状況**　壁は垂直に立ちあがり、壁高は30～40cmほどで東壁がやや低く、西側の北西コーナー部が張り出す方形状を呈している。床は平坦で特に中央部が踏み固められている。南東コーナー部からは、焼土・砂質粘土等が廃棄された状態で検出されている。

**竈**　北壁の中央に位置しN－32.5°－Wを向いて設置されている。竈の遺存度は悪く、北壁を約１ｍの幅で50cmほど掘り込み、天井部は崩落し、袖部は砂まじりの粘土で構築されている。中央の燃焼部に土製支脚が置かれ、火床は15cmほど掘り窪められているにすぎない。

**壁溝**　西壁にそって幅20cmほどの側溝が南北に1.6ｍほど掘られ、$P_4$に接して消滅する。東壁側の壁溝は南東コーナーの灰・焼土などを廃棄した落ち込みに続く。

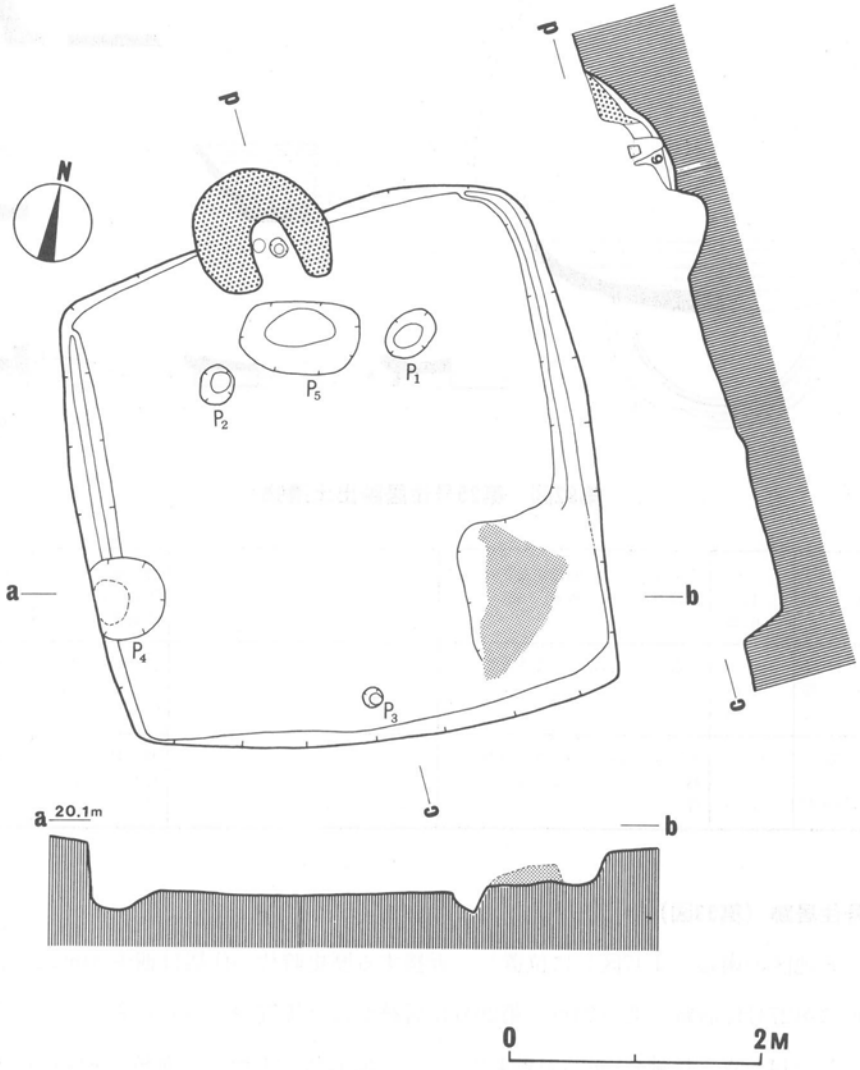
**柱穴**　竈の前に位置する$P_5$は94×60cmの長方形状を呈し、竈方向にわずかに傾斜を示し、灰のかき出し場として利用されたものであろうか。柱穴は竈の前に２ヶ所、中央に１ヶ所みられる。

**覆土**　上層は暗褐色土・黒褐色土で、下層はロームブロック混りの褐色土が堆積し、自然流入の堆積状況を示している。

**遺物出土状況**　遺物は多く土師器と須恵器で、ほとんどは覆土中から出土している。床面中央付近より須恵器の蓋（第92図８）が出土している。

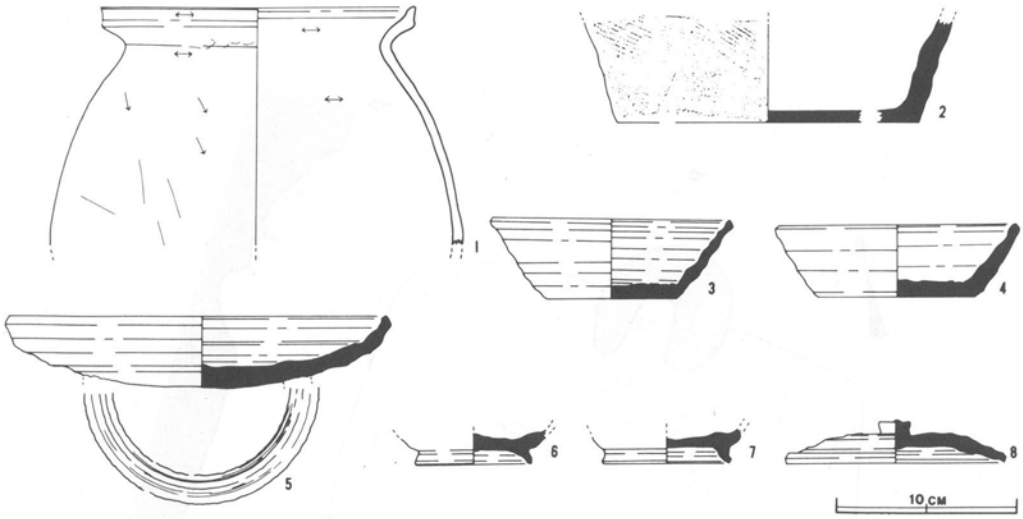
**遺　物（第92図）**

| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器形の特徴 | 整形技法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 92図<br>1 | 甕<br>胴下部欠<br>¼ | 17.4<br>(13.1) | 口縁部は外反して立ちあがり、さらに直立する。口辺部に稜を有する。器厚0.6cmほど。 | 口縁部内外とも横なで。胴部外面は斜位のなで。 | 普 通<br>砂 粒<br>燈 色 | |




第91図　第25号住居跡実測図

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 甕<br>底部 | (5.6)<br>16.5 | 底部は大きく、底部の一部を欠く。 | 胴部外面には叩目痕がみられ、内面は粗雑なでがなされている。 | 普通<br>砂粒<br>灰褐色 | 須恵器 |
| 3 | 坏<br>完形 | 13.0<br>4.5<br>7.1 | 口縁部はゆるく外反してロクロによる水引きがなされ、底部は篦切り、器厚は0.3～0.7cmほどである。 | | 普通<br>砂粒<br>灰白色 | 須恵器 |
| 4 | 坏<br>ほぼ完形 | 12.8<br>3.9<br>8.55 | 口縁部はゆるく内彎ぎみに立ちあがり、ロクロによる水引きがなされ、底部内面に左巻の渦巻状の水引き痕がみられる。 | | 普通<br>砂粒・長石<br>にぶい褐色 | 内外面煤付着<br>須恵器 |
| 5 | 台付盤<br>台部欠<br>¾ | 20.5<br>(3.9) | 盤部は口縁部が直立ぎみに立ちあがり、器厚は0.5～1.1cmほどで、台部は貼付高台である。ロクロによる水引き。 | | 普通<br>砂粒・長石<br>暗灰褐色 | 須恵器 |




**第92図　第25号住居跡出土遺物**

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 台付坏<br>底　部 | 1.9<br>6.35 | 台部片で、台は貼付がなされ、器面はロクロ痕が残る。 | | 普　通<br>砂粒・長石<br>灰黄色 | 須恵器 |
| 7 | 台付坏<br>底　部 | 1.8<br>6.95 | 台部片で台は貼付がなされている。 | ロクロ | 良　好<br>砂　粒<br>灰　色 | 須恵器 |
| 8 | 蓋<br>ほぼ完形 | 12.0<br>2.3<br>1.65 | ロクロによる水引きがなされ、口縁は短く立ちあがる。器厚はやや厚い。 | | 良　好<br>砂粒・長石<br>灰　色 | 須恵器 |

**第26号住居跡（第93図）**

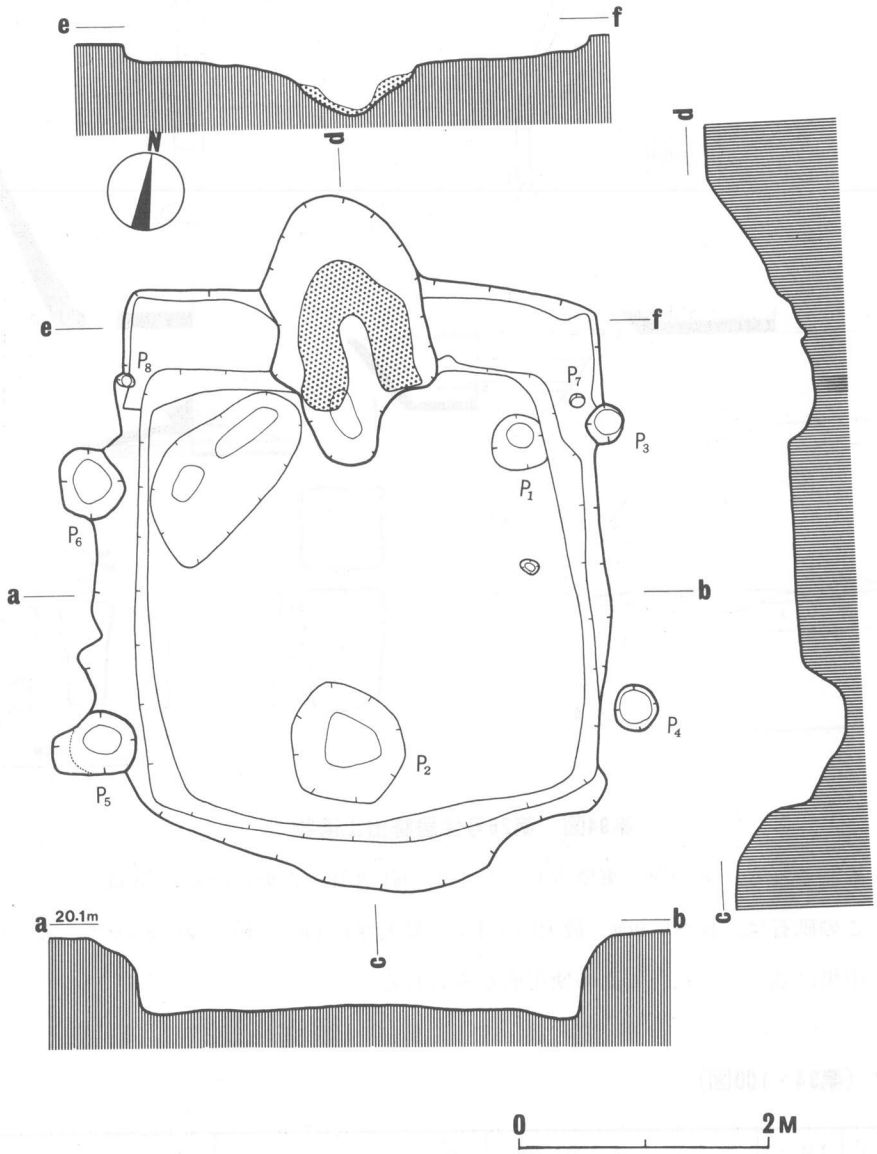
**位置**　B地区の南端（J47区）に位置し、近接する歴史時代の住居は西方20mに第24号住居跡東方29mに第27号住居跡、北方29mに第29号住居跡がほぼ等間隔にみられる。

**規模**　N－14°－W　長軸4.8m　短軸4.2m　　平面形状　方形　　面積　約14.2（11.5）㎡

**各部の状況**　壁は垂直ぎみに立ちあがり、壁高は50～70cmほどで、北西コーナーおよび南壁の外辺部がゆるい傾斜をもって立ちあがる。床はほぼ平坦でよく踏み固められ、中央部はわずかに盛りあがっている。

**竈**　北壁の中央部に位置し、北壁を125cmの幅で約50cmほど斜めに掘りこんで煙道部とし、燃焼部は砂質粘土によりU字状に構築され、天井部は壊れ、焚口部も破壊されている。竈の両側は北壁より一段低い平場とし、テラス状の施設として利用している。規模は西側117×55cm、東側が130×54cmである。住居の北西コーナー部には灰・粘土・焼土が多量に堆積し、竈内の廃棄物の処理場と考えられる。

**柱穴**　床面には$P_1$・$P_2$がみられるが、両方から多量の灰・焼土等が検出され主柱穴とはあまり

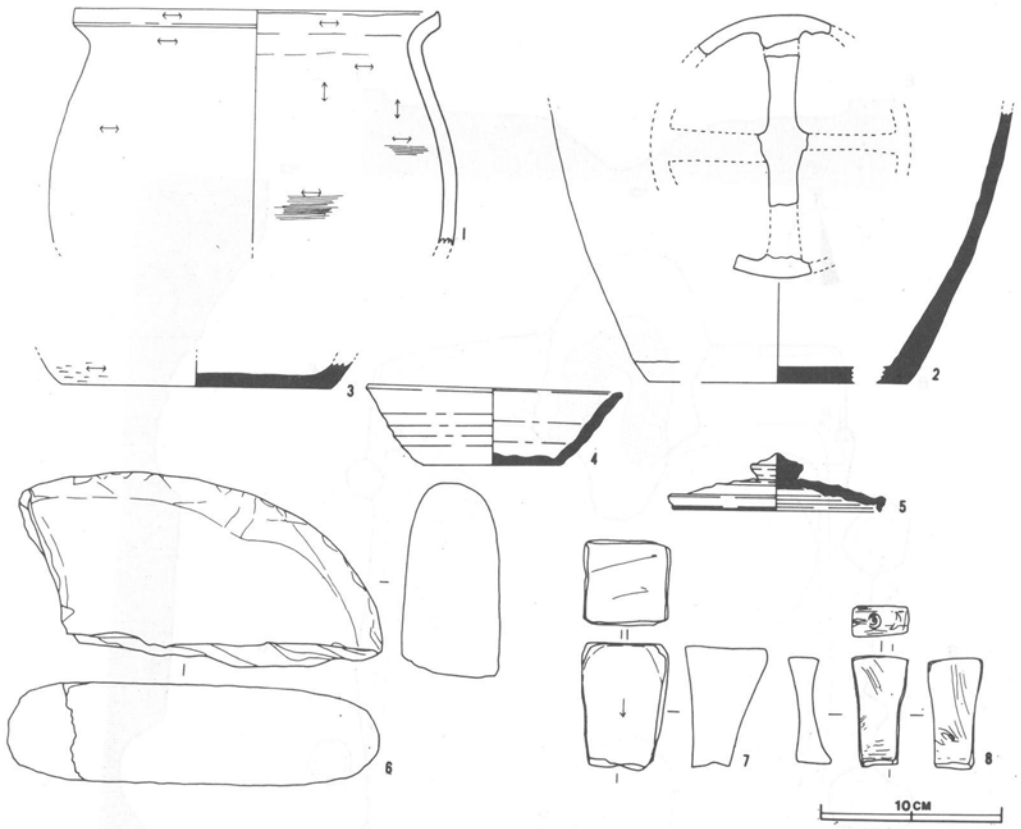



**第93図　第 26 号 住 居 跡 実 測 図**

考えられないが、壁外辺に位置する$P_3$～$P_6$は屋外施設の主柱穴と考えられる。直径は30～50cm内外で、深さ20～50cmほどである。　$P_3$が最も深く、$P_7$・$P_8$は小穴でテラス状の遺構の補助的なものと考えられる。

**覆土**　上層は黒色土で、下層は黒褐色土である。壁ぎわは多量のローム粒を混入する黄褐色土の流入がみられ、自然堆積を示している。

**遺物出土状況**　遺物は覆土および床面よりみられ、北側より投棄されたような状況が遺物の出



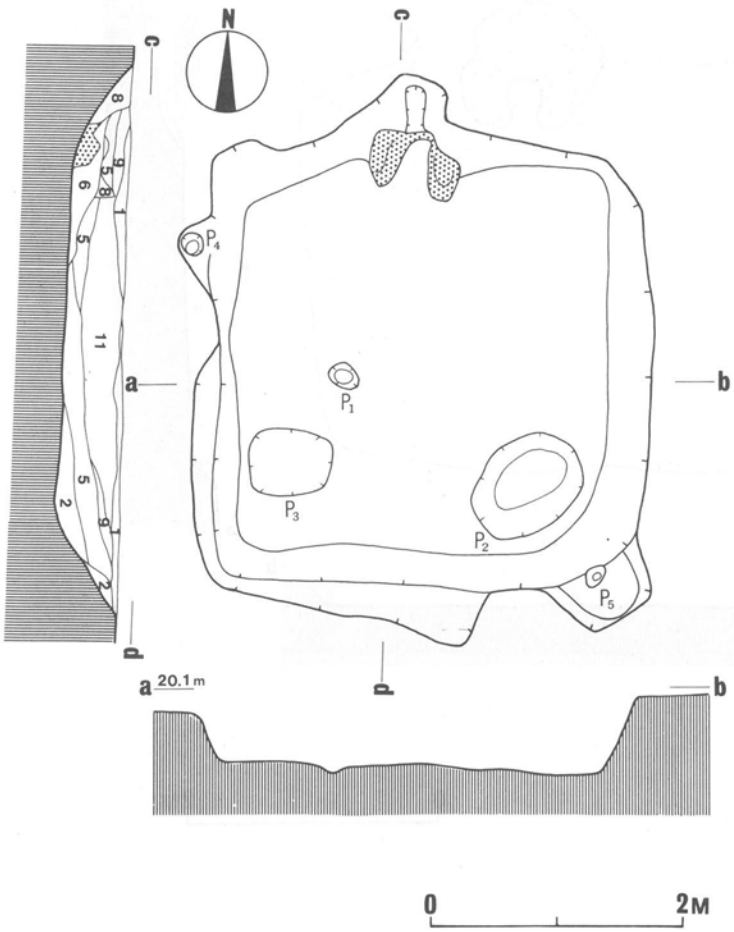

**第94図　第26号住居跡出土遺物**

土状態から推測される。その他、東壁ぎわより小型の砂質凝灰岩製の砥石（第94図８）が出土している。（この砥石は、長さ5.9cm、最大巾3.1cm、最大厚1.95cm、最小厚0.85cmで、表・裏ともすり減って中央に強くくびれ、４面の使用痕がみられる。）

## 遺　物（第94・100図）

| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器　形　の　特　徴 | 整　形　技　法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 94図<br>1 | 甕<br>胴下部欠 | 20.0<br>(12.7) | 口縁部は外反して立ちあがり、胴部は下半部を欠いている。器厚は0.7cm内外である口縁部内面に稜がみられる。 | 口縁部内外とも横なでがみられ、胴部にもなでがみられる。外面に煤付着。 | 良　好<br>砂　粒<br>橙　色 | 煤付着 |
| 2 | 甕<br>胴下部<br>¼ | (14.8)<br>14.2 | 底部からやや内彎して胴部へ立ちあがり、底部は十字形の橋状部を有する。横位部の各面は篦削りがなされている。器厚は0.6～1.5cmほどである。 | ロクロ整形の水引き痕が認められる。胴下端部には、篦削り痕が認められる。 | 良　好<br>緻密・砂粒<br>暗灰色 | 須恵器 |
| 3 | 甕<br>底　部 | (1.5)<br>14.8 | 底部は大きく、胴下端部には篦削りがみられ、内面にはなで整形がなされている。 | | 良　好<br>砂　粒<br>灰褐色 | 須恵器 |
| 4 | 坏<br>完　形 | 13.9<br>4.2<br>7.6 | 底部から直線的に開いて立ちあがり、器厚は0.5～0.7cmほどである。 | 内外面ともロクロによる水引き痕が認められ、底部は篦削りがなされている。 | 普　通<br>砂粒・雲母<br>灰褐色 | 須恵器 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 蓋 | 11.4<br>3.3 | 口縁部は直立しており宝珠はやや大きい。 | ロクロによる水引き痕が認められる。 | 普　通<br>長石・砂粒<br>青灰色 | 須恵器 |
| 6 | 砥　石 | 長 20.3<br>幅（9.7）<br>重量1700g | 表裏が平坦に磨かれ、砥石として使用されたものと考えられる。 | | | |
| 7 | 砥　石<br>½ | 長（6.8）<br>幅 4.7<br>重量 175g | 中央部のくびれ部で破損したもので、各面とも中央部にくびれがみられる。また各面とも縦位の擦痕が認められる。 | | | |
| 8 | 砥　石 | 長 5.9<br>幅 3.1<br>重量<br>（33.2）g | 表裏面が平坦に磨かれ、砥石として使用されたものと考えられる。 | | | 4面の使用痕 |
| 100図<br>19 | 管状土錘<br>⅗ | 長 5.8<br>幅 2.4<br>重量<br>（23.1）g | 一部を欠き、器面はやや粗雑なでがみられる。 | | 良　好<br>砂　粒<br>暗褐色 | |




第95図　第27号住居跡実測図

## 第27号住居跡（第95図）

**位置**　B地区の南部（N47区）に位置し、近接する歴史時代の住居跡は西方28mに第26号住居跡、北方18mに第28号住居跡がみられる。

**規模**　N－2°－W　長軸3.6m　短軸3.6m　平面形状　正方形　面積　約9.14m²

**各部の状況**　壁は垂直に立ちあがり、壁高は40～60cmで東部が高く、西部が低くなり、南壁がややゆるい傾斜を示して立ちあがる。床はほぼ平坦で固いが、南にやや傾斜を示して

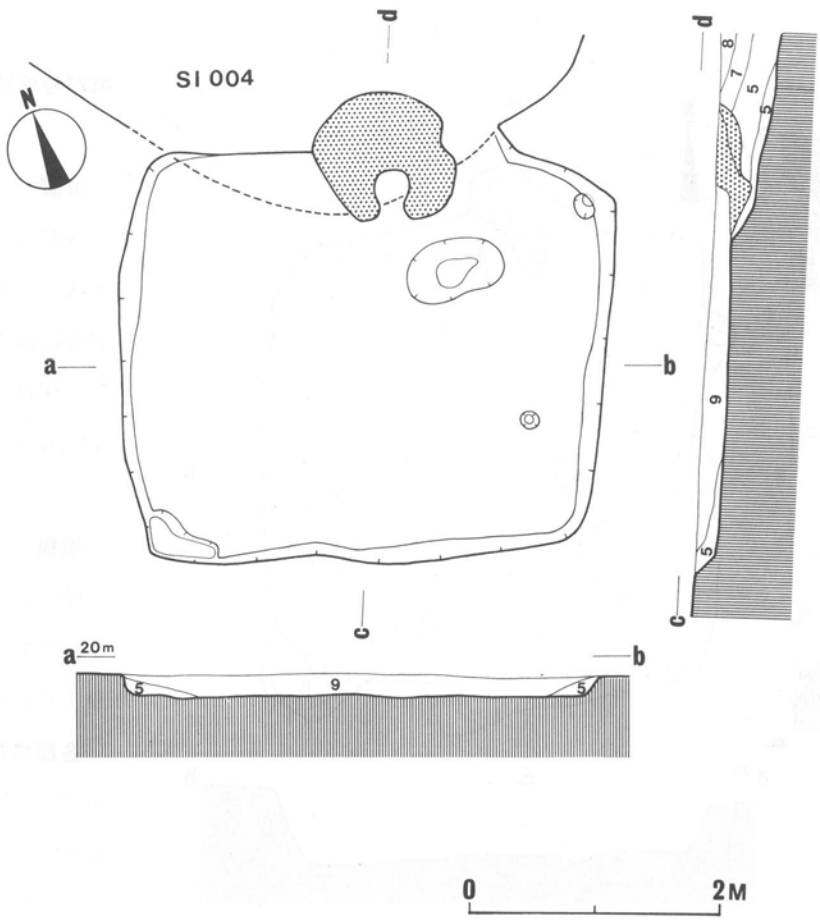
いる。また、南東コーナーおよび南西コーナー部分に長方形状の浅い掘り込みがみられる。

**竈**　北壁の中央に位置し、北壁を80cmの幅で約40cmほど斜めに掘り込んで煙道部とし、袖部は30～40cmほどU字状に突出している。床は皿状にわずかに掘り深めている。

**柱穴**　中央床の西側に直径25cm内外、深さ12cmの小穴$P_1$がみられるだけで、屋外施設も検出されなかったが、北壁上に直径20cm内外の小穴$P_4$がみられる。

**覆土**　上層はローム粒子を混入する黒色土・暗褐色土がみられ、下層はロームブロック等を含む黄褐色土がレンズ状に堆積している。

**遺物出土状況**　遺物は少量で須恵器の蓋と少量の土師器片がみられる。




**第96図　第28号住居跡実測図**

**遺　物（第84・99図）**

| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器　形　の　特　徴 | 整　形　技　法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 84図<br>3 | 蓋<br>⅔ | 12.8<br>(2.1) | 口縁部は薄くやや直立ぎみに立ちあがりを呈し、宝珠部を欠いている。器厚は0.2～0.7cmほど。 | ロクロ整形。 | 良　好<br>緻　密<br>緑灰色 | 須恵器<br>自然釉あり |
| 99図<br>20 | 球状土錘 | 長　2.2<br>幅　2.5<br>重　11.2g<br>孔径0.5<br>～0.7 | 煤付着 | | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | |

**第28号住居跡（第96図）**

**位置**　B地区の南部（N45区）に位置し、北側に隣接する縄文時代の第4号住居跡の南壁を切って竈が構築されている。

**規模**　N－26°－E　長軸3.8m　短軸3.3m　　平面形状　長方形　　面積　約11.1m²

**各部の状況**　壁は垂直ぎみに立ちあがるが、壁高は20cm内外で浅くやや軟弱である。床はほぼ平坦で固く踏み固められている。南西コーナー部に浅い溝状の落ち込みがみられるが、側溝とはならなかった。北側は第4号住居跡と重複して明瞭でない。

**竈**　北壁のほぼ中央に位置し、規模は1.34×1mほどであるが確認面から浅いため遺存度は悪く、煙道部も不明瞭である。燃焼部は砂質粘土によって構築され、床はわずかに掘り込まれている。

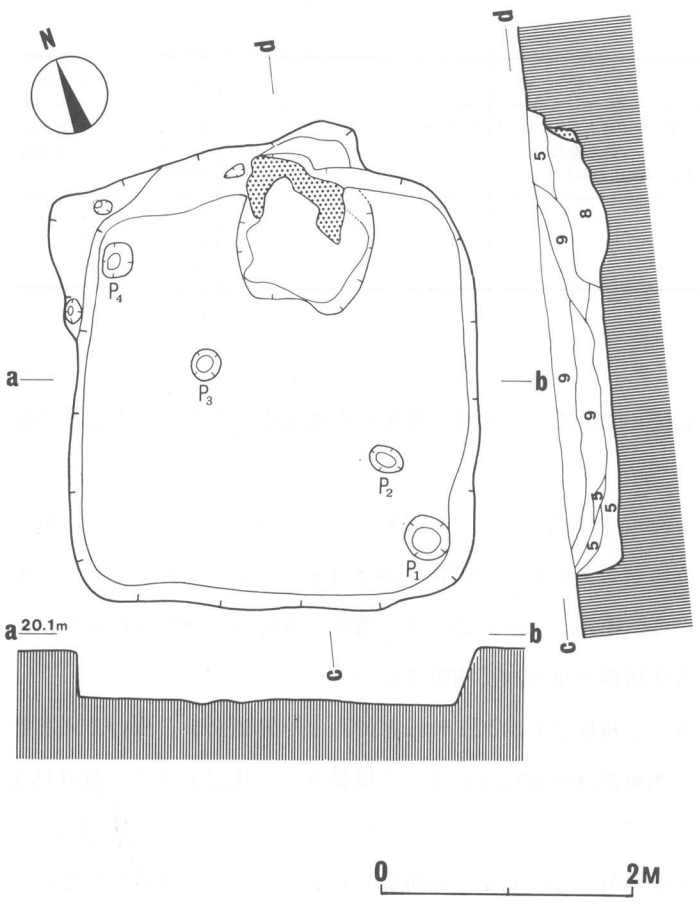
**柱穴**　東壁よりに、直径15cm内外の小穴が2ヶ所確認されるだけで他にはみられないが竈の南東に78×44cmほどの楕円状の掘り込みがみられる。

**覆土**　暗褐色土の堆積がみられ、壁ぎわに黄褐色土が流入している。

**遺物出土状況**　極少量で、西よりの床面に須恵器の坏（第84図6）が出土している。

**遺　物（第84図）**

| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器　形　の　特　徴 | 整　形　技　法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 84図<br>4 | 甕<br>口縁部 | 11.2<br>(3.1) | 口縁部は頸部から開いて立ちあがり、口唇部はほぼ直立する。頸部以下を欠いている。器厚は0.5cm内外。 | 口縁部内外とも横なでがみられる。 | 普　通<br>砂　粒<br>褐　色 | 二次焼成 |
| 5 | 坏<br>⅓ | 11.45<br>2.8<br>5.5 | 底部から外反して開いている。器厚は0.4cm。 | 体部内外とも水引き痕がかすかにみられ、底面は篦削り。 | 普　通<br>砂　粒<br>暗黄褐色 | |
| 6 | 坏<br>底　部<br>⅓ | (2.4)<br>7.1 | 底部片で底部から口縁部にむかって開く。 | 体部は水引き痕がかすかにみられ、底面は回転篦切りである。 | 良　好<br>砂粒（少）<br>明褐灰色 | 須恵器 |



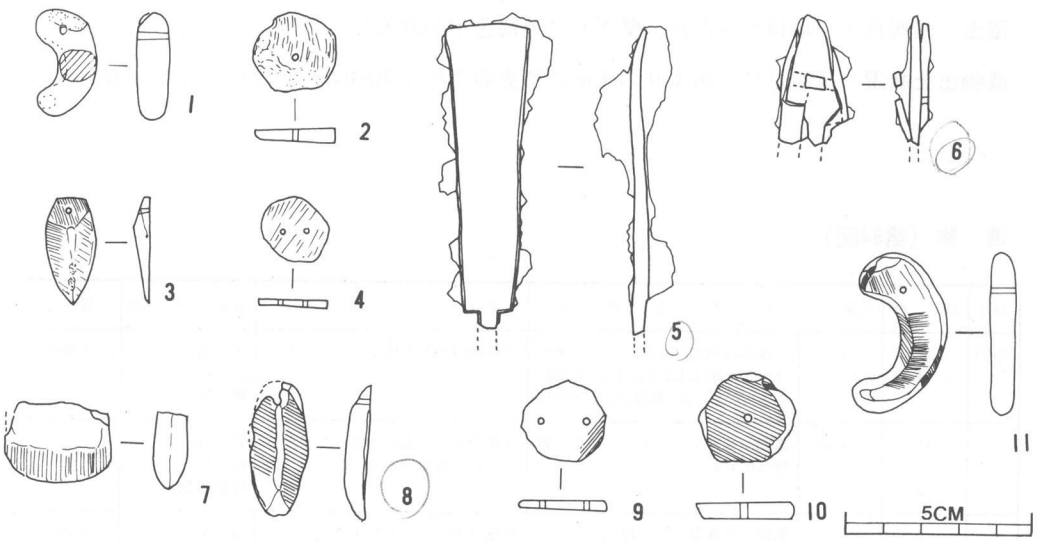

第97図　第29号住居跡実測図

**第29号住居跡(第97図)**

**位置**　B地区の南部（J44区）に位置し、この住居跡より北には同時期の遺構は確認されていない。

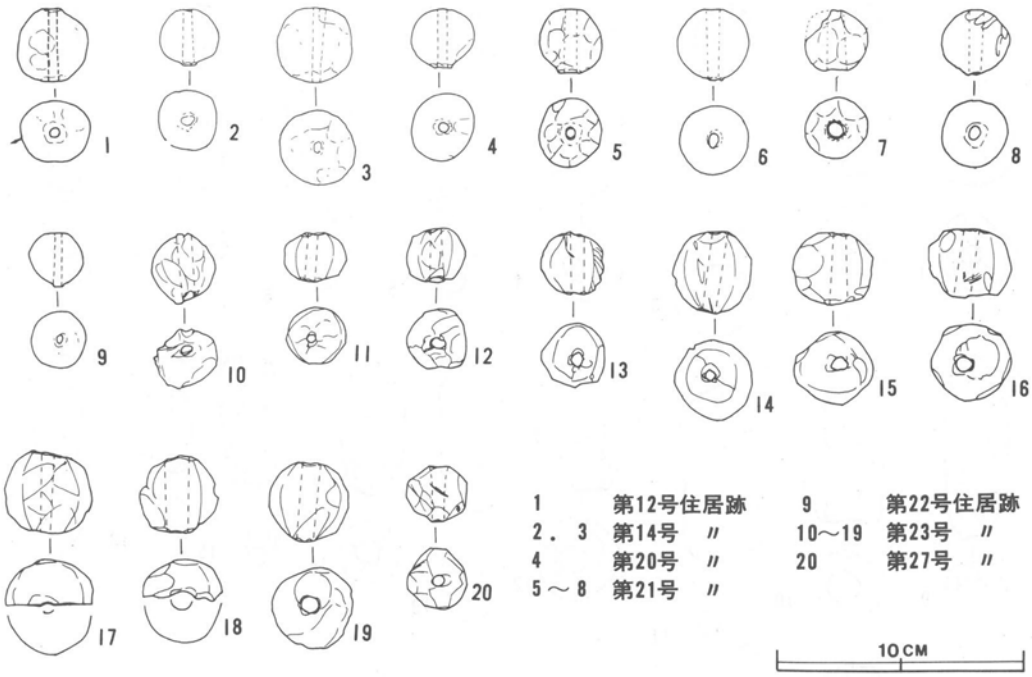
**規模**　N－21°－E　長軸3.5m　短軸3.2m　平面形状　方形　面積約9.5m²

**各部の状況**　壁は垂直ぎみに立ちあがるが、北西コーナーから北壁の外辺部は外傾ぎみとなり、壁高は37～47cmほどで東が高く、西がが低くなる。床はほぼ平坦でよく踏み固められている。




1・2　第14号住居跡　　5　第24号住居跡　　7　第12号住居跡　　11　第2号土壙
3・4　第17号住居跡　　6・8　第23号住居跡　　9・10　グリット

第98図　石器類及び鉄製品実測図




**第99図　球状土錘実測図**

**竈**　北壁のほぼ中央に位置し、主軸方向はＮ－38°－Ｅを向き、遺存度は悪い。わずかに北壁に焼土・粘土等が残存する。北壁を30cmほど掘り込み、燃焼部は床面をわずかに掘りくぼめている。

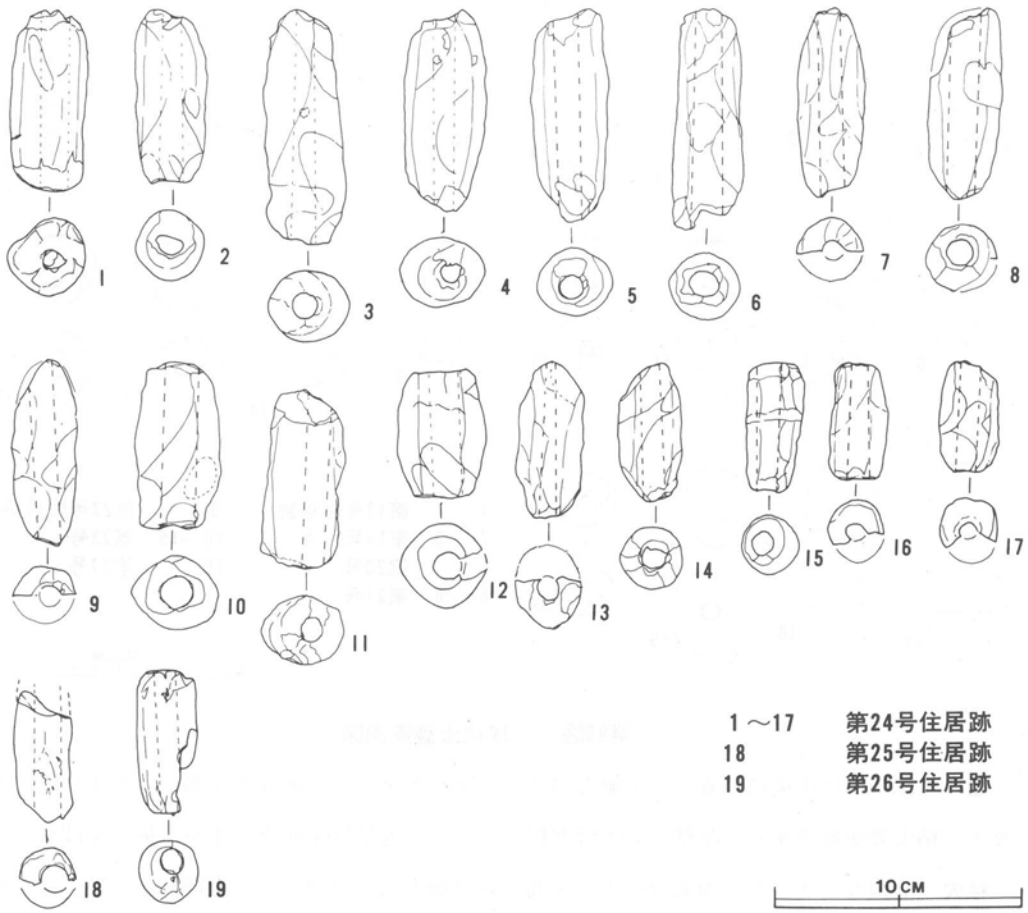
**柱穴**　北西コーナーから南東コーナーを通る対角線上に、ほぼ並んで直径30cm内外、深さ20cmほどの柱穴がみられる。

**覆土**　上層は暗褐色土、下層はローム小ブロックを含む黄褐色土がみられ、自然流入的な堆積である。

**遺物出土状況**　遺物は須恵器・土師器が出土しているがそれほど多くはない。竈の東側の床面より土師器の小型甕（第84図７）が出土している。

## 遺　物（第84図）

| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器　形　の　特　徴 | 整　形　技　法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 84図<br>7 | 甕<br>完　形 | 16.5<br>14.75<br>8.25 | 口縁部は頸部から開き、さらに直立ぎみに立ちあがる。底部は平底で、木葉痕がみられ、器厚は0.3～1.0cmほどである。 | 口縁部内外とも横なでがみられ、胴部内外面は箆削り、外面は箆みがきがなされている。 | 良　好<br>砂　粒（多）<br>褐　色 | 煤付着<br>底部木葉痕 |
| 8 | 坏<br>½ | 12.6<br>(6.0) | 口縁部は体部から外反して開き、体部は底部へすぼまる。底部を欠き、器厚は0.6cm内外である。 | 内外面とも箆みがきがなされ、丹彩されている。 | 普　通<br>砂　粒<br>赤褐色 | 煤付着<br>丹　彩 |




第100図　管状土錘実測図

## 第2節　土　壙

### 1．縄文時代

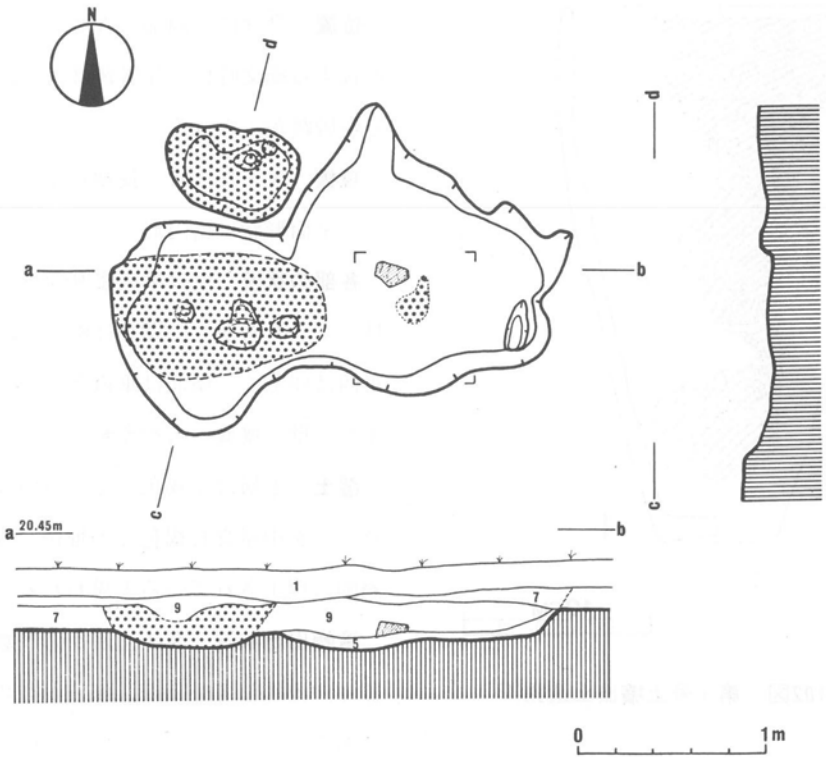
**第1号土壙（第101図）**

**位置**　B地区のほぼ中央部（N38区）に位置するが、近接する住居跡はみられない。

**規模**　N－71°－E　長軸2.42m　短軸1.52m　平面形状　不整形

**各部の状況**　壁は13～23cmほどでゆるやかに立ちあがり、壁および壙底とも軟弱であり、東側の不定長方形をなす土壙を西側の楕円形状の掘り込みが切っているが、それほど時間差はないと考えられる。また、北西に長軸0.7m、短軸0.5mの楕円形の小穴がみられる。

**覆土**　第2層の褐色土より掘り込み、上層はローム粒を混入する褐色土で、繊維を混入する円筒形の土器がみられ、下層はローム粒を含む黄褐色土である。西側のヤマトシジミを混入する掘




**第101図　　第１号土壙実測図**

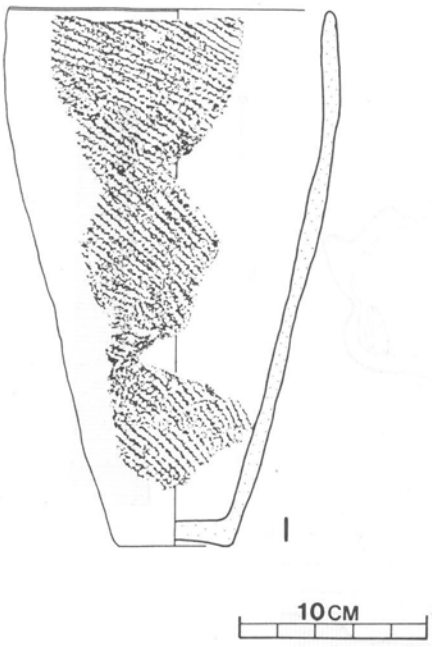
り込みは上層が暗褐色土で、下層は混貝土層でわずかに焼土および灰等の混入が看取される。

**遺物出土状況**　中央付近より深鉢形土器（第102図）の底部が出土し、$P_2$の南側に同土器の口縁部分がみられる。その周辺にヤマトシジミが散在しその数は約1000点、極小破片は別にして、右殻が603点、左殻が397点で投棄されたシジミは603点以上であると考えられる。殻長・殻高とも1.5～３cm内外で、２～2.5cm内外のものが最も多い（第104図）。また焼土および灰等が検出され、シジミの殻もかなり、軟弱であり、一次的に火をうけている。

## 遺　物（第102・103図）

本土壙から出土した土器はすべて第Ⅰ群土器であり、器形が把握される第102図1以外はすべて破片である。１は口径17.5cm・器高28.5cm・底径６cmほどの深鉢形土器で、口縁部は直立ぎみに立ちあがる円筒状を呈している。器外面には$R<\frac{L}{L}$の縄文が全体に施文されている。

第103図１～３は２群１種の土器であり、14～21は羽状構成を呈している。また、14はやや外反して立ちあがる口縁部片である。22～29は無節の縄文を有する土器群で、直線的に外へ開く口縁部と、やや内彎ぎみに立ちあがるものがみられる。30・31は底部片である。




第102図　第１号土壙出土遺物(1)

**第３号土壙（第105図）**

**位置**　Ｄ地区の西部（Ａ２区）に位置し、近接する縄文時代の住居跡は南東23ｍに第11号住居跡がみられる。

**規模**　Ｎ－16°－Ｗ　長軸1.75ｍ　短軸1.45ｍ　平面形状　楕円形

**各部の状況**　壁は壙底よりゆるいカーブを持って立ちあがり、壁高は86～100cm内外で、東西はゆるく、南北は垂直ぎみに立ちあがる。また、壁・壙底ともやや軟弱である。

**覆土**　上層は暗褐色土で、下層はロームブロックを中量含む褐色土の堆積がみられ、人為的に埋土されていると思われる。

**遺物出土状況**　覆土上層から多数の縄文土器片が出土しているが、壙底からの出土は稀である。

**遺　物（第106図）**

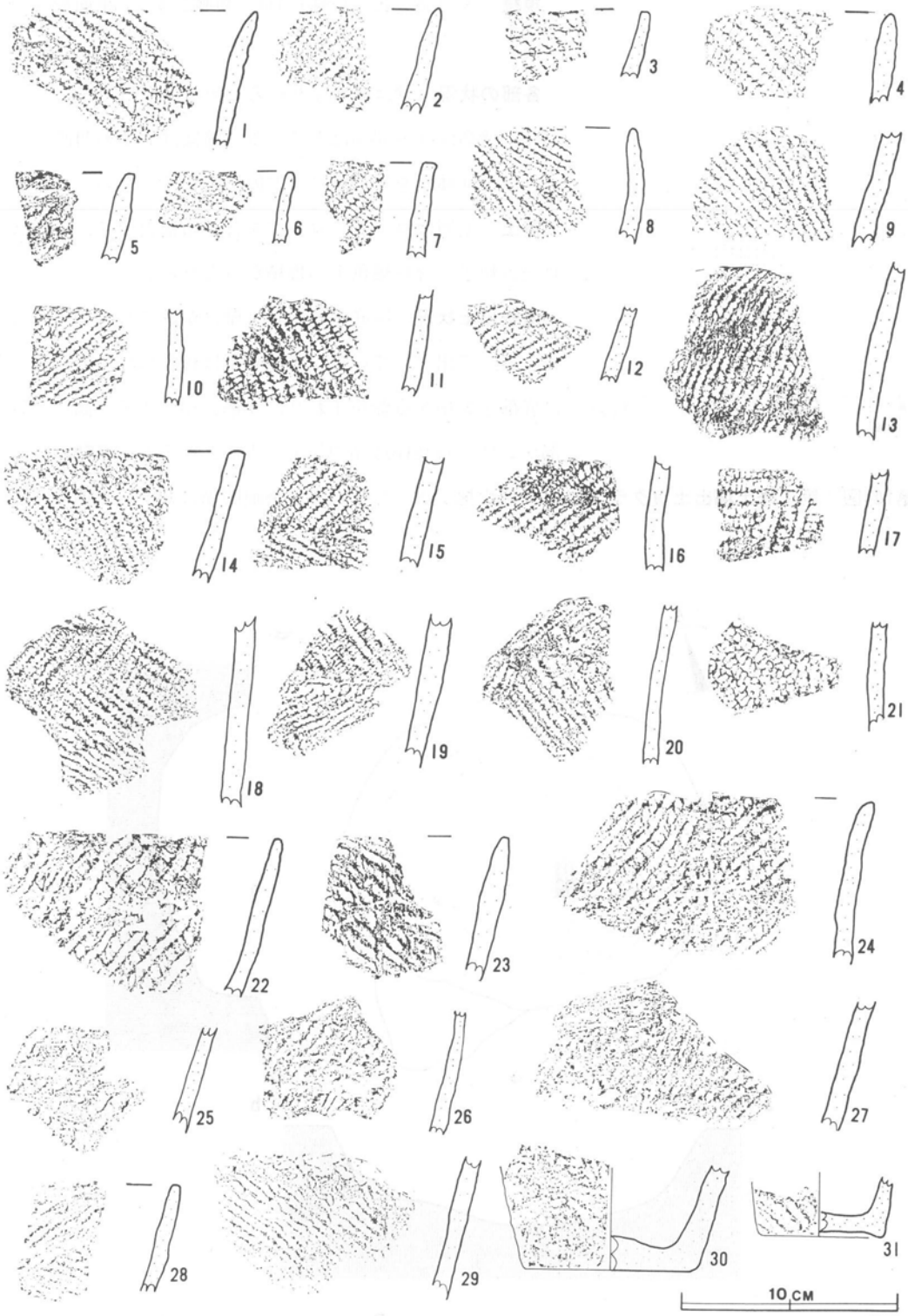
本土壙から出土した土器はすべて第Ⅰ群土器であり、ほとんどが覆土上層から出土している。第106図１・２はいずれも器形が推定されるものであり、大形の深鉢形土器である。

１は推定口径約65cmほどの大形の土器で、口縁部は波状を呈し、波頂部に３ヶ所ずつ小突起がみられ、さらに口唇部にはスリットがみられる。胴上部はくびれて口縁部は開き、さらに内彎している。口辺部は櫛歯状工具による縦区画がみられ、区画間それぞれには弧状文が６段ずつ施され、縦区画櫛目文上には、弧状文同様竹管文が施されている。胴下部は$R\langle\frac{L}{L}$の縄文がみられ、くびれ部には櫛目文が周回し、その上には同じ工具の刺突がみられる。２は胴部で胴上部には半截竹管による有節沈線文が斜格子状に描かれ、胴上部は$L\langle\frac{R}{R}$の縄文が施されている。周回する４段の有節沈線によって文様帯は区分され、縄文区の上部には竹管刺突が２段に施されている。１同様大形の土器であるが、１・２とも焼成は良好で、内面の整形もきわめて良好である。

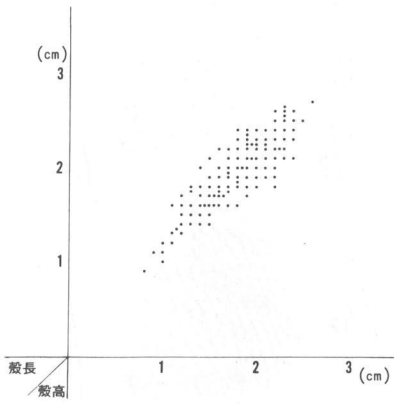
## ２．古墳時代

**第２号土壙（第107図）**

**位置**　Ａ地区の東端（Ｑ17区）に独立して位置する。




**第103図　　第１号土壙出土遺物（２）**



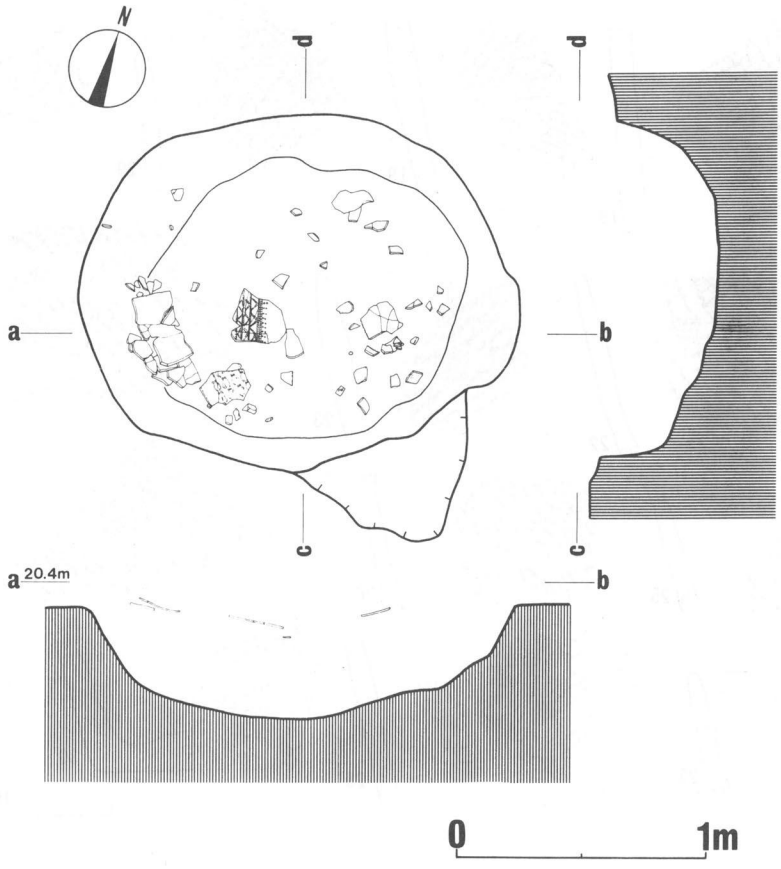

第104図　第１号土壙出土貝グラフ

**規模**　N－58°－E　長軸1.4m　短軸1.3m　平面形状　楕円形

**各部の状況**　壁は壙底よりゆるいカーブを持って立ちあがり、壁高は30～36cmほどである。壙底は若干の凹凸がみられ、すり鉢状を呈しそれほど固いものではない。

**覆土**　上層はロームブロックを含む暗褐色土で、下層はローム粒子を含む褐色土の堆積がみられる。

**遺物出土状況**　壙底中心から東壁にかけて数個の土師器が一括して出土している。その状況は複合口縁の壺を中心に底部を欠損する壺がまわりに４個、坏が１個、高坏の脚部が2 個、石製模造品の勾玉が１個、その他シダ類の付着する焼土塊が出土している。祭祀関係に類する土壙と考え




第105図　第３号土壙実測図

**第106図　　第３号土壙出土遺物**

られる。

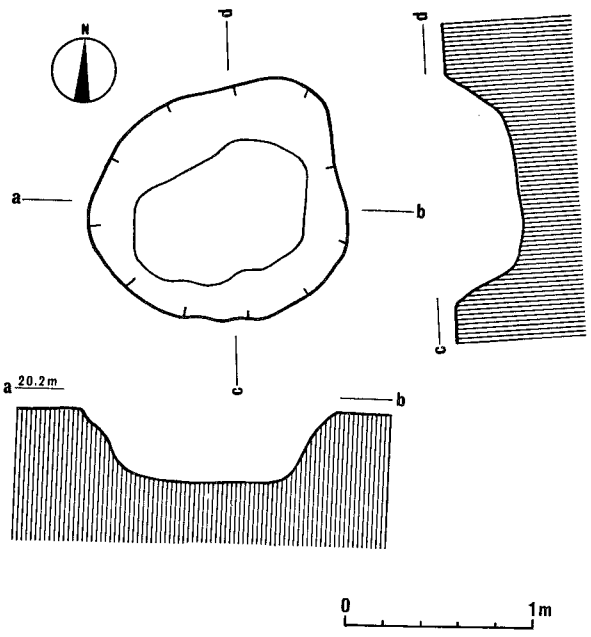
## 遺　物（第98・108図）

| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器　形　の　特　徴 | 整　形　技　法 | 焼成・胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 108図<br>1 | 壺<br>完　形 | 17.8<br>34.1<br>6.9 | 口縁部は肥厚して複合口縁状を呈し、頸部から大きく外反して開いている。胴部はやや長い形状を示し、器厚は0.7～１cmほどある。 | 口縁部内外とも横位の刷毛目がみられ、胴部はなでの後に篦削りがなされている。内面はなでがみられ、輪積み痕がみられる。 | 普　通<br>砂粒・石英<br>明褐色 | |
| 2 | 甕<br>⅔ | 17.8<br>32.1<br>5.9 | 器形はやや変形しており、左右の器高が異なる。口縁部は大きく外反して立ちあがり、胴部中位に最大径を有する。底部は小さく、器厚は0.8～１cmほどである。 | 口縁部内外とも横なで、胴部外面には篦削りがみられ、内面はなで整形がなされ、輪積み痕がみられる。 | 普　通<br>砂粒・雲母<br>褐　色 | |

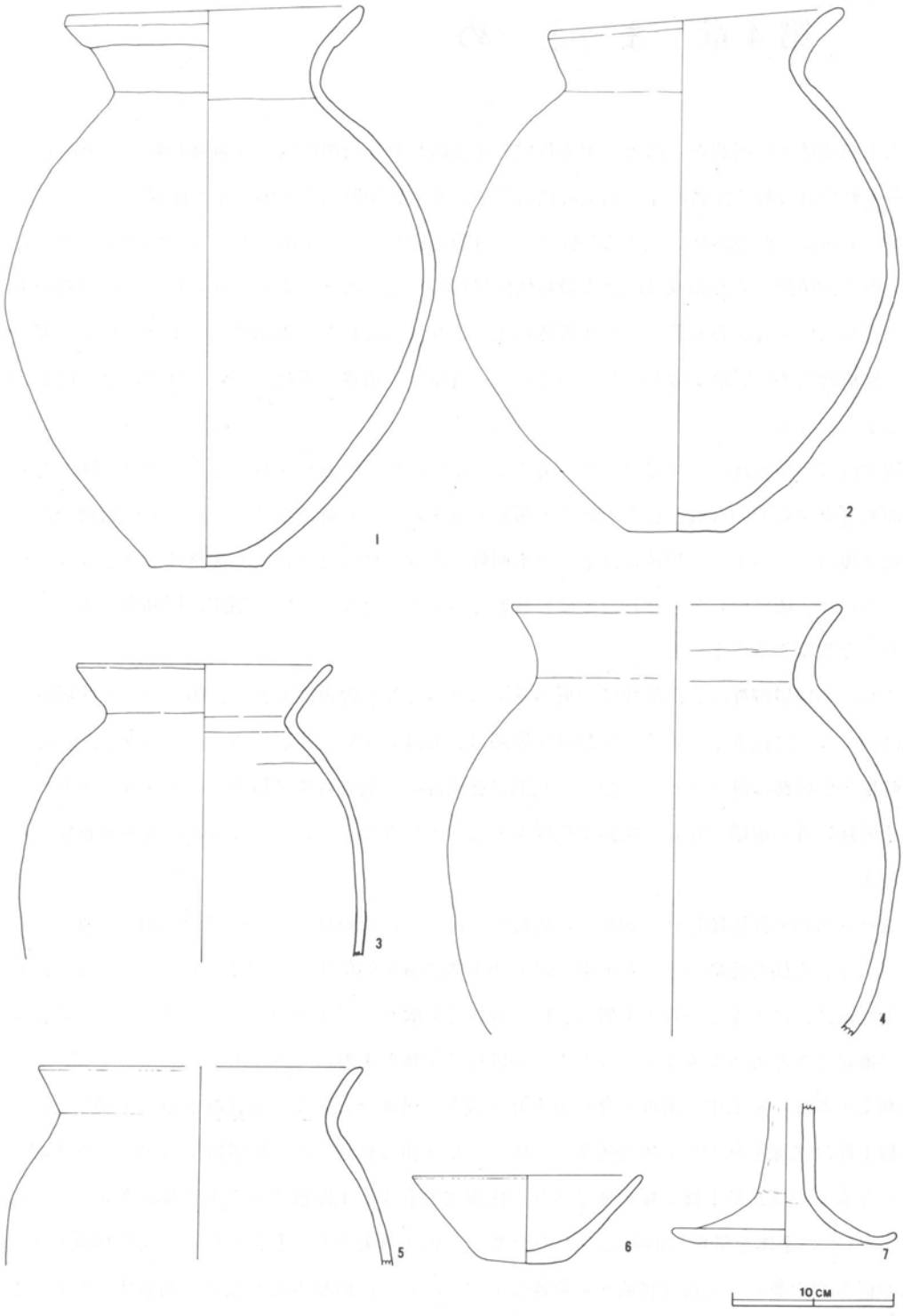
| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 甕<br>胴下部欠<br>½ | 15.6<br>(18.0)<br>6.9 | 口縁部は頸部から直線的に開き、胴部はやや長く、底部を欠いている。器厚は0.6～0.8cmである。 | 口縁部内外は篦なでがみられ、胴部も篦削りが認められる。 | 普　通<br>砂粒・石英・長石<br>赤褐色 | |
| 4 | 甕<br>胴下部欠<br>⅓ | 20.0<br>(26.3) | 口縁部は外反して立ちあがり、胴部はやや球状を呈する。器厚は0.8～1.5cmほどである。 | 口縁部内外とも横なでがみられ、胴部外面は篦削りがみられる。内面はなで。 | 普　通<br>砂粒・石英<br>浅黄褐色 | 二次焼成 |
| 5 | 甕<br>口縁部<br>⅓ | 19.7<br>(12.0) | 口縁部は頸部からやや外反して開き、胴部中位以下を欠き、器厚は0.6～0.8cmほどである。 | 口縁部内外とも横なでがみられ、胴部は篦削りがみられる。 | 普　通<br>砂粒・石英<br>浅黄褐色 | |
| 6 | 坏<br><br>⅔ | 14.4<br>5.2<br>5.1 | 底部はやや丸味を有し、口縁部にむかって直線的に開き、器厚は0.6～1.2cmほどである。 | 内外器面はなで整形が認められる。 | 普　通<br>砂粒・石英<br>褐　色 | |
| 7 | 高　坏<br>脚柱部 | <br>(8.5)<br>10.0 | 脚柱部は円筒状を呈し、裾部で大きく開きさらに外反する。 | 脚柱部は縦位の篦なでがみられ、裾部も篦なでがみられる。 | 普　通<br>砂粒・長石<br>明赤褐色 | |
| 98図<br>11 | 石製<br>模造品 | 長 4.4<br>厚 0.7<br>孔 0.15<br>重 9.5g | 扁平な形状を呈し、表裏面には擦痕が顕著である。 | 側面部の整形はやや粗雑。 | | |

## その他の遺物

| 番号 | 器　種 | 法量(cm) | 器形の特徴 |
|---|---|---|---|
| 98図<br>9 | 石製<br>模造品 | 長 2.1<br>幅 2.2<br>厚 0.2<br>重 3g | やや不整の円形状を呈し、2㎜ほどの孔が2個みられる。表裏面とも擦痕が認められる。 |
| 10 | 石製<br>模造品 | 長 2.6<br>幅 3.3<br>厚 0.4<br>重 4.5g | 不整の円形状を呈し、厚い。中央部に2㎜ほどの孔を有し、表裏面とも擦痕顕著。 |




第107図　第２号土壙実測図




**第108図　第２号土壙出土遺物**

# 第4章　ま　と　め

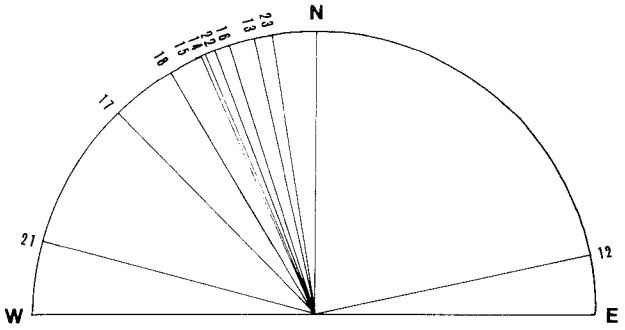
大生郷遺跡の発掘調査の結果、縄文時代の住居跡11軒、古墳時代の住居跡12軒、歴史時代の住居跡６軒の計29軒の住居跡と、縄文時代の土壙２基、古墳時代の土壙１基が確認された。これら遺構の分布は、台地西側に入りこむ幅の広い沖積地をひとつの生活基盤としていたようにみられる。西の沖積地の北谷頭東部には古墳時代住居跡のひとつのまとまりがみられ、台地南部の東に入り込む浅い支谷の谷頭周辺にも住居跡のまとまりがみられた。南部地区のまとまりは、縄文時代～歴史時代の住居跡が複合したものであり、各時代の遺構・遺物については次のようにまとめることができる。

縄文時代の住居跡は、すでにのべてあるように楕円形の平面形を有するもの２軒、隅丸方形の平面形を有するもの３軒、長方形状の平面形を有するもの６軒である。これらの住居跡の内容を詳細に検討してみると、炉跡がほとんど不明鮮であり、柱穴についても規格性はあまりみられない。さらに、床についてもそれほど硬い状態を示すものはなく、居住期間が短期間であったのであろうと推察することができる。

これらの住居跡群は、南部地区の東へ浅く入り込む谷頭周辺に分布し、第１～９号住居跡が谷頭に向くように位置している。第11号住居跡は、北部のブロックに位置しているが、そのほかに同時期の住居跡は確認されていない。北部の谷頭部は、調査対象区域外ということもあり、第11号住居跡以外の遺構の存在を明確に把握することはできなかったが、住居跡の存在を推定するにとどまった。

これら第10号住居跡以外の10軒の住居跡から出土した土器群は、すべて胎土中に繊維を含む土器であり、文様的特徴などから前期の黒浜式土器に編年的位置づけができるものである。遺物の出土状況は、ほとんどが覆土上層で、同一個体でも散在して出土している。これらの土器群は器形の推定できるものは少なく、ほとんどが破片で深鉢形土器の一部である。

縄文土器は、胎土中に繊維を含む第Ⅰ群土器と、繊維を含まない第Ⅱ群土器に大別したが、第Ⅰ群土器は沈線を有する１類と縄文を主体とした２類に分類した。住居跡から出土した土器の主体となるものは、第Ⅰ群２類１種であり、沈線文を有する土器群よりも出土量は多い。その中でも、R$<\frac{L}{L}$の原体を横位に回転したものが多く、０段多条のものも含まれる。羽状構成を呈する土器群もやや多く、羽状は普通から粗雑なものがみられ、回転方向が変えて羽状化したものが多くみられる。沈線文の土器群は、半截竹管による文様施文が多くみられ、コンパス文・波状文・平行沈線文などが主体である。コンパス文はやや形の退化したものが多く、前型式にみられるものよりも後出的な様相を呈している。土器以外の遺物はほとんどみられず、大生郷遺跡の特徴と




**第109図　住居跡主軸表（大生郷第Ⅲ期）**

いうことができる。

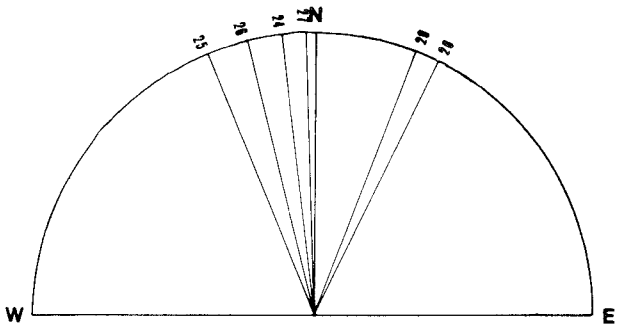
第10号住居跡出土土器は第Ⅱ群土器で、北部地区に単独で検出された住居跡から出土したもので、大生郷遺跡においては本住居跡以外に認められていない。住居跡は方形の平面形を呈し、柱穴・炉跡などは確認されず、住居跡として不明瞭な部分も多くみられる。出土土器は前述のように第Ⅱ群土器で、微隆帯によって曲線的な区画がなされて縄文が施文される中期末の加曽利ＥⅣ式土器である。

縄文時代のその他の遺構として土壙２基があげられる。第１号土壙は南部地区の谷頭の奥に位置し、ヤマトシジミが検出され、さらに下層の床付近からは灰と焼土が検出されている。出土土器は第Ⅰ群土器２類１種で、住居跡同様黒浜期のものと考えられる。床付近の灰・焼土は煮沸用のものと考えられるが、ヤマトシジミが出土したことから土壙の用途が推察できる。第３号土壙は北部地区の谷頭東部に位置し、第11号住居跡と隣接して確認された土壙である。出土土器は胎土中に繊維を含む第Ⅰ群土器であるが、文様構成的には諸磯ａ式土器のものと近似している。また、復元実測の結果、大形の深鉢形土器であることが判明した。これらの土器群は、勝田市遠原貝塚出土の第３群土器中の一部に類似が認められ、今後の資料の増加を待つものである。

古墳時代の住居跡は12軒が確認され、南部地区においては縄文時代の住居跡群と同様に東に入り込む浅い支谷の奥に分布している。また、北部地区においては北の谷頭を中心として広範囲に点在している。これらのまとまりは、南の第13～16号住居跡、第18～21号住居跡、第22・23号住居跡で、第17号住居跡が中央部に位置している。

各住居跡はほとんど方形を呈し、第19号住居跡は長方形を呈している。全体的に床は軟弱なもので、炉跡もほとんど不鮮明である。柱穴も基本的には４柱の主柱穴がみられるが、不鮮明なも含まれている。貯蔵穴はほとんどの住居跡にみられ、南西コーナー部に位置しているものが多く全部の住居跡が火災に遭遇した痕跡を残している。規模としては、一辺６～７ｍほどの大きさを有するものが一般的で、第15・16・19・23号住居跡が大型の住居跡である。主軸方向は北を中心として西に傾くものが多く、北北西方向のものがほとんどである。

住居跡のまとまりの状況から南のグループをＡ群、北のグループをＢ群として２分してそれぞれの群内での特徴をみれば、大型住居跡の存在があげられる。Ａ群において第16号住居跡は11.5




**第110図　住居跡主軸表（大生郷第Ⅳ期）**

×11.4ｍの方形の平面形を有し、さらに、第15号住居跡は9.6×9.5ｍの規模を有している。Ｂ群においては第23号住居跡が最大規模のもので11.9×11.7ｍの大きさを有している。さらに、第19号住居跡が9.3×6.4ｍで第15号住居跡と類似している。Ａ・Ｂ両群においては大型住居跡の存在が注目され、Ａ群における第15・16号住居跡とＢ群における第19・23号住居跡の共通性を充分考慮すべきであろうと考えられる。

各住居跡の遺物についてみれば、壺形土器・甕形土器・坏形土器・高坏形土器・椀形土器・鉢形土器・坩形土器などの器種がみられ、それぞれの住居跡でのセット関係は多様である。これらの土器群で注目されるのは高坏土器であり、Ａ群第16号住居跡から多数出土している。さらに坩形土器も他の住居跡と比較すると多く、祭祀的な性格の濃い住居跡と考えられる。Ｂ群の第23号住居跡は、第16号住居跡と同規模の住居跡であるが、他の住居跡と比較すればやはり高坏形土器の出土量が多く、性格的に第16号住居跡との類似性が多くみられる。

第17号住居跡はＡ・Ｂ群のほぼ中間に位置した住居跡で、球状土錘が24個ほど検出されている。この球状土錘は、手網などの錘として利用されたもので、飯沼水系での当時の漁撈活動の一端をうかがうことができる。そのほかの遺物としては石製模造品があり、第14・17・23号住居跡から出土している。

古墳時代に位置ずけられたこれらの住居跡は、前期的な様相を一部に残しているが和泉式土器の特徴を示した土器群を出土し、和泉期に編年されるものである。住居跡以外では第２号土壙を同時期のものと考えられ、1.5ｍ内外の楕円形を呈する本土壙内から壺形土器・甕形土器が出土している。その性格については明確に理解されていないが、貯蔵穴的なものとも考えられるが、覆土中より出土した石製模造品（勾玉）の存在が注目される。

歴史時代の住居跡は６軒が南部地区に確認され、縄文時代および古墳時代Ａ群と同様に分布が認められる。これらもひとつのまとまりとしてとらえることが可能であり、規模は3.5～4.8ｍほどの方形を呈した平面形を示している。主軸方向は北方向を示したものが多く、竈も北壁に構築されている。床は良く踏み固められた状態を示したものが多い。柱穴は明確に床面に確認されるものは少なく、住居跡外部にその存在を求めなければならない。

出土遺物は完形品およびそれに近い状態の出土は少なく、土師器と須恵器が伴出している。これらの破片の出土量を分類すると、須恵器の出土率はほとんど10%内外であり、第25号住居跡においては45%の比率がみられた。また、完存率の高いものは、第24号住居跡において須恵器80%・土師器20%であり、破片の比率は６%・94%と逆転している。この須恵器と土師器の比率の問題は、器種などの差によっても異なるが、今後充分に検討しなければならない問題点であろう。そのほか、第24号住居跡から管状土錘が17個ほど出土し、古墳時代第17号住居跡同様に漁撈活動を考慮する必要がある。

大生郷遺跡から検出された集落跡は、それぞれ時間的な間隔をおいて営まれたということができ、概略的にⅠ～Ⅳ期に分類すれば第Ⅰ期は縄文時代前期の黒浜期の住居跡群で、ヤマトシジミを出土した土壙もこの時期に位置づけることができる。第Ⅱ期はそれほど明確なものではないが縄文時代中期末の加曽利ＥⅣ期である。第Ⅲ期は古墳時代中期の和泉式土器を出土する住居跡群が位置づけられる。大生郷遺跡の第Ⅲ期にはＡ・Ｂの２つの住居跡群がみられ、それらの例からみて５～６軒ほどの住居跡がひとつの集落単位を構成するものであると考えられる。しかし、Ａ・Ｂの群についての同時性を明確に把握することはできない。これらの群における大型住居跡は、その群の主体的な住居として存在していたと考えられる。第Ⅳ期は６軒からなる集落で、第Ⅰ・Ⅲ期同様に単一時期の集落としてとらえることができ、８世紀中葉から８世紀後半の時期に位置づけることができる。

これらの遺構については、今後も充分な検討が必要であり、周辺地域の資料の増加とともに分析されていく資料となりうるであろう。

## 住 居 跡 一 覧 表

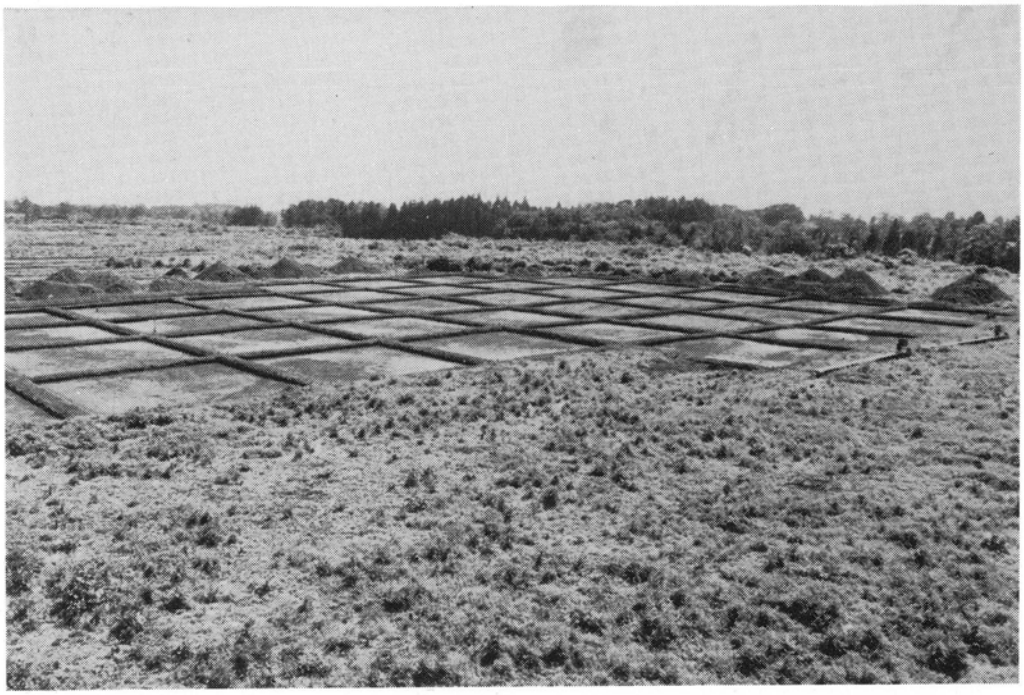
| 住居跡 | 地区 | 主軸方向 | 平面形 | 規模(m) | 面積(m²) | 炉竈 | 柱穴 | 貯蔵穴(cm) | 火災 | 出土遺物 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | G48区 | N-83°-E | 楕円形 | 5.6×5.1 | 19.6 | | 3 | | | 縄文土器 1446片 石22 | 縄文時代 前期 |
| 2 | L45区 | N-28°-W | 隅丸方形 | 6.46×5.65 | 38.0 | | | | | 〃 1081片 軽石1 | 〃 〃 |
| 3 | L45区 | N-84°-W | 長方形 | 5 ×3.5 | 13.2 | | 1 | | | 〃 558片 石4 | 〃 〃 |
| 4 | N44区 | N-35°-W | 長方形 | 6.3×5.6 | 24 | | 2 | | | 〃 2137片 石11 | 〃 〃 |
| 5 | I43区 | N-8°-E | 楕円形 | 6.3×5.6 | 15.8 | | 5 | | | 〃 219片 軽石2 | 〃 〃 |
| 6 | I42区 | N-1°-E | 隅丸方形 | 5.8×5.3 | 19.0 | | 13 | | | 〃 520片 石2 | 〃 〃 |
| 7 | I42区 | N-4°-E | 隅丸方形 | 5.7×5.4 | 21.1 | | 16 | | | 〃 661片 軽石2 | 〃 〃 |
| 8 | K39区 | N-24°-E | 方形 | 3.8×3.5 | 10.4 | | | | | 〃 133片 | 〃 〃 |
| 9 | R38区 | N-4°-E | 不定長方形 | 5.5×4 | 19.0 | | 7 | | | 〃 34片 | 〃 〃 |
| 10 | K9区 | N-33°-W | 方形 | 4.1×3.6 | 10.7 | | | | | | 〃 中期 |
| 11 | D3区 | N-25°-W | 方形 | 6.09×5.92 | 32.6 | | 6 | | | 〃 1594片 | 〃 前期 |
| 12 | L46区 | N-78°-E | 方形 | 7.08×6.6 | 42.6 | | 9 | | ○ | (土師器) 壺2.小形壺1.高坏2 椀2.坏1.鉢1 | 古墳時代 和泉期 |
| 13 | M45区 | N-12.5°-W | 方形 | 5.08×4.8 | 21.6 | | 6 | 90×70×40 | ○ | 〃 甕1.複合口縁壺1 坩1.小形壺1.椀1 | 〃 〃 |
| 14 | L44区 | N-23°-W | 方形 | 6.65×6.6 | 41.2 | | 9 | 70×60×45 | ○ | 〃 坩1.壺1.坏2 椀5.土錘2.勾玉1 | 〃 〃 |
| 15 | O43区 | N-24°-W | 方形 | 9.64×9.5 | 82.4 | | 9 | | ○ | 〃 坩1.坏2.椀2 | 〃 〃 |
| 16 | L41・L42区 M41・M42区 | N-18°-W | 方形 | 11.5×11.4 | 131.1 | | 11 | 100×100×60 | ○ | 〃 坩5.坏2.椀1 高坏18 壺 甕 | 〃 〃 |
| 17 | I27区 | N-44.5°-W | 方形 | 6.7×6.4 | 41.4 | | 4 | 105×55×45 | ○ | 〃 高坏2.椀4.坩2 球状土錘多数 | 〃 〃 |
| 18 | K15区 | N-31°-W | 方形 | 6.1×6.0 | 34.8 | | 4 | 96×56×45 | ○ | 〃 高坏1.小片 | 〃 〃 |
| 19 | N13区 | N- | 長方形 | 9.3×6.4 | (56.8) | | 2 | 117×75 | ○ | 〃 椀2.坩. 壺 | 〃 〃 |
| 20 | H9区 | N- | 方形 | 5.7×5.1 | | ○ | | | | 〃 坩2.椀1.土錘1 | 〃 〃 |
| 21 | L5区 | N-75°-W | 方形 | 5.1×5.0 | 24.0 | | 3 | | ○ | 〃 椀2.坏1 球状土錘4 | 〃 〃 |
| 22 | E3区 | N-21°-W | 方形 | 5.14×5.13 | 25.2 | | 2 | 50×50 | ○ | 〃 高坏2 球状土錘1 | 〃 〃 |
| 23 | C1区 | N-9°-W | 方形 | 11.9×11.7 | 135.4 | | 15 | | ○ | 〃 坩1.高坏4.鉢2 椀3.壺1 | 〃 〃 |
| 24 | H46区 | N-7°-W | 方形 | 4.3×4.0 | 15.5 | ○ | 2 | | | (須恵器) 坏8 (土師器) 坏2.管状土錘17 | 歴史時代 国分期 |
| 25 | H47区 | N-22.5°-W | 方形 | 4.3×4.1 | 15.5 | ○ | 2 | | | (須恵器) 坏2.盤1 | 〃 〃 |
| 26 | J47区 | N-14°-W | 方形 | 4.8×4.2 | (14.2) (11.5) | ○ | 8 | | | 〃 坏壺1.砥石1 | 〃 〃 |
| 27 | N47区 | N-2°-W | 方形 | 3.6×3.6 | 9.14 | ○ | 4 | | | (須恵器) 坏1 (土師器) 球状土錘1 | 〃 〃 |
| 28 | N45区 | N-26°-E | 長方形 | 3.8×3.3 | 11.1 | ○ | 2 | | | 土師器片 | 〃 〃 |
| 29 | J44区 | N-21°-E | 方形 | 3.5×3.2 | 9.5 | ○ | 1 | | | 土師器 小形甕1 | 〃 〃 |

# 図　　版

遺物写真下の番号は、遺構番号及び図版番号

(例)
12－(2) 1　第12号住居跡の図版(2)－1
SK 2 － 1　第 2 号土壙の図版－1

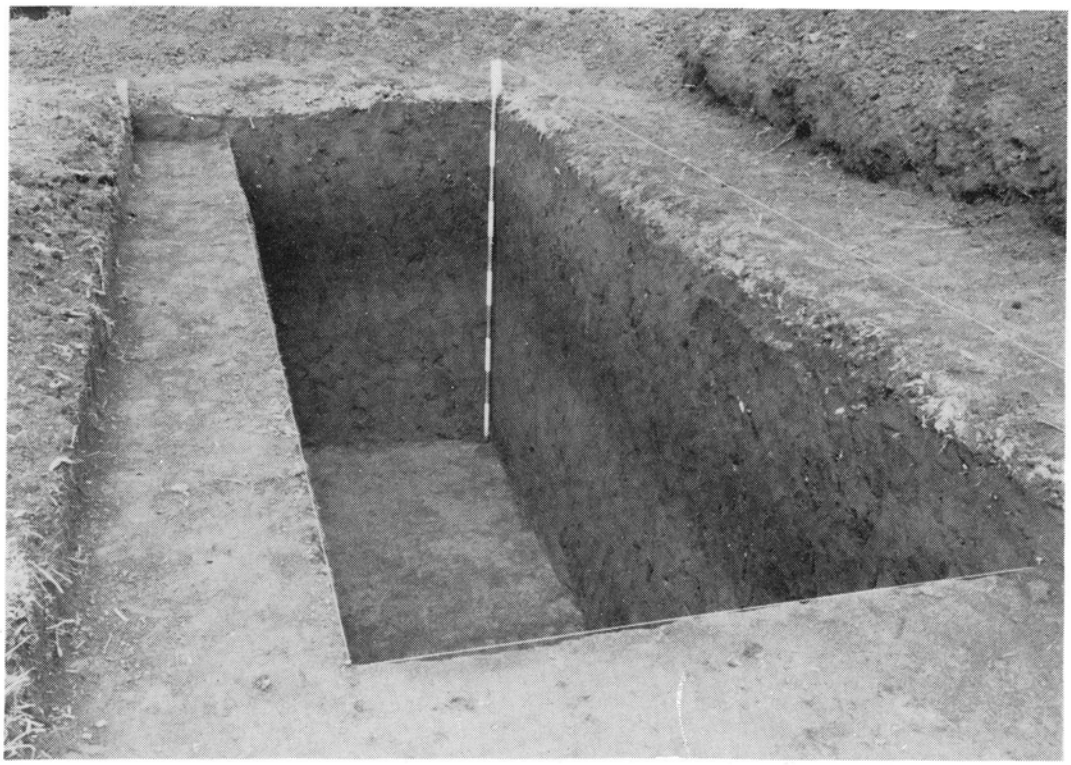
PL1 航空写真（遺跡遠景）



PL2　A地区グリット全景

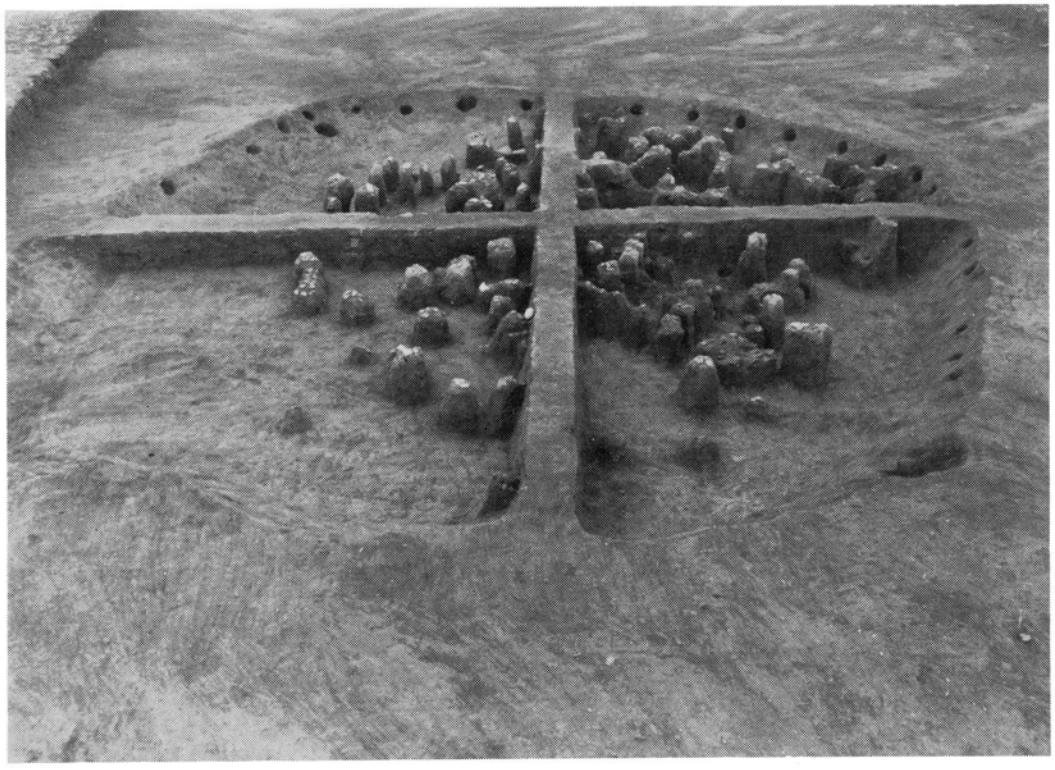
PL3　B地区北部トレンチ全景

PL4　D地区グリット全景



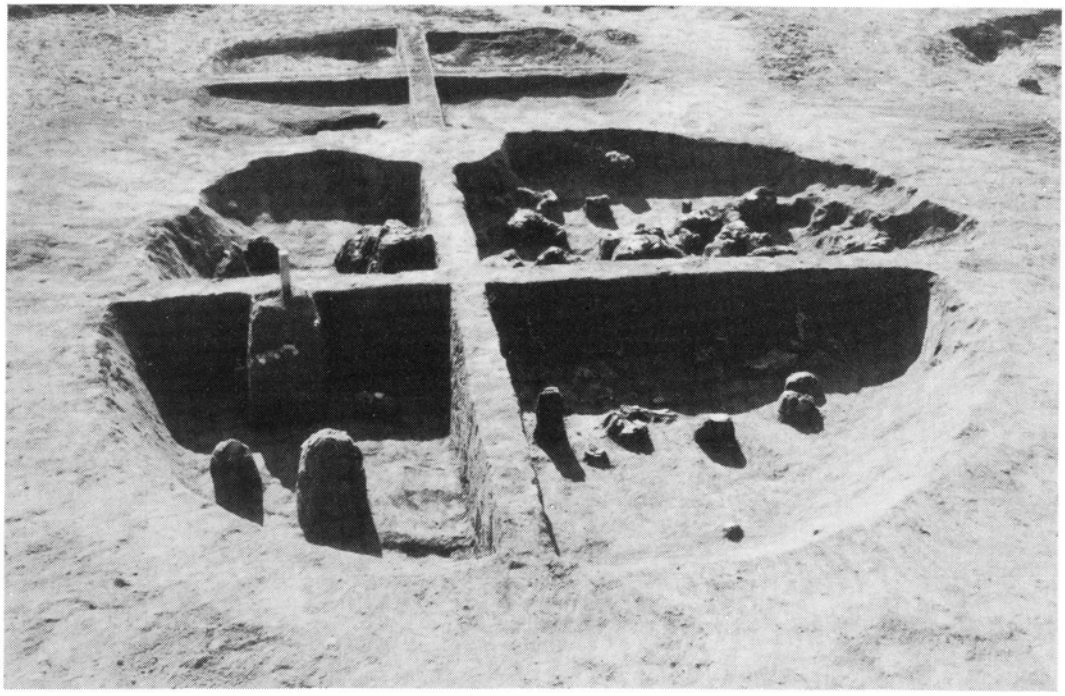
PL5　テストピット

PL 6　第 1 号住居跡遺物出土状況

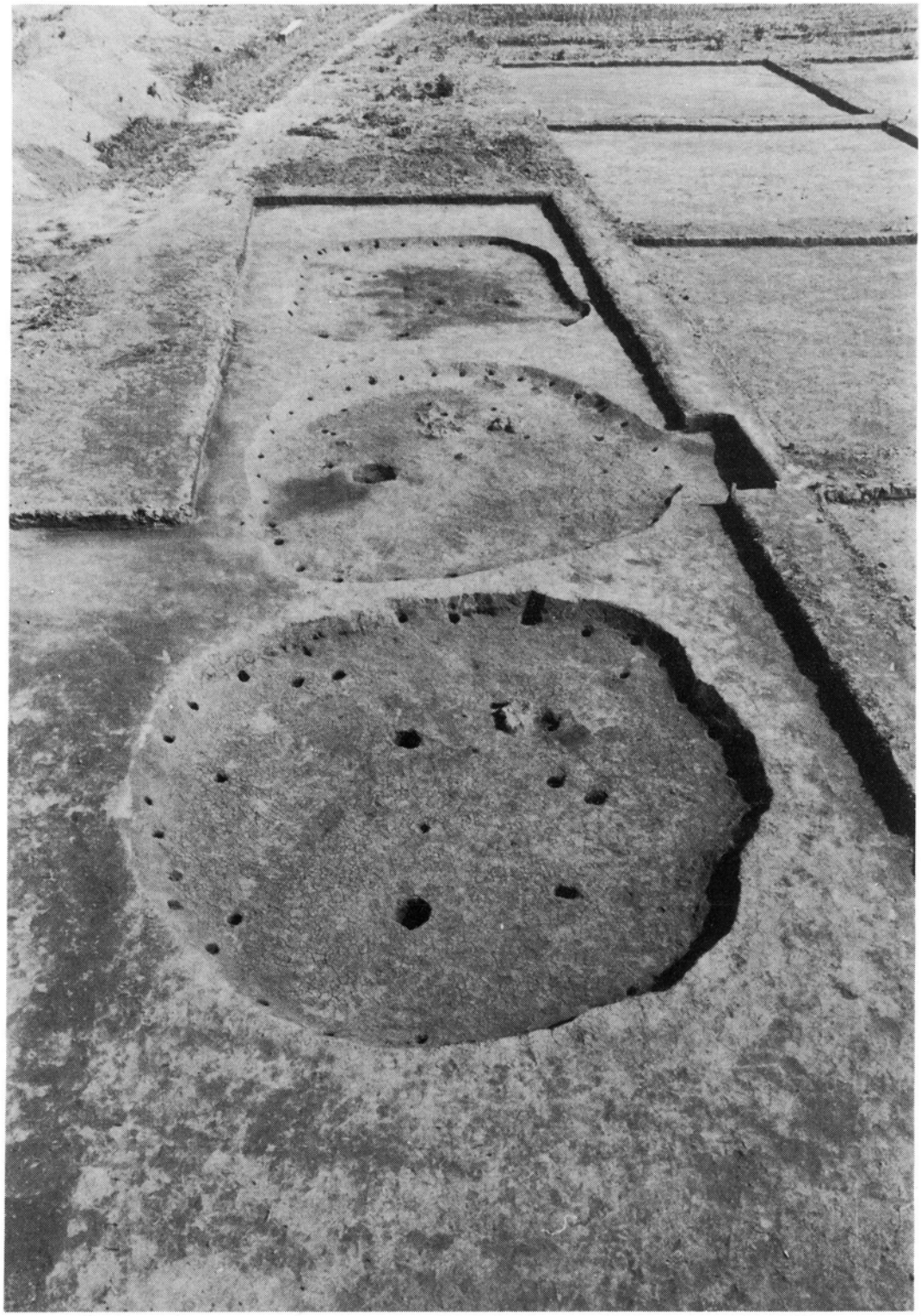


PL 7　第 2 号住居跡遺物出土状況

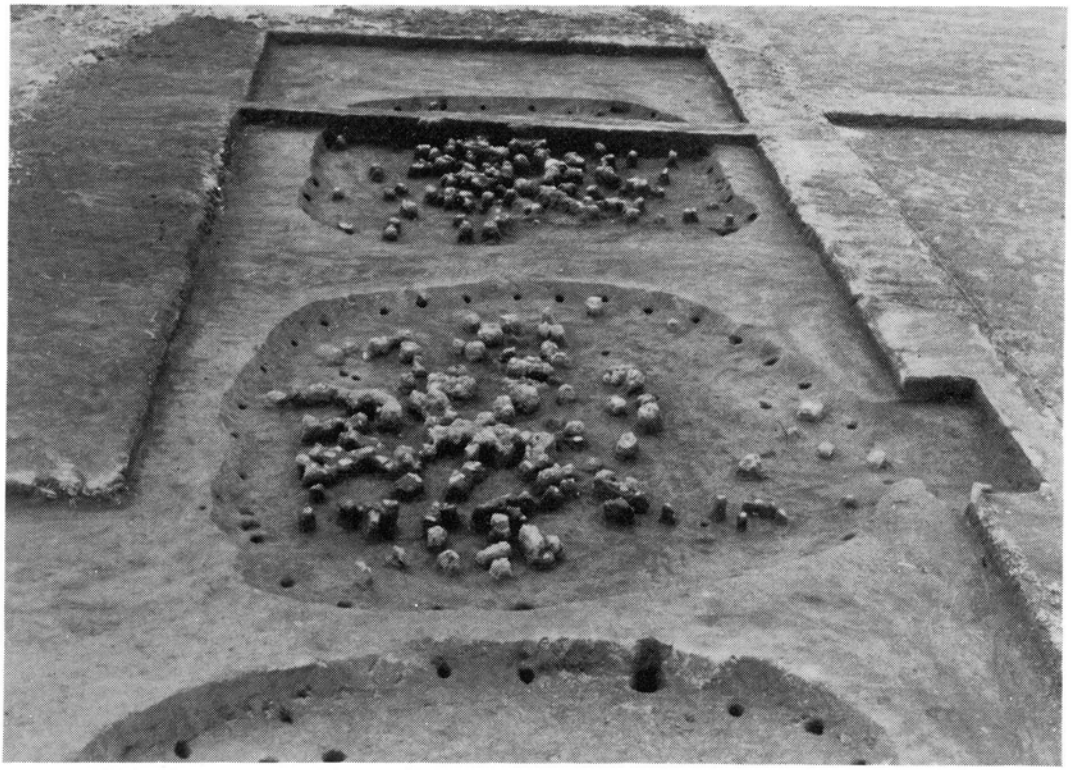
PL8　第　2　号　住　居　跡



PL9　第 4 号住居跡遺物出土状況



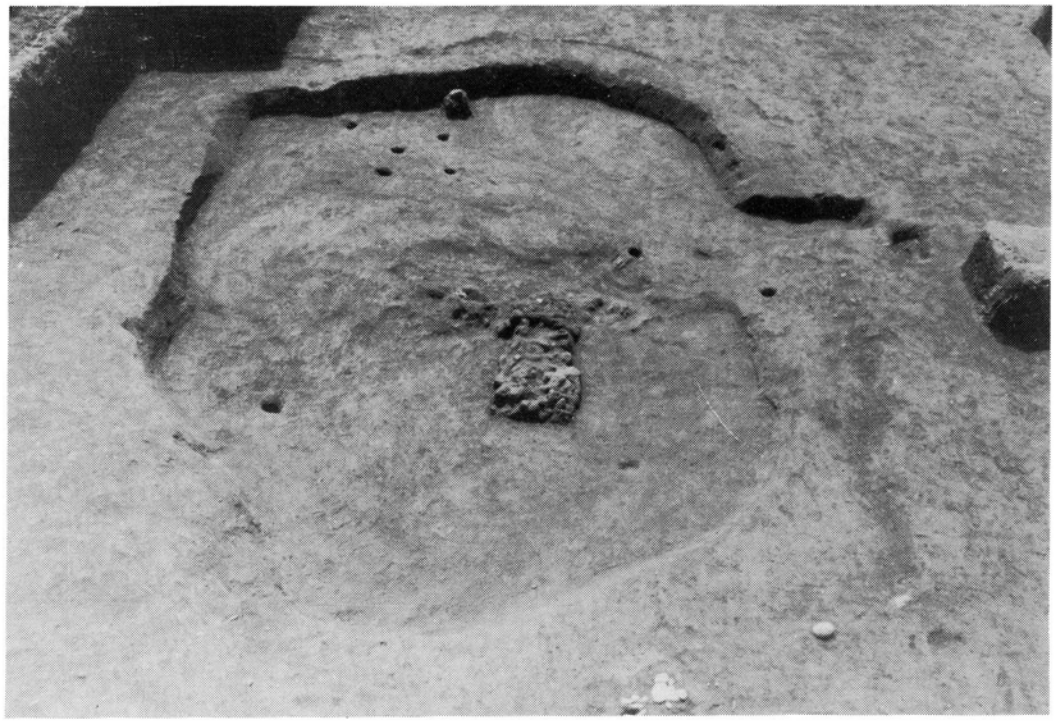
PL10　第5・6・7号　住　居　跡（手前より）



PL11 第 6 号住居跡遺物出土状況

PL12 第 7 号住居跡

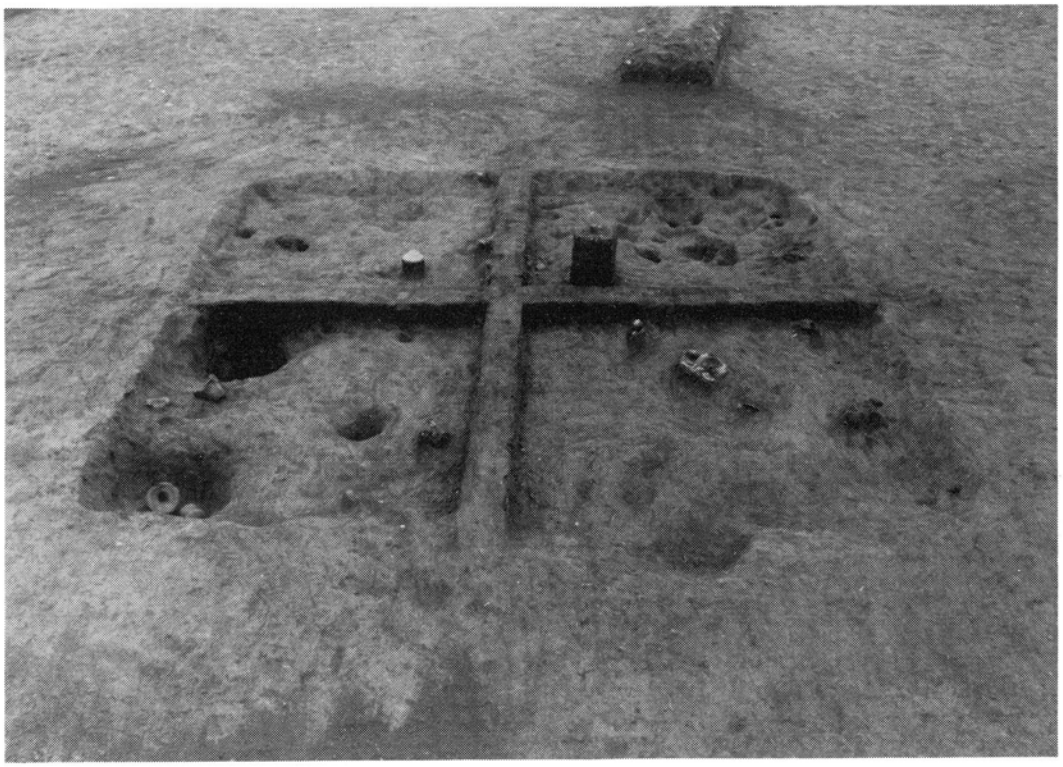
PL13 第 8 号住居跡遺物出土状況



PL14 第 9 号住居跡

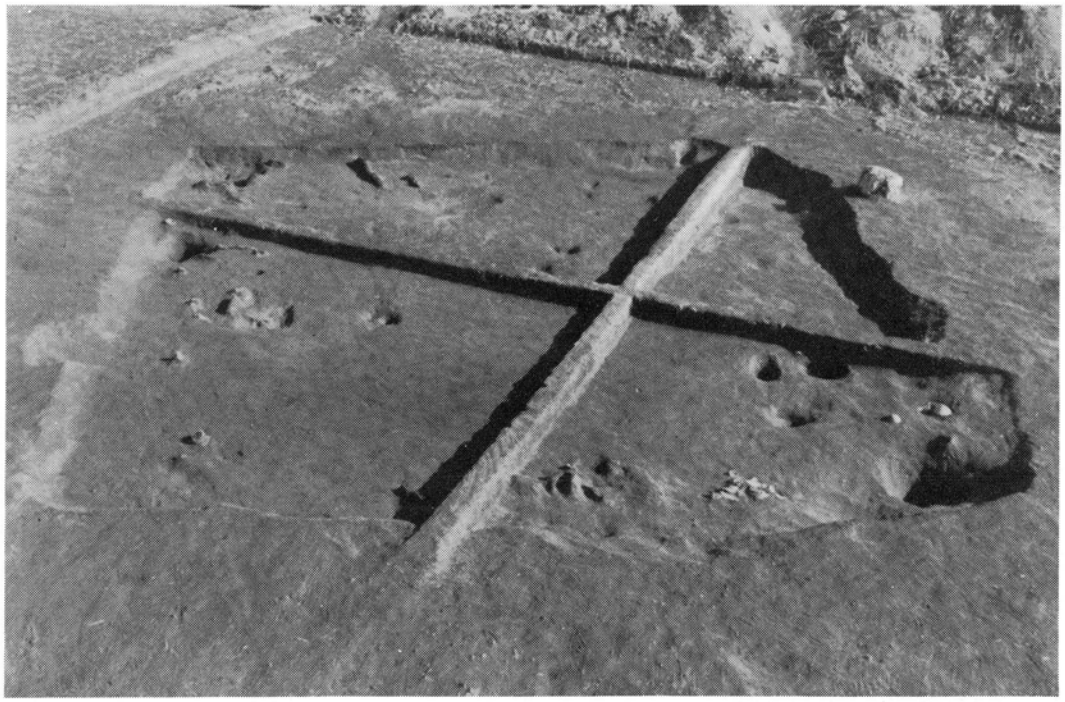
PL15　第11号住居跡遺物出土状況

PL16　第12号住居跡

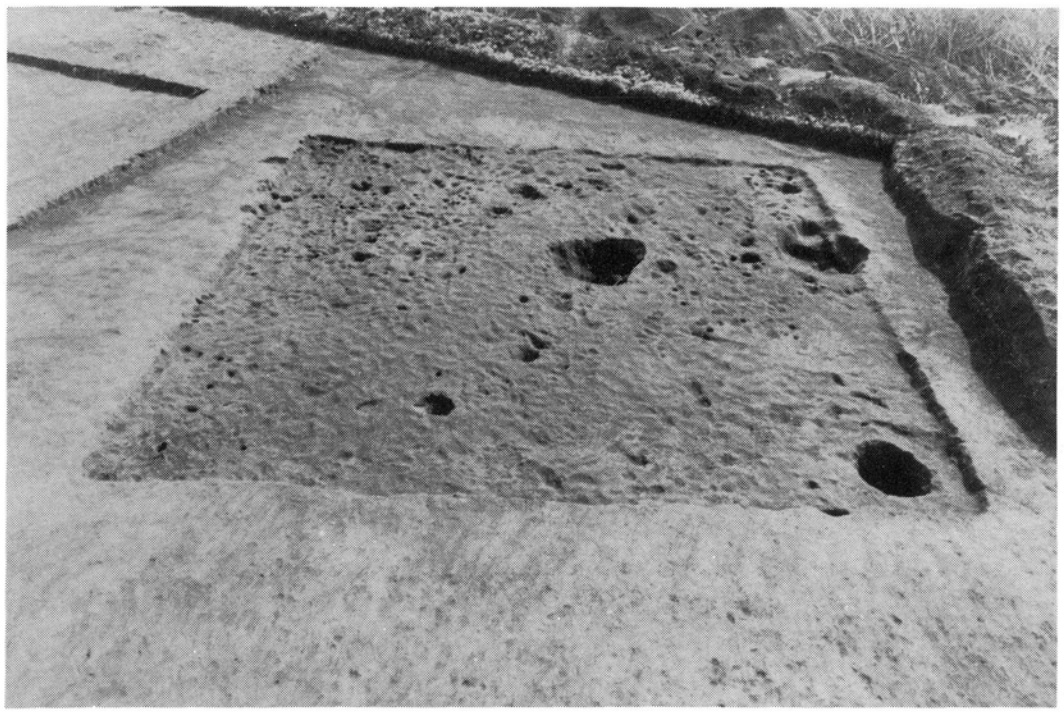


PL17 第13号住居跡遺物出土状況

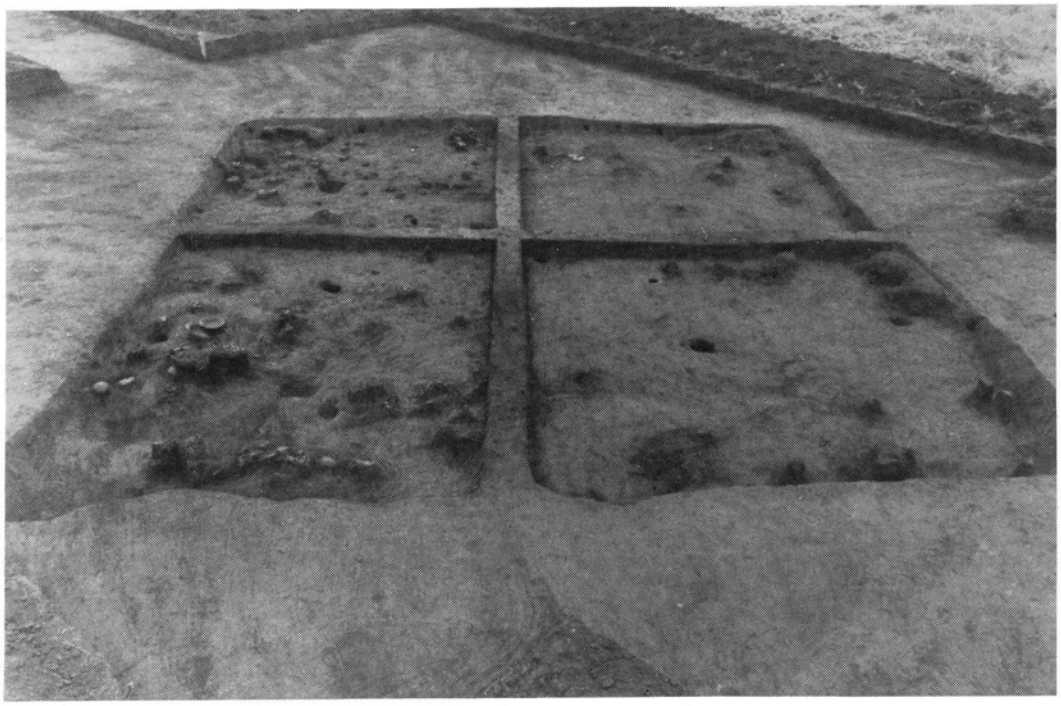
PL18 第 14 号 住 居 跡



PL19 第15号住居跡遺物出土状況



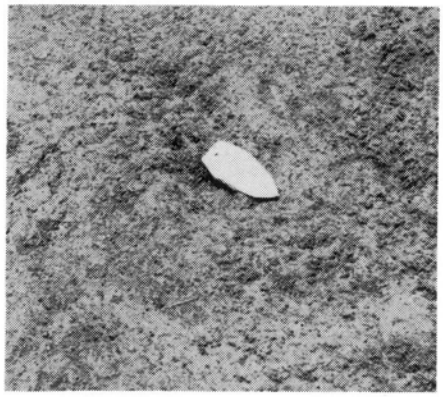
PL20 第 16 号 住 居 跡

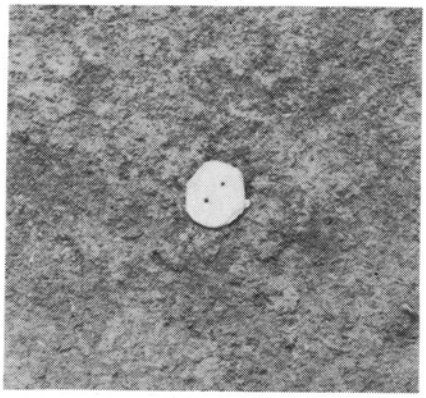


PL21　第17号住居跡遺物出土状況（1）

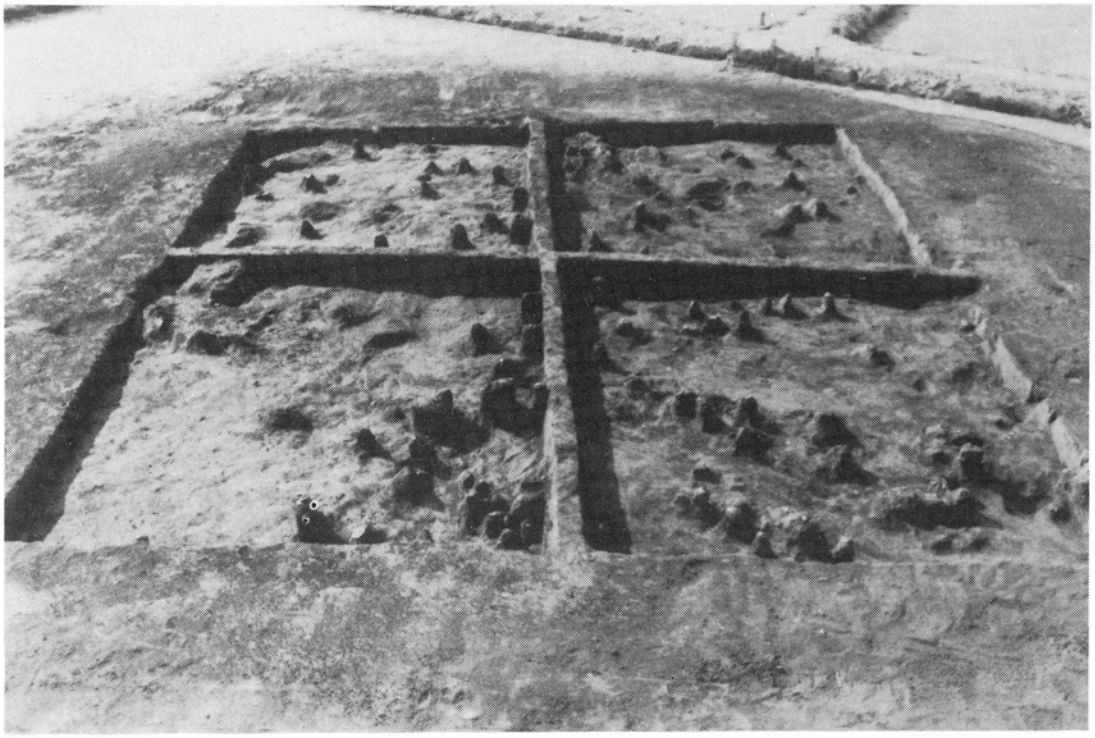
PL22　第17号住居跡遺物出土状況（2）

PL23　第17号住居跡球状土錘出土状況

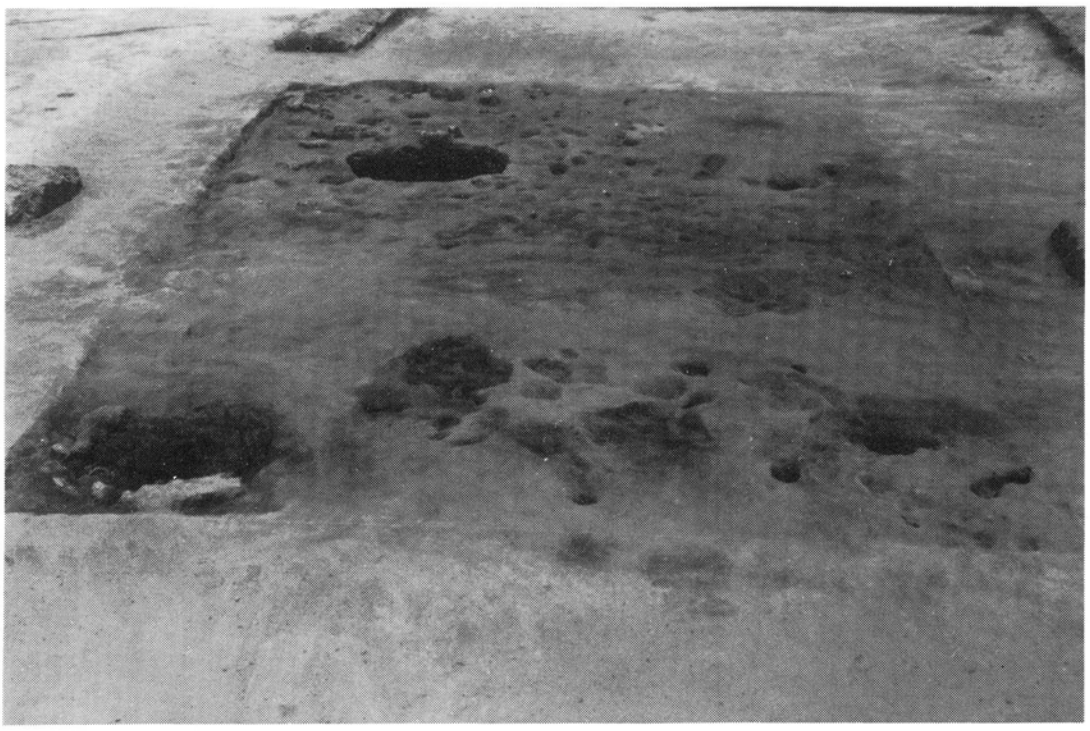




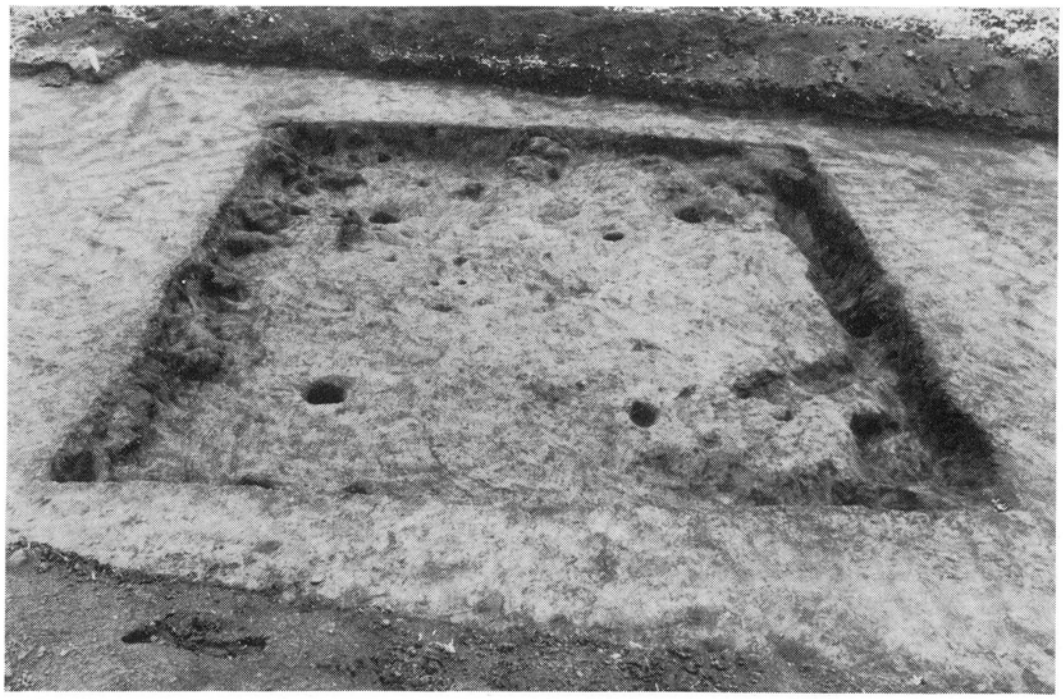
PL24　第17号住居跡石製模造品出土状況



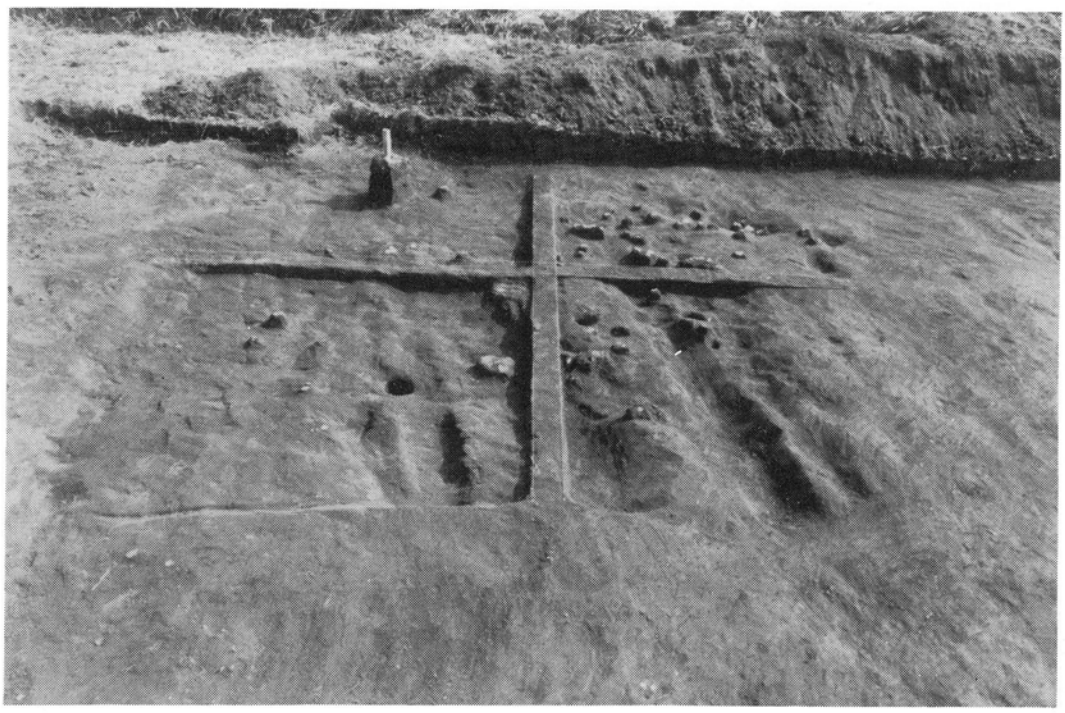
PL25 第18号住居跡遺物出土状況



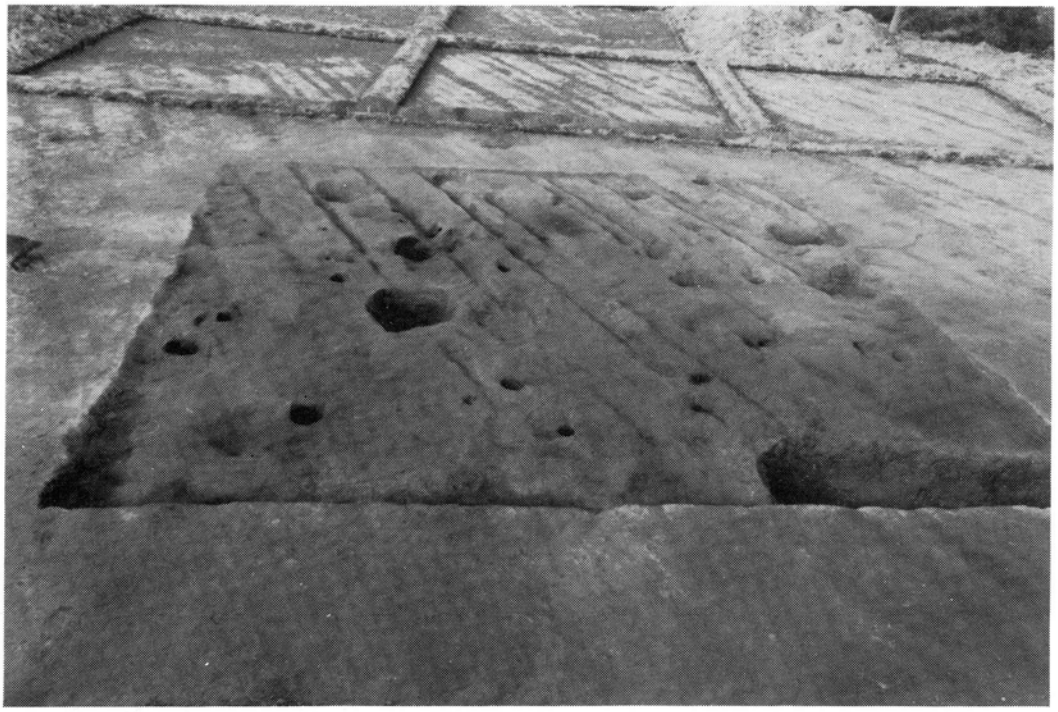
PL26 第19号住居跡



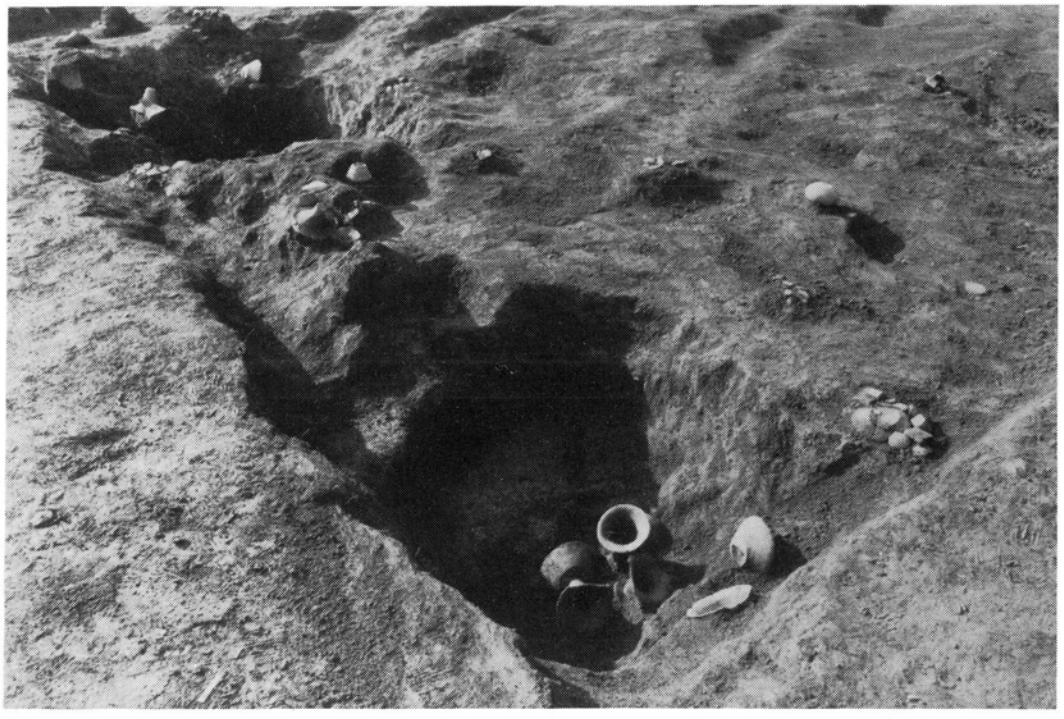
PL27 第 21 号 住 居 跡



PL28 第22号住居跡遺物出土状況



PL29 第 23 号 住 居 跡

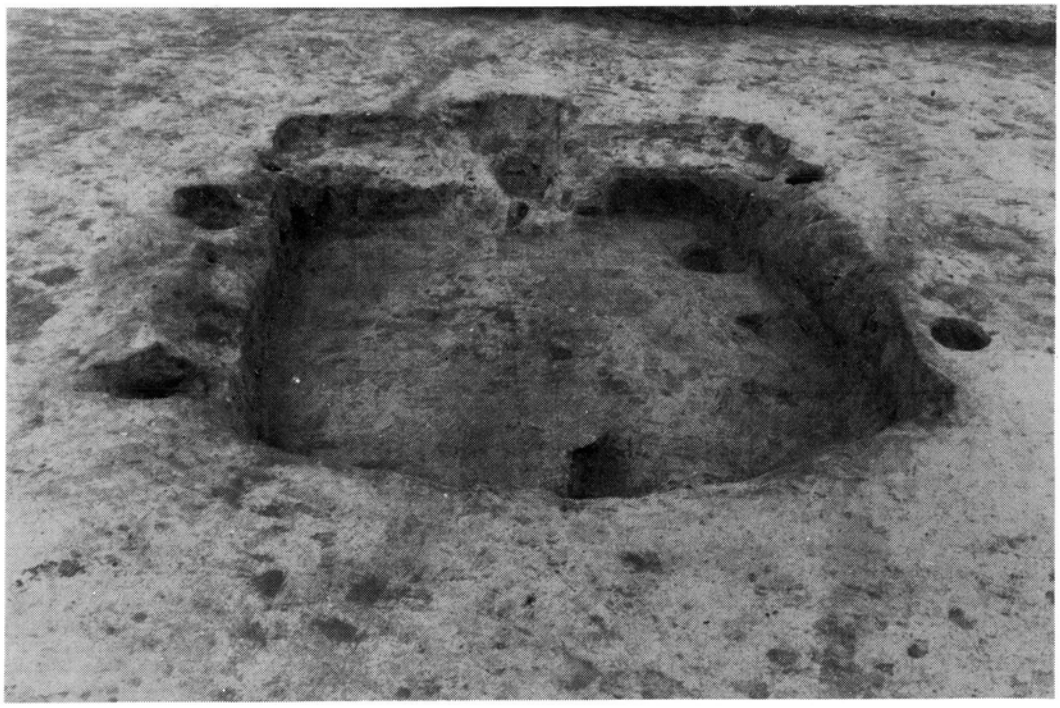


PL30 第23号住居跡遺物出土状況

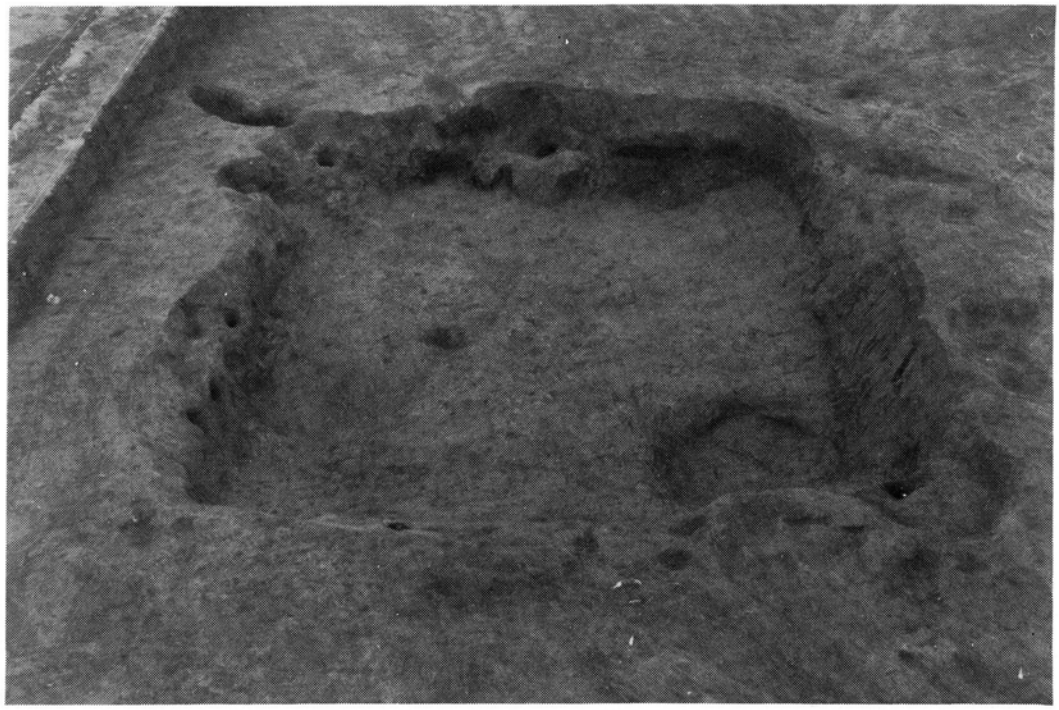
PL31　第24・25号住居跡遺物出土状況

PL32　第24・25号　住　居　跡

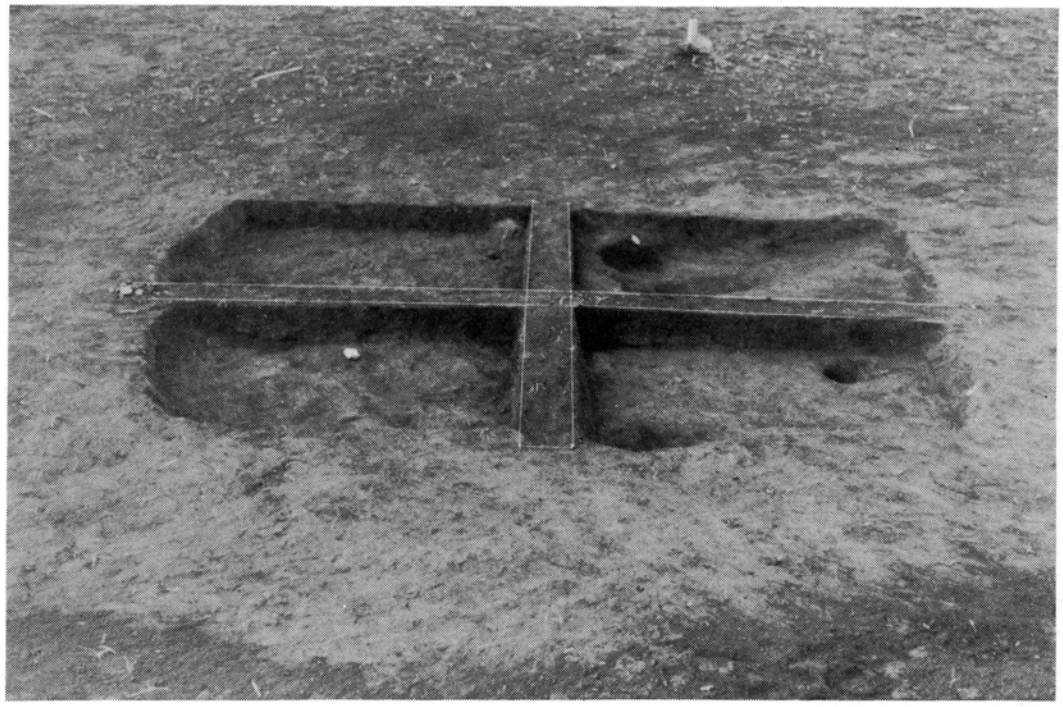
PL33 第26号住居跡遺物出土状況



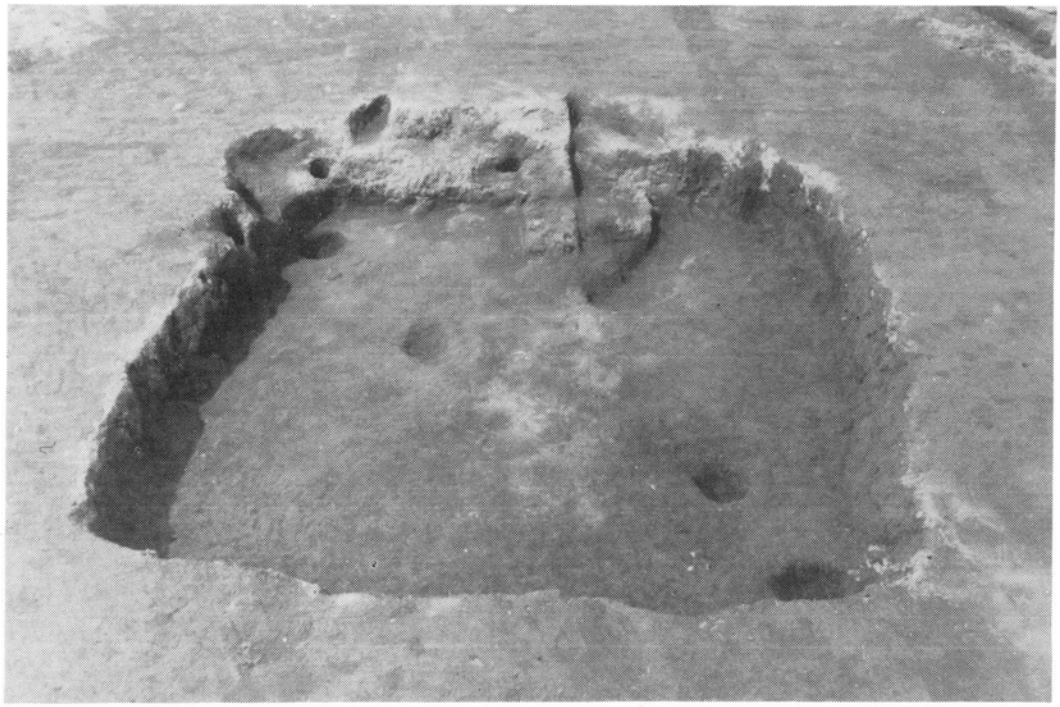
PL34 第26号住居跡



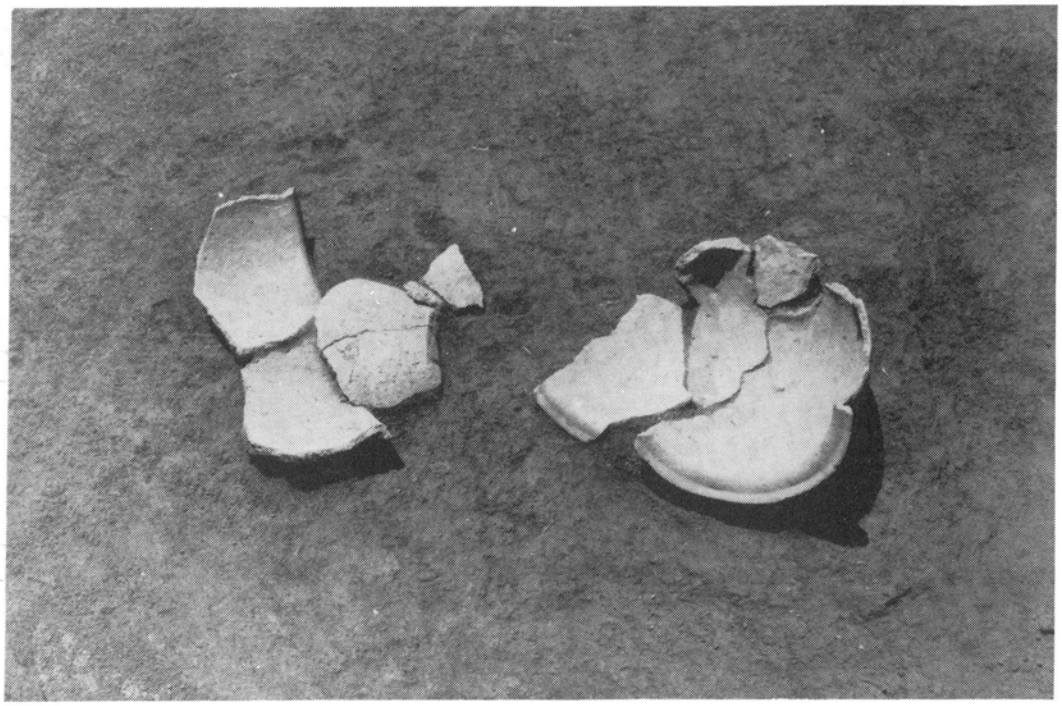
PL35 第 27 号 住 居 跡



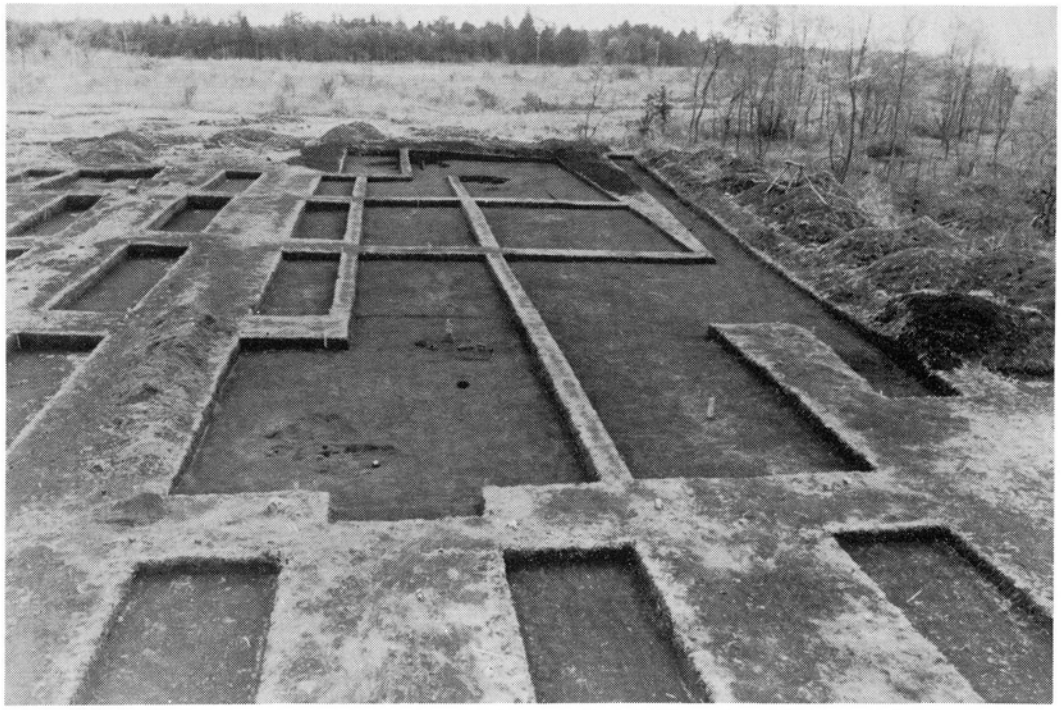
PL36 第 28 号 住 居 跡 土 層 断 面



PL37 第 29 号 住 居 跡

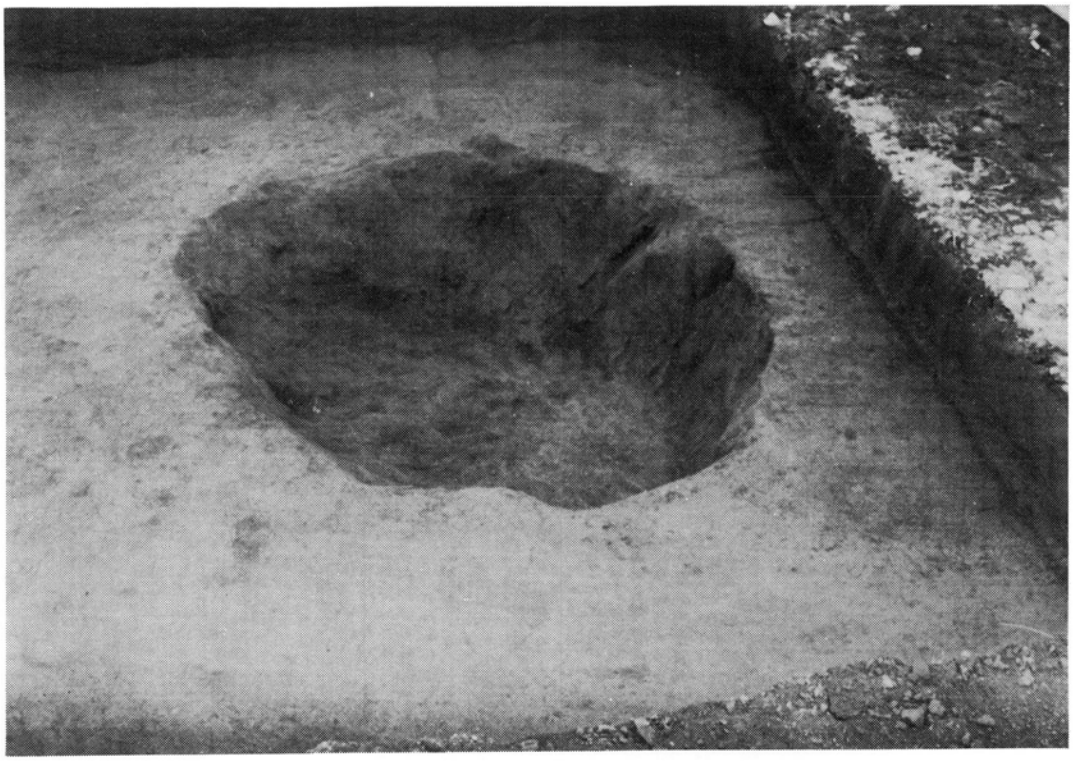


PL38 第29号住居跡遺物出土状況

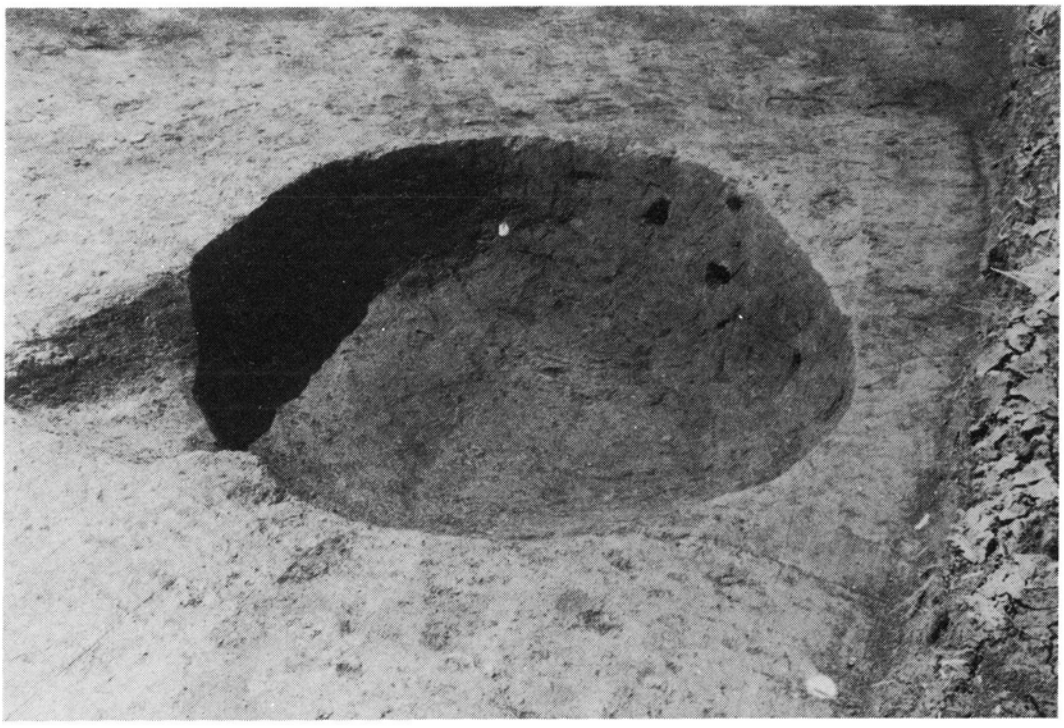


PL39 B地区トレンチ拡張区

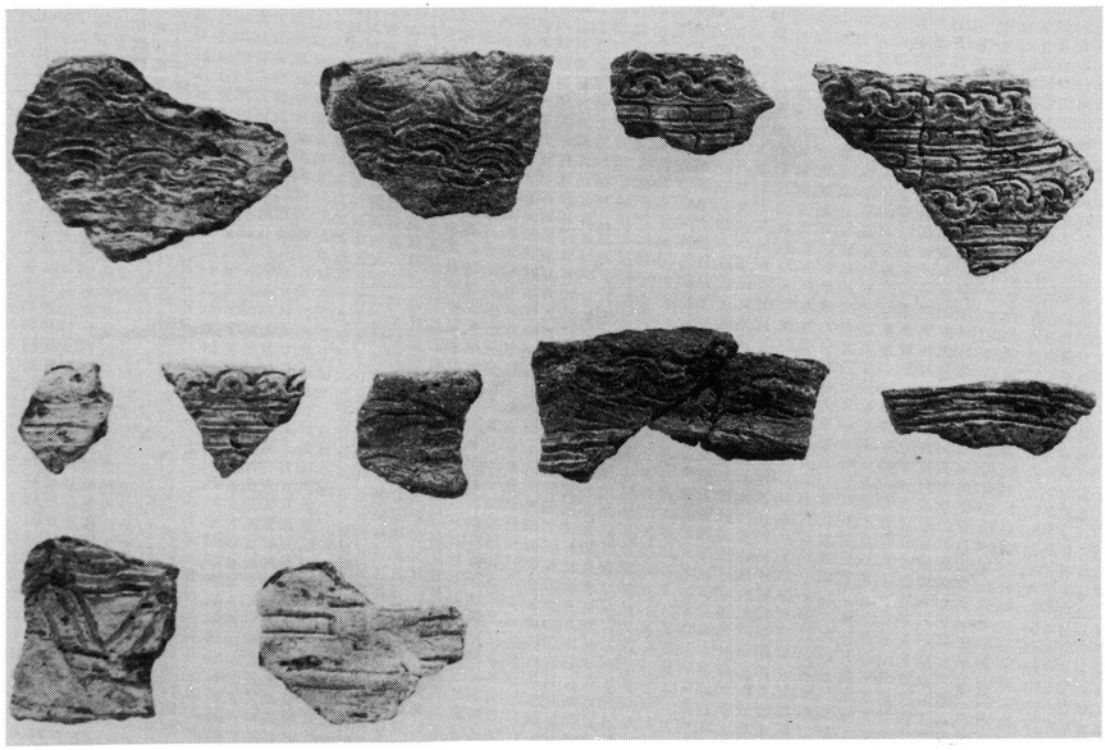
PL40 第 1 号 土 壙



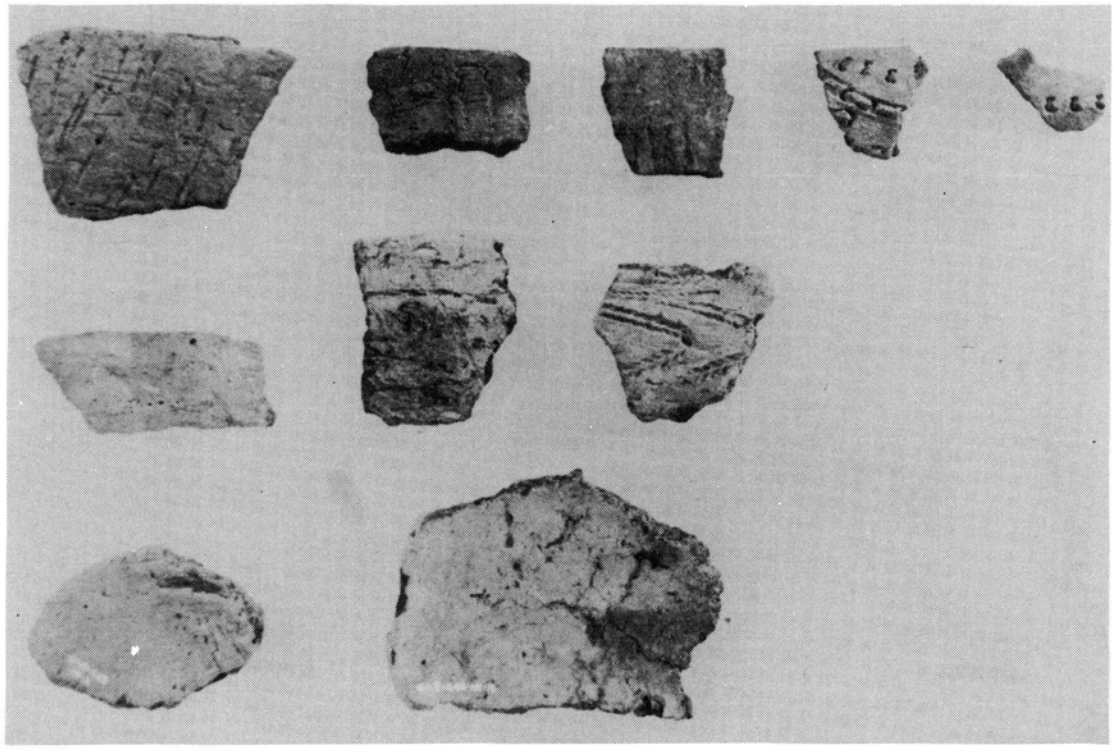
PL41 第 2 号 土 壙



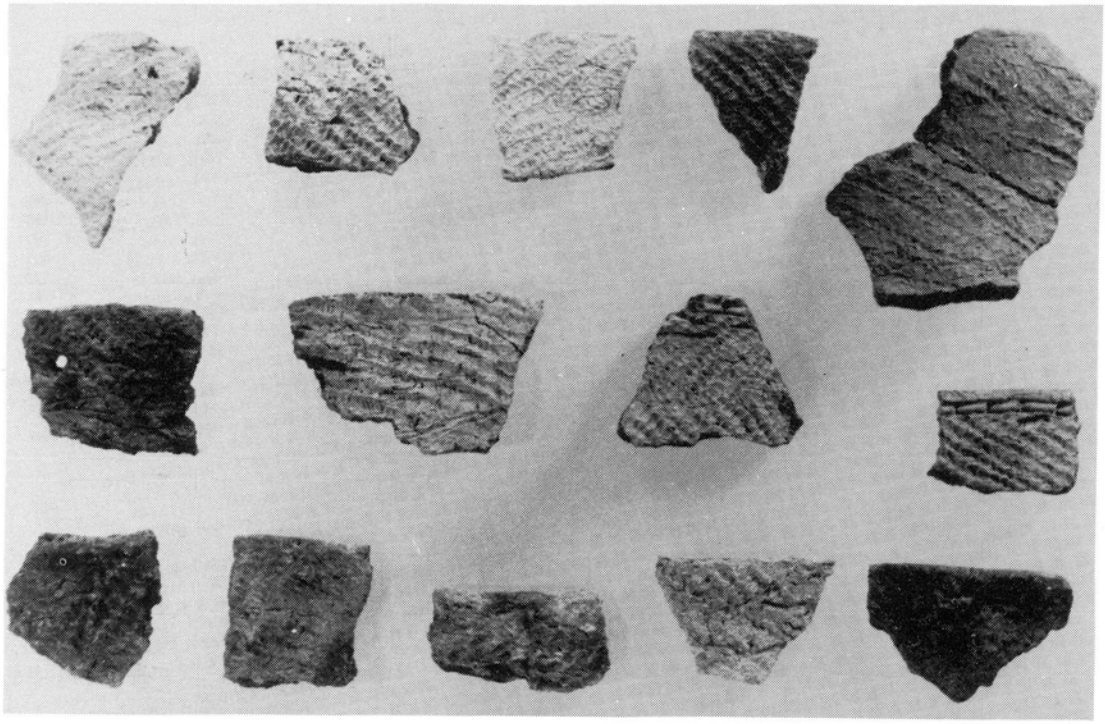
PL42 第 3 号 土 壙



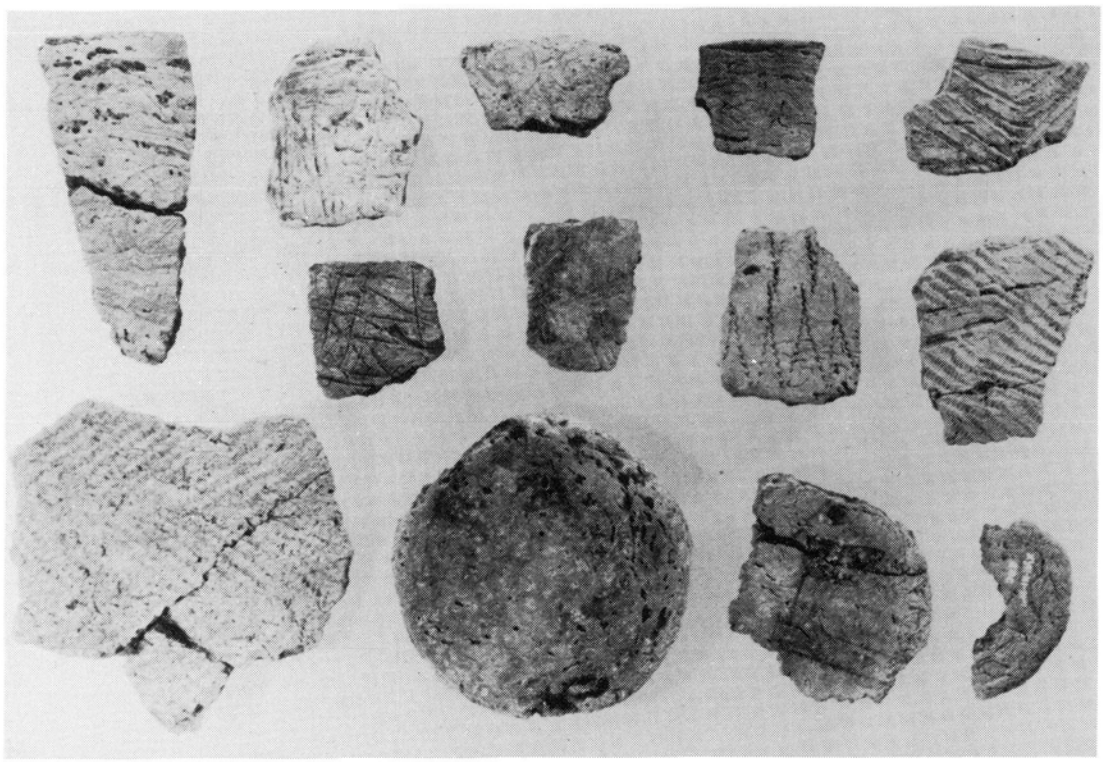
PL43 第 1 号住居跡出土土器



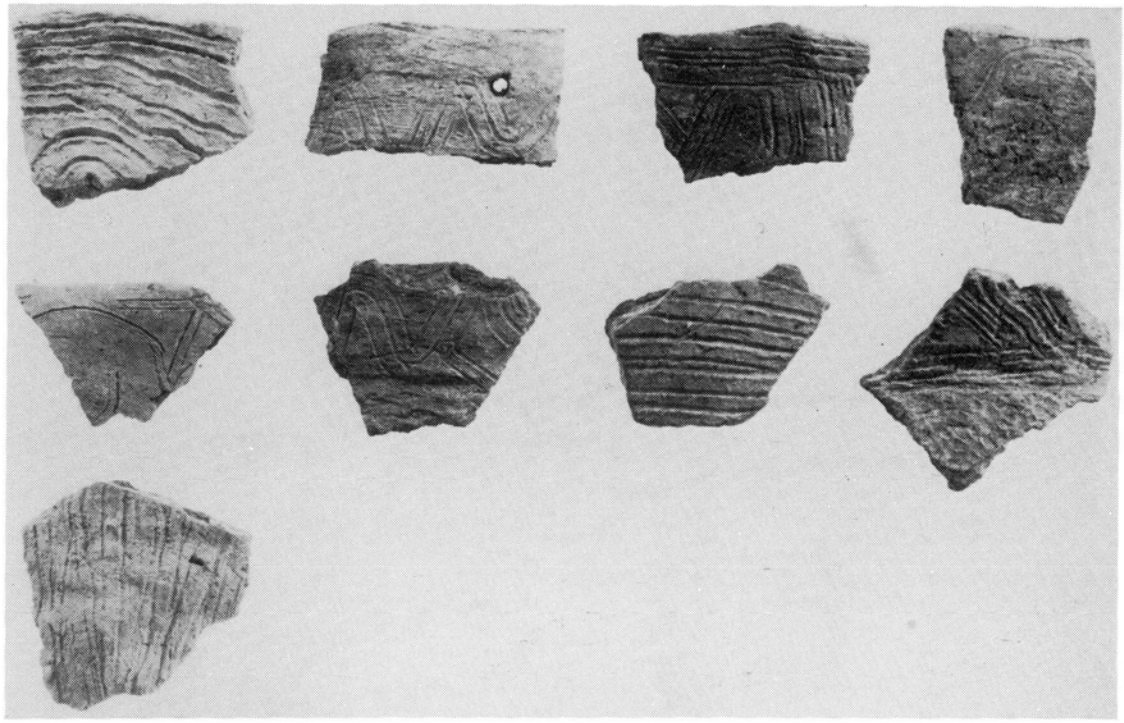
PL44 第 1 号住居跡出土土器



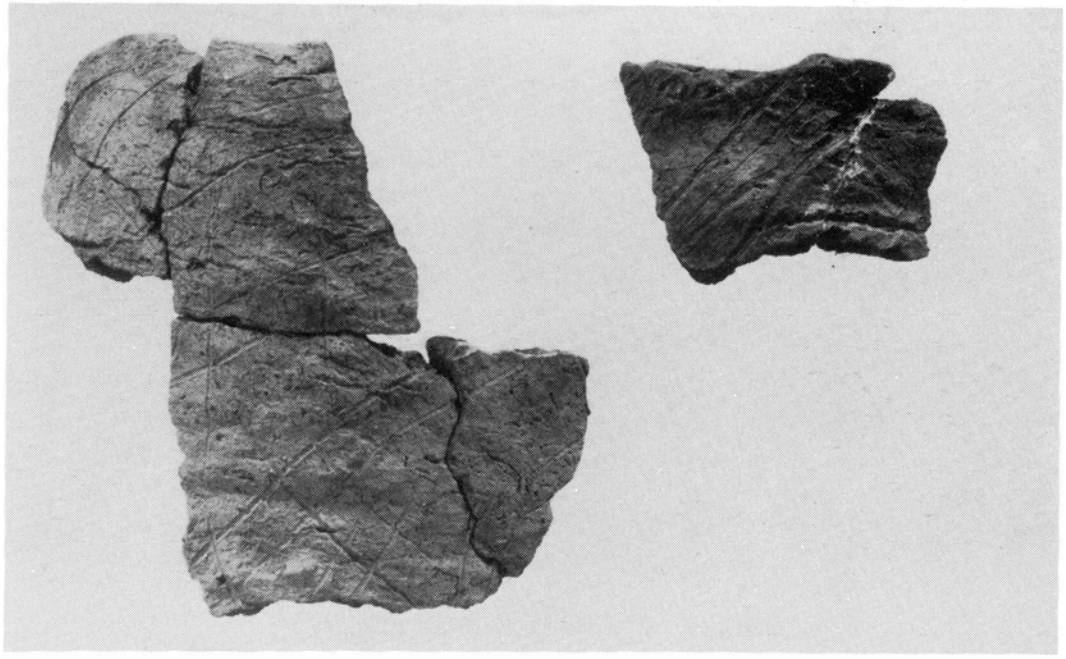
PL45 第 2 号住居跡出土土器



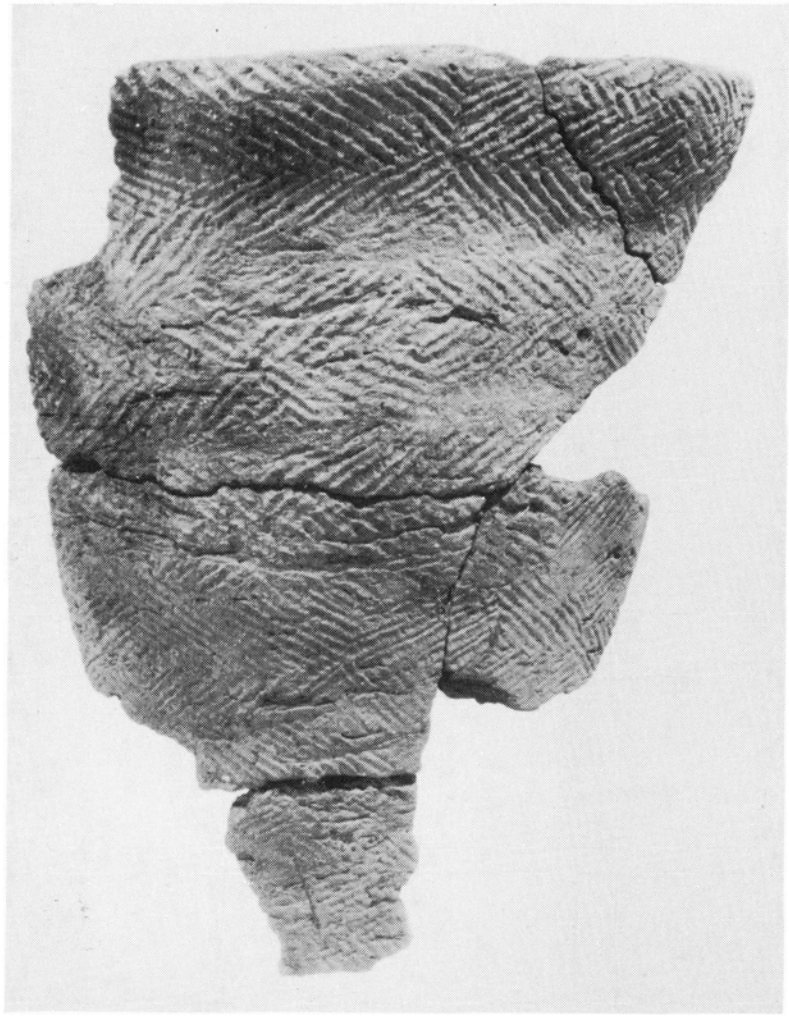
PL46 第 2 号住居跡出土土器

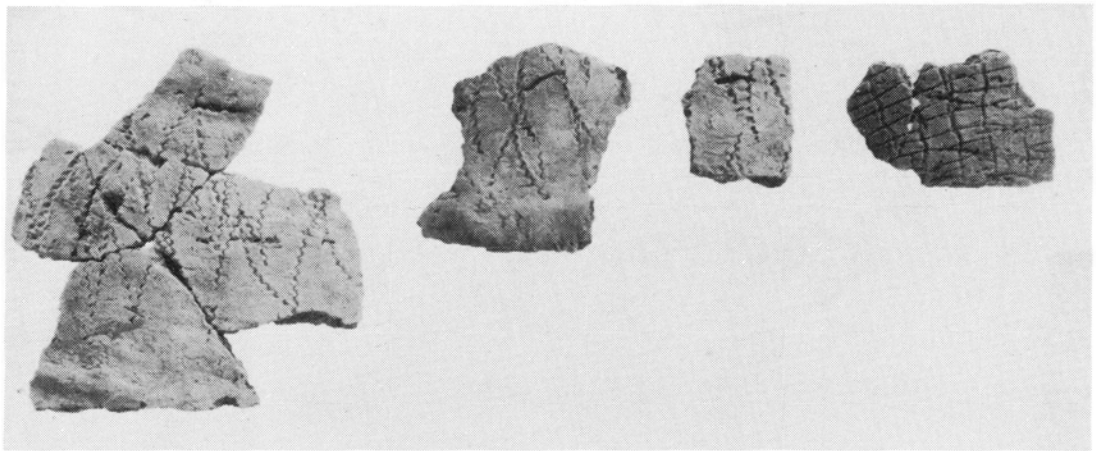


PL47 第 4 号住居跡出土土器

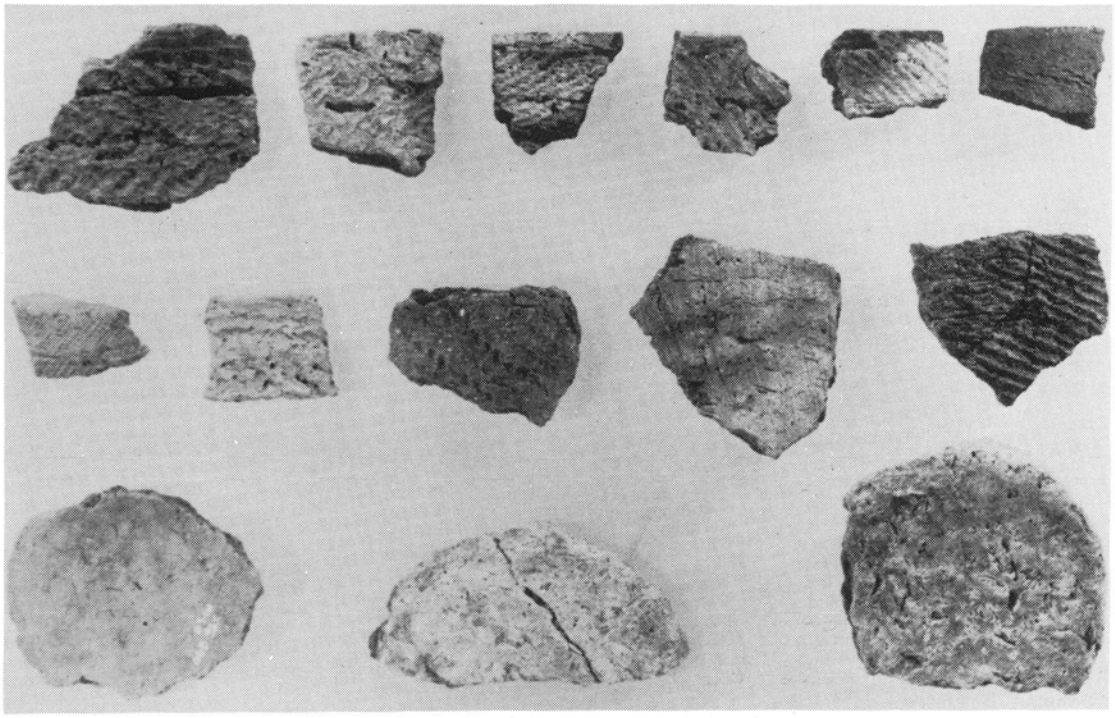


PL48 第 4 号住居跡出土土器

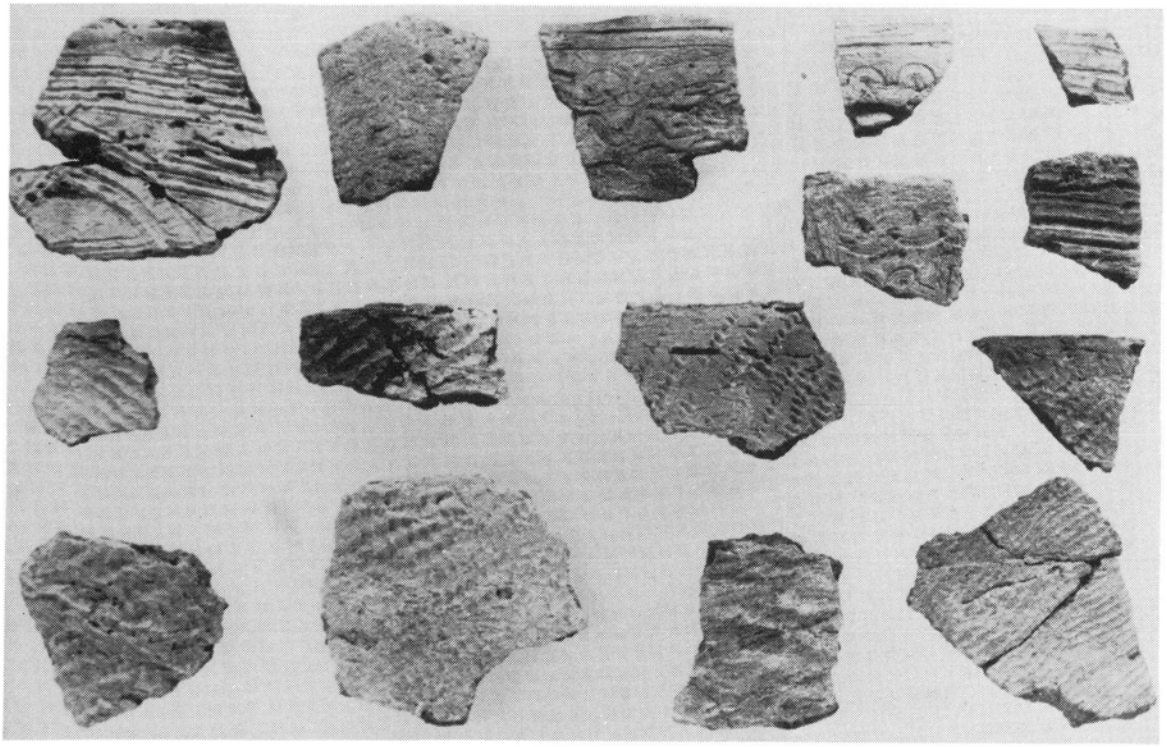




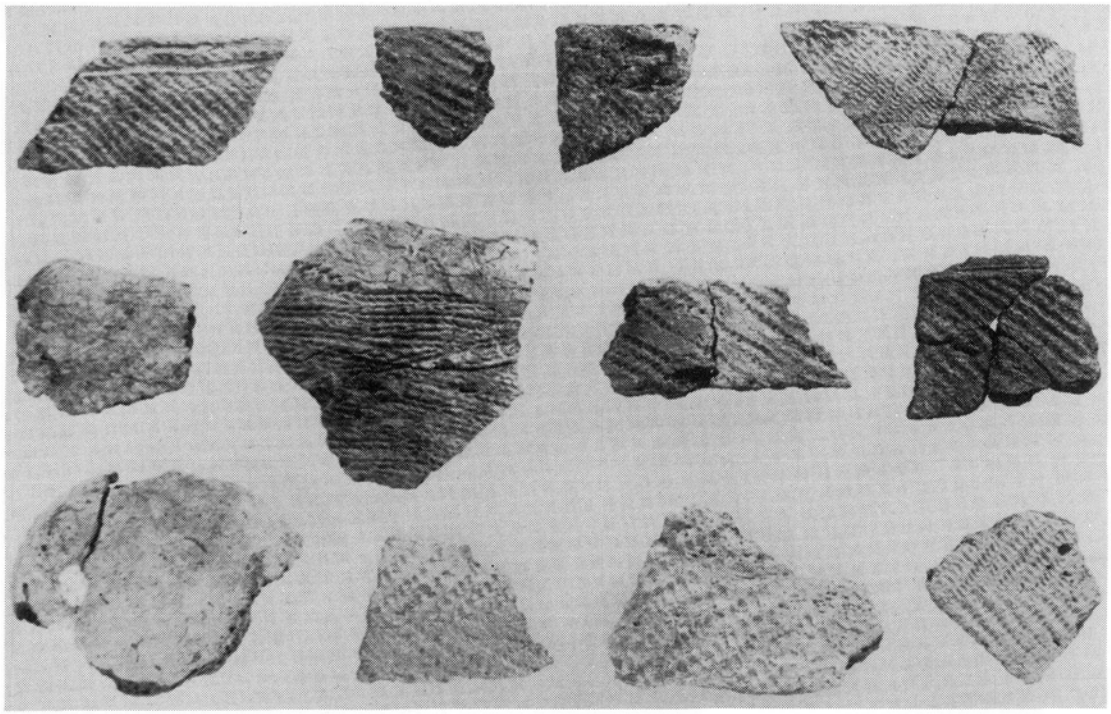
PL49 第 4 号住居跡出土土器



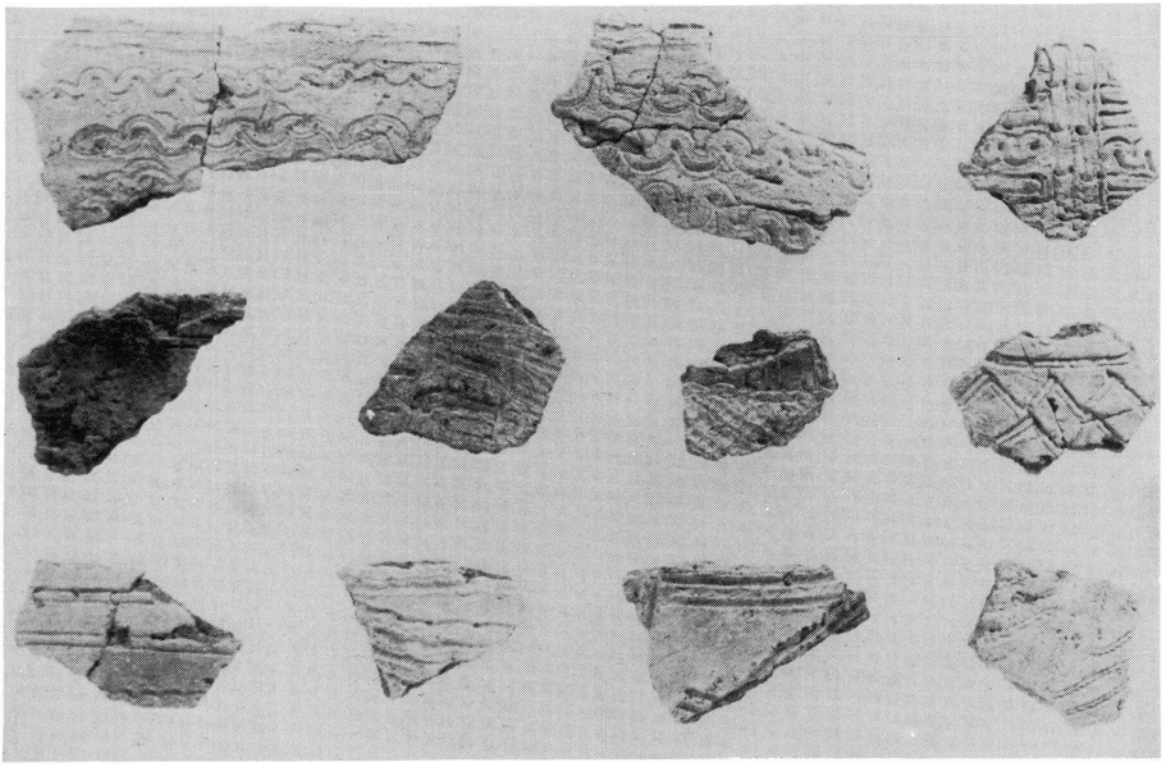
PL50 第 3 号住居跡出土土器



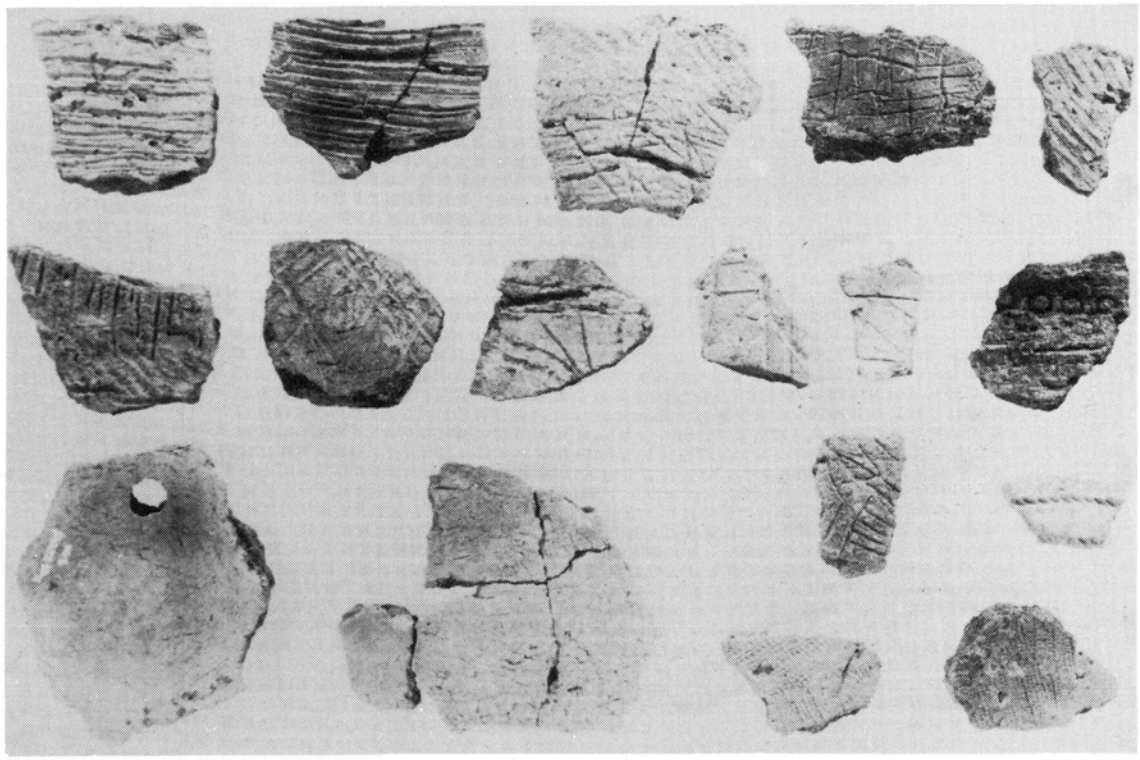
PL51 第 5 号住居跡出土土器



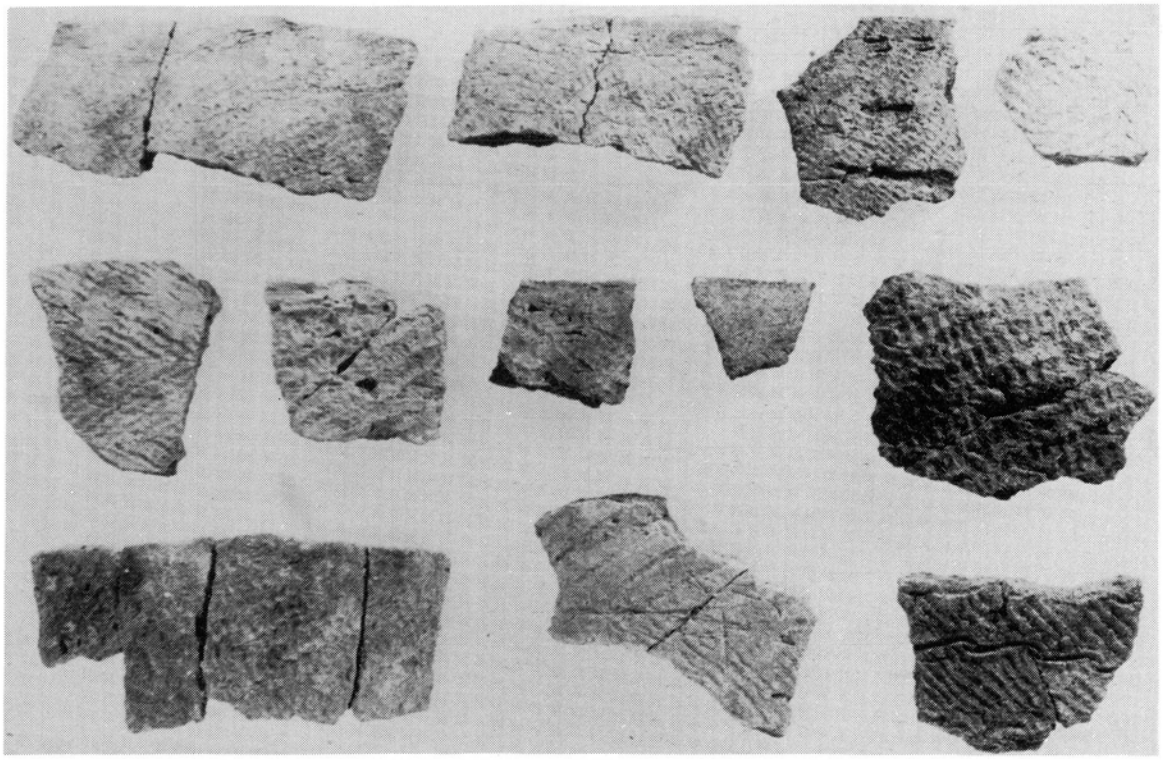
PL52 第 6 号住居跡出土土器



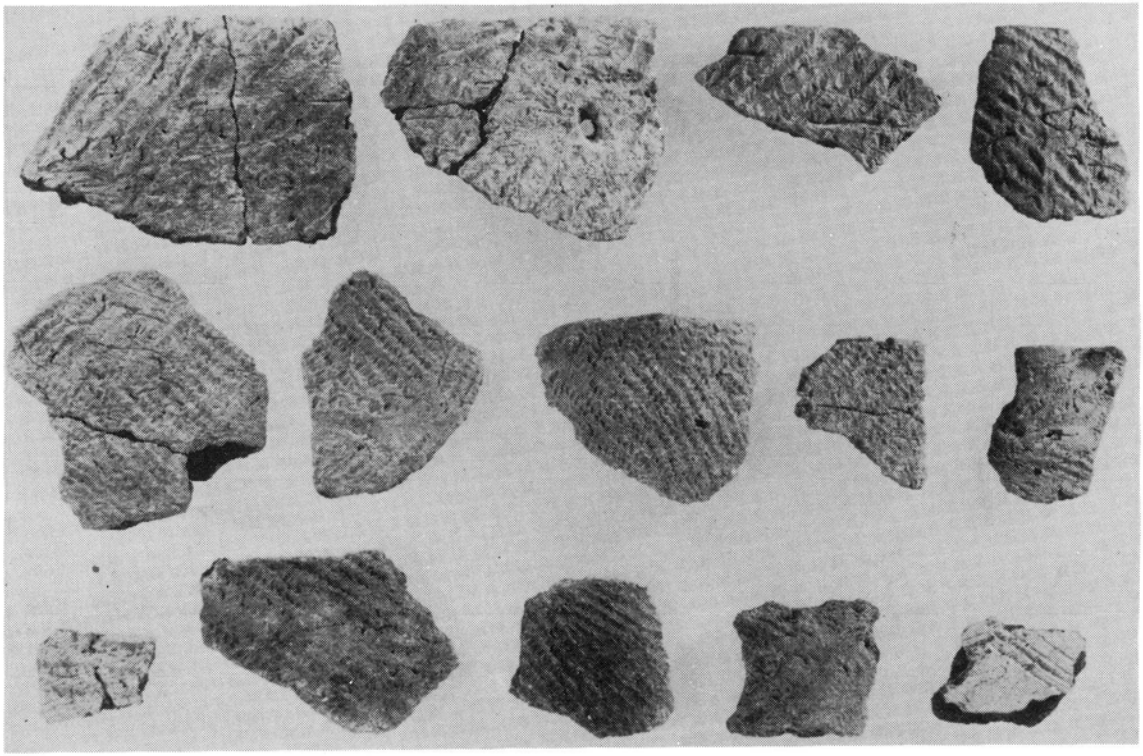
PL53 第 6 号住居跡出土土器



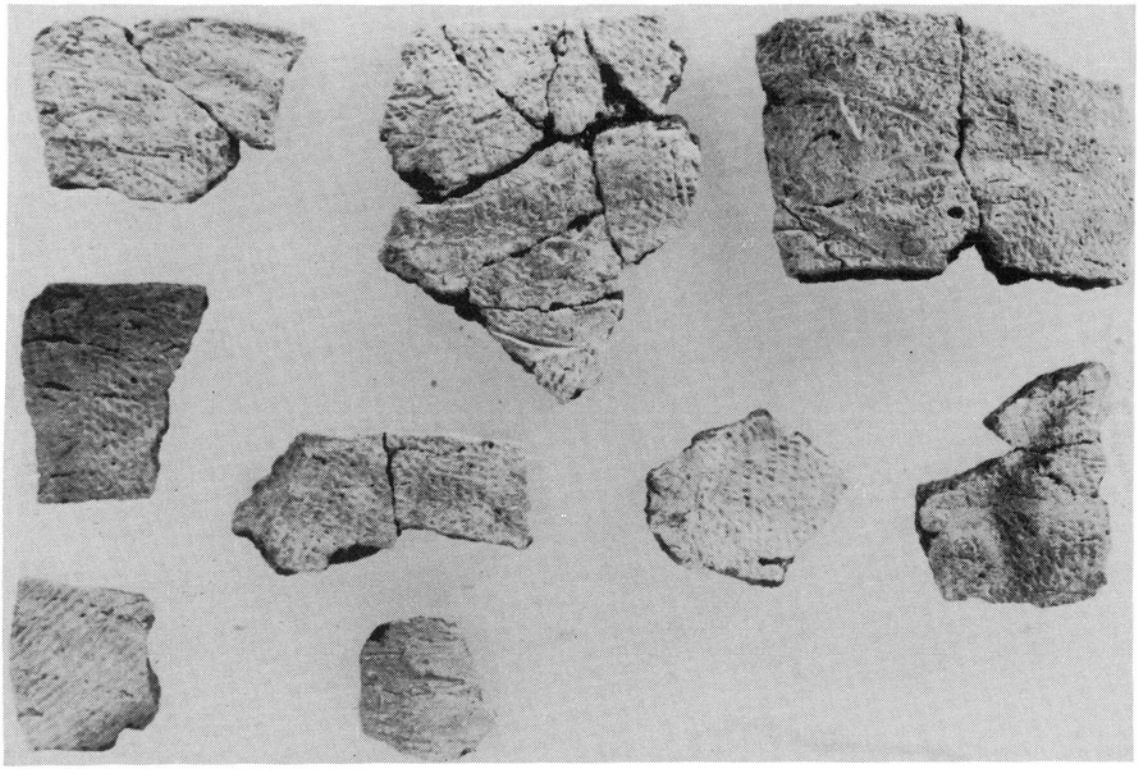
PL54　第 7 号住居跡出土土器



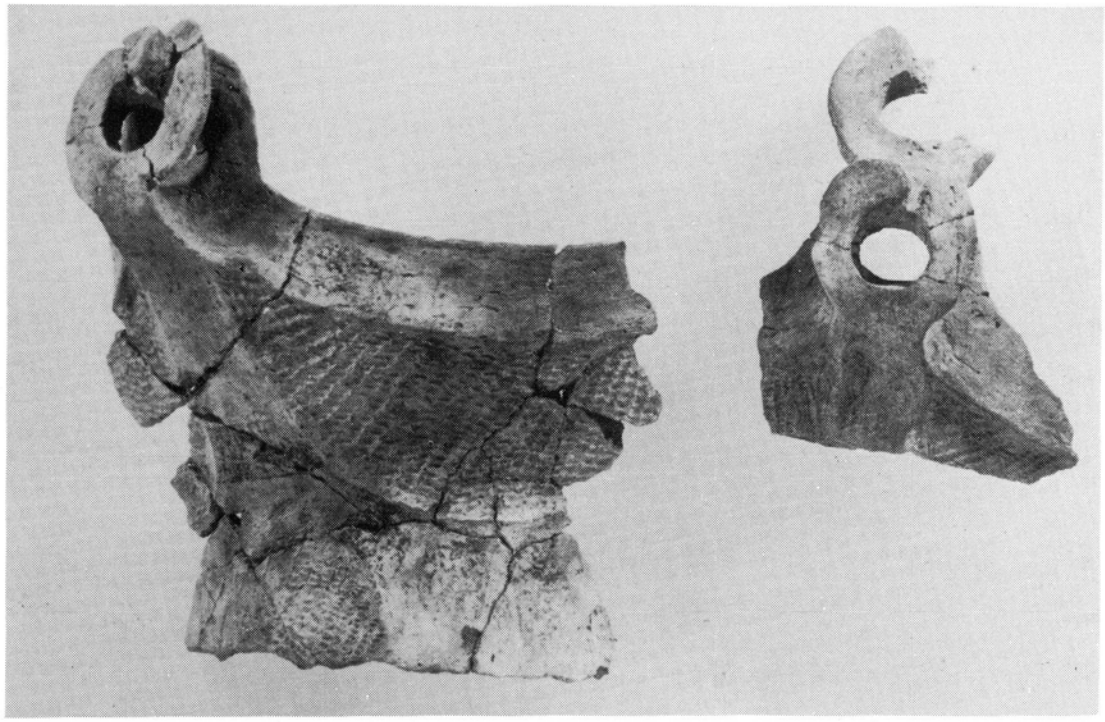
PL55　第 7 号住居跡出土土器



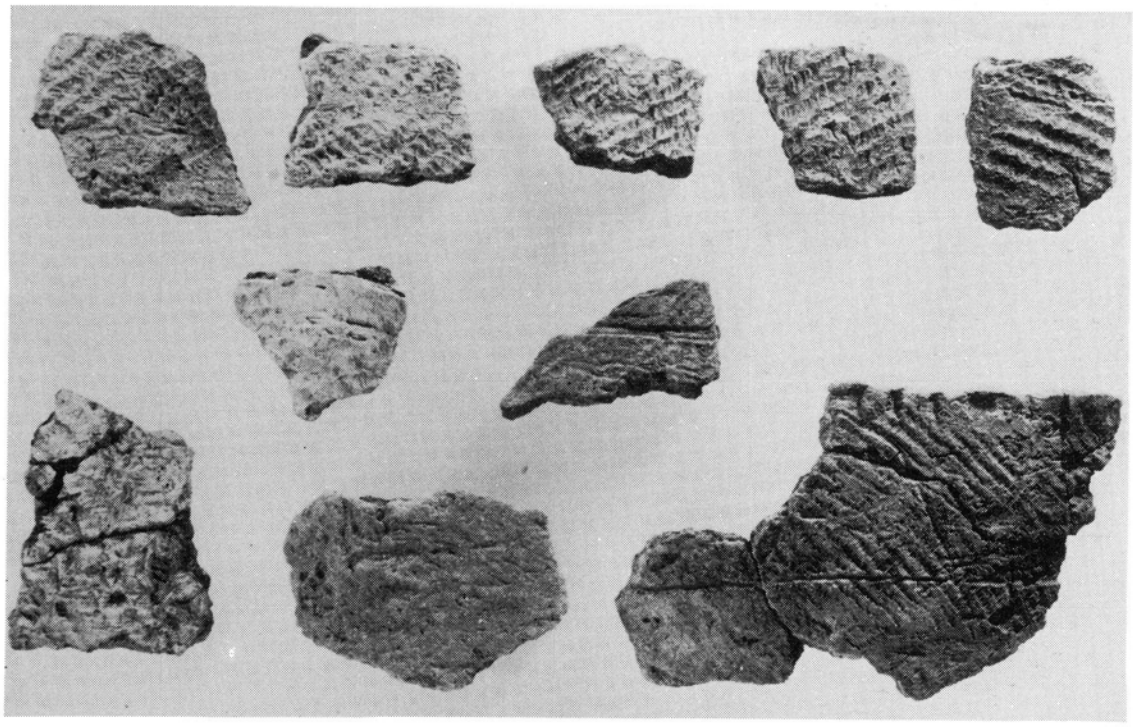
PL56 第 8 号住居跡出土土器



PL57 第 9 号住居跡出土土器



PL58　第10号住居跡出土土器

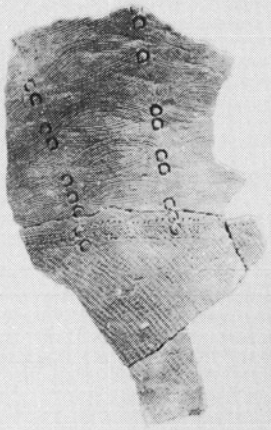


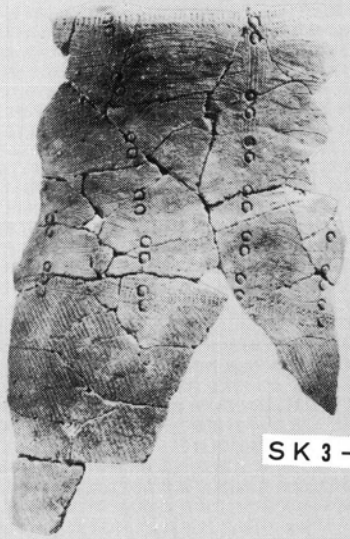
PL59　第11号住居跡出土土器

11－(7)　1

11－(7)　2

PL60　第11号住居跡出土土器

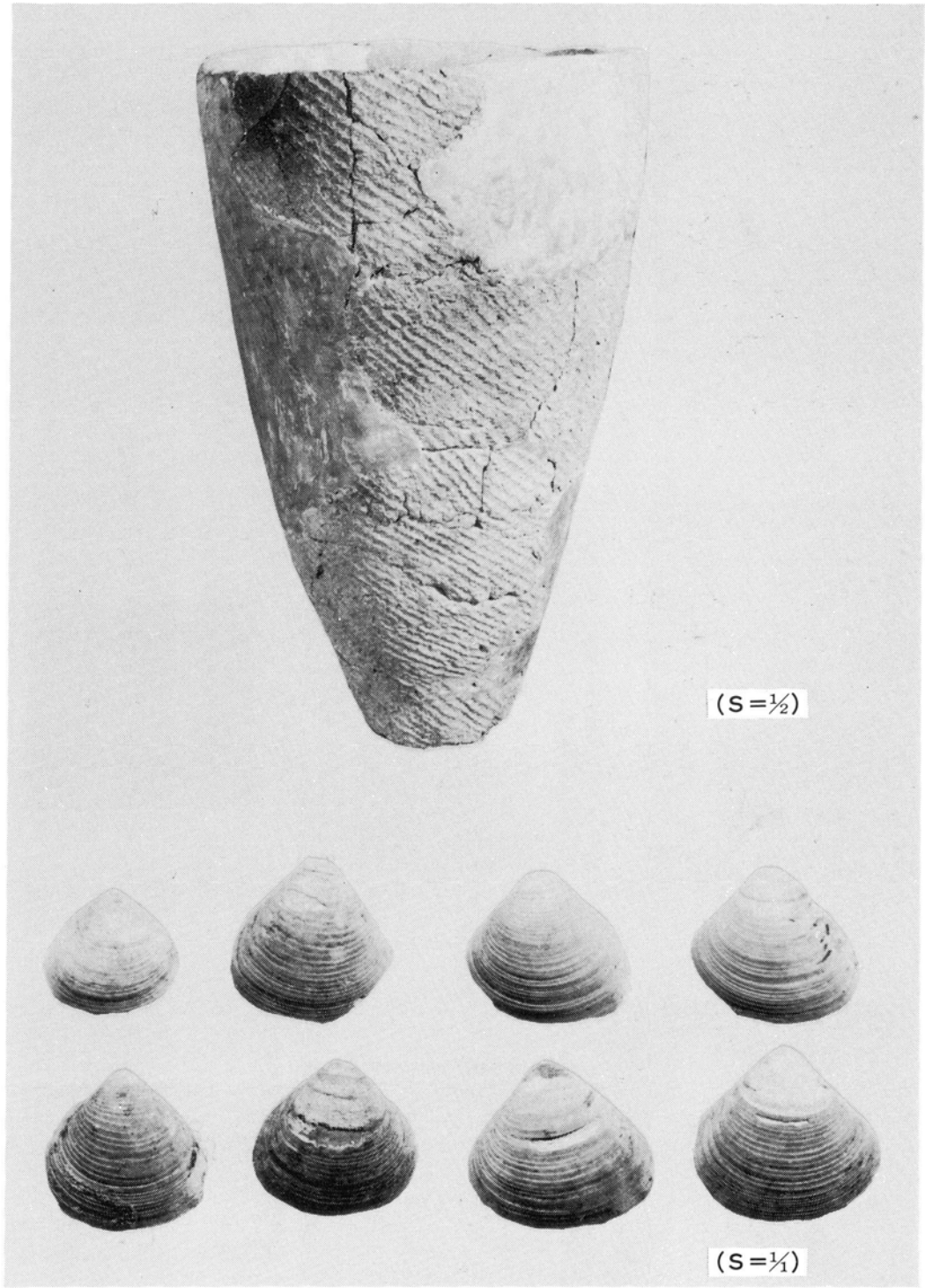




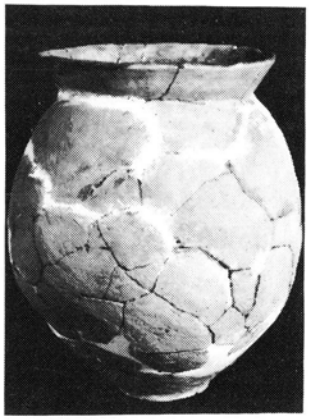
SK 3－1

PL61　第3号土壙出土土器

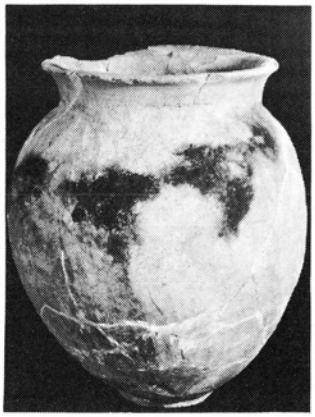
SK 3－2　(S=¼)



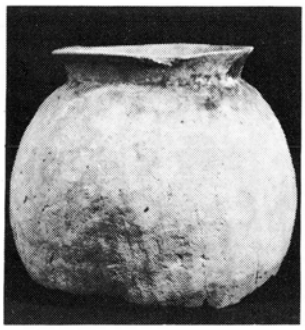

ＰＬ62　第１号土壙出土ヤマトシジミ



12－1

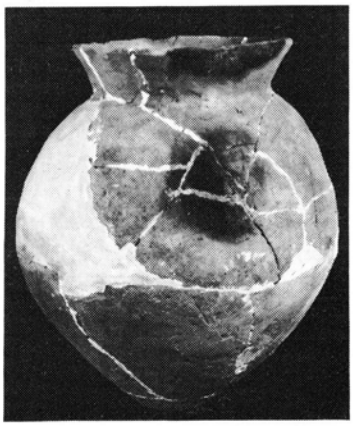


12－2

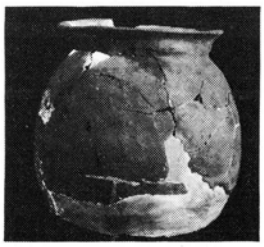


14－1

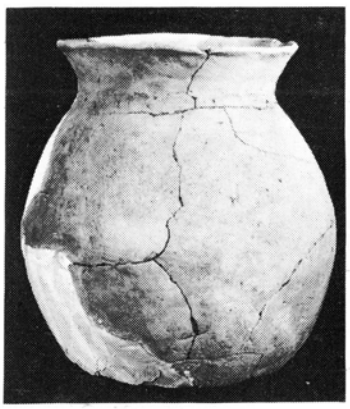
SK 2－1



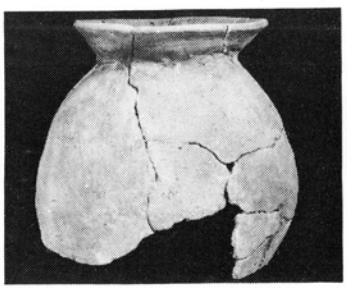
SK 2－2



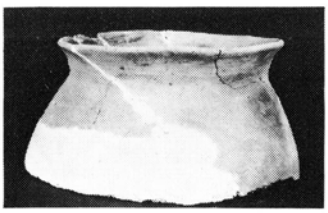
13－1



SK 2－4

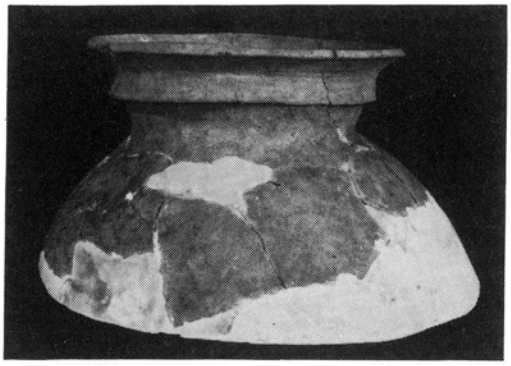


SK 2－3



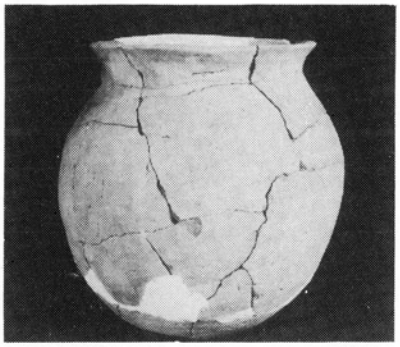
SK 2－5

PL63 住居跡出土土器 (S=1/6)

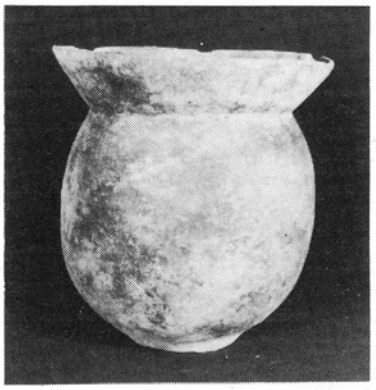


13－2

16－4

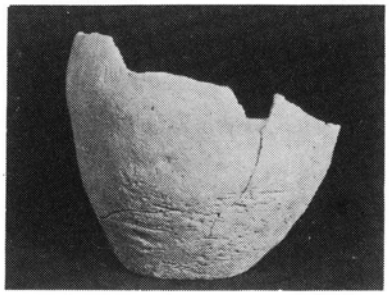


12－4



23－1

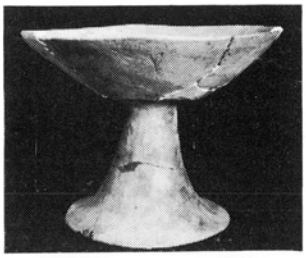
16－2

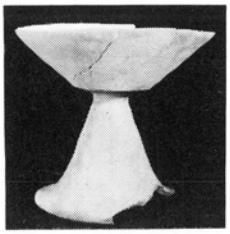


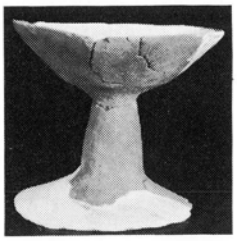
24－6

29－7

PL64 住 居 跡 出 土 土 器 (S=¼)


12—(1)　1


12—(1)　2


13—8

16—(1)　2

16—(1)　12

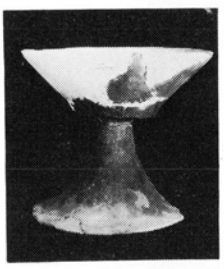
16—(1)　15

23—(1)　1

23—(1)　2

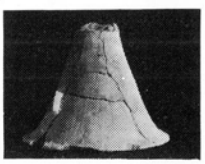
23—(1)　3

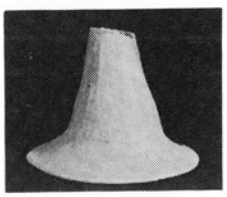
23—(1)　4


23—(1)　5

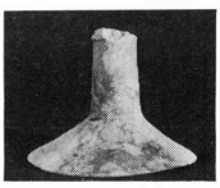
13—11

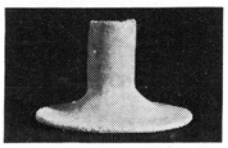
15—10


23—(1)　13


16—(1)　14

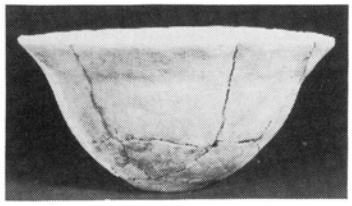
17—5


16—(1)　16


23—(1)　12

PL65　住居跡出土土器

(S=1/6)



12—(2)　9

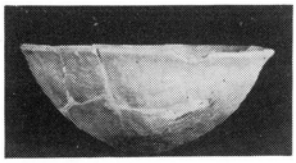
23—(2)　2

23—(2)　3

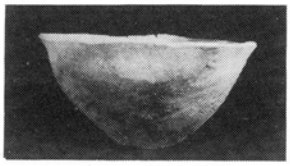
21—3

15—4

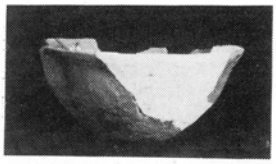
23—(2)　4



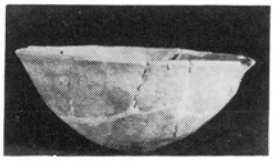
12—(2)　6



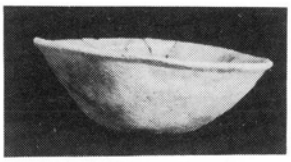
14—7



15—6



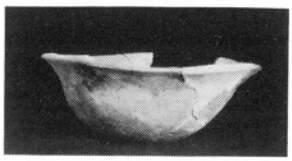
12—(2)　10



15—2

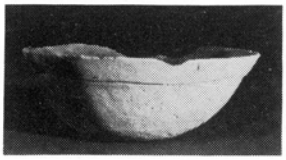
16—(2)　14

15—3

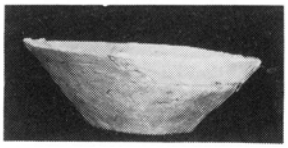


13—5

14—6



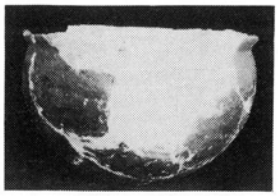
23—(2)　5



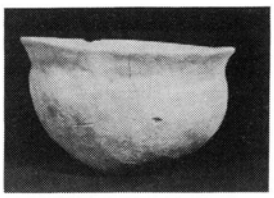
SK2—6

14—9

PL66 住居跡出土土器　　(S=¼)



13－4

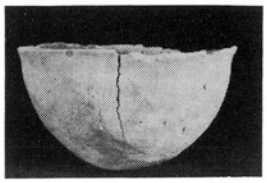


14－3

14－4

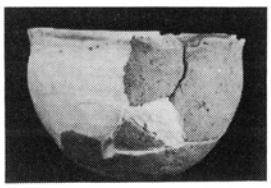
14－5

14－8



15－5

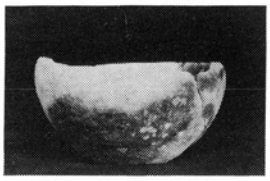
17－6



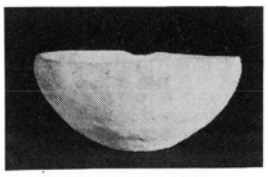
19－4

19－5

20－5

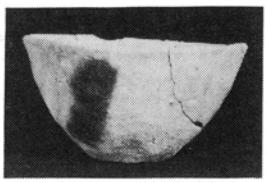


12－(2)　8

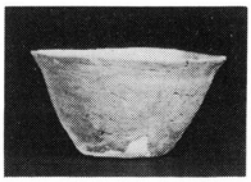


21－5

17－7



17－8



17－9

PL67　住　居　跡　出　土　土　器　　(S＝¼)

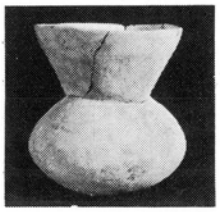
13－6

14－10

15－9

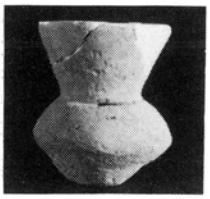
16－(2)　7

16－(2)　8

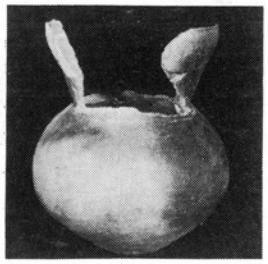


23－(2)　7

19－2

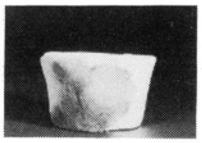


23－(2)　8



17－2

16－(2)　15



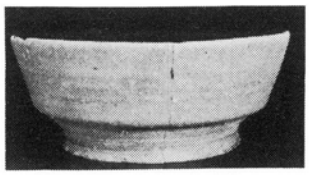
15－8

13－3

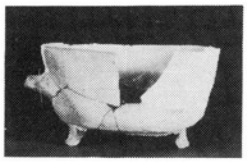
16－(2)　6

12－(2)　5

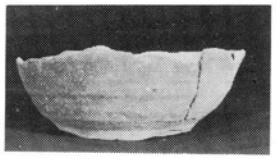
PL68 住居跡出土土器　　(S＝¼)



24—(1)　4



24—(1)　6



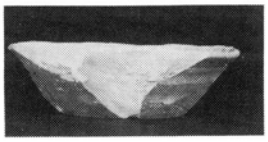
24—(1)　7

24—(1)　8

24—(1)　9

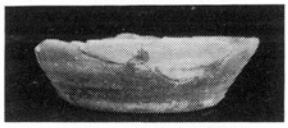
24—(1)　10

24—(1)　11

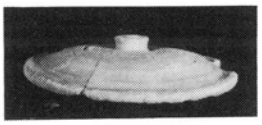


24—(1)　12

24—(1)　13

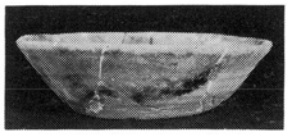


25—4

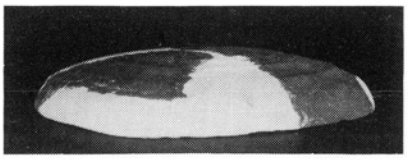


25—8

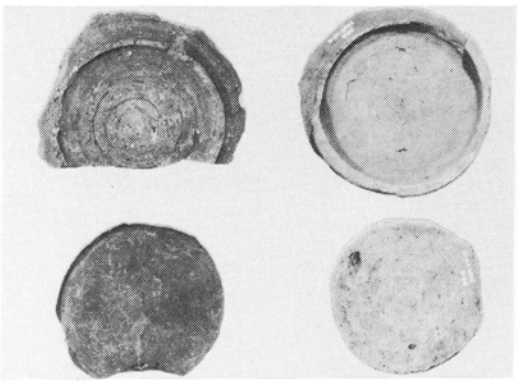
26—5



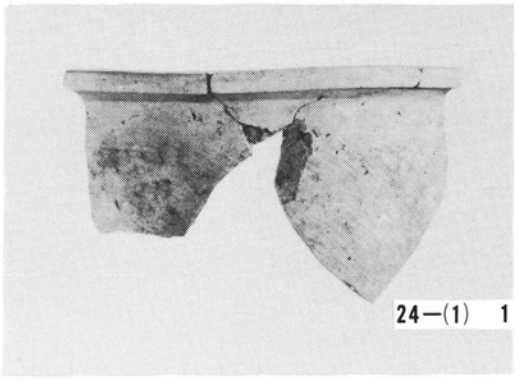
26—4



25—5

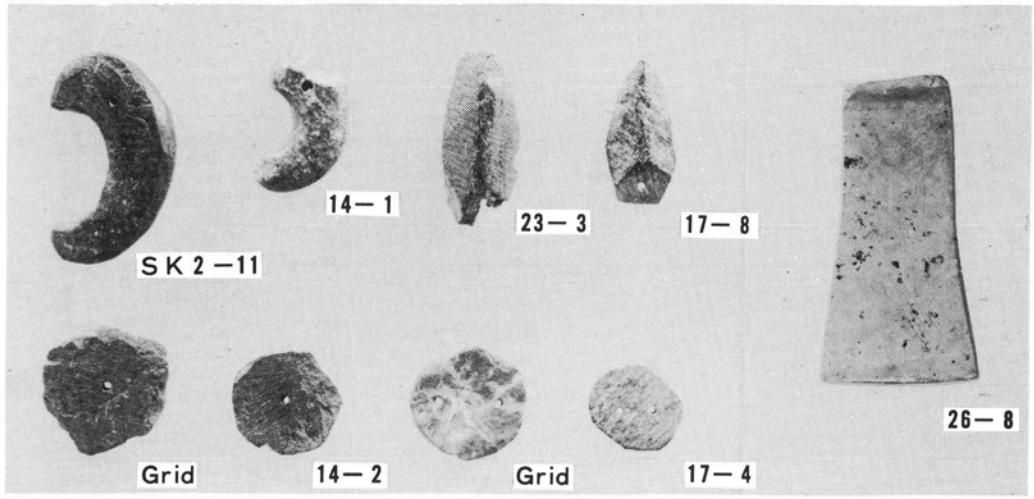


24—底部

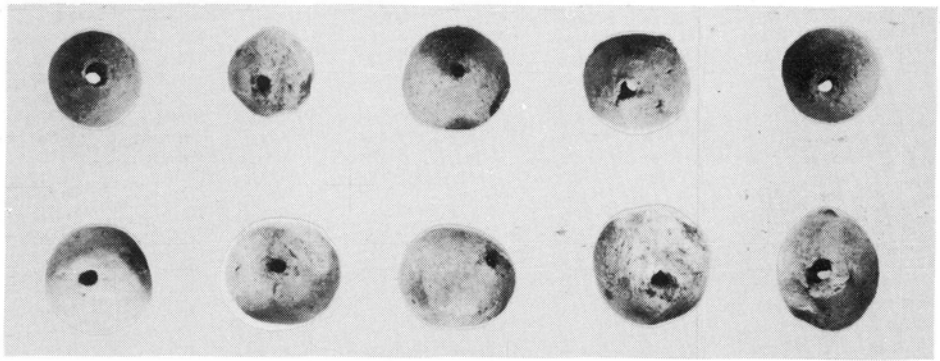


24—(1)　1

PL69　住　居　跡　出　土　土　器（須恵器）　（S＝¼）




石　製　品



第 17 号住居跡出土球状土錘

第 24 号住居跡出土管状土錘 （S＝1/1.5）

PL 70

6

大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書
——大 生 郷 遺 跡——

昭和56年 9 月27日　印刷
昭和56年 9 月30日　発行
発行　財団法人 茨城県教育財団
水戸市南町 3 － 4 －57
印刷　川 田 プ リ ン ト